

第150図 2区5号住居平面・断面図、出土遺物図

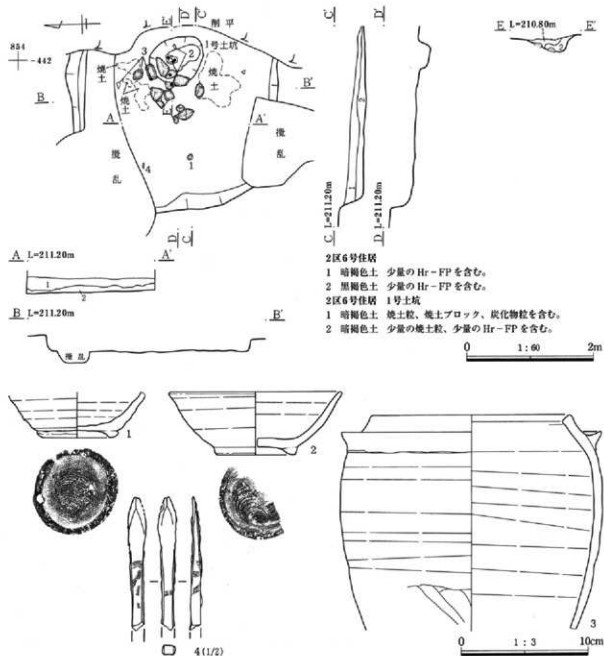
2区5号住居出土遺物観察表

No.	採回 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第150回 PL-104	須恵器 碗	+15 1/4	口(14.1) 高 4.9 底(6.8) 高台-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。
2	第150回 PL-104	須恵器 碗	+19 体~底部	口- 高 4.1 底 5.8 高台5.8	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切りか。高台は貼付。
3	第150回 PL-104	灰釉陶器 碗	床直 1/5	口(15.5) 高 4.9 底(7.1) 高台(7.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は透明感のある緑色。光ヶ丘1号室式期。
4	第150回 PL-104	灰釉陶器 碗	埋土 体~底部1/4	口- 高 3.4 底(7.1) 高台(7.3)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号室式期。
5	第150回 PL-104	土師器 甕	埋土 口縁片	口(18.9) 高 4.8 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。

2区6号住居(第151図、PL57・105)

位置 854-442 方位 測定不可能。形状 中世の削平と攪乱のため、東壁・北壁周辺が確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 36cm 重複 なし。床面 床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面を床面とする。床面は堅く締まっていた。住居内1号土坑は床面からの掘り込みである。土坑上で礫が検出され、土坑の埋土や周辺からは焼土粒や焼土ブロックが検出された。壁溝 確認できなかった。

柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 検出されなかった。遺物 床直から須恵器碗、羽釜、鍛造の鉄製品、鏝が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 1号土坑は鍛冶工房関連施設の可能性があると調査所見であるが、遺構の残存状況が悪く、詳細を推測することは出来ない。本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。



第151図 2区6号住居平面・断面図、出土遺物図

2区6号住居出土遺物観察表

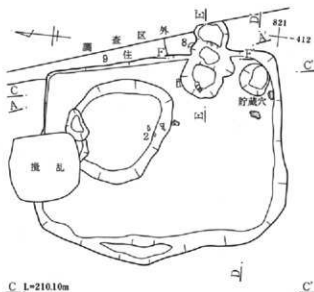
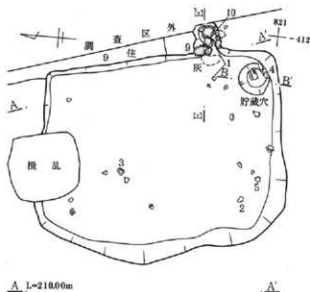
No.	神田No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	③焼成	特徴など
1	第151図 PL-105	須臾器 椀	床直 体~底部	口 - 高 3.6残 底 6.4 高合 6.5	①粗砂 ②黄褐色	①ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
2	第151図 PL-105	須臾器 椀	床直 1/3	口(13.7) 高 5.0 底(6.6) 高合(6.5)	①粗砂 ②黄褐色	①ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
3	第151図 PL-105	須臾器 椀	床直 口~胴部1/5	口(16.0) 高 17.0残 底 - 胴(20.6)	①粗砂 ②黄褐色	①ロクロ成形。胴は貼付。胴部外面下位、縦方向のヘラ削り。	
No.	神田No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など		
4	第151図 PL-105	鉄製品 鍛造品 鏃	①8.0 g ②5 ③L(●)	床直 長7.1残 幅1.0 厚0.5	鋳身の鉄鏃の先端部から茎にかけての破片。基部は僅かに断面長方形きみで、刃部は柳刃形。稜はやや不明瞭。刃部の左側に傷があり、刃部と茎部の間には、植物質のものが巻き付けられている。長軸方向に僅かながら反っている。		

①重量②磁石③メタル度

2区7号住居(第152~154図、PL57・105)

位置 821-412 方位 N-79°-E 形状 長軸 3.74m・短軸3.14mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 9.63㎡ 壁高 51cm 重複 2区9号住居と重複。2区7号住居が、2区9号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ15cmの埴め土を施して平坦な面を造る。住居中

央やや北に大きな窪みがあるものの掘り方面はほぼ平坦である。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ27cm・長軸52cm・短軸50cmの楕円形を呈す。竈 東壁の南側に設置。燃焼部は幅26cm、奥行き30cm。

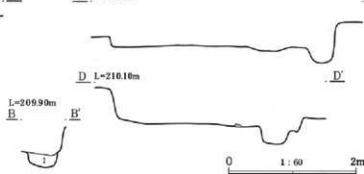


2区7号住居

- 1 黒褐色土 多量のHr-PPを含む。
- 2 黒褐色土 多量のHr-FAを含む。
- 3 黒褐色土 多量のHr-FAブロックを含む。総まりあり。(貼り床)

2区7号住居 貯蔵穴

- 1 暗褐色土 少量のHr-PP、炭化物粒を含む。

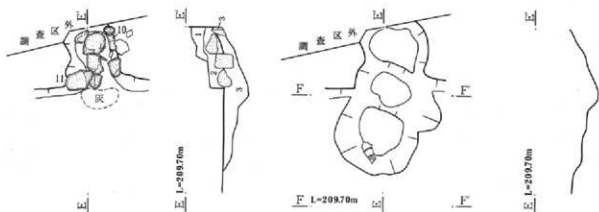


第152図 2区7号住居・掘り方 平面・断面図

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

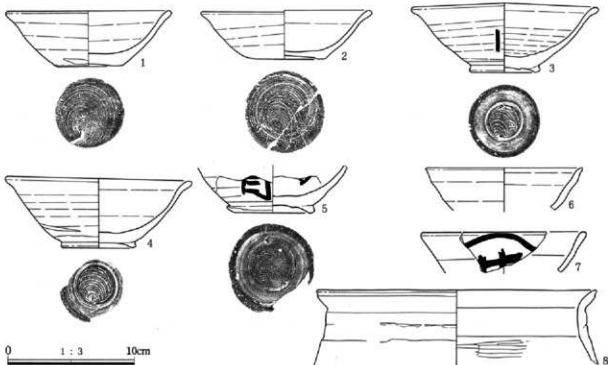
竈構築材として用いられた加工痕のある二ツ岳石が、一部設置した状態で残存している。遺物 竈から須恵器杯、床直から須恵器杯、碗、土師器甕、埋土から須恵器杯、碗、土師器甕、羽釜、大甕、吊り手金具か毛抜きの可能性のある鉄製鍛造品、鉄滓が出土した。埋土から出土した須恵器碗(5)と杯・碗(7)は、墨書土器である。7の体部外面の墨書は「㊦」と判読できる可能性がある。実測可能な遺物が11

個体ある。所見 諏訪ノ木V遺跡で検出された竈穴住居中、墨書土器が出土した住居は、本住居の他に2区18号住居がある。本住居・2区18号住居とも石原東遺跡D1区遺物包含層から、400m以上離れた場所に位置する。本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。

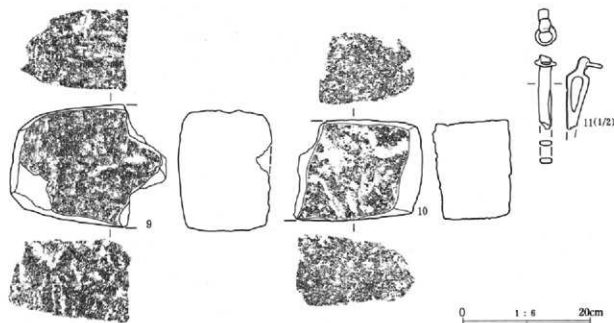


2区7号住居 竈

- 1 褐色土 少量のHr-FPを含む。
- 2 灰褐色土 多量のHr-FPを含む。粘性、締まりあり。
(竈を構築した粘土の崩落土か)
- 3 暗褐色土 多量のHr-FAを含む。締まりあり。(掘り方埋土)



第153図 2区7号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)



第154図 2区7号住居出土遺物図(2)

2区7号住居出土遺物観察表

No.	押図No. 図版No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第153図 PL-105	須恵器 杯	カマド 1/3	口(132) 高44 底5.4	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第153図 PL-105	須恵器 杯	床直 1/2	口135 高38 底6.4	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第153図 PL-105	須恵器 杯	+8 1/3	口(149) 高56 底5.5 高台5.6	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部外面に墨書。
4	第153図 PL-105	須恵器 杯	床直 ほぼ完形	口149 高5.5 底5.8 高台(6.0)	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
5	第153図 PL-105	須恵器 鉢	+8 体～底部	口 - 高37残 底6.6 高台7.0	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部内外面に墨書、「□」/「□」。
6	第153図 PL-105	須恵器 杯・碗	埋土 口～体部1/5	口(124) 高33残 底 - 高台 -	①砂粒 ②酸化焼 ③褐色	ロクロ成形。
7	第153図 PL-105	須恵器 杯・碗	埋土 口縁片	口(132) 高32残 底 - 高台 -	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形。体部外面正位に墨書、「□」②カ。
8	第153図 PL-105	土師器 薬	床直 口～胴部1/8	口(221) 高59残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
9	第154図 PL-105	竊土器 天井石	カマド	長246 幅193 厚147 重52kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面の竊土器材。被熱痕のある面1面(下面)。
10	第154図 PL-105	竊土器 天井石か	カマド	長205 幅159 厚122 重36kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面の竊土器材。被熱痕のある面1面(下面)。
No.	押図No. 図版No.	遺物名	①重量②③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
11	第154図 PL-105	鉄製品 鍛造品 毛抜きか	①32g ②4 ③H(○)	埋土 長39残 幅12 厚0.6	刀の吊り手金具状の鉄製品。毛抜きの可能性が高い。頭部を一組絞った上で、径2mm以下の細い鉄輪を装着している。体部下端は欠落し破面となっている。	

①重量②磁着度③メタル度

2区8号住居(第155・156図、PL57・105)

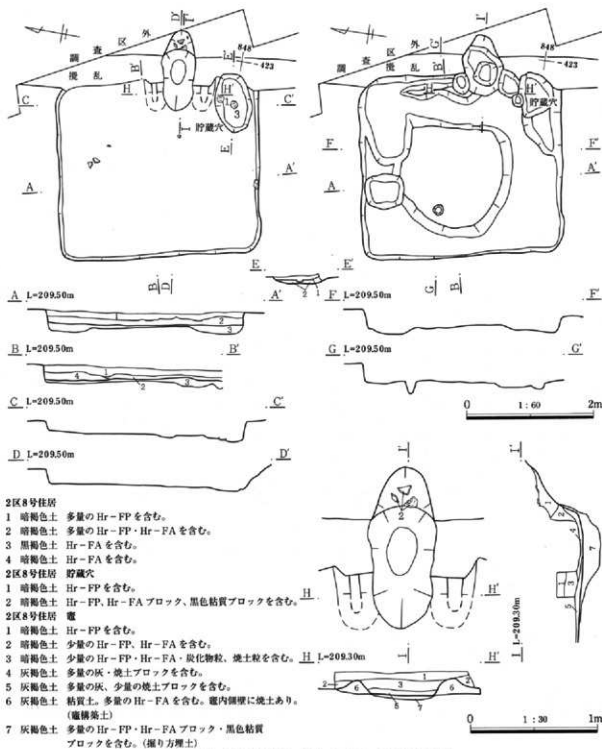
位置 848-423 方位 N-73°-E 形状 長軸
3.17m・短軸2.80mで長軸を南北にもつ方形である。
面積 827㎡ 壁高 26cm 重複 住居東壁周辺が攪
乱に切られる。床面 掘り方面から厚さ13cmの埴

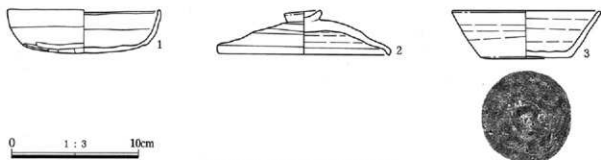
め土を施して平坦面を造る。床面は凹凸なく、平
坦で整っている。掘り方面は住居中央が高く壁際
を深く掘り下げている。壁溝 確認できなかった。
柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に
設置。深さ11cm、長軸92cm、短軸51cmの楕円

形を呈す。竈 東壁の中央やや南側に設置。燃烧部は幅48cm、奥行き80cm。煙道は幅45cm、奥行き46cmで緩やかに立ち上がる。燃烧部の一部に焼土壁が残存する。遺物 貯藏穴内から土師器杯、須恵器杯の2個体がほぼ完形の状態出土した。竈から須恵器蓋、埋土から土師器甕の底部が出土した。

実測可能な遺物が3個体ある。

所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀第3~4四半期に比定される。





第156図 2区8号住居出土遺物図

2区8号住居出土遺物観察表

No.	棟図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	③焼成	特徴など
1	第156図 PL-105	土師器 杯	貯蔵穴 完形	口121 高33 底-	①砂粒 ③褐色	②良好	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。
2	第156図 PL-105	須恵器 蓋	カマド 2/3	口138 高33 横径30	①砂粒 ③灰色	②還元焙	ロクロ成形、右回り回転。横みは貼付。天井部は回転ヘラ削り。内外面に自然釉。
3	第156図 PL-105	須恵器 杯	貯蔵穴 完形	口118 高37 底72	①砂粒 ③灰色	②還元焙	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明、ヘラ起こし技法か。

2区9号住居(第157図、PL58・105)

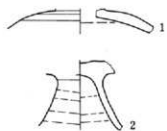
位置 823-412 方位 測定不可能。形状 住居の大部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 32cm 重複 2区7号住居と重複。2区9号住居が、2区7号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方を床面とする。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。

た。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 埋土から須恵器高杯、蓋、土師器甕、須恵器杯底部が出土した。実測可能な遺物が2個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀前半に比定される。



0 1:60 2m 2区9号住居

1 黒褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAを含む。



0 1:3 10cm

第157図 2区9号住居平面・断面、出土遺物図

2区9号住居出土遺物観察表

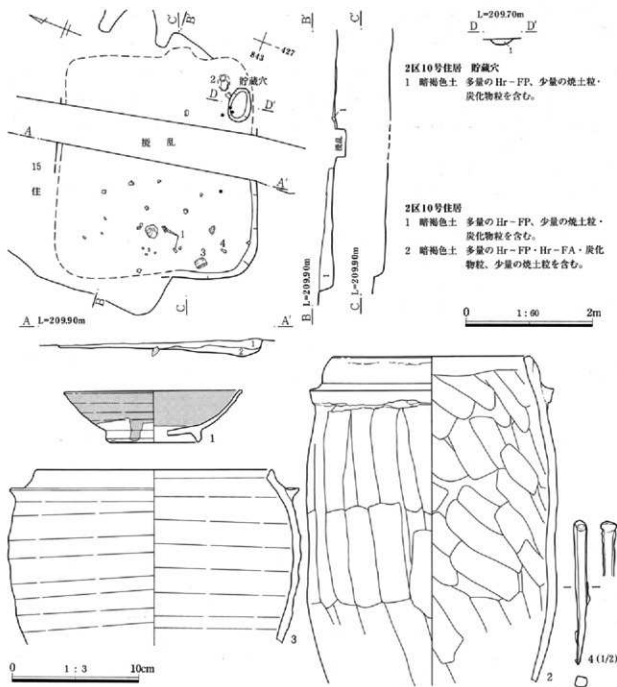
No.	棟図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	③焼成	特徴など
1	第157図 PL-105	須恵器 甕	埋土 天井1/6	口- 高19残 横径-	①砂粒 ③灰色	②還元焙	ロクロ成形、右回り回転。横みは貼付。天井部は回転ヘラ削り。
2	第157図 PL-105	須恵器 高杯	+17 脚部1/3	口- 高52残 底-	①砂粒 ③灰色	②還元焙	ロクロ成形、脚部は貼付。

2区10号住居(第158図、PL58・106)

位置 843-427 方位 N-69°-E 形状 長軸(3.41)m・短軸(3.14)mで長軸を東西にもつ長方形である。面積(10.17)㎡ 壁高 南角で16cmを測るが、遺構の残存状況悪く、大部分で壁を確認できなかった。重複 2区15号住居と重複。2区10号住居が、2区15号住居を切って構築する調査所見を得た。

床面 掘り方面を床面とする。残存状況悪く、床面不明瞭。住居東で灰層が検出された。竈に伴う灰層の可能性が高く、竈位置は灰層から推定した。

壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ7cm、長軸53cm、短軸36cmの楕円形を呈す。竈 確認されなかった。床面に灰層が確認された位置から竈位置を



第158図 2区10号住居平面・断面、出土遺物図

推定した。遺物 床直から灰釉陶器椀、羽釜、鍛造の鉄製品(釘)、埋土から須恵器杯、椀、土師器甕、須恵器壺、須恵器大甕が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物よ

り10世紀第1四半期に比定される。竈と貯蔵穴の間の床直から吉井型の羽釜(3)、住居南側の床直から日夜野型の羽釜(2)が出土した。

2区10号住居出土遺物観察表

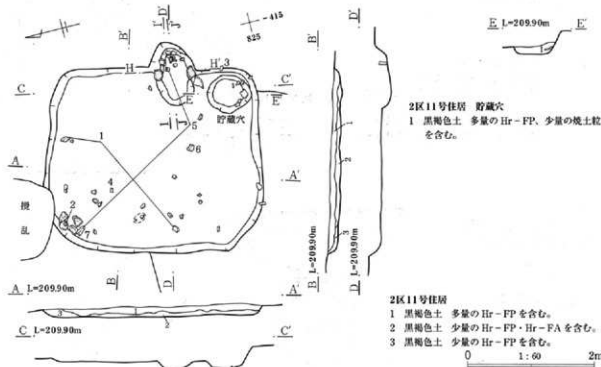
No.	神田No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第158図 PL-106	灰釉陶器 椀	床直 1/4	口(14.1)高4.1 底(7.5)高台(7.1)	①粗砂 ②還元焼 ③灰白色	ロタロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号壺式類。
2	第158図 PL-106	羽釜	床直 口~胴部1/6	口(15.9)高25.8 底- 踵(19.5)	①粗砂 ②還元焼 ③灰白色	罅は貼付。胴部外面、底部から踵に向けて縦方向のヘラ削り。内面ナデ。
3	第158図 PL-106	羽釜	床直 口~胴部1/4	口(18.8)高13.8 底- 踵(22.9)	①粗砂 ②還元焼 ③灰白色	ロタロ成形。罅は貼付。
No.	神田No. 図版No.	遺物名	①重②価③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
4	第158図 PL-106	鉄製品 鍛造品 釘	①5.3g ②5 ③錐化(△)	床直 長7.6 径0.4	僅かに頭部の痕跡を残す小形の釘。横断面形は方形。頭部は二方が小さく張り出す。胴部寄りか僅かに弧状となる。	

①重量②価値③メタル度

2区11号住居(第159~161図, PL58-106)

位置 825-415 方位 E-14°-S 形状 長軸 3.39m・短軸2.93mで長軸を東西にもつ方形である。面積 8.30㎡ 壁高 24cm 重複 2区12号住居と重複。2区12号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ9cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面では、住居中央から南壁にか

けて大きな掘り込みが確認された。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ15cm、長軸70cm、短軸60cmの楕円形を呈す。竈 東壁の中央やや南側に設置。燃焼部は幅37cm、奥行き40cm。袖部の石製の竈構築材と支脚石が設

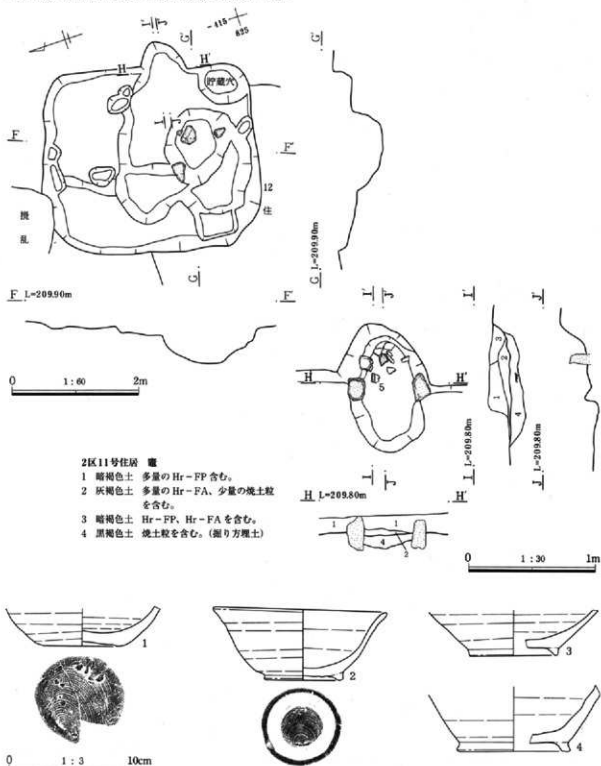


第159図 2区11号住居平面・断面図

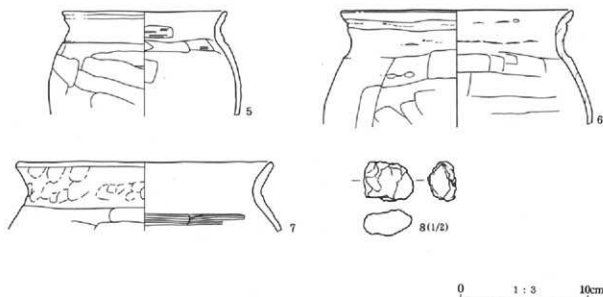
第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

置した状態で残存していた。遺物 床直から、須恵器杯、碗、土師器小型甕、甕、埋土より須恵器大甕、灰釉陶器壺、甕より鍛冶滓が出土した。実測可能な遺物が8個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。住居

内から鍛冶工房としての施設が検出されなかったことや、鉄関連遺物が鍛冶滓1点(8)のみであったことから、出土した鍛冶滓は他遺構からの混入物と考えられる。



第160図 2区11号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)



第161図 2区11号住居出土遺物図(2)

2区11号住居出土遺物観察表

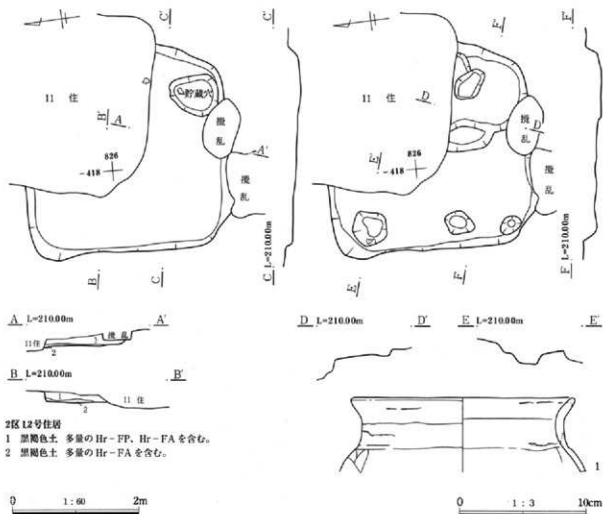
No.	種目 No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第160図 PL-106	須恵器 杯	+9 体~底部	口 - 高 32 残 底 6.6	①粗砂 ②酸化焙 きみ③にぶい黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第160図 PL-106	須恵器 碗	床直 完形	口 138 高 5.6 底 6.2 高台 6.3	①粗砂 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
3	第160図 PL-106	須恵器 杯	+11 体~底部1/4	口 - 高 35 残 底 (7.2) 高台 (7.0)	①粗砂 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
4	第160図 PL-106	須恵器 碗	+14 体~底部1/5	口 - 高 52 残 底 (8.6) 高台 (9.0)	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法は不明。高台は貼付。
5	第161図 PL-106	土師器 小型甕	床直 口~胴上1/4	口 (130) 高 8.2 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第161図 PL-106	土師器 甕	+8 口~胴部1/4	口 (184) 高 9.1 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
7	第161図 PL-106	土師器 甕	+9 口~胴部1/3	口 202 高 5.5 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
No.	種目 No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
8	第161図 PL-106	鍛冶滓 (含鉄)	①135g ②4 ③L(●)	カマド 長径26 短径21 厚1.4	指頭大の含鉄の鍛冶滓。上面がやや平坦な形で、下面が楕円に突出する。中核部は含鉄部で、鍛冶滓材の産廃片か。	

①重量②磁質③メタル度

2区12号住居(第162図、PL58・106)

位置 826-418 方位 測定不可能。形状 長軸 3.23m・短軸 3.20mで長軸を東西にもつ方形である。面積 (885)㎡ 壁高 17cm 重複 2区11号住居と重複。2区11号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ 5cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面で床下土坑が検出された。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の

南東隅に設置。深さ 15cm、長軸 79cm、短軸 63cmの楕円形を呈す。竈 確認できなかった。遺物 床直から土師器甕、埋土から灰釉陶器杯、碗が出土した。ほとんどが小破片で、実測可能な遺物は1個体である。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。



第162図 2区12号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図

2区12号住居出土遺物観察表

No.	採掘No. 図版No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	③焼成	特徴など
1	第162図 PL-106	土師器 壺	床直 口<頭部1/3	口(17.8) 高 5.9 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色		口縁部から頭部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

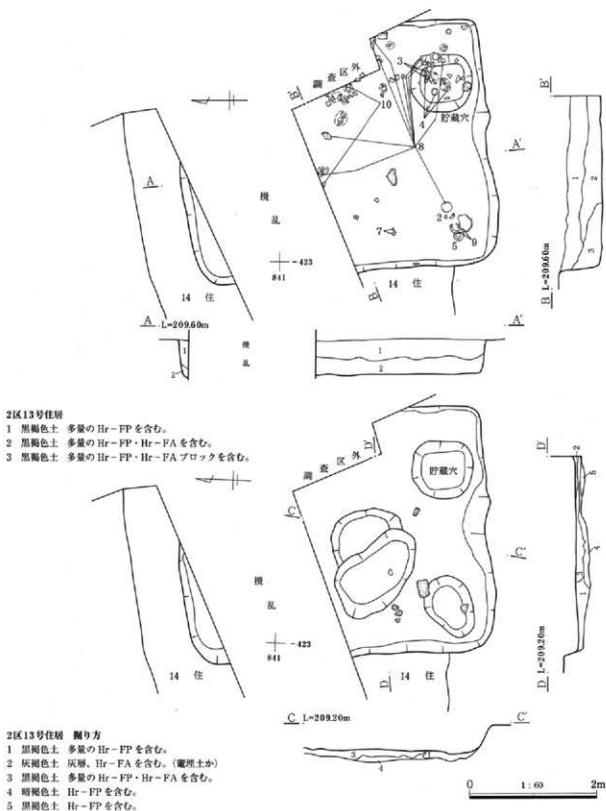
2区13号住居(第163・164図、PL58・106・107)

位置 841-423 方位 N-87°-E 形状 長軸 4.87m・短軸3.88mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 測定不可能。壁高 58cm 重複 2区14号住居と重複。2区13号住居が、2区14号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ18cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面で床下土坑を検出。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ27cm・径約100cmのほぼ円形を呈す。竈 確認できなかった。

た。掘り方2層が竈の埋土である可能性が高い。東壁やや南よりに位置する可能性がある。遺物 床直から土師器杯、須臾器杯、椀、土師器小型壺、壺、埋土から砥石、棒状の鍛造鉄製品、釘、土師器杯、須臾器大壺、鉄滓が出土した。実測可能な遺物が13個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。諏訪ノ木V遺跡住居内から砥石が出土した例は本遺構の一例のみ。刀子の茎の可能性のある棒状の鍛造鉄製品や釘が出土したが、鉄関連遺物の量が少なかったことや、鍛冶

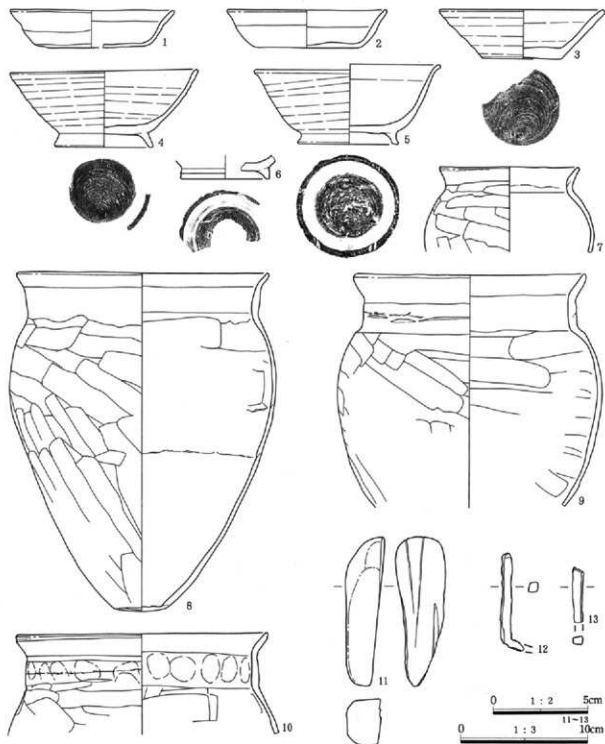
工房としての施設が確認できなかったことから、単純に本遺構鉄関連遺物を結びつけることはできない。砥石を含めた鉄関連遺物すべてが埋土からの出

土であるので、他遺構からの混入の可能性が高い。



第163図 2区13号住居・掘り方 平面・断面図

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物



第164図 2区13号住居出土遺物図

2区13号住居出土遺物観察表

No.	採区No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第164図 PL-106	土師器 杯	埋土 1/3	口(130) 高30 底(8.8)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ 削りか。
2	第164図 PL-106	土師器 杯	床直 1/5	口(126) 高30 底8.2	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ 削りか。

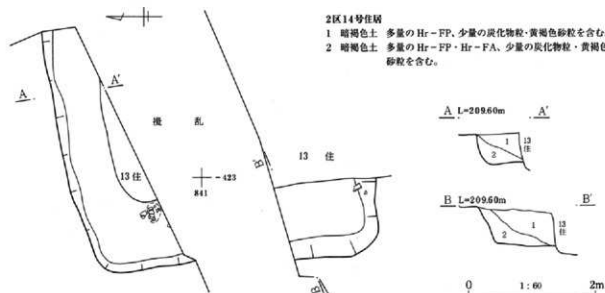
No.	棟因 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成	特徴など
3	第164回 PL-106	須惠器 杯	床直 2/3	口131 高39 底63	①粗砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内面黒色。
4	第164回 PL-106	須惠器 椀	床直 2/3	口(150)高63 底70 高台(78)	①粗砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
5	第164回 PL-107	須惠器 椀	床直 1/2	口177 高64 底75 高台80	①粗砂 ②還元焼 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
6	第164回 PL-107	須惠器 椀	埋土 底部1/3	口 - 高19残 底(70) 高台(70)	①粗砂 ②還元焼 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部に円形の打ち欠いた痕。
7	第164回 PL-107	土師器 小型壺	床直 口~胴部1/2	口111 高67残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面はへらナデ。
8	第164回 PL-107	土師器 壺	床直 2/3	口201 高268 底40	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面はへらナデ。
9	第164回 PL-107	土師器 壺	床直 口~胴部2/3	口(184)高184残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面はへらナデ。
10	第164回 PL-107	土師器 壺	+41 口~胴部1/3	口(200)高80残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面はへらナデ。
11	第164回 PL-107	石製品 砥石	埋土	長79 幅25 厚18 重46g		砥石。2面に刃物痕、1面に磨り面。
No.	棟因 No. 図版 No.	遺物名	①重②径③メ	出土位置 計測値(cm)		特徴など
12	第164回 PL-107	鉄製品 製造品 釘	①57g ②4 ③L(●)	埋土 長52残 径05		足部の先端部がやや開いたL字状に折れ曲がった釘。足部先端は欠落する。横断面形は方形。頭部は欠落しており、小さな破面となっている。含鉄L(●)で鉄部の残りは良好。
13	第164回 PL-107	鉄製品 製造品 棒状 不明	①13g ②2 ③酸化(△)	埋土 長30残 径04		断面形が僅かに長方形をした棒状不明品。長軸の両端部が欠けており、もとの形状は不明。釘ではないと判断される。難いながらも刀子の茎の可能性をもつ。

①重量②縦着径③メタル径

2区14号住居(第165・166回、PL58・107)

位置 841-423 方位 測定不可能。形状 全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 45cm
重複 2区13号住居と重複。2区13号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ10cm

の埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 床直付近から須惠器杯、埋土から土師器杯、小型壺、須惠器杯、椀、土師器



第165図 2区14号住居平面・断面図

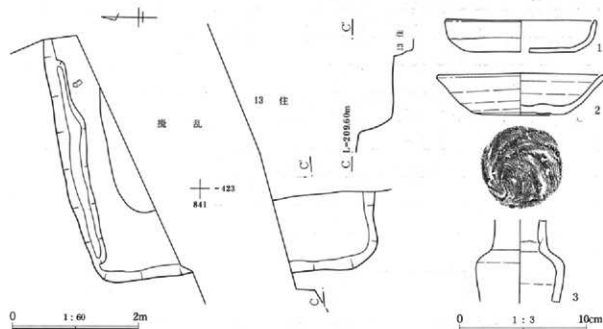
2区14号住居

- 1 暗褐色土 多量のHr-PP、少量の炭化物粒・黄褐色砂粒を含む。
- 2 暗褐色土 多量のHr-PP・Hr-FA、少量の炭化物粒・黄褐色砂粒を含む。

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

壺が出土した。実測可能な遺物が3個体ある。所見本住居の時期は、出土遺物より9世紀第2四半期に比定される。諏訪ノ木V遺跡では、3のような平城

宮の土器分類で壺Gと呼ばれる小型壺が、2区3号住居でも出土した。接合関係はなく別個体である。



第166図 2区14号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図

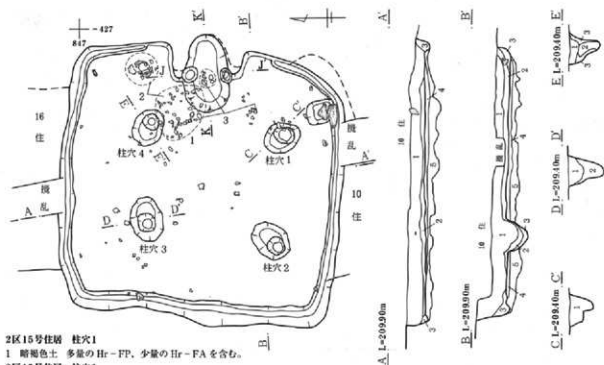
2区14号住居出土遺物観察表

No.	採掘No. 図版No.	類別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第166図 PL-107	土師器 杯	埋土 L/3	口(10.9) 高 3.5 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のへう張りか。
2	第166図 PL-107	須恵器 杯	埋土 L/4	口(13.9) 高 3.3 底 6.2	①砂粒 ②還元焼 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第166図 PL-107	須恵器 小壺	埋土 頭-胴部L/3	頸径 4.7 高 6.4 残 底 -	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。頸部と胴部に接合痕あり。平城宮の土器分類で壺G。

2区15号住居(第167・168図、PL59・108)

位置 847-427 方位 E-8°-S 形状 長軸 4.40m・短軸4.38mで長軸を南北にもつ方形である。面積1467㎡ 壁高47cm 重複 2区10号住居・16号住居・17号住居と重複。2区10号住居・17号住居に切られ、2区16号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ22cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 幅5~10cm前後、深さ約5cmで全局。柱穴 床面から掘り込まれた柱穴を住居のほぼ対角線上に4個を確認した。貯蔵穴 確認で

きなかった。掘り方面で確認された南東隅の掘り込みは貯蔵穴の可能性ある。竈 東壁のほぼ中央に設置。燃焼部は幅35cm、奥行き75cm。燃焼部は、壁内にある。袖内側から検出された小さな2つの落ち込みは、補強用の礎を設置した跡であると思われる。遺物 竈や床直から土師器壺、埋土から土師器台付壺が出土した。実測可能な遺物が3個体ある。掲載遺物は竈や床直からの出土。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。



2区15号住居 柱穴1

1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAを含む。

2区15号住居 柱穴3

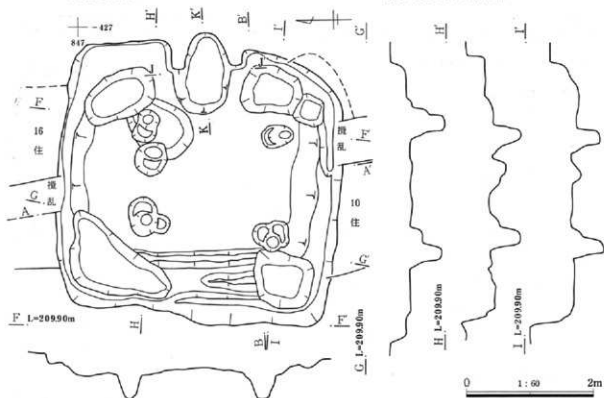
1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAを含む。
2 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FA・焼土粒を含む。

2区15号住居 柱穴4

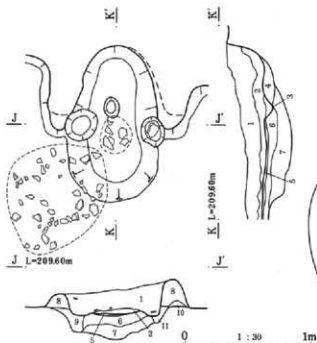
1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAを含む。
2 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FA・焼土粒を含む。
3 黒褐色土 多量のHr-FP、Hr-FA・焼土粒を含む。
やや締まりあり。

2区15号住居

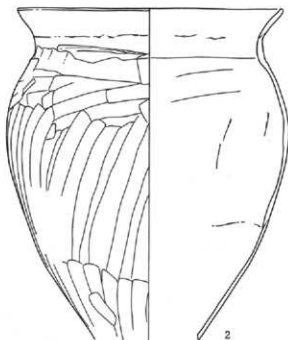
1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAを含む。
2 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FA・焼土粒を含む。
3 黒褐色土 多量のHr-FP、少数のHr-FA・焼土粒を含む。
4 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAを含む。締まりあり。(貼り床)
5 灰褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック、黒色粘質ブロックを含む。締まりあり。(貼り床)



第167図 2区15号住居・掘り方 平面・断面図

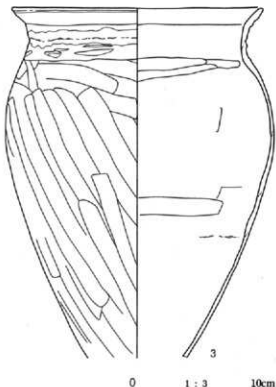
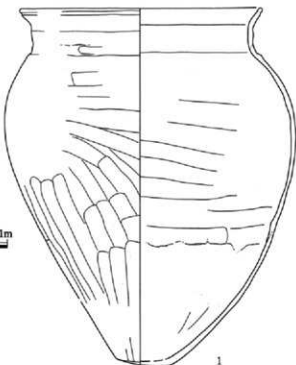


- 5 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック、焼土粒を含む。やや締まりあり。(貼った土か)
- 6 灰褐色土 多量のHr-FAブロックを含む。
- 7 灰褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック、黒色粘質ブロック、焼土粒を含む。
- 8 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック、焼土粒、焼土ブロックを含む。やや締まりあり。
- 9 暗褐色土 多数のHr-FP、Hr-FAブロック、焼土粒、焼土ブロックを含む。やや締まりあり。
- 10 黒褐色土 黒色粘質ブロック、Hr-FAブロックを含む。
- 11 黒褐色土 黒色粘質ブロック、Hr-FAブロック、黄褐色砂粒を含む。



2区15号住居 竈

- 1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAブロック・焼土粒・炭化物粒を含む。
- 2 灰褐色土 灰層、焼土粒を含む。
- 3 灰褐色土 焼土ブロックを多量に含む。(支脚を埋設した痕か)
- 4 灰褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック、焼土粒を含む。やや締まりあり。(貼った土か)



第168図 2区15号住居竈平面・断面図、出土遺物図

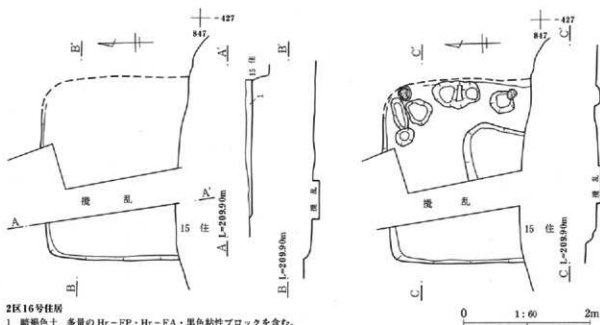
2区15号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第168図 PL-108	土師器 甕	カマド 1/6	口(194)高 278 底(36)	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
2	第168図 PL-108	土師器 甕	カマド 2/3	口212 高 262残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
3	第168図 PL-108	土師器 甕	カマド 3/4	口200 高 275残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

2区16号住居(第169図、PL60・107)

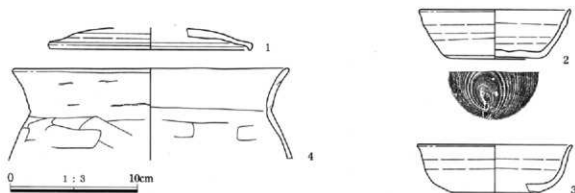
位置 847-427 方位 測定不可能。形状 住居の南部分が、2区15号住居に切られるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 12cm 重複 2区15号住居と重複。2区15号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ3cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で

整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 埋土から須恵器杯、土師器甕、須恵器蓋が出土した。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀第三四半期に比定される。



2区16号住居

1 暗褐色土 多量のHr-FP・Hr-FA・黒色粘性ブロックを含む。



第169図 2区16号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図

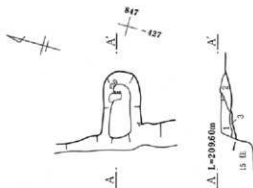
2区16号住居出土遺物観察表

No.	採掘No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	③焼成	特徴など
1	第169図 PL-107	須恵器 壺	埋土 口~天井1/6	口(16.0) 高 17 底 -	①砂粒 ②灰色	③還元焼	ロクロ成形、右回り回転。
2	第169図 PL-107	須恵器 杯	埋土 1/2	口(12.0) 高 39 底(7.0)	①細砂 ②灰白色	③還元焼	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第169図 PL-107	須恵器 杯	埋土 1/5	口(12.2) 高 38 底(7.0)	①砂粒 ②灰色	③還元焼	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第169図 PL-107	土師器 壺	埋土 口~肩部1/4	口(20.0) 高 72 底 -	①砂粒 ②褐色	③良好	口縁部から肩部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

2区17号住居(第170図、PL60)

位置 847-427 方位 N-65°-E 形状 竈のみの検出。面積 測定不可能。壁高 測定不可能。重複 2区15号住居と重複。2区15号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 不明瞭。確認できなかった。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。

竈 東壁に設置。燃焼部は幅17cm、奥行き42cm。明瞭な焼土層が検出された。遺物 埋土から土師器壺、須恵器大甕が出土した。出土した遺物はどれも小破片で、実測可能な遺物は検出されなかった。所見 出土土器から時期を比定することはできない。



2区17号住居 竈

- 1 暗褐色土 多量のHr-FP・焼土粒・焼土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 多量のHr-FP、少量の焼土粒・黄褐色砂粒を含む。
- 3 焼土

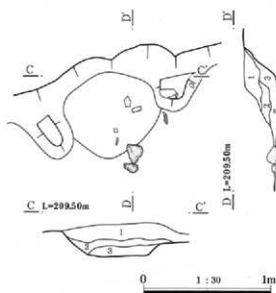
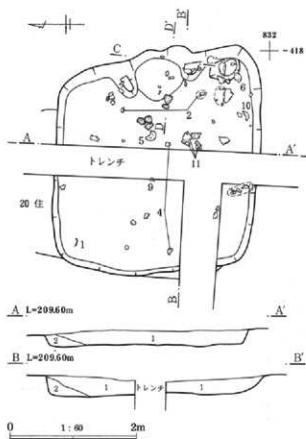


第170図 2区17号住居平面・断面図

2区18号住居(第171・172図、PL60・108・109)

位置 832-418 方位 N-82°-E 形状 長軸 3.40m・短軸3.18mで長軸を東西にもつ方形である。面積 88.5㎡ 壁高 20cm 重複 2区20・21号住居と重複。2区20・21号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方を床面とする。床面は堅く締まっていた。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ7cm・長軸52cm、短軸32cmの楕円形を呈す。竈 東壁に設置。燃焼部は幅72cm、奥行き67cmで検出。袖の補強用の礎が設置した状態で残存していた。遺物 床直から須恵器杯、碗、須恵器壺、土

師器壺、埋土から石製の杵の錘、釘、須恵器杯、灰釉陶器壺、須恵器大甕が出土した。実測可能な遺物が13個体ある。所見 諏訪ノ木V遺跡で検出された竈穴住居中、墨書土器が出土した遺構は、本遺構の他に2区7号住居がある。本遺構・2区7号住居とも石原東遺跡D1区遺物包含層から、400m以上離れた場所に位置する。完形の石製の杵の錘は、上面からと表表面から逆T字形に穿孔するタイプである。本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。



2区18号住居

1 黒褐色土 多量のHr-FP・Hr-FAを含む。

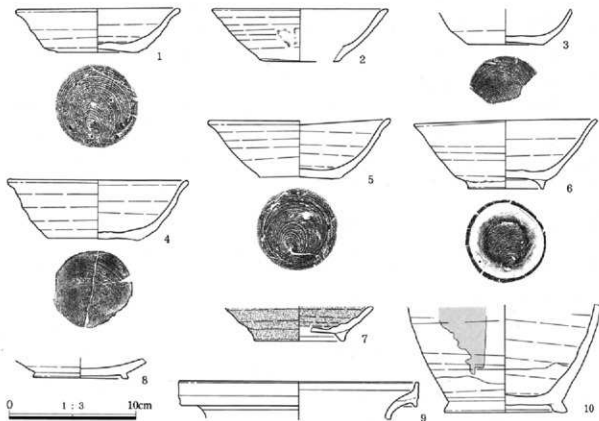
2 黒褐色土 多量のHr-FA粒・Hr-FAブロックを含む。

2区18号住居 竈

1 黒褐色土 多量のHr-FP・Hr-FAを含む。

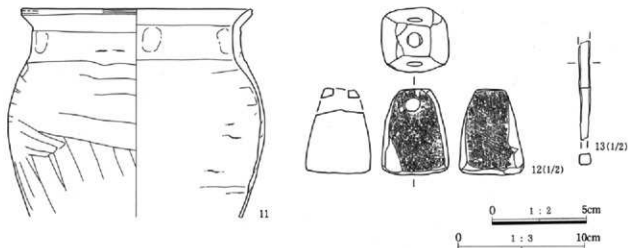
2 黒褐色土 少量のHr-FAブロックを含む。

3 黒褐色土 多量のHr-FAブロック・焼土粒を含む。



第171図 2区18号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物



第172図 2区18号住居出土遺物図(2)

2区18号住居出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第171図 PL-108	須恵器 杯	床直 ほぼ定形	口130 高35 底66	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第171図 PL-108	須恵器 杯	床直 1/3	口(14.0)高42 底(6.9)	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面に 磨き、「□」。
3	第171図 PL-108	須恵器 杯	埋土 1/3	口 - 高28残 底(6.0)	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面黒色。
4	第171図 PL-108	須恵器 碗	床直 3/4	口144 高47残 底8.8 高台 -	①粗砂 ②還元焰 ③黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付 であるが脱落。
5	第171図 PL-108	須恵器 碗	床直 3/4	口145 高4.8残 底 - 高台 -	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付 であるが脱落。外面のロクロ目強い。
6	第171図 PL-108	須恵器 碗	床直 2/3	口145 高5.5 底6.3 高台6.0	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、左回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
7	第171図 PL-108	須恵器 碗	埋土 体~底部1/3	口 - 高27残 底(8.0) 高台(7.2)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。 内外面黒色。
8	第171図 PL-108	灰輪陶器 碗	埋土 底部1/6	口 - 高1.6残 底(7.3) 高台(7.5)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。 輪調は緑色。黒雫14号室式期。
9	第171図 PL-108	須恵器 壺	床直 口縁1/3	口(19.1)高3.0残 底 -	①粗砂 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。
10	第171図 PL-108	灰輪陶器 長頸壺	+10 胴~底部1/2	口 - 高8.5残 底(9.0) 高台(9.6)	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。糸切り後、周辺部ナデ。高台は 貼付。輪調は透明感のない緑がかった灰色。
11	第172図 PL-109	土師器 壺	床直 口~胴部1/4	口(18.3)高15.5残 底 -	①粗砂 ②良好 ③褐色	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナ デ。
12	第172図 PL-109	石製品 秤の錘	埋土 完形	高 4.7 重 78.3 g	砥沢石(石材)	穿孔方法は上面と表裏面の逆T字形。穿孔は0.8mm大の正 円形。表裏面と上面からの穿孔は同じ工具を使用したもの か。上面1.7cm×1.3cmの長方形、下面3.4cm×3.4cmの正方形 を呈す。重量78.3gは1両42gという単位を用いた場合、 2両に近い。
No.	検出No. 図版No.	遺物名	①重②細③メ	出土位置 計測値(cm)		特徴など
13	第172図 PL-109	鉄製品 鋳造品 釘	①3.6 ②3 ③錆化(△)	埋土 長5.2残 径0.6		頭部の欠けた小形の釘破片。足部の先端部も小さく欠けている。横断面はや や歪んだ方形。頸部寄りが曲がっているのは既使用品のためか。

①重量②磁着度③メタル度

2区20号住居(第173図、PL60・109)

位置 832-419 方位 E-8°-S 形状 長軸
3.43m・短軸2.58mで長軸を南北にもつ長方形であ
る。面積(7.72)㎡ 壁高28cm 重複 2区18・21
号住居と重複。2区18号住居に切れ、21号住居

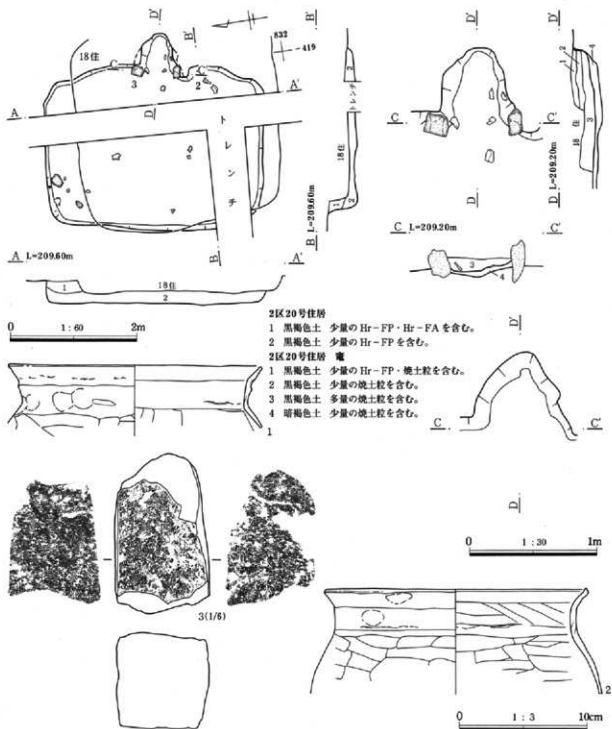
を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面
を床面とする。床面は堅く締まっていた。

壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。
貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁ほぼ中央に設

置。燃焼部は幅35cm、奥行き69cmで検出。燃焼部は、壁外にある。加工痕のある二ツ岳石を使用した竈構茶材が、竈袖部に設置した状態で残存。

遺物 床直から土師器甕が出土した。実測可能な遺

物が3個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4半期に比定される。



第173図 2区20号住居・甕 平面・断面図、出土遺物図

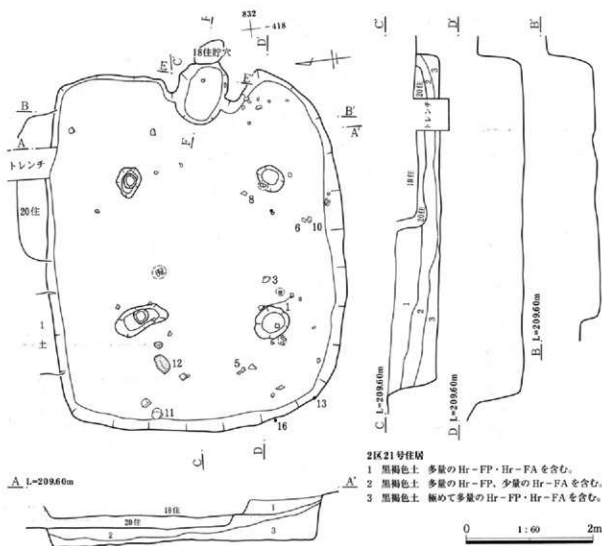
2区20号住居出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第173図 PL-109	土師器 罌	埋土 □-頸部1/4	口(202)高4.8 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
2	第173図 PL-109	土師器 罌	+8 □-胴部1/6	口(208)高8.2 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
3	第173図 PL-109	竈構築材 左軸石	カマド	長246 幅150 厚151 重551kg	二ツ岳石(石材)	4面加工。1面自然面。1面破面の竈構築材。

2区21号住居(第174~176図、PL60・109)

位置 832-418 方位 E-9°-S 形状 長軸 5.73m・短軸4.73mで長軸を東西にもつ長方形である。面積 21.33㎡ 壁高 32cm 重複 2区18・20号住居と重複。2区18・20号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ8cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っ

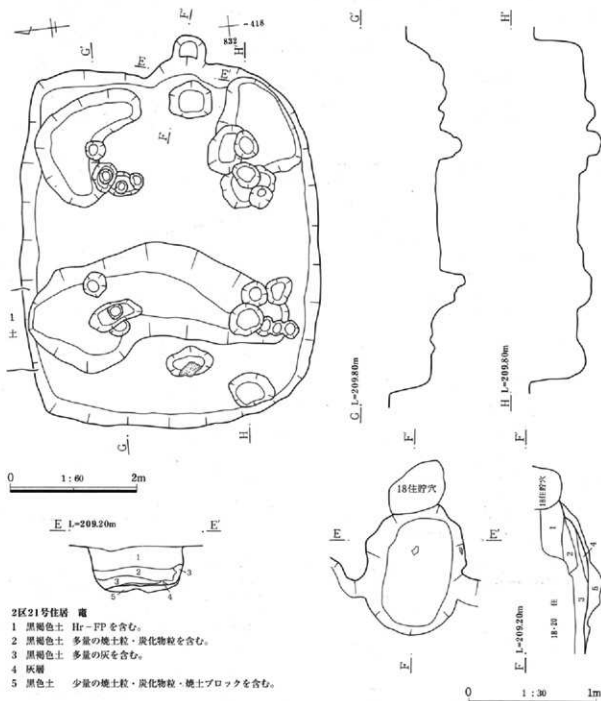
ている。壁溝 確認できなかった。柱穴 床面の調査時には確認できなかったが、掘り方面で、住居のほぼ対角線上に4つのピットが検出された。床面から掘り込まれたと考えられるとの調査所見を得た。貯蔵穴 なし。竈 東壁に設置。燃焼部は幅51cm、奥行き62cm 検出。遺物 床直から土師器杯、須恵器



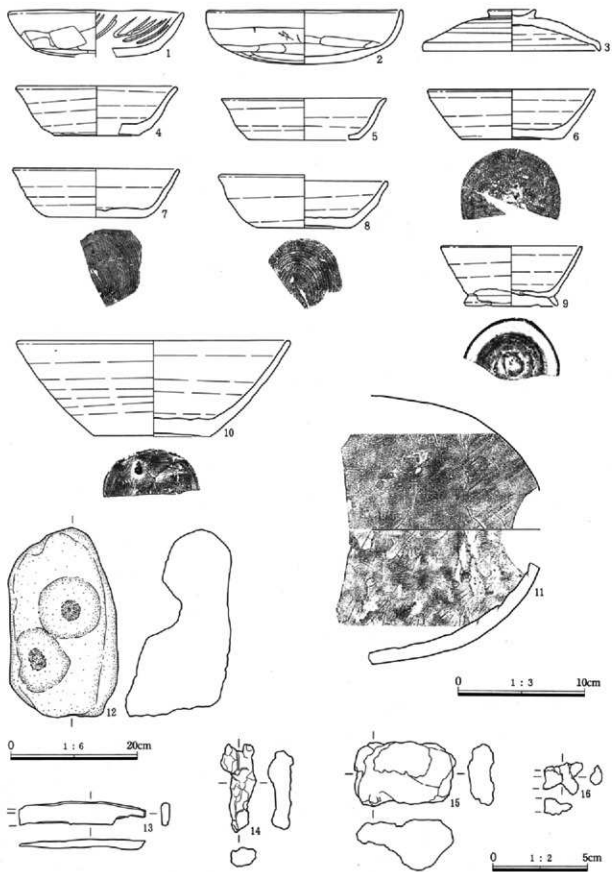
第174図 2区21号住居平面・断面図

杯、椀、壺、横瓶、加工痕のある二ツ岳石、埋土から須恵器大甕、刀子、未製品の可能性がある板状の鍛造鉄製品、釘状の鍛造鉄製品、鍛冶滓が出土した。実測可能な遺物が16個体ある。所見 発掘調査の段階では、21号住居の西側約1/3を22号住居として調査した。遺物の接合関係や土層断面の再検討の結果、21号住居と22号住居は同一の住居であるこ

とが確認された。22号住居を欠番として21号住居として報告することとする。掘り方で確認された柱穴は、床面から掘り込まれたと考えられるとの所見から、21号住居平面図内に4つの柱穴を合成した。本住居の時期は、出土遺物より8世紀第3四半期に比定される。



第175図 2区21号住居掘り方・竈 平面・断面図



第176図 2区21号住居出土遺物図

2区21号住居出土遺物観察表

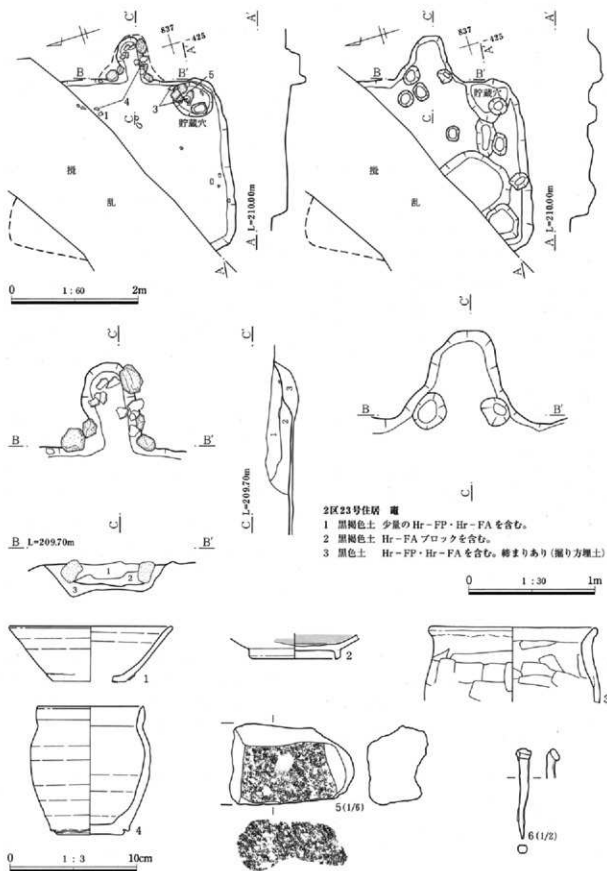
No.	埴田No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第176回 PL-109	土師器 杯	床直 1/4	口(14.0) 高37残 底-	①細砂 ②良好 ③色調	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘウ削り。底部は不定方向のヘウ削りか。内面口縁部は斜状状隆文。
2	第176回 PL-109	土師器 杯	埋土 1/3	口(15.6) 高4.3 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘウ削り。
3	第176回 PL-109	須恵器 産	床直 1/3	口14.2 高3.3 底- 横径3.9	①砂粒 ②還元端 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。横みは貼付。天井部は回転ヘウ削り。
4	第176回 PL-109	須恵器 杯	埋土 1/3	口(12.9) 高4.0 底(6.3)	①細砂 ②還元端 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。外面の一部に自然軸。
5	第176回 PL-109	須恵器 杯	床直 1/4	口(13.0) 高3.3 底-	①細砂 ②還元端 ③灰色	ロクロ成形。
6	第176回 PL-109	須恵器 杯	床直 1/3	口(13.3) 高4.0 底(8.0)	①細砂 ②還元端 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り磨し技法はナデで不明。
7	第176回 PL-109	須恵器 杯	埋土 1/8	口(13.2) 高3.8 底(7.6)	①砂粒 ②還元端 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
8	第176回 PL-109	須恵器 杯	床直 2/3	口18.4 高4.2 底7.4	①砂粒 ②還元端 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
9	第176回 PL-109	須恵器 輪	埋土 1/5	口(11.2) 高4.8 底(6.9) 高台(7.4)	①砂粒 ②還元端 ③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。回転ヘウ起こし。高台は貼付。
10	第176回 PL-109	須恵器 輪	床直 1/3	口(21.8) 高7.6残 底(9.4) 高台-	①粗砂 ②還元端 ③灰白色	大形。ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥離。
11	第176回 PL-109	須恵器 横板	床直 体部	口- 高- 底-	①砂粒 ②還元端 ③灰色	外面平行叩き。内面にて具痕が残る。
12	第176回 PL-109	凹み石	床直 定形	長29.7 幅17.0 厚15.0 重585kg	二ツ岳石(石材)	原石の敷面を粗い磨削により平坦化し、一面に2穴の楕円状の凹みを有する。凹みの内1穴は内面が研磨され、他の1穴は細いノミ状の工具による加工痕が残る事から、片側は未使用と推察される。
No.	埴田No. 図版No.	遺物名	①重②細③メ	出土位置 計測値 (cm)		特徴など
13	第176回 PL-109	鉄製品 鍛造品 刀子か	①9.7g ②5 ③特L(☆)	+32 長67残 幅1.1 厚0.4		一見、刀子状の鉄製品。ただし現状では刃部が認められない。茎も粗い鍛造で留まっており、背側も完全に成形が終了していないものと判断される。刀子の未製品の可能性が大。切先側は薄く鍛造されており、やや成形が進んだものか。
14	第176回 PL-109	鉄製品 鍛造品 釘状不明	①14.6g ②4 ③L(●)	埋土 長47 径1.8		漆に覆われた棒状の鉄製品。外周部は放射割れの目立つ漆部で、中心部には含鉄部が想定される。全体に長い棒状で、芯部は釘などの鉄製品かもしれない。表面には粉状炭が密集し、No.16と類似する。
15	第176回 PL-109	鉄製品 鍛造品 未製品か	①64.8g ②5 ③特L(☆)	埋土 長5.3 幅3.5 厚2.7		表面が酸化土砂に覆われた鉄製品または未製品。平面部は長方形。板状で各面は平坦化されていない。含鉄の塊形鍛冶滓の断片の可能性も残る。含鉄部は広く、錆化が進みつつある。
16	第176回 PL-109	鍛冶滓	①2.6g ②3 ③なし	+18 長2.1 短1.7 厚0.9		極小の鍛冶滓片。不定形で端部片層が破面。もう一方は漆が塊状に突出する。No.14の端部の可能性あり。表面には微細な粉状炭が残る。

①重量②細さ③メタル度

2区23号住居(第177回、PL60-110)

位置 837-425 方位 E-17°-S 形状 長軸(3.60)m・短軸2.78mで長軸を南北にもつ方形である。住居北西は水道管が通るため調査できなかった。面積(3.42)㎡ 壁高24cm 重複なし 床面掘り方面から厚さ7cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ21cm・長軸63cm、短軸51cmの楕円形を呈す。被熱痕のある礎、加工痕のある二ツ岳石、土師器甕が出土した。二ツ岳

石には被熱痕が認められる。竈 東壁に設置。燃焼部は幅26cm、奥行き65cmで検出。竈は焚き口部分を広く掘り込み、袖石を設置し、黒色土を貼り込んで構築している。遺物 床直から須恵器輪、小型甕、貯蔵穴内から土師器甕、埋土から釘、須恵器大甕片、掘り方直土から灰釉陶器片が出土した。所見 貯蔵穴内から出土した被熱痕・加工痕のある二ツ岳石、被熱痕のある礎は、竈構築材として使用されていたものと思われる。本住居の時期は、出土遺物より10世紀第2四半期に比定される。



第177図 2区23号住居・掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図

2区 23号住居出土遺物観察表

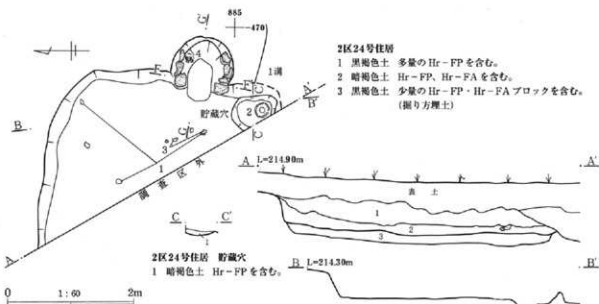
No.	押図 No. 図版 No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②釉色 ③色裏	④焼成	特徴など
1	第177図 PL-110	須臾器 罎	床直 1/6	口(130) 高 4.3 底(52) 高台-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色		ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。
2	第177図 PL-110	灰輪陶器 罎	掘り方埋土 底部1/4	口- 高 19.9 底(7.2) 高台(7.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色		ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。輪軸方法は刷毛織り、輪脚は透明感のない緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号室式。
3	第177図 PL-110	土師器 罎	貯蔵穴 口-前部1/4	口(134) 高 5.9 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色		口縁部から底部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
4	第177図 PL-110	須臾器 小型罎	床直 1/3	口(8.6) 高 10.4 底 5.2	①粗砂 ②還元焰 ③黄褐色		ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明。胎土に無色透明の鉱物含む。北陸系のロクロ罎。
5	第177図 PL-110	竈構築材 天井石か	貯蔵穴	長19.5 幅13.0 厚9.5 重20kg		二ツ岳石(石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。
No.	押図 No. 図版 No.	遺物名	①重量②③	出土位置 計測値 (cm)	特徴など		
6	第177図 PL-110	鉄製品 鐵造品 釘	①30g ②4 ③L(●)	埋土 長4.8 径0.5	小ぶりの頭折れ釘。体部の横断面は方形ぎみ。全体に緩やかなS字状に歪んでおり、頭部も傾いている。材に打ち込んだためか、おじれも生じている。		

①重量②重量③メタル度

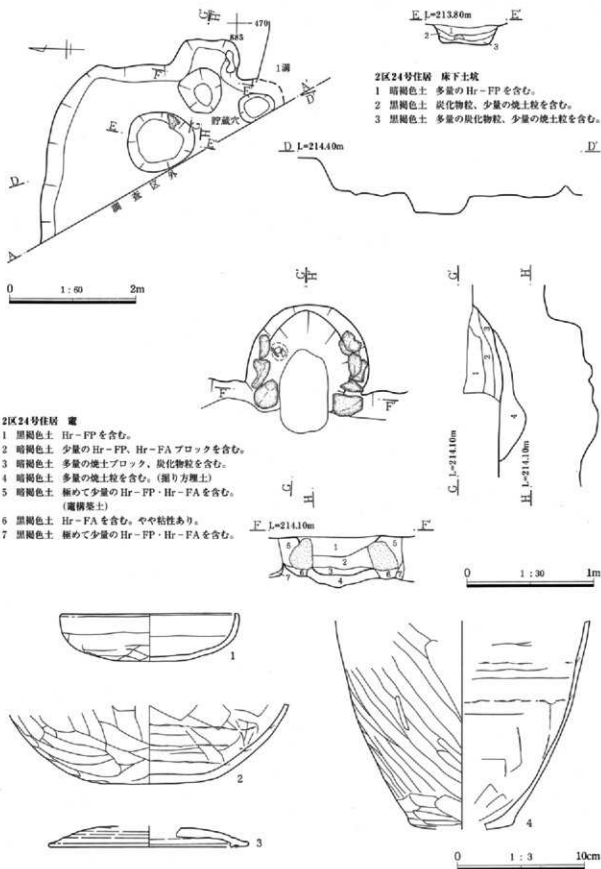
2区24号住居(第178・179図、PL61・110)

位置 885-470 方位 E-4°-S 形状 住居の南西部が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 51cm 重複1溝と重複。1溝が2区24号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ16cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面はほぼ平坦である。中央やや東に床下土坑。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。

深さ8cm、長軸64cm、短軸53cmの楕円形を呈す。貯蔵穴内から土師器鉢、甕が出土。竈 東壁南側に設置。焼残部は幅37cm、奥行き67cmで検出。竈袖部から竈構築材として用いられた被熱痕のある二ツ岳起渾の加工標が、設置した状態で検出された。遺物 竈から土師器甕、貯蔵穴内から土師器杯、鉢、埋土から須臾器甕が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀中頃に比定される。



第178図 2区24号住居平面・断面図



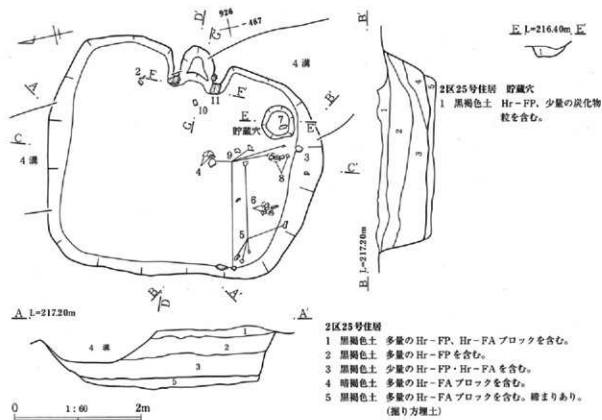
2区24号住居出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第179図 PL-110	土師器 杯	貯蔵穴 1/3	口(142)高3.8残 底3.8	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
2	第179図 PL-110	土師器 鉢	貯蔵穴 体下～底部	口 - 高6.3残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	体部下半～底部、不定方向のヘラ削り。内面ヘラナデ。
3	第179図 PL-110	須恵器 蓋	+13 口～天井1/3	口159 高1.6残 底 -	①砂粒 ②還元焼 ③暗灰色	口口ロ成形、右回り回転。天井部中ほどは回転ヘラ削り。外面自然軸。
4	第179図 PL-110	土師器 甕	カマド 側～底部2/3	口 - 高1.65残 底(8.0)	①砂粒 ②良好 ③褐色	体部外面斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。

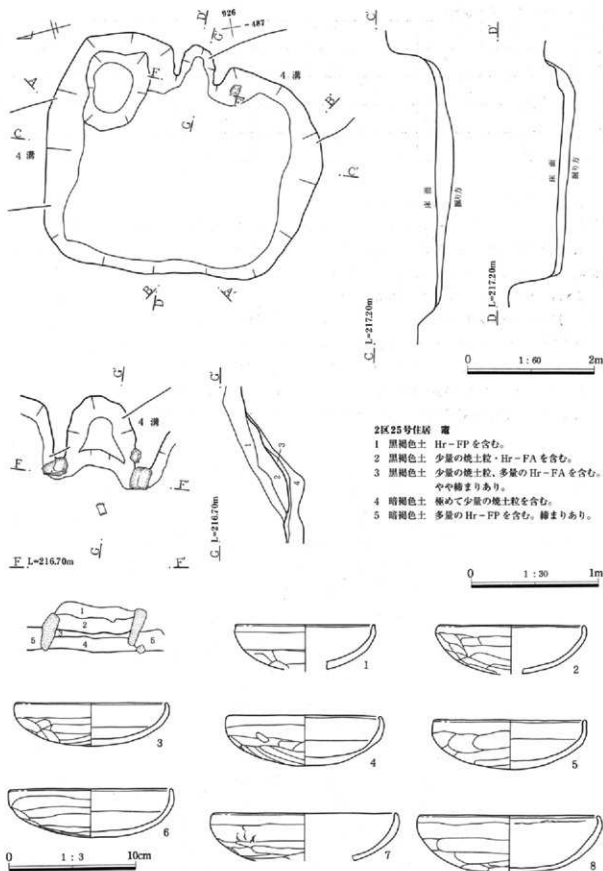
2区25号住居(第180～182図、PL62・110)

位置 926-487 方位 E-28°-S 形状 長軸 4.32m・短軸3.31mで長軸を南北にもつ方形である。面積 10.54㎡ 壁高 72cm 重複 4溝と重複。4溝が2区25号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ13cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面は、住居北東角に土坑状の窪みがあるもの、ほぼ平坦である。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ17cm、径52cm

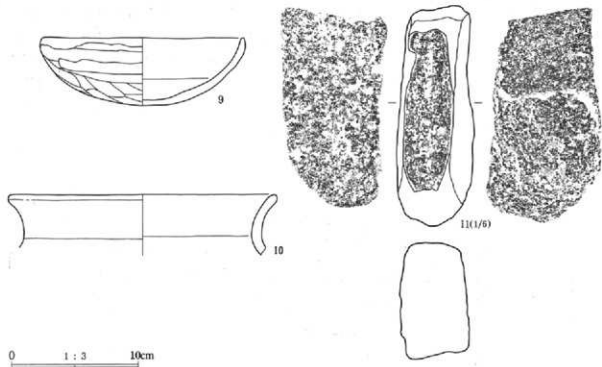
のほぼ円形を呈す。貯蔵穴内埋土から土師器杯、炭化物が出土。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅31cm、奥行き40cmで検出。加工痕のある二ツ岳石を使用した竈構築材が、右袖部で出土した。遺物 床直から土師器杯、甕、竈から二ツ岳起源の加工磚、貯蔵穴内から土師器杯、埋土から土師器杯、甕、須恵器杯、碗が出土した。実測可能な遺物が11個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より7世紀第3四半期に比定される。



第180図 2区25号住居平面・断面図



第181図 2区25号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)



第182図 2区25号住居出土遺物図(2)

2区25号住居出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状況	計測値 (cm)	①粘土 ②着色	特徴など
1	第181図 PL-110	土師器 杯	埋土 1/4	口(110) 高3.5 底-	①砂粒 ②褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
2	第181図 PL-110	土師器 杯	+24 1/3	口(120) 高3.9 底-	①砂粒 ②褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
3	第181図 PL-110	土師器 杯	+18 1/4	口(124) 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
4	第181図 PL-110	土師器 杯	床直 3/4	口121 高4.0 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
5	第181図 PL-110	土師器 杯	+17 ほぼ定形	口122 高3.9 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
6	第181図 PL-110	土師器 杯	+9 2/3	口130 高3.9 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
7	第181図 PL-110	土師器 杯	貯蔵穴 1/3	口(146) 高3.8 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
8	第181図 PL-110	土師器 杯	+16 1/2	口(144) 高4.5 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半が横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。
9	第182図 PL-110	土師器 杯	+9 3/4	口160 高5.4 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	大形。口唇部が横ナデ。上半が横方向のヘラ削り。下半-底部は不定方向のヘラ削り。
10	第182図 PL-110	土師器 甕	床直 口縁片	口(213) 高4.8 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部から頸部横ナデ。
11	第182図 PL-110	陶質建材 右端石	カマド	長34.5 幅12.4 厚18.3 重669g	二ツ岳石(石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面の陶質建材。被熱灰のある面1面(下面)。

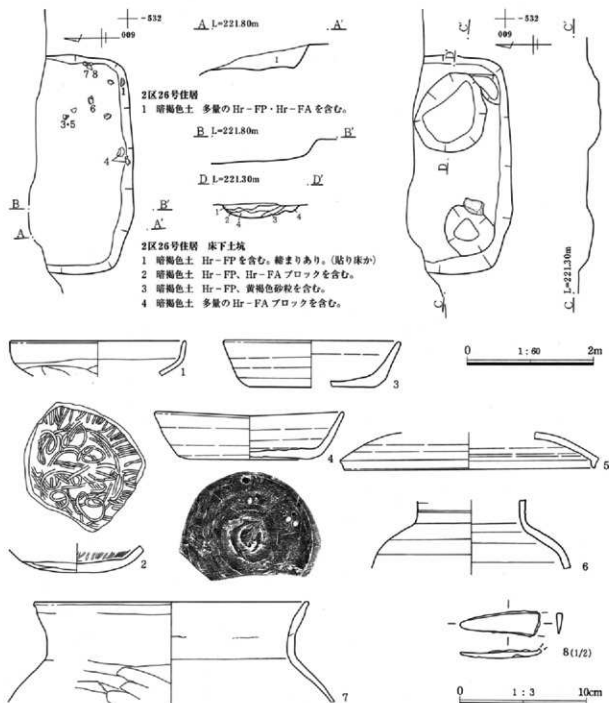
2区26号住居(第183図、PL63・111)

位置 009-532 方位 測定不可能。形状 住居の北部分が掘乱により切られているため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 27cm

重複 住居の北側が掘乱に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ13cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整ってい

る。住居南東に床下土坑。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 床直から土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、刀子、埋土から土師器杯、須恵器長頸壺、掘り方埋土から土師器杯が出土した。実測可能な遺物が8個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀第2四半期に比定される。

出土した刀子(8)は、基部側が折り曲げられており、故鉄の可能性があると指摘を穴澤氏より受けた。刀子(8)は、床直からの出土であるが、本遺構が鍛冶工房施設と結びつく遺構・遺物は刀子(8)以外に検出されなかった。遺構の残存状況悪く詳細は不明である。



第183図 2区26号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図

2区26号住居出土遺物観察表

No.	神田 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第183図 PL-111	土師器 杯	+10 1/4	口(14.0)高2.7残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がヘラ削り。
2	第183図 PL-111	土師器 杯	掘り方埋土 底部片	口- 高2.1残 底-	①細砂 ②良好 ③にぶい橙色	下半が横方向のヘラ削りか。底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放状縮文、底部は縮放状縮文。
3	第183図 PL-111	須恵器 杯	床直 1/4	口(13.6)高3.7 底(9.6)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロタロ成形、右回り回転。底部切り離しは、ヘラこし技法。
4	第183図 PL-111	須恵器 杯	床直 1/3	口(15.0)高3.8 底9.4	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロタロ成形、右回り回転。底部切り離しは、ヘラこし技法。
5	第183図 PL-111	須恵器 蓋	床直 口~天井1/5	口(20.0)高2.9残 底-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロタロ成形、右回り回転。天井部に自然釉。
6	第183図 PL-111	須恵器 長頸壺	+8 頸~胴部1/6	口- 高- 底-	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロタロ成形、回転方向不明。
7	第183図 PL-111	土師器 罍	床直 口~胴部1/6	口(21.8)高8.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。頸部より下位はヘラ削り。内面はヘラナデ。

No.	神田 No. 図版 No.	遺物名	①重②細③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
8	第183図 PL-111	鉄製品 製造品 刀子	①26 ②4 ③H(O)	床直 長4.2残 幅1.0 厚0.3	小形の刀子の先端部破片。基部側は破面となっており、片側に折り曲げられている。背側はやや丸みを持ち、全体に弧状になる。錆化が進み層状に剥離しつつある。基部側が折り曲げられているのは放鉄とするためか。

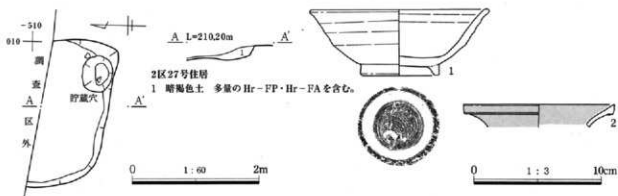
①重量②細さ③メタル度

2区27号住居(第184図、PL63・111)

位置 010-510 方位 測定不可能。形状 住居の北部分が擾乱により切られているため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 14cm 重複 住居の北側が擾乱に切られる調査所見を得た。床面 不明瞭だが、掘り方を床面とした可能性が高い。床面は堅く締まっていた。

壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。

た。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ8cm、長軸57cm、短軸49cmの楕円形を呈す。竈 確認できなかった。遺物 埋土から灰胎陶器長頸壺、掘り方埋土から須恵器碗が出土した。実測可能な遺物が2個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀前半に比定される。



第184図 2区27号住居平面・断面図、出土遺物図

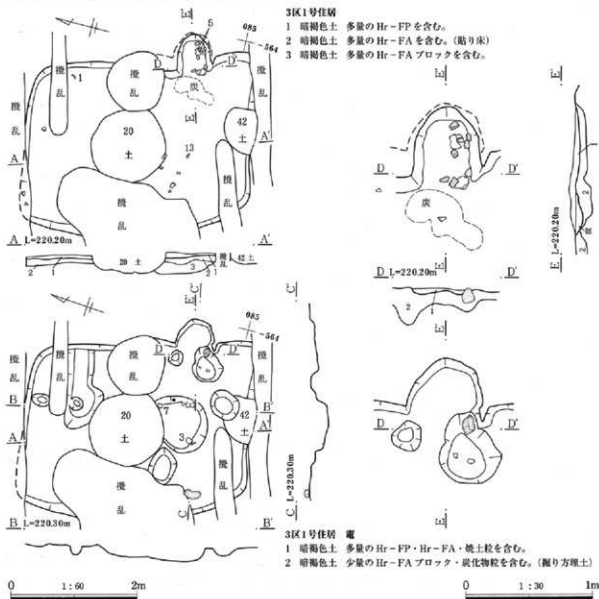
2区27号住居出土遺物観察表

No.	神田 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第184図 PL-111	須恵器 碗	掘り方埋土 1/3	口(14.2)高5.2 底6.2 高台6.3	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロタロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。粗い胎土。
2	第184図 PL-111	灰胎陶器 長頸壺	埋土 口縁片	口(11.8)高1.8残 底-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロタロ成形。内外面釉。

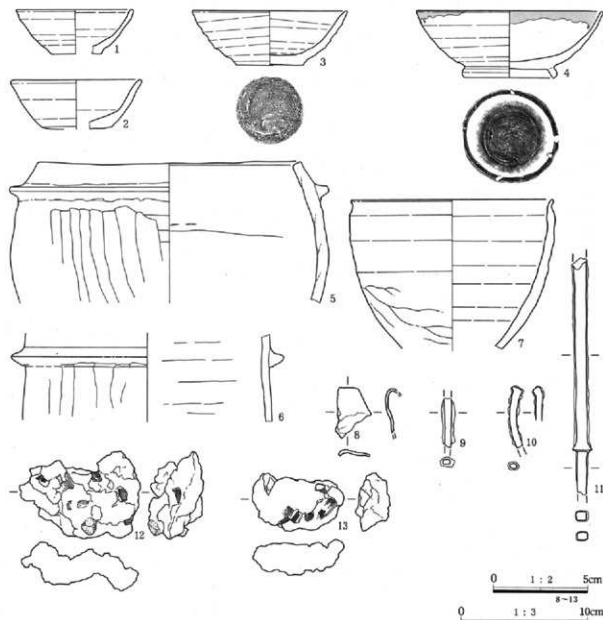
3区1号住居(第185・186図、PL63・111)

位置 085-564 方位 N-74°-E 形状 長軸 3.56m・短軸2.66mで長軸を南北にもつ長方形である。面積(8.34)㎡ 壁高12cm 重複 32・43号土坑と重複。32・43号土坑が、3区1号住居を切る調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ11cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は残存悪く不明瞭。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁南側に設置。熱焼部は幅46cm、奥行き41cmで検出。焚き口右手側の補強用の礫が設置した状態で残存していた。掘り方面確認時に検出された焚き口左手側の

小さな窪みは補強用礫を設置した跡であると思われる。遺物 床直から羽釜、須恵器甕、椀形鍛冶滓、埋土から須恵器杯、灰軸陶器椀、羽釜、釘、鉄鏝、棒状や板状の鍛造鉄製品、椀形鍛冶滓が出土した。実測可能な遺物が13個体ある。所見 遺構の残存状況が悪く不明瞭であった。椀形鍛冶滓や鍛造の鉄製品が多数出土したが、鍛冶工房に結びつく施設などは、検出されなかった。本遺構と鉄関連遺物を単純に結びつけることはできない。本住居の時期は、出土遺物より10世紀前半に比定される。



第185図 3区1号住居・掘り方・竈 平面・断面図



第186図 3区1号住居出土遺物図

3区1号住居出土遺物観察表

No.	神宮No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第186図 PL-111	須恵器 杯	+9 1/4	口(9.3)高(3.5) 底(4.0)	①砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第186図 PL-111	須恵器 杯	埋土 1/4	口(10.4)高(3.8) 底(5.7)	①砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第186図 PL-111	須恵器 杯	+9 1/3	口(12.3)高4.3 底5.4	①砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第186図 PL-111	灰釉陶器 椀	埋土 1/2	口14.8 高5.3 底7.0 高台7.4	①細砂 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大塚2号室式期。
5	第186図 PL-111	羽釜	+12 口~胴部1/6	口(20.9)高11.2残 底 - 胴径(25.3)	①粗砂 ②還元焙 ③褐色	罎は貼付。胴部外面、胴部から罎に向けて縦方向のヘラ刷り。
6	第186図 PL-111	羽釜	埋土 罎~胴部片	口 - 高6.9残 底 - 胴径(21.6)	①粗砂 ②還元焙 ③黄褐色	罎は貼付。胴部外面、胴部から罎に向けて縦方向のヘラ刷り。
7	第186図 PL-111	須恵器 甕	床直 口~胴部1/5	口(16.1)高11.8残 底 -	①砂粒 ②酸化焙 ③にぶい褐色	ロクロ成形、右回り回転。胴部下手ヘラ刷り。内面ヘラナデ。

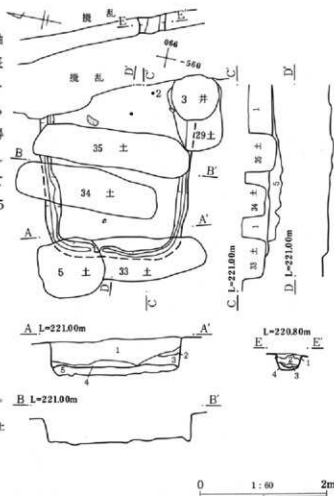
第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

No.	検出No. 図版No.	遺物名	①重量②磁石度 ③錆化(△)	出土位置 計測値(cm)	特徴など
8	第186図 PL-111	鉄製品 鍛造品 板状 不明	①12 g ②2 ③錆化(△)	埋土 長27残 幅17 厚0.15	厚さ0.15mm程の薄板を偏平な環状に折り曲げた鉄製品。左側の側面は直線状に途切れており、右側の側面は斜めになっている。長軸の両側面は破面。何らかの物体を外周部で止めたもので、内側の厚みは5mm強と、やや幅狭い。右側面が山形になる可能性もあり、刀尻または工具の柄杓めであろうか。
9	第186図 PL-111	鉄製品 鍛造品 釘	①12 g ②3 ③錆化(△)	埋土 長33残 径0.3	弧状に曲がった小形の釘。僅かに頭部が広がっているようにも見え、側部先端部は欠落する。横断面には錆化と酸化土砂により不明瞭で、現状では丸に近い断面形である。
10	第186図 PL-111	鉄製品 鍛造品 棒状	①14 g ②2 ③錆化(△)	埋土 長26残 幅0.3	酸化土砂に覆われた小さな棒状の鉄製品。長軸の両端部は欠けている可能性が高く、上手側端部には幅2.5mm程の方形の窪部がのぞいている。釘の可能性を持つが、断定はしにくい。
11	第186図 PL-111	鉄製品 鍛造品 鏃	①192 g ②6 ③特L(☆)	埋土 長125残 幅0.6 厚0.5	長い体部をもつ鉄製品の破片。先端部と茎の端部は欠落する。茎と体部の間には明瞭な間を全面に渡り残し、体部側の端部は小さく広がっている。
12	第186図 PL-111	焼石 鍛冶滓 (小、含鉄)	①620 g ②6 ③錆化(△)	埋土 長径6.4 短径4.5 厚2.3	不定形な小形扁平の焼石鍛冶滓。定形形で右側の方が焼石に発達しかけている。左半分は木炭灰や隙間の多いまとまりの悪い滓で、右側は焼石の屑部状となっている。上面は平坦で小さな木炭灰を残す。下面は右側部が一段と張り出すものの全体的には焼石で、炭屑を残しながらも全体的には面をなす。こうした形状になるには素材中の滓量が少なかったか。
13	第186図 PL-111	焼石 鍛冶滓 (細小)	①280 g ②4 ③なし	+2 長径4.9 短径3.0 厚1.9	平面、半円形をした小形の焼石鍛冶滓の破片。右側部のみが破面となる。上面は胴部がやや下がる形態で、表面には木炭灰が残る。下面は胴部の立ち上がりの強い焼石で、全体的に木炭灰に覆われている。また、その表面には木炭由来の繊維痕が数多く残っている。下手側の側面には径1.5mm大の粒状滓が固着する。

①重量②磁石度③メタル度

3区2号住居(第187・188図、PL63・111)

位置 066-560 方位 E-12°-S 形状 長軸(3.33)m・短軸2.32mで長軸を東西にもつ縦長の長方形である。面積(4.75)㎡ 壁高36cm 重複5・29・33・34・35号土坑、3号井戸と重複。重複するすべての遺構が、3区2号住居を切る調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 遺構の残存している部分では、深さ5~10cm、幅12~20cmでほぼ全局。



3区2号住居

- 1 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。
- 2 黒色土 多量のHr-FPを含む。
- 3 Hr-FP 二次堆積。地山から流れ落ちた堆積土。
- 4 褐色土 多量のHr-FPを含む。
- 5 暗褐色土 多量のHr-FAブロックを含む。

3区2号住居 竈

- 1 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。(住居の1層と同じ)
- 2 暗褐色土 多量のHr-FP・Hr-FAブロック・焼土粒を含む。二次堆積。天井崩落土の可能性あり。
- 3 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAブロック・焼土粒を含む。(天井崩落土の可能性あり)
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物粒を含む。(4層上面が使用面)

第187図 3区2号住居平面・断面図

柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁南側に設置。2つの攪乱により切られているため残存わずか。断面のみの調査。

遺物 床直から土師器甕、埋土から土師器杯が出土



0 1:3 10cm

第188図 3区2号住居出土遺物図

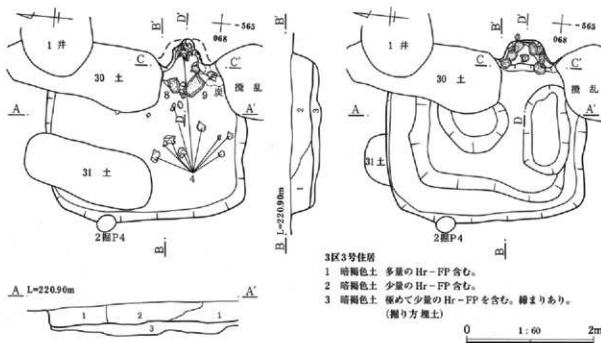
3区2号住居出土遺物観察表

No.	検出 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第188図 PL-111	土師器 杯	埋土 L/4	□(131) 高35 底(80)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	□縁部上手が横ナデ。下手がナデ。底部は不定方向のヘア割り。内面油煙。
2	第188図 PL-111	土師器 甕	床直 □~頸部片	□(206) 高37残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	□縁部横ナデ。

3区3号住居(第189~191図、PL64・112)

位置 068-565 方位 N-80°-E 形状 長軸 (3.16)m・短軸2.40mで長軸を南北にもつ方形である。面積 (6.22)㎡ 壁高 32cm 重複 30・31号土坑、1号井戸、2号掘立柱建物と重複。重複するすべての遺構が、3区3号住居を切る調査所見を得た。床面 掘り方から厚さ17cmの埋め土を施し

て平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。床面は堅く締まっていた。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁南側に設置。焼部は幅32cm、奥行き20cmで検出。袖・焼壁の石組みが設置した状態で残存している。焼部中央で検出された燼

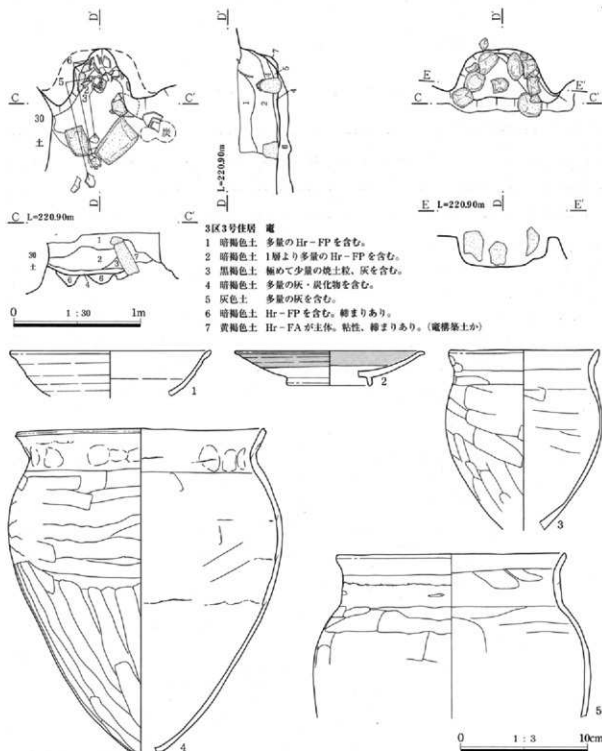


第189図 3区3号住居・掘り方 平面・断面図

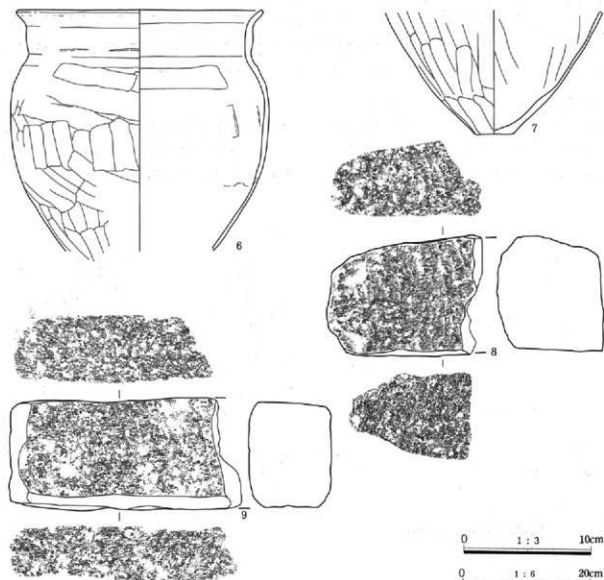
は支脚。竈手前で出土した加工痕のある直方体に切り出された二ツ岳石は天井石と考えられる。炭化物や灰層が4層下面に認められる。炭化物・灰層は、竈燃焼部に平面的に広がる。遺物 床直から二ツ岳起源の加工罫、土師器甕、羽釜、竈から須恵器杯・椀、

灰軸陶器皿、土師器小型甕、甕、羽釜、埋土から須恵器杯、土師器甕、須恵器壺が出土した。実測可能な遺物が9個体ある。

所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。



第190図 3区3号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)



第191図 3区3号住居出土土物観察表

3区3号住居出土土物観察表

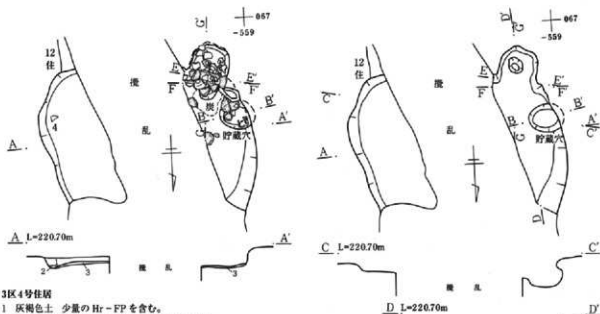
No.	採掘No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第190図 PL-112	須恵砂 杯・碗	カマド 口～体部1/6	口(16.0)高35残 底-	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。内面黒色。
2	第190図 PL-112	灰釉陶器 皿	カマド 1/4	口(15.0)高27 底(6.7)高台(68)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。施釉方法は横け掛け。大皿2号並式器。
3	第190図 PL-112	土師砂 小型甕	カマド 口～胴部下 1/5	口120 高143残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
4	第190図 PL-112	土師砂 甕	床直 3/4	口200 高255 底(27)	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。内面と外面の口縁部から頸部にかけて黒色の付着物。
5	第190図 PL-112	土師砂 甕	カマド 口～胴部1/4	口(18.3)高130残 底-	①砂粒 ②良好 ③赤い ④褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第191図 PL-112	土師砂 甕	カマド 口～胴部1/6	口(19.6)高192残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
7	第191図 PL-112	土師砂 甕	埋土 胴～底部1/4	口- 高97残 底28	①砂粒 ②良好 ③褐色	胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

No.	棟図 No. 図版 No.	種類 砂種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材	特徴など
8	第191図 PL-112	竜巻茶材 天井石か	カマド	長241 幅190 厚166 重695kg	二ツ岳石	4面加工面、1面自然面、1面破面の竜巻茶材。被熱痕のある面1面(下面)。
9	第191図 PL-112	竜巻茶材 天井石か	カマド	長365 幅170 厚130 重100kg	二ツ岳石	4面加工面、1面自然面、1面破面の竜巻茶材。被熱痕のある面1面(下面)。

3区4号住居(第192~194図、PL65・113)

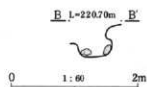
位置 067-559 方位 S-22°-W 形状 長軸
320m・短軸(211)mで長軸を東西にもつ方形である。
面積 (620)㎡ 壁高 26cm 重複 3区12号住居と

重複。3区4号住居が3区12号住居を切る調査所見
を得た。住居中央部が攪乱に切られる。
床面 掘り方面から厚さ7cmの埋め土を施して平坦



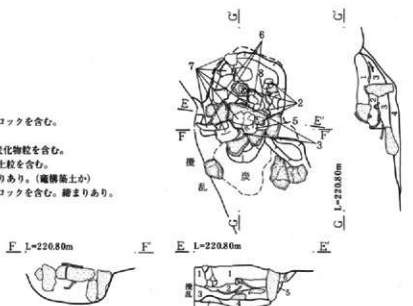
3区4号住居

- 1 灰褐色土 少量のHr-FPを含む。
- 2 Hr-FP 二次堆積。地山から崩れ落ちた堆積。
- 3 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。



3区4号住居 竈

- 1 暗褐色土 少量のHr-FP・Hr-FAブロックを含む。
- 2 黒褐色土 少量のHr-FPを含む。
- 3 暗褐色土 少量のHr-FP・Hr-FA・炭化物粒を含む。
- 4 黒褐色土 炭化物が主体の層。少量の焼土粒を含む。
- 5 黄褐色土 Hr-FAが主体。粘性。締まりあり。(竜巻茶土か)
- 6 暗褐色土 少量のHr-FP・Hr-FAブロックを含む。締まりあり。

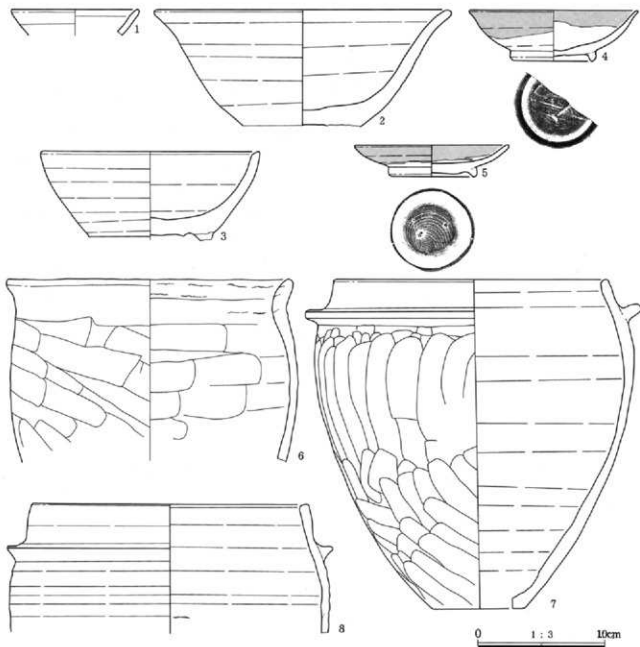


第192図 3区4号住居・掘り方・竈 平面・断面図

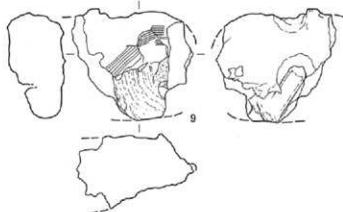
な面を造る。掘り方面はほぼ平坦である。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ28cm、長軸(55)cm、短軸48cmの楕円形を呈す。住居西壁をえぐるように掘られている。竈 南壁西隅に設置。焚口袖・天井などの石組みが残存している。焚口幅44cm。燃焼部中央で検出された礫は支脚。遺物 竈から灰釉陶器皿、須恵器碗、羽釜、土師器甕、床直から灰釉陶器碗、埋

土から土師器杯、須恵器大甕片、流出孔滓が出土した。2、3の須恵器碗は大形である。実測可能な遺物が9個体ある。本遺構から出土した羽釜片・土師器甕片が、3区7号住居から出土した羽釜片・土師器甕片と接合した。これらの遺物は、4・7号住居出土接合遺物として、本遺構と、3区7号住居の間に掲載した。

所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



第193図 3区4号住居出土遺物図(1)



第194図 3区4号住居出土遺物図(2)

3区4号住居出土遺物観察表

No.	押図No. 図版No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第193図 PL-113	土師器 杯	壇土 口縁1/3	口(10.0) 高2.1 残底-	①砂粒 ②酸化燻 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。内面黒色、炭化物か。
2	第193図 PL-113	須恵器 碗	カマド 1/4	口(23.5) 高9.3 残底(9.4) 高台-	①砂粒 ②酸化燻 ③にぶい橙色	大形。ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。
3	第193図 PL-113	須恵器 碗	カマド・貯蔵 穴 1/5	口(17.4) 高7.1 残底- 高台-	①砂粒 ②酸化燻 ③にぶい黄褐色	大形。ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。内面黒色。
4	第193図 PL-113	灰釉陶器 碗	床直 1/2	口(13.3) 高4.0 底(6.7) 高台(6.8)	①細砂 ②還元燻 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。釉貼方法は漬け掛け。大塚2号窯式期。外面下位の黒色の付着物は黒炭か。
5	第193図 PL-113	灰釉陶器 皿	カマド 完形	口12.2 高2.6 底7.0 高台7.0	①細砂 ②還元燻 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。釉貼方法は漬け掛け。大塚2号窯式期。口縁部の黒色の付着物は黒炭か。
6	第193図 PL-113	土師器 甕	カマド 口~胴部	口22.8 高14.4 残底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部横ナデ。胴部は斜位のヘラ削り。内面はヘラナデ。
7	第193図 PL-113	羽釜	カマド 3/4	口21.8 高26.2 底(7.2) 口径26.7	①砂粒 ②酸化燻 ③にぶい橙色	ロクロ整形。胴は貼付。胴部外面、底部から筒に向けてヘラ削り。
8	第193図 PL-113	羽釜	カマド 口~胴上1/6	口(22.0) 高10.2 残底-	①砂粒 ②酸化燻 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形。胴は貼付。
No.	押図No. 図版No.	遺物名	①重②粗③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
9	第194図 PL-113	流出孔滓	①106.5 ②5 ③なし	壇土 長径6.5 短径5.9 厚3.9	最大幅が5.7cm程の、やや扁平な流出孔滓破片。上下面と短軸側の側面の一部が生きており、全体に右方向に向かい半流動状。右側の方が流動性が高く、左側は木炭灰をかみ込みが内洋的。下面上手には小籠網ながら灰色の如き埋土が残る。下面下手寄りには右側から差し込まれた棒状の工具痕あり。工具先の形状は幅5mm程の隅丸方形の断面を持つ。滓はややガス質。本遺跡では数少ない製煉系の滓の可能性もあり、流出孔径が小さなことから、和本身もやや小形かと推定される。	

①重量②粗さ③メタル度

3区4・7号住居接合遺物

(第195・196図、PL65・66・113)

概要 3区4号住居から出土した羽釜片・土師器甕片と、3区7号住居から出土した羽釜片・土師器甕片が接合した。これらの遺物は、4・7号住居出土接合遺物として、この項に掲載する。3区4号住居、3区7号住居とも出土遺物から、10世紀後半代に比定さ

れる遺構である。接合遺物も10世紀後半代に比定される。3区4号住居、3区7号住居は、約15m離れている。

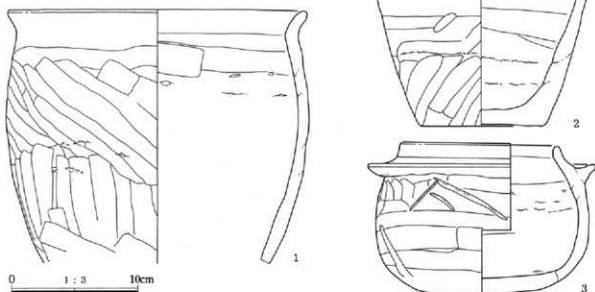
土師器甕(1)はほぼ1:3の割合で3区4号住居から出土した土器片と3区7号住居から出土した土器片が接合した。3区4号住居出土土器片は、3区4号住居貯蔵穴からの出土である。3区7号住居出土土器片

は、すべて3区7号住居竈からの出土である。3区7号住居出土土器片は3区7号住居竈燃焼部奥の壁に貼り付けて出土した。

須恵器甕(2) はほぼ4:1の割合で3区4号住居から出土した土器片と3区7号住居から出土した土器片が接合した。3区4号住居出土土器片は、3区4号住居竈と3区4号住居貯蔵穴からの出土である。3区7号住居出土土器片は、3区7号住居埋土からの出土である。

羽釜(3) はほぼ1:1の割合で3区4号住居から出土した土器片と3区7号住居から出土した土器片が接合した。3区4号住居出土土器片の大部分は、3区4号住居竈からの出土である。土器片は竈に残存した天井石の真下から出土した。3区7号住居出土土器片は3区7号住居竈内の出土である。竈燃焼部奥の煙道付近で出土した。

所見 3区4号住居出土の土器片は、竈燃焼部あるいは焚き口付近から出土しているものが多い。これは3区4号住居の竈で使用された甕の土器片として捉えることが出来る。一方、3区7号住居出土の土器片は竈の燃焼部から煙道にかけての壁際で検出されているものが多い。なかには3のように燃焼壁に貼り付けて出土した土器片もあった。これは3区7号住居の竈構築材として利用されていた土器片であったと捉えることが出来る。3区4号住居で使用していた土器片を3区7号住居の竈構築材として転用した可能性が高い。

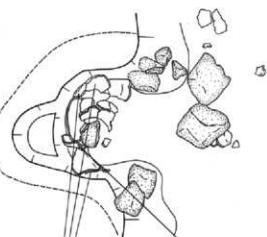


第195図 3区4・7号住居出土遺物図

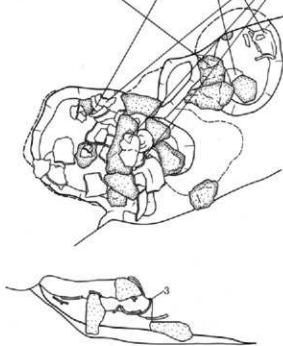
3区4・7号住居出土 接合遺物観察表

No.	検出 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状況	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	③焼成	特徴など
1	第195図 PL-113	土師器 甕	4号住居貯蔵穴 7号住居カマド 1/3	口238 高200 残底-	①粗砂 ②褐色	③良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
2	第195図 PL-113	須恵器 甕	4号住居貯蔵穴 7号住居	口(184)高184 底(96)	①粗砂 ②褐色	③酸化	口クロ整形。底部は回転系切りか。外面下部ヘラ削り。
3	第195図 PL-113	羽釜	4号住居カマド 7号住居カマド ほぼ完形	口125 高121 胴径179	①砂粒 ②にぶい ③にぶい 褐色	③酸化	鈿は貼付。胴部外面、上位は鈿に向けて取方向のヘラ削り、下位は横方向のヘラ削り。体部外面割書「口」。底部丸底。内面ナデ。

3区7号住居 竈



3区4号住居 竈



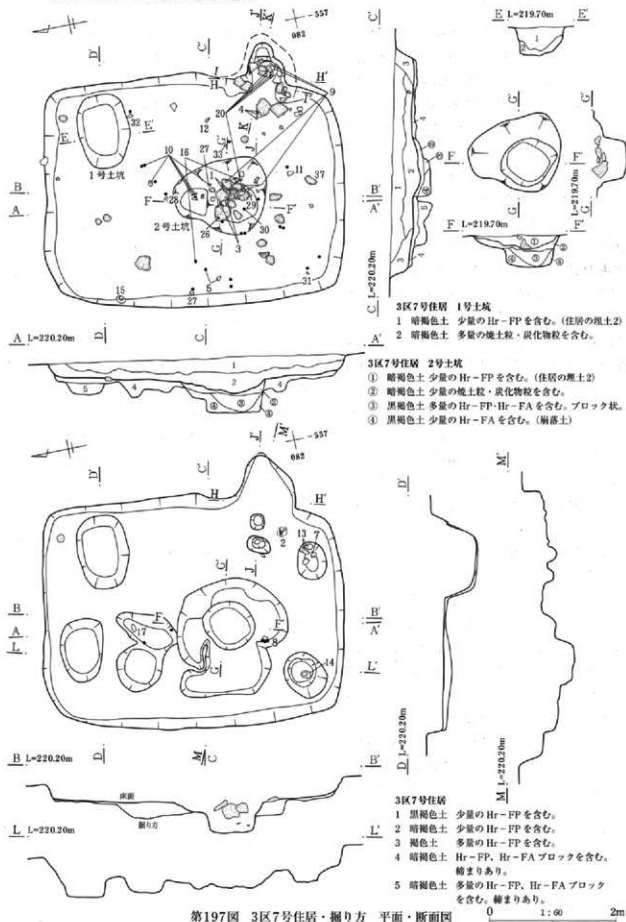
第196図 3区4・7号住居竈遺物出土状況

3区7号住居(第198-201図、PL66・67・114・115)
 位置 082-557 方位 E-19°-S 形状 長軸
 471m・短軸366mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 1387㎡ 壁高 31cm 重複 なし 床面
 掘り方面から厚さ13cmの埋め土を施して平坦面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。住居北東隅に長軸114cm・短軸85cmの隅丸長方形土坑を検出(1号土坑)。住居中央に長軸145cm・短軸123cmの楕円形土坑を検出(2号土坑)。2号土坑の周辺からは被熱痕のある礫が多数出土した。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 1号土坑が貯蔵穴か。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅49cm、奥行き29cmで検出。煙道は幅24cm、奥行き9cmで緩やかに立ち上がる。袖の補強用礫、支脚が設置した状態で残存している。竈手前から出土した直方体に切り出された礫は天井部に設置されていた可能性が高い。竈は広く掘り込み、褐色土や土器片を貼り込んだ状態で構築している。燃焼部奥の壁に貼り込んだ土器片は3区4号住居出土の土器片と接合した。これらの遺物は、3区4・7号住居出土接合遺物として、本遺構と、3区4号住居の間に掲載した。

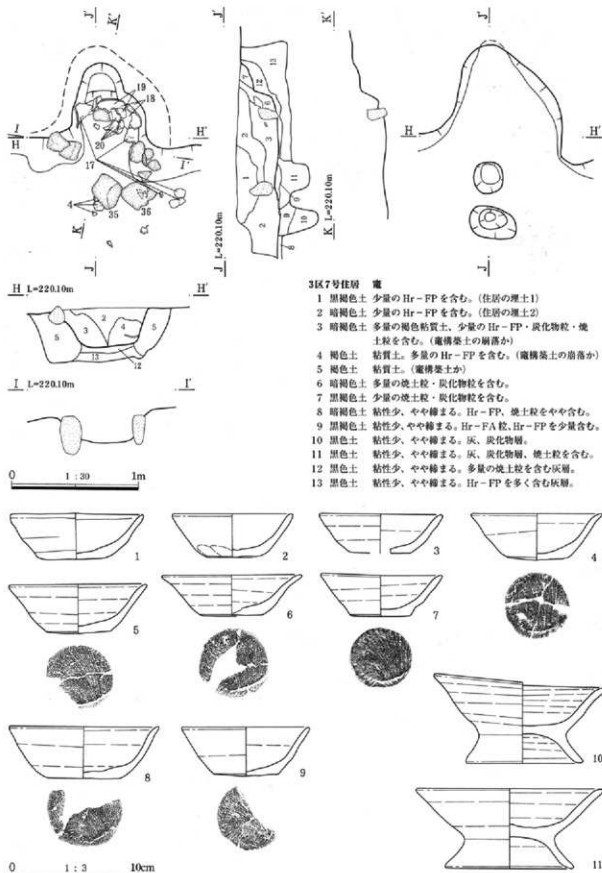
遺物 竈から須恵器杯、土師器寛、羽釜、羽口、竈構築材として用いられた二ツ岳起源の加工礫、床直から須恵器杯、椀、黒色土器椀、灰軸陶器段皿、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、1号土坑から釘と思われる鉄製品、U字状の鍛造鉄製品、灰軸陶器椀、2号土坑から多量の椀形鍛冶滓、鍛造剥片、須恵器杯、灰軸陶器段皿、羽釜、埋土から鍛造鉄製品、鍛冶滓、須恵器杯、灰軸陶器耳皿、掘り方埋土から須恵器杯が出土した。埋土から出土した鑄造品は、鑄造品の脚部と推定されるが、放鉄として本遺構に持ち込まれた可能性が高い。2号土坑から出土した多量の椀形鍛冶滓、鍛造剥片は精錬鍛冶的な要素を持つ。穴澤氏による所見を以下に掲載する。

滓質や含鉄の椀形鍛冶滓が多い点など共通する要素を持っていて、椀形鍛冶滓そのものも偏平で横方向に広がり、鍛冶炉の炉床が比較的皿状で広いこと

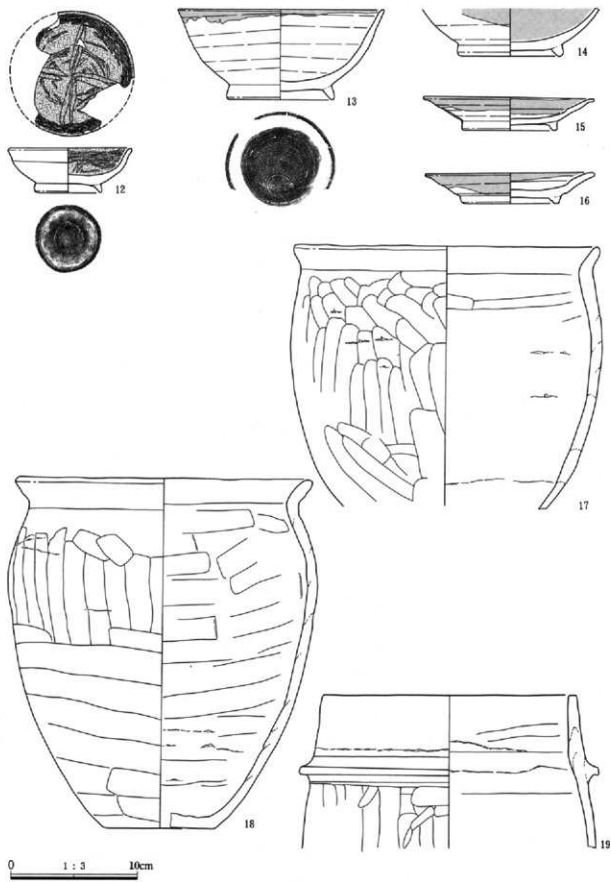
を示すものである。羽口の溶損角度は強く、除滓と鉄中の炭素量を調整する精錬鍛冶的な要素の強い遺物群である。鉄製品が3点出土しているが、1点は釘状の鍛造品でもう1点は盤等の平板な製品の四角につく形の脚部である。鍛冶工房そのもので、こうした盤の様な機能を持つ大形の鑄造品を使用したというよりは、放鉄として鑄造品の破片が持ち込まれたものと考えた方がよさそうである。使用角度の強い羽口は、炭素量の高い鉄系系の鉄塊や鉄製品の炭素量を下げて鍛造品にむく鉄質に調整するには有効なものである。時期も他の住居跡の鍛冶関連遺物より新しく、諏訪ノ木V遺跡の10世紀代後半の鍛冶のあり方を読みとることが出来る一括資料である。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。燃焼部奥の壁に貼り込んだ土器片は、3区4号住居出土の土器片と接合した。3区4号住居で使用していた土器片を、3区7号住居の竈構築材として転用した可能性が高い。2号土坑は、床面を構築した後に掘られたものである。床面を円形に深く掘り、黒褐色土を埋め込んで構築されたと思われる。2号土坑2層上面が、住居廃絶直前の状態である。2号土坑1層中には多量の被熱痕のある自然石や、多量の椀形鍛冶滓、鍛造剥片が検出された。2号土坑は、2号土坑2層上面を使用面とする精錬鍛冶工房に関連する鍛冶炉の可能性が考えられる。



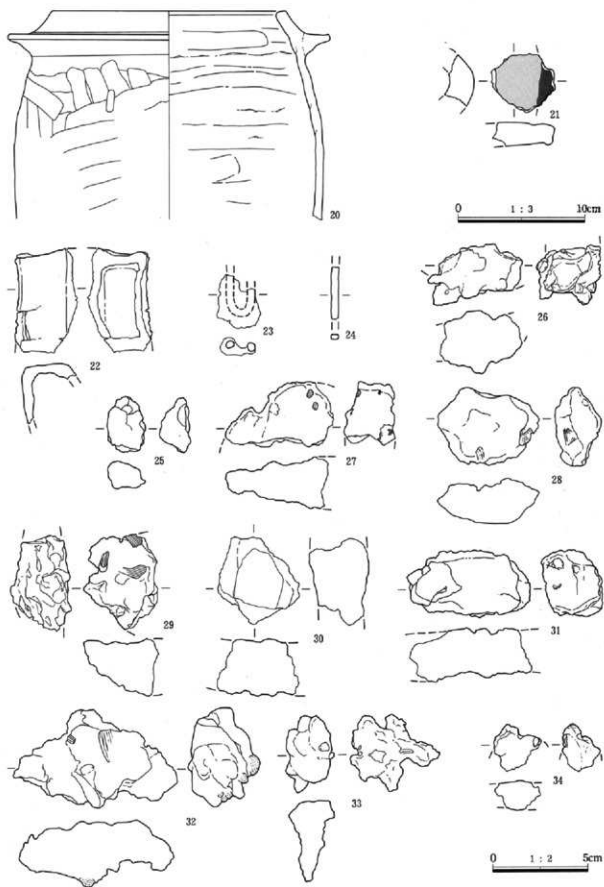
第197図 3区7号住居・掘り方 平面・断面図



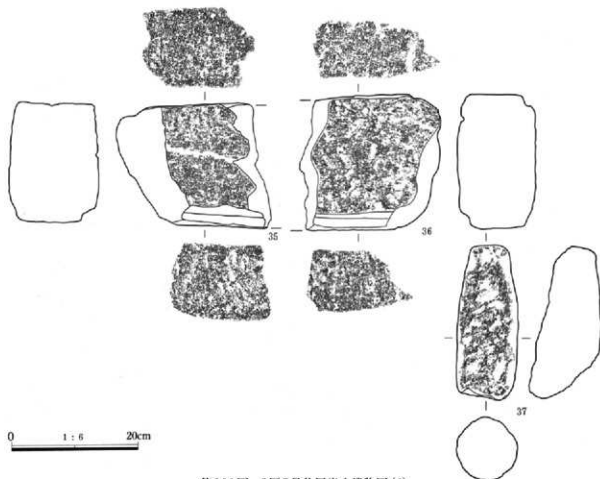
第198図 3区7号住居遺平面・断面図、出土遺物図(1)



第199図 3区7号住居出土遺物図(2)



第200図 3区7号住居出土遺物図(3)



第201図 3区7号住居出土遺物図(4)

3区7号住居出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第198図 PL-114	須恵器 杯	2号土坑 ほぼ完形	□105 高37 底58	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
2	第198図 PL-114	須恵器 杯	2号土坑 2/3	□95 高34 底40	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
3	第198図 PL-114	須恵器 杯	カマド 1/4	□(98) 高31 底7.0	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
4	第198図 PL-114	須恵器 杯	カマド ほぼ完形	□103 高37 底5.0	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
5	第198図 PL-114	須恵器 杯	床直 2/3	□110 高39 底5.1	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
6	第198図 PL-114	須恵器 杯	埋土 2/3	□(111) 高32 底4.5	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
7	第198図 PL-114	須恵器 杯	掘り方埋土 1/2	□96 高34 底5.2	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
8	第198図 PL-114	須恵器 杯	床直 1/6	□118 高42 底5.8	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
9	第198図 PL-114	須恵器 杯	埋土 1/6	□(101) 高39 底5.2	①粗砂 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
10	第198図 PL-114	須恵器 碗	床直 2/3	□138 高7.1 底6.9 高台9.3	①砂粒 ②酸化焙 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明、高台は貼付。
11	第198図 PL-114	須恵器 碗	床直 1/3	□(148) 高6.3 底7.1 高台(102)	①砂粒 ②酸化焙 ③橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明、高台は貼付。
12	第199図 PL-114	黒色土器 碗	床直 1/2	□98 高36 底5.2 高台5.4	①砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明、高台は貼付。内面ヘラミガキ、黒色処理。

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

No.	押込 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
13	第199図 PL-114	灰釉陶器	1号土坑 1/2	口16.4 高7.2 底8.2 高台8.6	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	口クロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色。胎土方法は漬けがけ。虎渡山1号壺式期。
14	第199図 PL-114	灰釉陶器 椀	掘り方皿土 体へ底部	口一 高3.8 底8.4 高台8.6	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	口クロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明であるが回転赤切りか。高台は貼付。釉調は灰色がかった緑色。大原2号壺式期。
15	第199図 PL-114	灰釉陶器 段皿	床直 宛形	口13.6 高2.6 底7.5 高台7.6	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	口クロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は緑がかった灰色。大原2号壺式期。
16	第199図 PL-114	灰釉陶器 段皿	2号土坑 1/2	口13.0 高2.4 底8.0 高台7.6	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	口クロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は緑がかった灰色。大原2号壺式期。
17	第199図 PL-114	土師器 壺	カマド 口へ胴部1/2	口(24.2)高20.8 底一	①淨砂 ②良好 ③なぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラナデ。内面はヘラナデ。
18	第199図 PL-114	土師器 壺	カマド 1/3	口(23.7)高27.7 底(8.8)	①淨砂 ②良好 ③濁色	口縁部は横ナデ。胴部上位は縦方向、下位は横方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。胴部下半に輪積み痕が残る。
19	第199図 PL-114	羽釜	カマド・2号 土坑 2/3	口(20.1)高12.2 底一 口径(2.6)	①粗砂 ②酸化焰 ③なぶい橙色	跨は貼付。胴部外面、体部から筒に向けて縦方向のヘラ削り。
20	第200図 PL-115	羽釜	カマド 口へ胴部1/2	口18.6 高16.5 口径 25.6	①粗砂 ②酸化焰 ③濁色	跨は貼付。胴部外面ヘラ削り。内面はヘラナデ。
No.	押込 No. 図版 No.	遺物名	①重量②磁度③メ	出土位置 計測値 (cm)		特徴など
21	第200図 PL-115	羽口 先端部	①400 g ② ③なし	カマド 長さ5.9 内径(3.0) 外径(7.0)		羽口の先端部破片。外面が黒色ガラス質に洋化し、先端部は上半部が斜めに滑削している。先端部下半は抉られたように滑削し、部が上方から垂れている。一部が欠けたまま使用されたためか。使用角度はかなり深い。通風孔部の内面も先端部では発達している。胎土はなぶいサを混えた粘土質。
22	第200図 PL-115	鉄製品 鋳造品	①51.1 g ②5 ③錆化(△)	埋土 長5.5 幅3.4 厚0.8		鋳造品の鋳り部分の破片と想定される。横断面はやや横長の隅丸方形で上端面には鋳造品本体につながる横方向に広がる突出部を残す。内面下縁はやや幅広がり、底部先端に向かうにつれて色が赤くなる。外面はそれぞれ平直な面をもつ。断面が突出されていない可能性が高い。現状は放射線が無放射に入り、かろうじて形をとどめている。長脚の三つ足の輪ではなく、四方に短い脚のつく籠の足部破片と想定される。比較的高鉄品で、鍛冶工房の可能性のある7号で使用していたとは考えられにくい。故土として工房に持ち込まれたものであろうか。上端面と側面の一部が破面となっている。
23	第200図 PL-115	鉄製品 鋳造品 U字状	①6.7 g ②3 ③なし	1号土坑 長 25 残 厚(0.4)		酸化土砂に覆われたU字状の鉄製品。鉄部の横断面は円形で、左右の両端部は破面となっている。鉄部の横断面はやや不整形なU字。なんらかのとり手の破片であろうか。
24	第200図 PL-115	鉄製品 鋳造品 形か	①1.0 g ②3 ③錆化(△)	1号土坑 長2.7 残 厚0.3		断面方形をした棒状の鉄製品。長軸の両端部が欠けており、不明点が多い。僅かに一方が広がっており、現状では釘の可能性を持つものである。
25	第200図 PL-115	陶形鋳造 治済 (極小)	①10.2 g ②2 ③なし	2号土坑 長径2.9 厚径1.9 厚1.5		平面、不整形円形をした小塊状で極小の陶形鋳造済。右側から下側の側面の一部分が破面となっている他は生きています。上面は平坦さ、下面は丸みをもって突出する。磁度が強く滑の産物片か。
26	第200図 PL-115	陶形鋳造 治済 (小)	①4.52 g ②4 ③なし	2号土坑 長径5.0 厚径3.2 厚3.4		小形の陶形鋳造済の側面破片。上下面と側面にも木炭痕を残し、側面に不規則な突出部を持つ。上側の側面は全面破面。滑は緻密。陶形鋳造済ではあるが、側面の突出部からみて、滑量はそう厚いと見えない。
27	第200図 PL-115	陶形鋳造 治済 (小)	①5.46 g ②3 ③なし	床直 長径5.7 厚径3.4 厚2.6		小形の陶形鋳造済の側面破片。側部がやや波状で滑量の少なさをうかがわせる。側部右側と下側が破面。上面には1cm程度の木炭痕が残り、下面は粉炭痕となる。
28	第200図 PL-115	陶形鋳造 治済 (極小)	①5.16 g ②4 ③なし	床直 長径5.4 厚径4.0 厚2.3		平面、不整形六角形をした極小の陶形鋳造済。側面に小破面を残すもの、ものと形を残している。上面には木炭痕が残るが全体的には平坦さ。下面は短軸方向に向かう舟底状で、その表面には粉炭痕と灰土の圧痕が共存する。比重はやや高めで7号住出土の滑と共通点をもつ。
29	第200図 PL-115	陶形鋳造 治済 (小)	①5.89 g ②3 ③なし	2号土坑 長径5.1 厚径4.9 厚2.8		小形あるいは中形の陶形鋳造済の側面破片。上下面と下側の側面が生きており、それ以外の側面はシャープな破面となる。気孔は不規則で、滑としてはやや比重が高い。下面は部分的に破面となる。破面の結晶がやや発達しており、ものと滑が大きい可能性をもつ。
30	第200図 PL-115	陶形鋳造 治済 (中、含鉄)	①8.04 g ②4 ③(●)	2号土坑 長径4.6 厚径4.3 厚3.2		中形の陶形鋳造済の中核部破片。上下面が生きており、側面は連続する小破面となる。上下面とも比較的平坦で、きれいな陶形の側面にはならない。滑は気孔が不定方向に伸びており、密度は低い。含鉄部は中核部。精練鋳造済の滑。
31	第200図 PL-115	陶形鋳造 治済 (中、含鉄)	①9.54 g ②5 ③(●)	床直 長径6.4 厚径3.5 厚2.8		上下面が平坦さの、含鉄の陶形鋳造済の中核部破片。上下面が生きており側面はシャープな破面となる。数ヶ所に含鉄部が分散した陶形鋳造済で、精練鋳造済の滑。気孔はきわめて不規則。

①重量②磁度③メス度

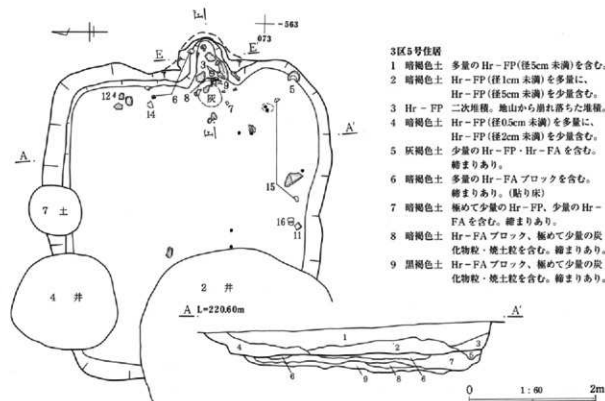
No.	拝因 No. 図版 No.	遺物名	①重量②③A	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
32	第200図 PL-115	楕形鍛冶滓 (中、含鉄)	①1133 g ②5 ③L(●)	床直 長径87 短径52 厚36	含鉄の楕形鍛冶滓の屑部寄りの破片。上下面は比較的平坦で、側面には木炭痕が目立ちやや凹凸が強い。下手側の側面の一部が破面の可能性が高い。含鉄部は左寄りの下面。7号住居ではNo.26、28、29、30、31と上下面が比較的平坦なみみの気孔の粗い滓が目立ち、滓質や含鉄の滓が多いという特徴が共通する。	
33	第200図 PL-115	鍛冶滓	①260 g ②4 ③なし	床直 長径41 短径25 厚43	不規則な形状をもつ最小の楕形鍛冶滓の完形品。上面が平坦なみで、斜め左下に向かって滓が伸びている。端部が突出し表面の各所に木炭痕が残る。下面右側はかろうじて楕形となる。滓量が少ないためにこうした形状になったものか。	
34	第200図 PL-115	鍛冶滓	①101 g ②3 ③なし	埋土 長径24 短径24 厚15	楕形鍛冶滓の屑部小破片。上面は平坦なみで側面は弧状となる。上下面が生きており、側面の片側のみが自然面。7号住居出土の中形の楕形鍛冶滓と類似し、屑部破片の可能性が高い。	
No.	拝因 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材	特徴など
35	第201図 PL-115	竈構築材 天井石か	カマド	長217 幅191 厚140 重6.85kg	二ツ岳石	4面加工面、1面自然面、1面破面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。36と同一個体か。
36	第201図 PL-115	竈構築材 天井石か	カマド	長223 幅212 厚124 重6.05kg	二ツ岳石	4面加工面、1面自然面、1面破面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。35と同一個体か。
37	第201図 PL-115	支脚	カマド	長243 幅91 厚101 重1.51kg	二ツ岳石	円柱状に加工された二ツ岳石製の支脚。破面はほとんどなく、ほぼ完存。

①重量②組着後③メタル度

3区5号住居(第202~205図、PL68・115・116)

位置 073-563 方位 N-87°-E 形状 長軸 4.83m・短軸4.50mで長軸を東西にもつ長方形である。面積(19.20)㎡ 壁高 34cm 重複 3区7号土坑、3区2-4号井戸と重複。重複するすべての遺構

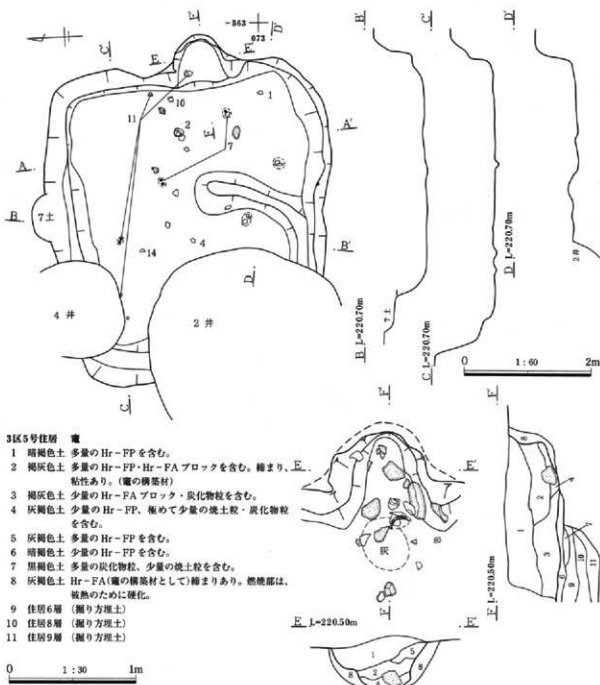
が、3区5号住居を切る調査所見を得た。床面 不鮮明。掘り方面から厚さ16cmの埋め土を施して平坦な面を造る。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。

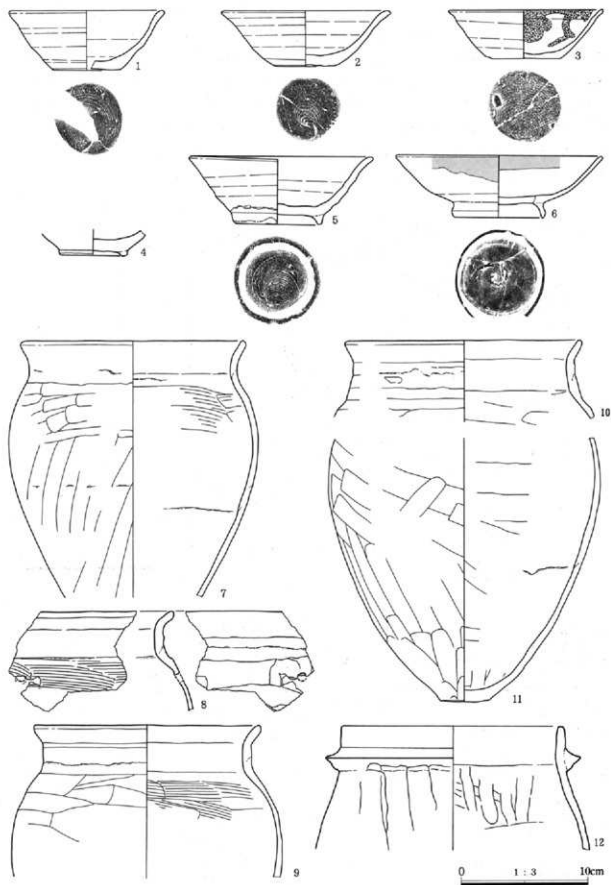


第202図 3区5号住居平面・断面図

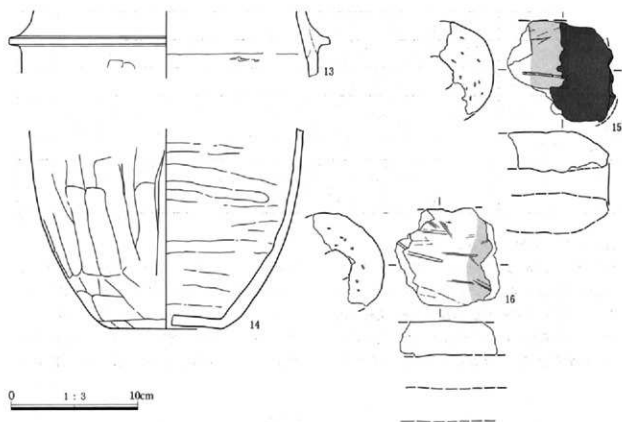
竈 東壁に設置。燃焼部は幅41cm、奥行き50cmで検出。補強用礫が燃焼部の南に設置した状態で残存している。竈は広く掘り込み、Hr-FAを張り込んで構築している。Hr-FAは自然堆積に比べて締まっており、燃焼部は熱を受けさらに硬化している。遺物 竈から須恵器杯、灰軸陶器碗、土師器甕、羽釜、床直から須恵器碗、土師器甕、羽口、掘り方埋土から須恵器杯、碗、羽釜、羽口が出土した。

実測可能な遺物が17個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。本遺構の掲載遺物の1/3は掘り方の埋土から出土したものである。掘り方埋土から出土した土器は、床直上あるいは竈内から出土した土器とほぼ同時期であり、床面が不明瞭であったことなどから、これらの土器も床面出土の土器と同等に捉えることができるかもしれない。





第204図 3区5号住居出土遺物図(1)



第205図 3区5号住居出土遺物図(2)

3区5号住居出土遺物観察表

No.	鉢図No. 図版No.	種類 部種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第204図 PL-115	須壺器 杯	-11 1/3	口(124) 高 5.1 底 5.2	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内面と外面の一部黒色。
2	第204図 PL-115	須壺器 杯	-13 1/3	口(134) 高 4.5 底 4.5	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第204図 PL-115	須壺器 杯	カマド 2/3	口(122) 高 3.9 底 5.8	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内面口唇部から底部にかけて黒色の付着物。灯明か。
4	第204図 PL-115	須壺器 碗	7 底部	口- 高 2.0 残 底 5.4 高台 5.4	①砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。内外面に黒色の付着物。
5	第204図 PL-115	須壺器 碗	床直 3/4	口 14.6 高 5.4 底 7.4 高台 7.0	①粗砂 ②還元焰 ③オリーブ黒色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。内外面黒色。
6	第204図 PL-115	灰釉陶器 碗	カマド 1/3	口(164) 高 4.9 底 7.0 高台 7.4	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。輪測はやや透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛。大型2号座式。
7	第204図 PL-115	土師器 壺	床直 口-頸部1/5	口(180) 高 20.3 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい棕色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ割り。内面はヘラナデ。
8	第204図 PL-116	土師器 カマド	口-頸部	破片	①砂粒 ②良好 ③にぶい棕色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ割り。内面はヘラナデ。頸部下位に穿孔有り。9と同一個体か。
9	第204図 PL-116	土師器 壺	カマド 口-頸上1/4	口(180) 高 12.1 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい棕色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ割り。内面はヘラナデ。8と同一個体か。
10	第204図 PL-116	土師器 壺	-4 口-頸部1/6	口(102) 高 6.3 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい棕色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ割り。内面はヘラナデ。
11	第204図 PL-116	土師器 壺	カマド掘り方 頸-底部1/4	口- 高 20.7 残 底 3.9	①砂粒 ②良好 ③にぶい棕色	胴部はヘラ割り。内面はヘラナデ。内面に黒色の付着物。
12	第204図 PL-116	羽釜	+13 口縁片	口- 高 10.0 残 底 -	①粗砂 ②還元焰 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形。跨は貼付。胴部外面、跨に向けて縦方向のヘラ割り。
13	第205図 PL-116	羽釜	掘り方埋土 口縁1/8	口(218) 高 5.5 残 底 - 跨(23.2)	①粗砂 ②還元焰 ③にぶい黄褐色	跨は貼付。体部外面割り。

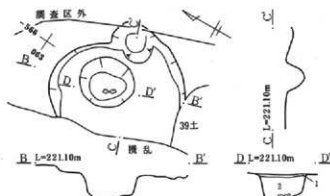
No.	採掘No. 図版No.	種別 砂種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
14	第205図 PL-116	羽釜	掘り方埋土 胴-底部1/4	口- 高 158残 底(95)	①粗砂 ②黄褐色	胴部外面、縦方向のヘラ削り。胴部下端は横位のヘラ削り。
No.	採掘No. 図版No.	遺物名	①重量②細さ ③なし	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
15	第205図 PL-116	羽口 先端部	①1727g ②3 ③なし	掘り方埋土 長さ 85残 内径(21) 外径(81)	羽口の先端部から体部にかけての破片。先端部寄りの胴部は丸みをもって淨化している。通風孔径は27cm。通風孔部の先端は僅かに外開き。正面から見て羽口としては上面から左側面の破片。胎土は多量のスヤを混入したもので、No.16と類似し、同一個体の可能性をもつ。外面は削りとナダ。使用角度は極めて鋭い。	
16	第205図 PL-116	羽口 体部	①1715g ②2 ③なし	床直 長さ 78残 内径(23) 外径(80)	羽口の体部破片。通風孔径は27cm以上で、胎土には多量のスヤが混和されている。側面は全面破面。外面は削りとナダにより仕上げられており、その表面にも長いスヤ痕が露出している。按察はやや不均等で、右側部がもっとも高温化している。使用角度はやや鈍い。No.15と同一個体の可能性あり。	

①重量②細さ③メタル度

3区6号住居(第206・207図、PL69・116)

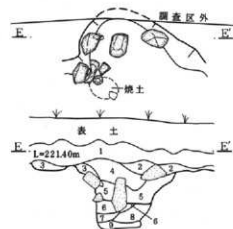
位置 063-566 方位 N-54°-E 形状 住居の東部分が攪乱に切られているため全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 12cm 重複 3区39号土坑と重複。3区39号土坑が、3区6号住居を切る調査所見を得た。東部分は、攪乱に切られる。

床面 掘り方面から厚さ3cm程の極薄い埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。住居中央やや南西の位置に、径78cmの床下土坑を検出。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 西壁



3区6号住居 床下土坑

- 1 黒褐色土 多量のHr-FAブロックを含む。やや粘りあり。(貼り床)
- 2 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。ほとんどがHr-FPの層。



3区6号住居 竈

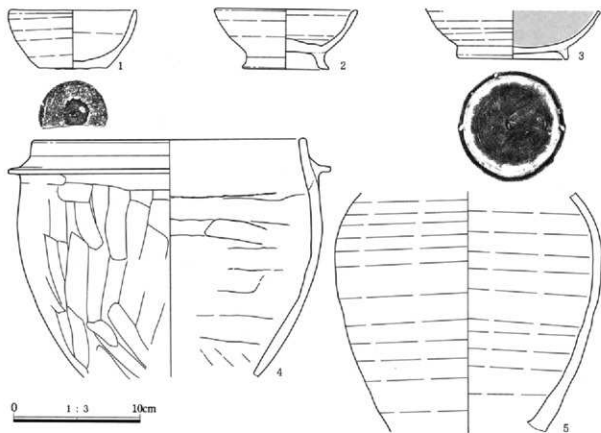
- 1 黒褐色土 少量のHr-FPを含む。
- 2 黒褐色土 1層より若干暗い。
- 3 暗褐色土 極めて少量のHr-FP、多量のHr-FAブロックを含む。
- 4 黒褐色土 少量のHr-FPを含む。
- 5 暗褐色土 少量のHr-FP、多量のHr-FAブロックを含む。
- 6 暗褐色土 極めて少量のHr-FP、多量のHr-FAブロック、炭化物粒を含む。
- 7 暗褐色土 少量のHr-FPを含む。
- 8 暗褐色土 少量のHr-FP・焼土粒・炭化物粒を含む。
- 9 暗褐色土 少量のHr-FP・Hr-FAを含む。

第206図 3区6号住居・掘り方・竈 平面・断面図

に設置。補強用の襷が袖・燃焼部に設置した状態で残存している。燃焼部から煙道にかけて調査区外。

遺物 床直から須恵器杯、碗、灰軸陶器碗、羽釜が

出土した。実測可能な遺物が5個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



第207図 3区6号住居出土遺物図

3区6号住居出土遺物観察表

No.	押図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第207図 PL-116	須恵器 碗	床直 2/3	口10.1 高4.6 底5.4	①砂粒 ②酸化燻 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。高台なし。
2	第207図 PL-116	須恵器 碗	床直 1/4	口(11.4) 高4.8 底(6.1) 高台(6.9)	①粗砂 ②酸化燻 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明、高台は貼付。
3	第207図 PL-116	灰軸陶器 碗	床直 体～底部	口 - 高39.9残 底8.7 高台8.9	①細砂 ②還元燻 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明、高台は貼付。釉調は透明感のある緑色。施釉方法は漬け掛け。大塚2号室式期。
4	第207図 PL-116	羽釜	床直 口～胴部1/4	口(21.9) 高18.8残 底 - 胴径(25.7)	①粗砂 ②酸化燻 きみ ③黄褐色	胴部外面、ヘラ削り。内面ナデ。
5	第207図 PL-116	羽釜	床直 胴部	口 - 高18.9残 底 -	①粗砂 ②還元燻 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形。

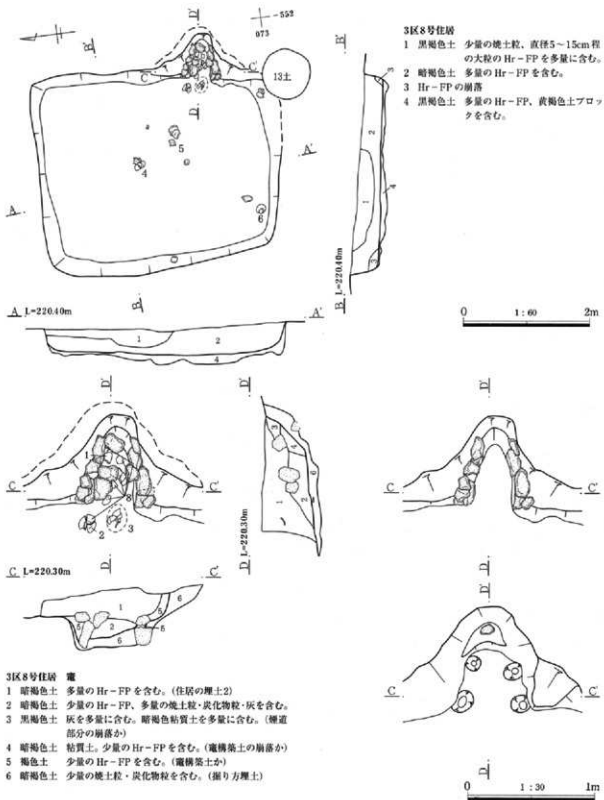
3区8号住居(第208・209図、PL70-117)

位置 073-552 方位 E-6°-S 形状 長軸 3.78m・短軸3.2mで長軸を南北にもつ方形である。面積 9.38㎡ 壁高 40cm 重複 3区13号土坑と重複。3区13号土坑が、3区8号住居を切る調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で

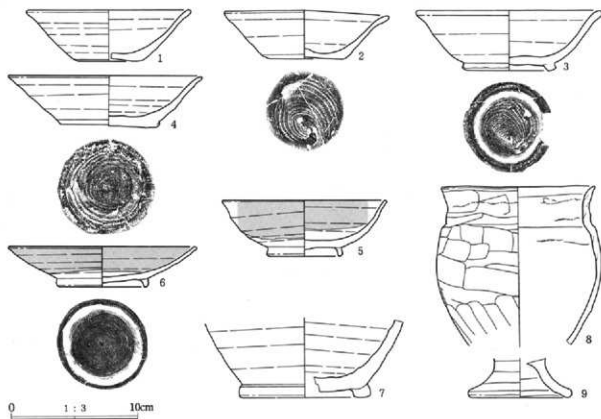
整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅29cm、奥行き59cmで検出。袖から燃焼部の石組みが設置した状態で残存している。遺物 竈から須恵器杯、碗、土師器小型甕、床直から灰軸陶器皿、須恵器杯、埋土から土師器杯、

須恵器椀、羽釜、灰軸陶器碗、壺、掘り方埋土から土師器小型甕が出土した。所見 竈燃焼部に石組みが残存する好資料である。本住居の時期は、出土遺

物より9世紀末から10世紀初頭に比定される。



第208図 3区8号住居・竈 平面・断面図



第209図 3区8号住居出土遺物図

3区8号住居出土遺物観察表

No.	棟号No. 図号No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	②焼成	特徴など
1	第209図 PL-117	須恵器 杯	カマド 1/4	口(13.0) 高 4.0 底(5.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色		ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第209図 PL-117	須恵器 杯	カマド 4/5	口(13.1) 高 3.9 底 6.0	①細砂 ②還元焰 ③灰白色		ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第209図 PL-117	須恵器 杯	カマド 1/3	口(14.7) 高 4.8 底 7.2 高台 7.5	①砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色		ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
4	第209図 PL-117	須恵器 碗	+23 高台欠損	口(15.4) 高 4.1 底 7.7 高台 -	①粗砂 ②酸化焰 ③灰白- 黄褐色		ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。
5	第209図 PL-117	灰釉陶器 碗	+25 1/3	口(13.1) 高 4.5 底 5.9 高台 6.0	①細砂 ②還元焰 ③灰白色		ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明。高台は貼付。輪調は緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式器。
6	第209図 PL-117	灰釉陶器 皿	床直 1/2	口(15.0) 高 3.2 底 7.3 高台 7.3	①細砂 ②還元焰 ③灰白色		ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、輪調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式器。
7	第209図 PL-117	灰釉陶器 壺	壇土 底部1/4	高 6.1 残 底(10.0) 高台(10.5)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色		羅貫。ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はナデで不明。高台は貼付。外周下半割り。
8	第209図 PL-117	土師器 小型壺	カマド 口~胴下1/2	口(12.2) 高 11.6 底 -	①砂粒 ②褐色	②良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
9	第209図 PL-117	土師器 小型壺	掘り方壇土 脚	口 - 高 3.1 底 8.2	①砂粒 ②褐色	②良好	内外面横ナデ。

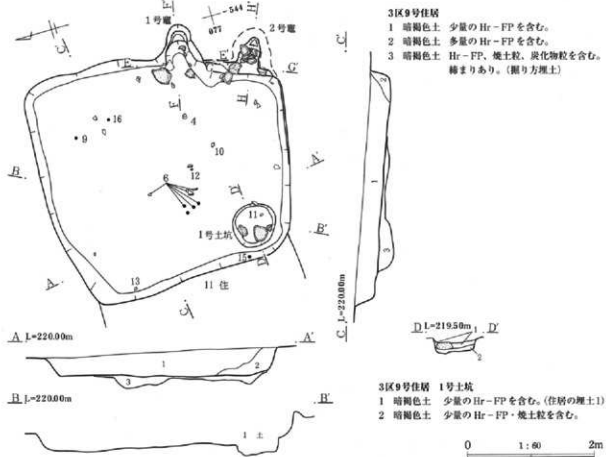
3区9号住居(第210~212図、PL71・117)

位置 077-544 方位 E-19°-S 形状 長軸
3.90m・短軸3.10mで長軸を南北にもつ長方形であ
る。面積 9.68㎡ 壁高 30cm 重複 3区11号住居、

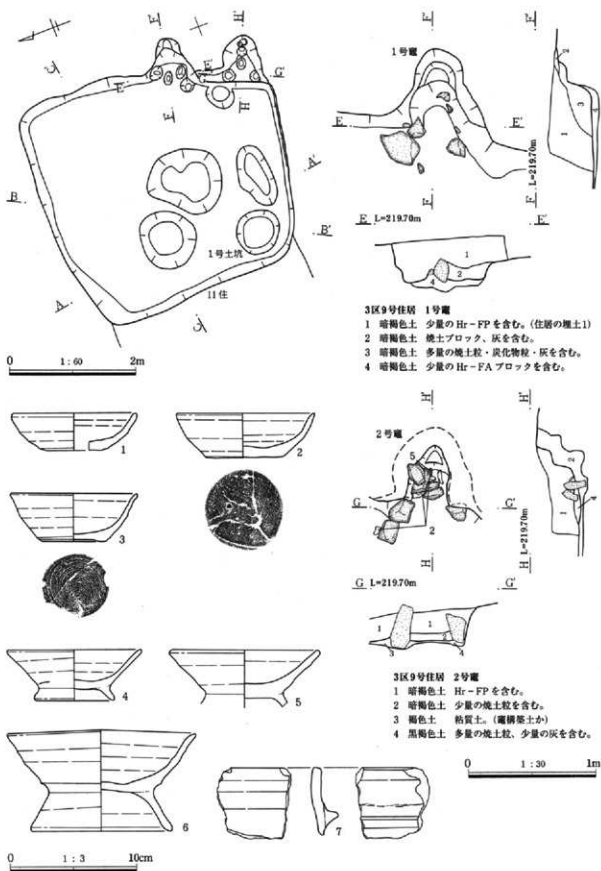
3区2号壑穴状遺構と重複。3区11号住居・2号壑穴
状遺構を切る調査所見を得た。床面 掘り方面から
厚さ4cm程の極薄い埋め土を施して平坦な面を造

る。掘り方面はほぼ平坦である。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 1号土坑が、貯蔵穴か。住居の南西隅に設置。深さ13cm、長軸72cm、短軸66cmの楕円形を呈す。竈 住居の東壁中央に1号竈、南に2号竈を検出した。住居廃絶時には1号竈を使用していたと思われる。住居廃絶時には、2号竈は埋設され、壁面が構築されていた。1号竈東壁中央に設置。燃焼部は幅22cm、奥行き24cmで検出。煙道は幅26cm、奥行き24cmで緩やかに立ち上がる。掘り方面で確認した燃焼部中央の窪みは支脚の痕跡であると考えられる。竈の手前から出土した平坦面のある礫は被熱痕が確認できることから竈の構築材であると思われる。2号竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅38cm、奥行き62cmで検出。袖の袖強用礫、支脚が設置した状態で残存している。2号竈は住居壁に埋もれて検出された。2号竈廃棄

の後、1号竈が構築されたと思われる。遺物 2号竈より須恵器杯、碗、床直から含鉄鉄洋、須恵器碗、埋土から須恵器杯、碗、土師器甕、羽釜、碗形鍛冶洋、鍛冶洋、釘の頭、貯蔵穴内から碗形鍛冶洋が出土した。所見 1号竈使用時には2号竈は埋められ、住居壁が構築されていることが確認された。2軒の住居が切りあっている可能性も考えられたが、2号竈使用時に対する床面が1号竈使用時の床面と一致し、同一住居内での竈の移設の可能性が高いと判断した。貯蔵穴とした1号土坑からは、碗形鍛冶洋が出土した。貯蔵穴埋土下層2層中では焼土粒も確認され、1号土坑は、鍛冶炉の可能性も考えられる。本遺構からは、鉄関連の遺物が多量に出土したが、大部分が埋土中の出土であるため、他遺構からの混入の可能性もあわせて検討したい。本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。

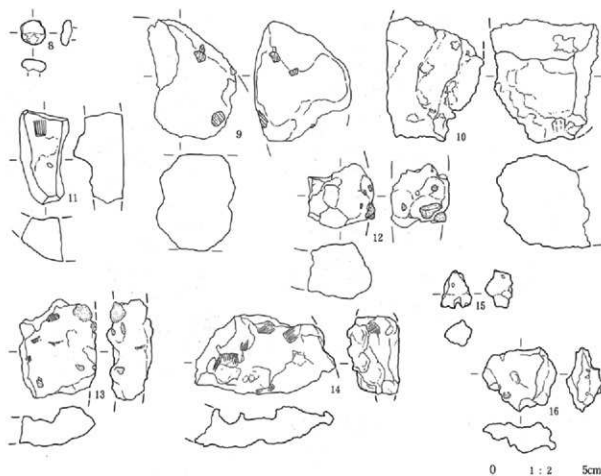


第210図 3区9号住居平面・断面図



第211図 3区9号住居掘り方・窟 平面・断面図、出土遺物図(1)

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物



第212図 3区9号住居出土遺物図(2)

3区9号住居出土遺物観察表

No.	神居No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第211図 PL-117	須恵器 杯	埋土 1/8	口(100) 高3.0 底(44)	①砂粒 ②酸化層 ③褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法は、静止糸切りか。
2	第211図 PL-117	須恵器 杯	2号カマド 2/3	口110 高3.6 底60	①砂粒 ②酸化層 ③にぶい褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。
3	第211図 PL-117	須恵器 杯	埋土 1/5	口(100) 高3.8 底50	①砂粒 ②還元層 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。外面黒色。
4	第211図 PL-117	須恵器 椀	+31 1/4	口(108) 高4.0 底56 高台(64)	①砂粒 ②酸化層 ③にぶい褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
5	第211図 PL-117	須恵器 椀	2号カマド 1/4	口(119) 高4.5残 底- 高台-	①砂粒 ②酸化層 ③にぶい褐色	ロクロ成形。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
6	第211図 PL-117	須恵器 椀	床直 2/3	口150 高8.0 底82 高台112	①砂粒 ②酸化層 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
7	第212図 PL-117	羽釜 口縁片	埋土 口縁片	口- 高5.4残 底-	①細砂 ②還元層 ③灰色	ロクロ成形。筒は貼付。
No.	神居No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
8	第212図 PL-117	鉄製品 鍛造品 釘の頭	①1.4g ②3 ③錐化(△)	埋土 径06	やや大きめの鉄釘の頭部破片。下面に残る体部の痕跡から見ると、釘自体は径6mm程の方柱状。錐化が進んでおり鉄部は痕跡のみが残っている。	
9	第212図 PL-117	埴形鍛冶部 (中)	①1805g ②6 ③錐化(△)	床直 長さ6.7 外径63 厚5.1	薄い酸化土層に覆われた埴形鍛冶部。上面は平直で右側部が生きている。それ以外の側部はシャープな破面。側部が急激に立ち上がる形で、破面の結晶の発達も進んでいる。やや大きめの埴形鍛冶部の側部破片の可能性が高い。含鉄部が散在していたためか、細い放射線が酸化土層中に分散して広がっている。	

①重量②磁着度③メタル度

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

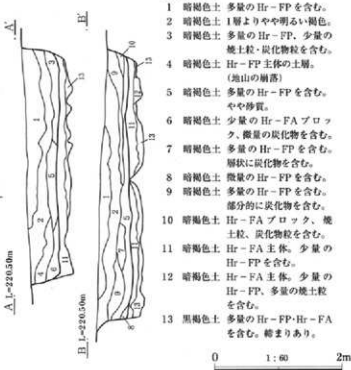
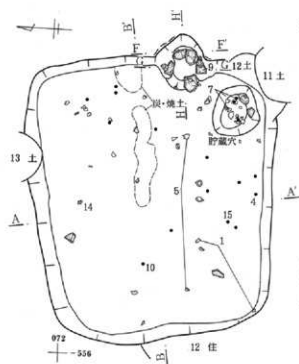
No.	神田No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
10	第212図 PL-117	碗形鍍金漆 工具痕付き	①210.9 g ②4 ③なし	+18 長径62 短径60 厚5.0	厚みをもったやや径の大きな碗形鍍金漆の胴部破片。上下面と左側面が生きており、右側面と上手側はシャープな破面となる。上面の中央部は塊状に盛り上がり跡が残っている。内部に残る含鉄部のためか、側面から下面は小さな凹凸が連続し、下面は皿状で側面はやや立ちきりとなる。洋は緻密で気孔は乱層に発達している。
11	第212図 PL-117	碗形鍍金漆 (小)	①39.3 g ②2 ③なし	貯蔵穴 長径5.0 短径2.7 厚2.3	薄手の碗形鍍金漆の胴部寄りの破片。上下面が生きており、側面4面はシャープな破面。上面は細かい木炭痕で、皿状の下面には軽石を含んだ鍍金漆の伊床土が面的に貼り付いている。洋は緻密で結晶はやや発達し、破面の中段には横方向に気孔が通っている。鍍金作業に僅かな中断があったためか。
12	第212図 PL-117	碗形鍍金漆 (含鉄)	①39.7 g ②5 ③M(O)	+21 長径3.5 短径3.4 厚3.0	含鉄の碗形鍍金漆の中核部破片。上下面が生きており、その表面には木炭痕が残る。上半の中核部は含鉄部を持ち、錯開れや放射割れが生じている。洋質はやや緻密。
13	第212図 PL-117	碗形鍍金漆 (小)	①49.6 g ②4 ③なし	+15 長径5.3 短径4.1 厚2.0	やや薄手の碗形鍍金漆の胴部破片。左側の側面と、上手側や下手側の側面3面が破面となっている。胴部はきれいな皿状で、上下面とも浅い凹形である。上面に木炭痕が残る。下面には鍍金漆の伊床土の圧痕と木炭痕が混在する。下面の状態はNo.14とみわけて似ている。本資料は胴部破片のため薄い部分に相当するものか。
14	第212図 PL-117	碗形鍍金漆 (小)	①7.00 g ②3 ③なし	垣土 長径7.4 短径4.2 厚2.1	扁平な碗形鍍金漆の中核部から斜部にかけての破片。上面は1cm大の木炭痕が強く、一部は皿状となる。下面は皿状で全面に粉状炭が残る。
15	第212図 PL-117	鍍金漆 (含鉄)	①3.5 g ②3 ③H(O)	+22 長径2.0 短径1.6 厚1.4	ごく小さな鍍金漆片。表面には酸化土砂が取り巻き、下手側の側面を中心に錯開れや放射割れの跡が認められる。碗形鍍金漆かどうかは付着砂があり不明。
16	第212図 PL-117	碗形鍍金漆	①2.55 g ②2 ③なし	+16 長径3.9 短径3.5 厚1.6	薄い碗形鍍金漆の胴部寄りの破片。上下面は基本的に生きており、側面は小破面が連続する。洋はやや緻密で中小の気孔が残る。上面の中央付近には引口先の溶解物が球状の粘土質の滓として面れ落ちている。本来はもう少し側面の角度が立つもので、厚みは、2.5cmを超える可能性を持つ。

①重量②磁石③メタル皮

3区10号住居(第213~215図、PL72-118)

位置 072-556 方位 N-89°-E 形状 長軸
4.51m・短軸3.70mで長軸を東西にもつ長方形であ

る。面積131.4㎡ 壁高46cm 重複 3区12号住
居、3区11・12・13号土坑と重複。3区11・12・13



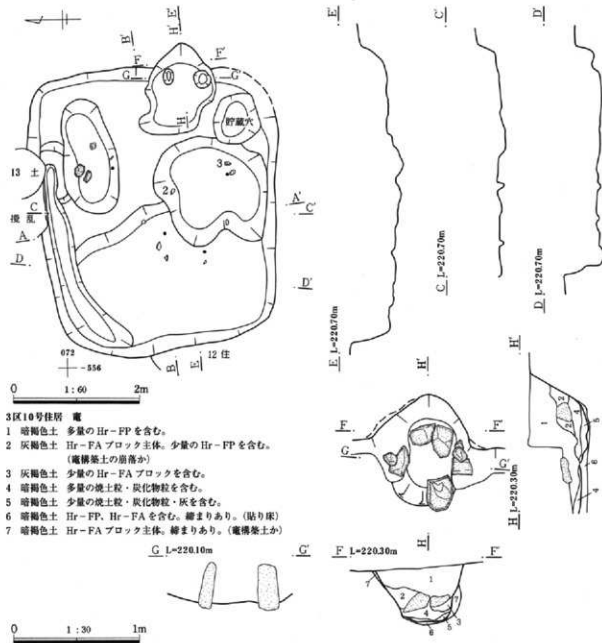
3区10号住居

- 1 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。
- 2 暗褐色土 1層よりやや明るい褐色。
- 3 暗褐色土 多量のHr-FP、少量の
焼土粒・炭化物粒を含む。
- 4 暗褐色土 Hr-FP主体の土層。
(地山の崩落)
- 5 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。
やや砂質。
- 6 暗褐色土 少量のHr-FAブロッ
ク、微量の炭化物を含む。
- 7 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。
層状に炭化物を含む。
- 8 暗褐色土 微量のHr-FPを含む。
- 9 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。
部分的に炭化物を含む。
- 10 暗褐色土 Hr-FAブロック、焼
土粒、炭化物粒を含む。
- 11 暗褐色土 Hr-FA主体。少量の
Hr-FPを含む。
- 12 暗褐色土 Hr-FA主体。少量の
Hr-FP、多量の焼土粒
を含む。
- 13 黒褐色土 多量のHr-FP-Hr-FA
を含む。締まりあり。

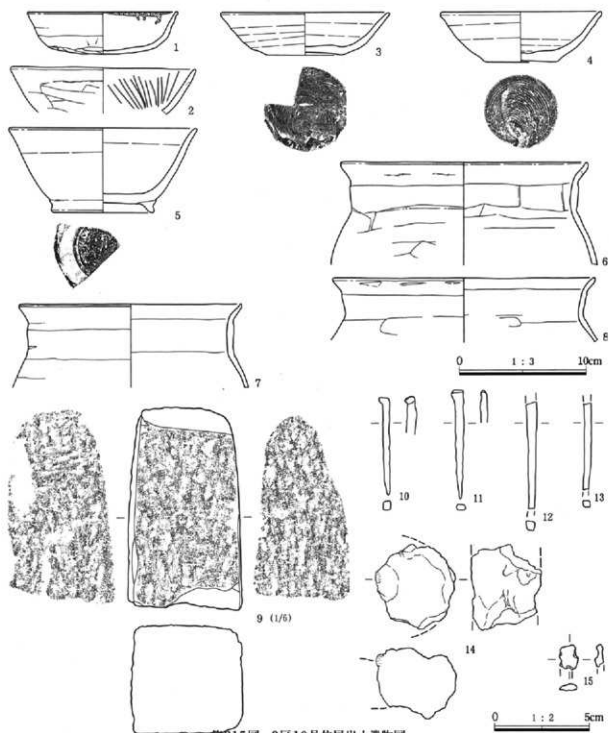
第213図 3区10号住居平面・断面図

号土坑に切られ、3区12号住居を切る調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ13cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。床面中央から炭や焼土が検出された。床下からは、土坑が2基検出された。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ14cm、長軸79cm、短軸74cmの楕円形を呈す。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅30cm、奥行き64cmで検出。二ツ岳石を加工した竈構築材(右袖部)が設置した状態で検出された。

遺物 床直から土師器杯、須恵器杯、椀、椀形鍛冶滓、未使用の可能性が高い釘(10-13)、貯蔵穴から土師器甕、二ツ岳石、埋土から鍛造の鉄製品、掘り方から土師器杯、甕、須恵器杯が出土した。所見椀形鍛冶滓や既使用品の可能性が高い釘などの鉄関連遺物が床直から出土した。住居床面中央から炭化物や焼土が検出されたが、炉の形状を確認することは出来なかった。本住居の時期は、出土遺物より9世紀前半に比定される。



第214図 3区10号住居掘り方・竈 平面・断面図



第215図 3区10号住居出土遺物図

3区10号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第215図 PL-118	土師器 杯	床直 完形	口120 高34 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。
2	第215図 PL-118	土師器 杯	掘り方 口縁1/4	口148 高36残 底-	①細砂 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半~底部はヘラ削りか。内面は斜紋放射状暗文。
3	第215図 PL-118	原形器 杯	掘り方 1/4	口136 高34 底64	①砂粒 ②還元焼 ③灰色	口ケロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

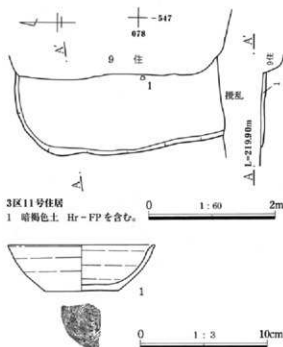
No.	採掘No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	特徴など
4	第215図 PL-118	須恵器 杯	床直 1/3	□(128) 高40 底58	①砂粒 ②還元色 ③灰白色	口コ成形。右回り回転。底部は回転糸切り。
5	第215図 PL-118	須恵器 碗	床直 1/4	□(149) 高67 底(80) 高台(82)	①砂粒 ②酸化色 ③褐色	口コ成形。右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
6	第215図 PL-118	土師器 甕	掘り方埋土 口～肩部1/4	□196 高81残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
7	第215図 PL-118	土師器 甕	貯蔵穴 口～頸部1/5	□(176) 高66残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。
8	第215図 PL-118	土師器 甕	掘り方埋土 口～頸部1/5	□(208) 高51残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
9	第215図 PL-118	焼物染材 石軸	カマド	長318 幅182 厚172 重12.2kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面の焼物染材。板状痕のある面1面(下面)。
No.	採掘No. 図版No.	遺物名	①重量②③メ	出土位置 計測値(cm)		特徴など
10	第215図 PL-118	鉄製品 鍛造品 釘	①1.9g ②4 ③錆化(△)	床直 長51 径0.4		片側に向かい頭部を簡単に作り出した小振り釘。体部上半の横断面はやや長方形で成形は粗い。足部寄りはやや方形断面となる。No.11、No.13とはほぼ同形の釘。頭の状態が3点とも材に打ち込まれた形状ではなく、既使用品か。
11	第215図 PL-118	鉄製品 鍛造品 釘	①1.9g ②4 ③錆化(△)	埋土 長58 径0.45		頭折れ釘状の頭部を持つ小形の釘。横断面はやや台形で、頭部寄りの成形は粗い。No.10、No.13もほぼ同サイズの釘である。
12	第215図 PL-118	鉄製品 鍛造品 釘	①2.6g ②4 ③錆化(△)	埋土 長56残 径0.5		横断面が方形の釘状の鉄製品破片。長軸の両端部が欠けており、頭部が不明で、釘と断定はしにくい。足部に向かって徐々に細くなる。
13	第215図 PL-118	鉄製品 鍛造品 釘	①1.6g ②4 ③錆化(△)	埋土 長45残 径0.35		頭部と足部先端の欠けた小振りの釘。断面形や全体形状はNo.10、No.11に類似する。頭部にごく近い位置で欠落する。長軸方向に緩やかに反る。
14	第215図 PL-118	碗形鍛冶滓 (中か)	①79.7g ②3 ③なし	床直 長径4.5 短径4.2 厚3.8		やや厚みをもった碗形鍛冶滓の側部の破片。上下面と右側面は生きており、それ以外の側面は破面となる。表面は緻密で比重が高い。上下面は平坦さみで部分的に窪む。
15	第215図 PL-118	鉄製品 鍛造品	①0.6g ②2 ③錆化(△)	+7 長12 幅0.9 厚0.4		表面が錆化した鉄製品破片。側面の下手側のみが破面で、僅かに鍛造らしい痕跡を残している。外周部は溶で、鍛冶作業中に脱落した鉄片であらうか。形態的には刀子の刃部状。

①重量②組織度③メタル度

3区11号住居(第216図、PL72・118)

位置 078-547 方位 測定不可能。形状 住居の大部分が3区9号住居に切られるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能 壁高 5cm 重複 3区9号住居と重複。3区9号住居に切られる調査所見を得た。住居南壁は擾乱に切られる。床面 不明瞭。床面は堅く締まっていた。掘り方面は確認できなかった。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。

竈 確認できなかった。遺物 床直から須恵器杯、埋土から土師器甕が出土した。実測可能な遺物は1個体。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



第216図 3区11号住居平面・断面図、出土遺物図

3区11号住居出土遺物観察表

No.	採掘No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①素材 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第216図 PL-118	須恵器 杯	床直 1/4	口(11.6) 高3.7 底(5.8)	①砂粒 ②酸化品 ③にぶい褐色	ロタロ成形、右回り回転。底部は回転車切り。

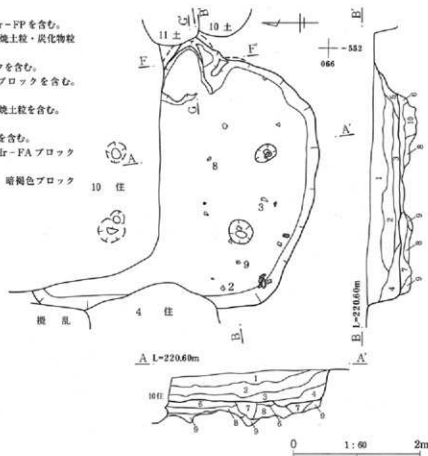
3区12号住居(第217~219図、PL73・118)

位置 066-552 方位 E-1°-S 形状 長軸 4.19m・短軸3.86mで長軸を南北にもつ隅丸方形である。面積(1230)㎡ 壁高 52cm 重複 3区4・10号住居・3区11号土坑と重複。3区4・10号住居・3区11号土坑に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ16cmの埋め土を施して平坦な面を作る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 床面の調査時には確認できなかったが、掘り方面で4つの柱穴が検出された。床面から掘り込まれた可能性が高く、住居のほぼ対角線上に4基確認した。貯蔵穴 確認できなかった。

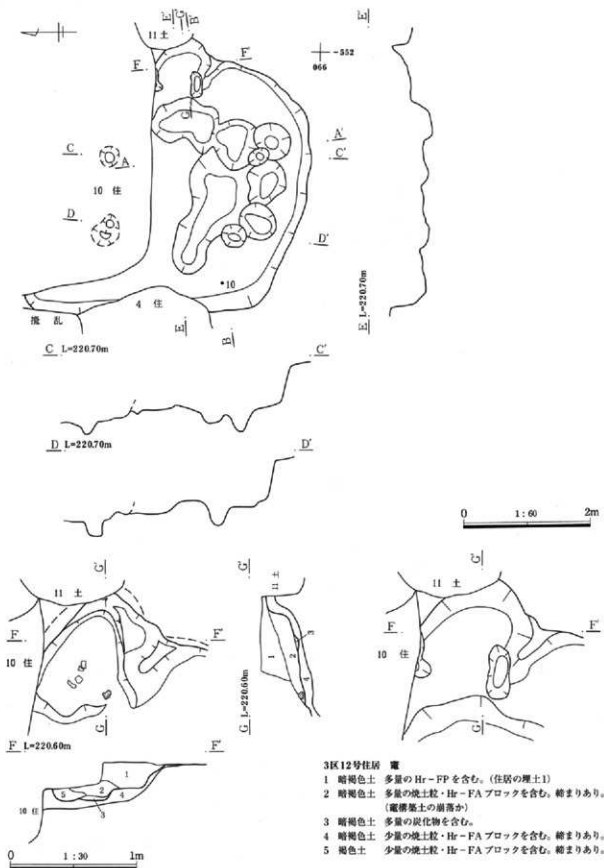
竈 東壁に設置。燃焼部は幅57cm、奥行き55cmで検出。掘り方時に検出された袖部の窪みは、竈構築材を据えた跡であろうか。遺物 床直から鉄塊系遺物、埋土から土師器甕、須恵器蓋、須恵器大甕、椀形鍛冶滓、掘り方埋土から鉄塊系遺物が出た。実測可能な遺物が10個体ある。所見 掘り方面で確認された柱穴は、床面から掘り込まれた可能性が高いとの所見から、12号住居平面図内に4つの柱穴を合成した。本住居の遺物は埋土からの出土が多い。出土遺物の時期は8世紀第2四半期に比定される。

3区12号住居

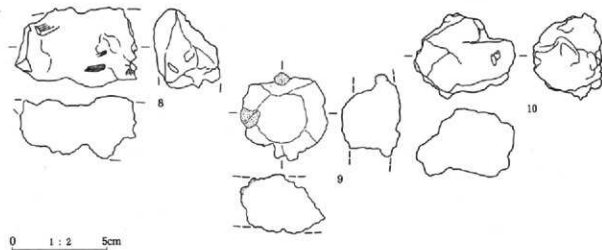
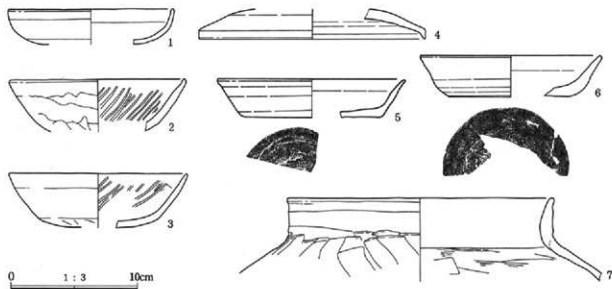
- 1 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。
- 2 暗褐色土 少量のHr-FA、多量のHr-FPを含む。
- 3 暗褐色土 黒色結晶ブロック、少量の焼土粒・炭化物粒を含む。
- 4 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロックを含む。
- 5 暗褐色土 多量の焼土粒・Hr-FAブロックを含む。締まりあり。(竈の2層)
- 6 暗褐色土 Hr-FAブロック、少量の焼土粒を含む。締まりあり。(掘り床)
- 7 暗褐色土 少量のHr-FP、Hr-FAを含む。
- 8 暗褐色土 少量のHr-FP、多量のHr-FAブロックを含む。
- 9 黒褐色土 少量のHr-FAブロック、暗褐色ブロックを含む。
- 10 褐色土 多量のHr-FPを含む。



第217図 3区12号住居平面・断面図



第218図 3区12号住居掘り方・竈 平面・断面図



第219図 3区12号住居出土遺物図

3区12号住居出土遺物観察表

No.	棟号 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第219図 PL-118	土師器 杯	埋土 1/6	口(132) 高 28 残 底-	①細砂 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部は不定方向のヘラ削りか。
2	第219図 PL-118	土師器 杯	+15 1/6	口(140) 高 41 残 底-	①細砂 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部はヘラ削り。内面は斜放射状暗文。
3	第219図 PL-118	土師器 杯	+33 1/4	口(141) 高 43 残 底-	①細砂 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。
4	第219図 PL-118	須恵器 釜	埋土 口～天井1/5	口(180) 高 23 残 底-	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。天井部中ほどは回転ヘラ削り。外面に自然釉。
5	第219図 PL-118	須恵器 杯	埋土 1/4	口(124) 高 30 底(86)	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転ヘラおこし。
6	第219図 PL-118	須恵器 杯	埋土 1/3	口 138 高 33 底(90)	①細砂 ②還元焼 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転ヘラおこし。
7	第219図 PL-118	土師器 壺	埋土 口～肩部1/4	口(212) 高 66 残 底-	①細砂 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

No.	検出No. 図版No.	遺物名	①重(②編③メ)	出土位置 計測値(cm)	特徴など
8	第219回 PL-118	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	①87.0 g ②4 ③H(○)	+41 長径64 短径42 厚33	含鉄の腕形鍛冶滓の肩部破片。上下面と上手側の側面が生きており、それ以外の側面が破面となっている。上面には1cm大の木炭が、下面には鍛冶滓に敷き詰められた粉炭痕が残されている。滓はやや軟密で含鉄部は僅か。
9	第219回 PL-118	鉄塊系遺物	①93.4 g ②5 ③特L(☆)	床直 長径45 短径44 厚31	鉄部主体の腕形鍛冶滓の中核部片または鉄塊系遺物。上面は平坦さみで、下面は皿状となっている。付着土砂が厚くやや確定するには躊躇する。含鉄の腕形鍛冶滓とすれば、中核部から僅かにそれた位置の個体であろう。上手側の側面には明瞭に含鉄部が露出しており、やや斜めに長さ2cm大の不整形円形の鉄塊が潜っている。鍛冶滓とすれば精錬途上の鉄塊であろう。それ以外にも内部には含鉄部が予想される。
10	第219回 PL-118	鉄塊系遺物	①102.8 g ②5 ③特L(☆)	-15 長径53 短径45 厚36	表面の酸化土砂の厚い鉄塊系遺物。メタル度が特L(☆)で、8世紀代の鉄塊系遺物としては重要品である。酸化土砂のため側面や自然面は区別できない。側面下半に黒錆の吹いた鈍影れがやや見逃している。組織の強弱が部位によりあり、鉄主体の含鉄の腕形鍛冶滓の側部破片の可能性も残される。その場合は平坦面が上面となる。鍛冶滓材としての製錬鉄塊であろうか。精錬途上の含鉄の腕形鍛冶滓かが注目される。

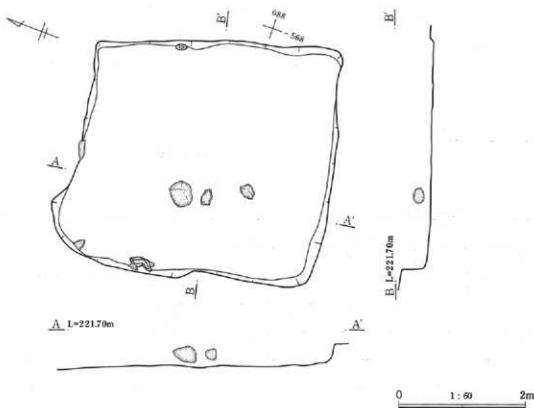
①重量②編者度③メタル度

(2) 竪穴状遺構

3区1号竪穴状遺構(第220図、PL74)

位置 088-568 方位 N-73°-E 形状 長軸
4.22m・短軸3.78mで長軸を南北にもつ方形である。
面積 13.85㎡ 壁高 35cm 重ねなし 柱穴 確認
されなかった。竈・炉 なし 遺物 須恵器碗、蓋、

灰軸陶器碗、襷が埋土から出土した。所見 出土
遺物が小破片であるため、時期を比定することはでき
ない。



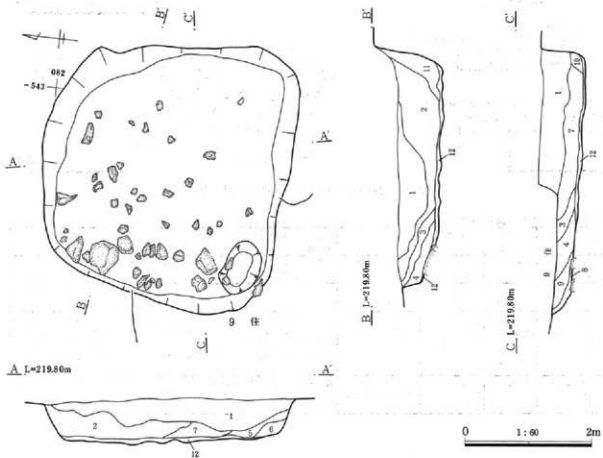
第220図 3区1号竪穴状遺構平面・断面図

3区2号堅穴状遺構(第221図、PL74)

位置 082-543 方位 N-13°-E 形状 長軸 43.0m・短軸39.0mで長軸を東西にもつ方形である。面積 111.7㎡ 壁高 62cm 重複 3区9号住居と重複、3区9号住居に切られる調査所見を得た。柱穴確認されなかった。竈・炉 なし 遺物 土師器杯、甕、須恵器杯・碗、皿が埋土から出土した。

所見 地山の礫が住居の西側に多く見られる。礫は地山中に深く埋没し、本遺構構築の際にも動かされた様子は無い。地山中の礫は2mを超える大きなものもある。最下層(12層)のみブロック土。1~11

層は自然堆積土層。12層は踏み固められたような土層ではあるが、住居の床面のような締まりはなく、掘削作業中に踏まれた土であろう。住居掘削途中で掘削を中止した遺構の可能性も考えられる。出土した土器片が小破片のため、出土遺物から遺構の時期を比定することはできない。3区9号住居に切られることから、10世紀後半以前に構築されたと思われる。



3区2号堅穴

- | | |
|--------------------------------|---|
| 1 黒褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAを含む。 | 7 暗褐色土 多量のHr-FP・Hr-FAブロックを含む。 |
| 2 褐色土 Hr-FAを主体とする砂質土、白色軽石を含む。 | 8 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。 |
| 3 暗褐色土 Hr-FAを主体とする砂質土、白色軽石を含む。 | 9 灰褐色土 Hr-FAを主体とする砂質土。 |
| 4 褐色土 2層より砂質。 | 10 褐色土 少量のHr-FP、多量の黒色粘質ブロックを含む。 |
| 5 褐色土 多量のHr-FP・Hr-FAブロックを含む。 | 11 褐色土 多量のHr-FP、多量の黒色粘質ブロックを含む。 |
| 6 黒褐色土 多量のHr-FPを含む。砂質土。 | 12 暗褐色土 多量のHr-FP・Hr-FAブロック・黒色粘質ブロックを含む。 |

第221図 3区2号堅穴状遺構平面・断面図

(3) 土坑

諏訪ノ木V遺跡で検出された奈良・平安時代の土坑は、2区1号土坑の1基だけである。

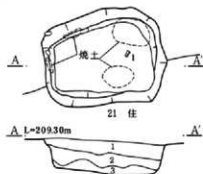
2区1号土坑(第222図、PL74・118)

土坑は、833-420に位置する。本遺構は2区21号住居と重複する。本遺構が2区21号住居を切

る調査所見を得た。

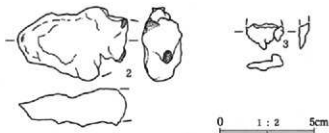
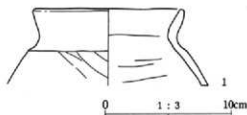
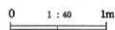
本遺構は、ほぼ方形で、長軸131cm、短軸106cm、確認深38cmを測る。土坑内には焼土、炭化物が多く含まれる。

本遺構から出土した遺物は土師器壺1点、鍛冶鉄塊系遺物1点、鍛冶滓1点である。



2区1号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FPを多く含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FAを多く含む。
- 3 黒褐色土 焼土、炭化物、Hr-FAを多く含む。



第222図 2区1号土坑平面・断面図、出土遺物図

2区1号土坑出土遺物観察表

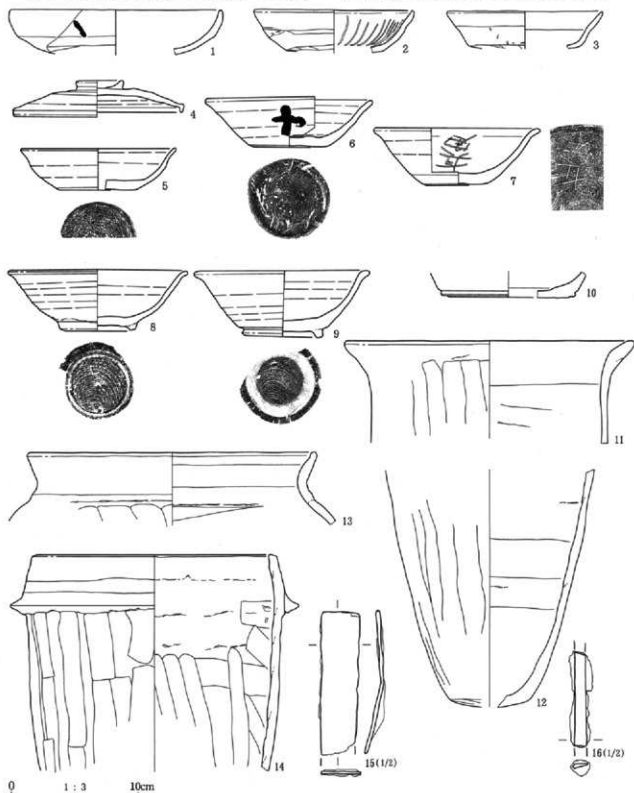
No.	検出No. 図版No.	種別 図種	出土位置 遺存状況	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第222図 PL-118	土師器 壺	+2 □~肩部片	□(120)高60残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。肩部外面ヘラナデ。内面ナデ。
No.	検出No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)		特徴など
2	第222図 PL-118	鍛冶鉄塊系 遺物	①698 g ②5 ③特L(☆)	埋土 長径58 短径38 厚20		平面、不整形円形をしたやや扁平な鍛冶鉄塊系遺物。上下面が生きており、右側面の一部が破面となる。この破面の周辺では放射割れが発達し、上面は僅かな凹凸を持つものの平坦きみで、下面は左右方向に伸びる浅い輪形、右側部帯りの放射割れや酸化土砂の厚い部分を除いて、全体に密着が強い。精錬鍛冶終了階段の鉄塊系遺物か。
3	第222図 PL-118	鍛冶滓	①15 g ②4 ③なし	埋土 長径20 短径13 厚0.5		扁平な鍛冶滓の小片。上手側の側面のみが破面となる。上下面で質感が異なり、上面はごく緩やかな波状。何らかの鉄製品などに接していた面か。これに対応する様に、右側の上面の跡は盛り上げられている。

①重量②磁重③メタル度

(4) 遺構外出土遺物(第223・224図、PL119)

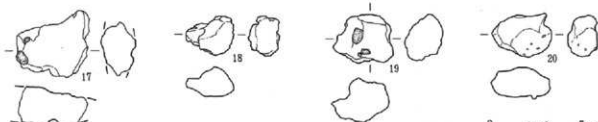
土師器杯、甕、須恵器蓋、杯、椀、瓶、羽釜、鉄製品、椀形鍛冶滓、鍛冶滓といった奈良・平安時代の

遺構外の遺物が出土した。帰属の明らかにできなかった遺物で、残存率のよい個体を取り上げた。



第223図 諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代遺構外出土遺物図(1)

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物



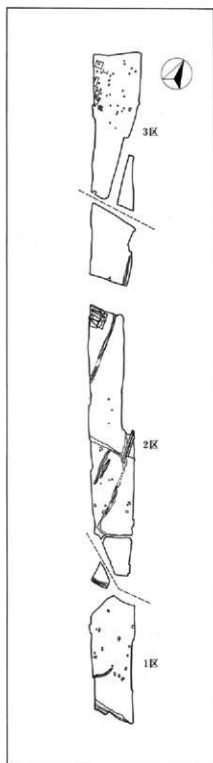
第224図 諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代遺構外出土土物図(2)

諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代遺構外出土土物観察表

No.	拝国 No. 区版 No.	種別 砂埴	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など	①胎土 ②焼成 ③色調
1	第223回 PL-119	土師器 杯	2区 1/3	□(16.8)高3.6 残底-	口縁部上半が横ナデ。下半-底部はヘラ削りか。①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色。体部外面に墨痕あり。	
2	第223回 PL-119	土師器 杯	2区 1/3	□(12.8)高3.3 残底-	口縁部上半が横ナデ。下半-底部はヘラ削りか。内面は斜放射状暗文。①砂粒 ②良好 ③褐色	
3	第223回 PL-119	土師器 杯	3区 1/6	□(12.3)高2.9 残底-	口縁部上半が横ナデ。下半-底部は不定方向のヘラ削りか。①砂粒 ②良好 ③褐色	
4	第223回 PL-119	須恵器 蓋	2区 2/3	□13.5 高2.9	ロクロ成形、右回り回転。積みは貼付。天井部などは回転ヘラ削り。①砂粒 ②還元焼 ③灰色	
5	第223回 PL-119	須恵器 杯	2区 1/3	□(12.4)高3.3 底6.0	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。①細砂 ②還元焼 ③暗青灰色	
6	第223回 PL-119	須恵器 杯	2区 定形	□13.3 高4.0 底5.6	体部外面正位に墨書、「□」。	
7	第223回 PL-119	須恵器 杯	2区 1/2	□13.1 高4.5 底5.0	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明であるが回転糸切りか。体部内面逆位に削書、「真口」[出カ]。①細砂 ②還元焼 ③灰白色	
8	第223回 PL-119	須恵器 碗	2区 2/3	□14.2 高4.9 底(6.0) 高台(6.0)	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。①細砂 ②酸化焙きみ ③灰褐色	
9	第223回 PL-119	須恵器 碗	2区 3/5	□14.0 高5.5 底6.3 高台6.5	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。内外黒色。①細砂 ②還元焼 ③灰白色	
10	第223回 PL-119	須恵器 板	1区 底部1/5	□ - 高2.1 残底(10.6)	ロクロ成形、右回り回転。底部回転ヘラ削り。高台は削り出し。①細砂 ②還元焼 ③灰色	
11	第223回 PL-119	土師器 甕	2区 □-胴部1/6	□(23.0)高8.1 残底-	口縁部横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。①粗砂 ②良好 ③褐色	
12	第223回 PL-119	土師器 甕	2区 胴-底部1/4	□ - 高18.7 残底(6.2)	縦位のヘラ削り。①粗砂 ②良好 ③褐色	
13	第223回 PL-119	土師器 甕	2区 □-胴部1/6	□(23.0)高5.7 残底-	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	
14	第223回 PL-119	羽釜	2区 □-胴部1/4	□(19.5)高17.2 残底 - 胴(23.9)	ロクロ成形。胴は貼付。胴部外面、底部から胴に向けて縦方向のヘラ削り。内面ヘラナデ。①砂粒 ②酸化焼 ③にぶい黄褐色	
No.	拝国 No. 区版 No.	遺物名	①重②紐着度③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
15	第223回 PL-119	鉄製品 鍛造品 板状不明	①12.5 g ②5 ③L(●)	1区 長7.6残 幅20 厚0.2	幅19cm程の薄板状の鉄製品。端部はほぼ直角に成形されており、下手寄りの右側の肩部が小さく欠けている。中央部で緩やかにくの字状に折れ曲がっており、折れ方向は斜めである。刃部は作り出されていない。	
16	第223回 PL-119	鉄製品 鍛造品 棒状不明	①10.2 g ②4 ③H(○)	3区 長5.1残 幅0.6 厚0.25	長軸の先端部が破面となった棒状の鉄製品破片。外周部に酸化土砂が取り巻く不明点が多い。上手側の端部には厚さ4.5mm程の不整形円形の端部が露出している。中程は横断面が円形。一部に放射割れが入りはじめている。	
17	第224回 PL-119	碗形鍛冶滓 (小、含鉄)	①29.6 g ②5 ③錆化(△)	3区 長径3.8 短径3.5 厚2.0	平面、不整形形をした含鉄の碗形鍛冶滓片。表面は酸化土砂に覆われ、放射割れが散見。上下面が生きており、側部は4面共に破面と見たい。放射割れの形態や紐着傾向から見て、含鉄部は広がりを持っていった可能性が高い。もとの碗形鍛冶滓の肩部寄りの破片か。	
18	第224回 PL-119	碗形鍛冶滓 (細小、含鉄)	①8.3 g ②5 ③錆化(△)	3区 長径2.5 短径2.1 厚1.6	平面、不整形三角形をした含鉄の碗形鍛冶滓片。上下面と右側面の一部が生きており、それ以外の側面は破面となっている。含鉄部は中核部。	
19	第224回 PL-119	鍛冶滓 (含鉄)	①18.5 g ②5 ③錆化(△)	3区 長径3.2 短径2.6 厚2.3	平面、不整形五角形をした小塊状の含鉄の鍛冶滓。表面には紐石を数多く含む酸化土砂が固着している。含鉄部は上手側の側面寄り。	
20	第224回 PL-119	鍛冶滓 (含鉄)	①12.7 g ②5 ③錆化(△)	3区 長径3.1 短径2.2 厚1.6	平面、不整形円形をした含鉄の鍛冶滓片。やや扁平で端部片側に小破面を持つ。鍛冶滓の産物か。	

①重量②紐着度③メタル度

[4] 中世以降の遺構と遺物



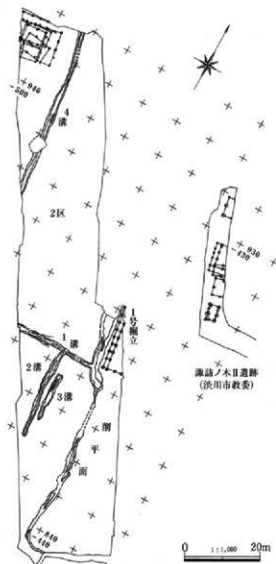
諏訪ノ木V遺跡 中世以降の遺構

概要

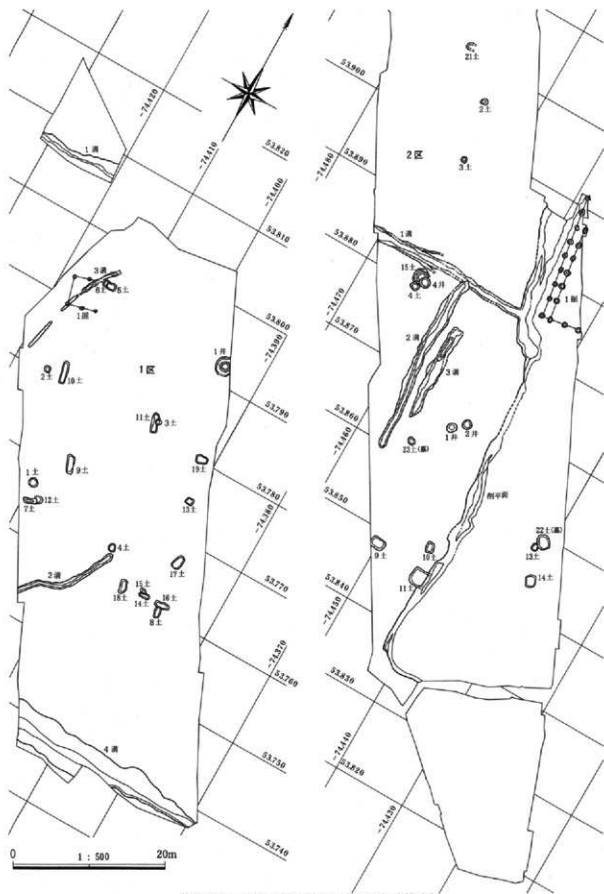
本遺跡の中世以降の遺構は、掘立柱建物12棟、柱穴列3列、土坑81基、土坑墓2基、井戸10基、溝6条である。(第226・227図)

1区2、3号以外の溝は、東西、南北方向を意識した溝である。また、2区南の表土下層からは、削平された面が確認された。削平された面もほぼ東西、南北方向を意識している。

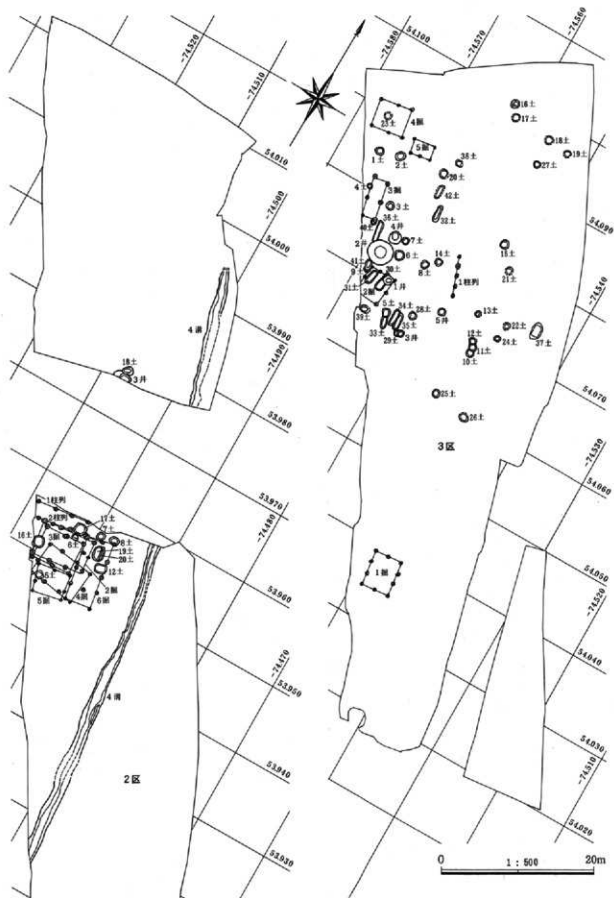
2区4号溝の西側と削平面に掘立柱建物群がある。2区1号掘立柱建物の北東にある諏訪ノ木II遺跡(2000 渋川市教委)では中世以降の掘立柱建物群が検出されている。



第225図 諏訪ノ木V遺跡と諏訪ノ木II遺跡の中世以降の遺構



第226図 諏訪ノ木V遺跡 中世以降の遺構(1)



第227図 御訪ノ木V遺跡 中世以降の遺構(2)

(1) 掘立柱建物

1区1号掘立柱建物(第228図、PL76)

位置 790-418 主軸方向 N-74°-E 重複 1区3号溝と重複。本建物の方が、溝より後出である。形態 身舎部分は1×2間(3.73m×3.77m・1.25尺×1.25尺)、14.06㎡の東西棟か。柱間は桁側1.81~2.04m、梁側3.73m。東・西・南・北辺すべてで、直線的に柱穴が並び、ほとんど歪みのない正方形を呈す。北東隅柱はトレンチのため未検出。

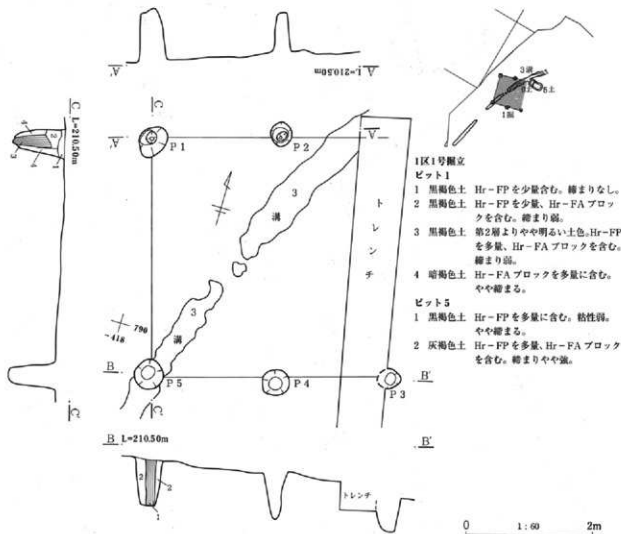
柱痕跡はP1・P5で見られ、15.2cm、20.5cmを測る。柱穴は、楕円形、円形、不整形のもの混

在し、長径37~53cm、短径31~43cm、深さ54~85cmで、ばらつきがある。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。

諏訪ノ木V遺跡 1区1号掘立柱建物 東西棟

規模	1×2間		面積		(14.06)㎡	
主軸方向	N-74°-E		庇		-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺(3.29)	P1	53	40	85	不整形	2.04
	P2	39	33	62	楕円形	-
南辺(3.77)	P3	37	31	54	楕円形	1.81
	P4	43	40	73	円形	1.96
西辺 3.73	P5	46	43	77	円形	3.73



第228図 1区1号掘立柱建物平面・断面図

2区1号掘立柱建物(第229回、PL75)

位置 891-444 主軸方向 N-9°-W 重複無し 形態 検出された身舎部分は2×6間(4.39m×13.2m・14.5尺×43.5尺)、37.23㎡以上の南北棟。南側に1.06mの間隔をとって、8間の庇が検出されたことから、全体として2×8間(5.45m×16.69m)の規模であると思われる。柱間は桁間1.84~2.55m、梁間2.13~2.26m。柱穴は直線的に並び、ほとんど歪みのない長方形を呈す。庇の柱穴は身舎の西辺とほぼ対応する位置にある。

柱痕跡はP9、11、14、15、16で見られ、14.9cm、15.2cm、12.5cm、12.3cm、15.3cmを測る。上面が比較的平坦な標が、P1、2、4~9、11、15、17の底から検出され、根石と見られる。柱穴は、楕円形で、長径52~83cm、短径42~69cm、深さ37~110cm、P18を除き、深さは統一性が高い。庇の柱穴は、身舎の柱穴とほぼ同規模である。内部施設なし。 出土遺物なし。

2区2号掘立柱建物(第230回)

位置 954-503 主軸方向 N-83°-E 重複2区3・4・6号掘立柱建物、2号柱穴列、6・16・17号土坑と重複。本遺構は、6・16号土坑より前出で、17号土坑より後出である。その他の遺構との新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は2×3間(4.50~4.56m×6.92~7.10m・15尺×23.5尺)、31.76㎡の東西棟。柱間は桁間2.16~2.52m、梁間2.17~2.33m。東・西・北辺で、直線的に柱穴が並ぶが、南東隅柱のP6は、内側に外れている。ほとんど歪みのない長方形を呈す。西辺のP1、P9間の柱穴は、未検出が省略。柱痕跡はP9で見られ、18.0cmを測る。柱穴は、長径33~65cm、短径24~59cm、深さ11~67cmで、大きなばらつきがある。

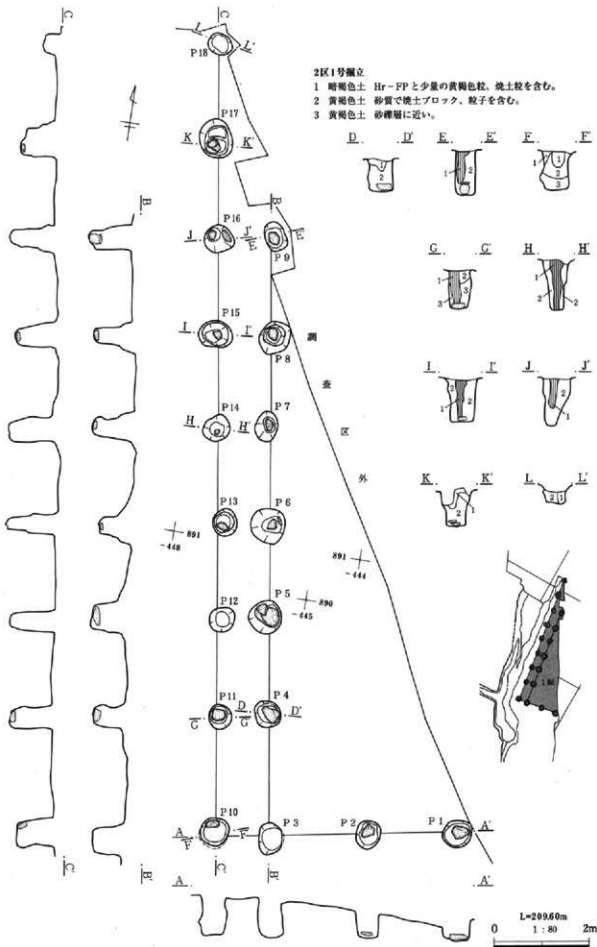
内部施設なし。 出土遺物なし。

諏訪ノ木V遺跡 2区1号掘立柱建物 南北棟

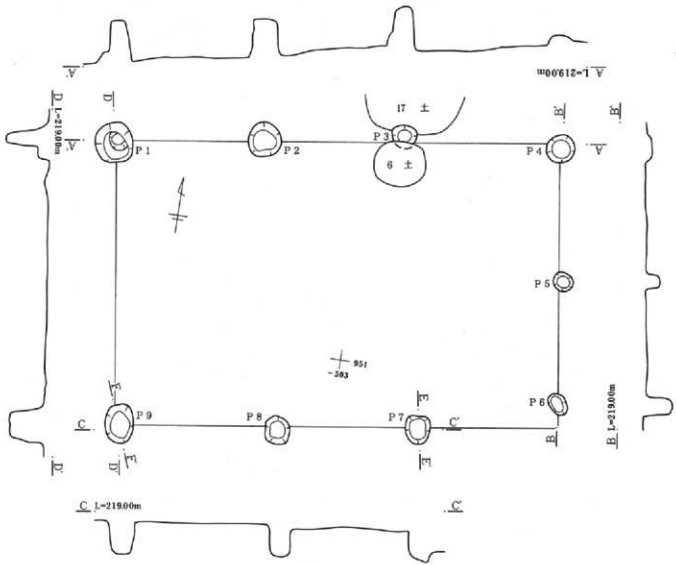
規模		(2+1)×(8)間			面積		(37.23)㎡	
主軸方向		N-9°-W			庇		西	
軒・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c.m.)			形状	次ビットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
南辺(4.39)	P1	65	55	43	不整形	2.26		
	P2	58	50	54	楕円形	2.13		
	P3	66	47	84	楕円形	2.55		
	P4	69	53	90	楕円形	2.01		
	P5	70	66	96	楕円形	1.90		
	P6	78	69	110	楕円形	2.10		
	P7	62	45	97	楕円形	1.84		
	P8	73	60	85	不整形	2.11		
西庇(16.96)	P9	61	41	93	楕円形	-		
	P10	62	58	84	楕円形	2.47		
	P11	52	47	67	楕円形	2.04		
	P12	56	50	66	楕円形	2.03		
	P13	57	50	65	楕円形	1.96		
	P14	59	49	88	楕円形	1.98		
	P15	71	52	86	楕円形	1.98		
	P16	63	55	93	楕円形	1.97		
	P17	83	67	75	楕円形	2.06		
	P18	52	42	37	楕円形	-		

諏訪ノ木V遺跡 2区2号掘立柱建物 東西棟

規模		2×3間			面積		31.76㎡	
主軸方向		N-83°-E			庇		-	
軒・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c.m.)			形状	次ビットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 7.1	P1	65	59	66	楕円形	2.37		
	P2	55	50	61	楕円形	2.21		
	P3	41	36	67	楕円形	2.52		
	P4	47	42	11	円形	2.17		
東辺 4.5	P5	33	29	23	楕円形	2.33		
	P6	37	24	44	楕円形	2.16		
南辺 6.92	P7	47	36	48	楕円形	2.25		
	P8	47	37	49	楕円形	2.51		
	P9	61	44	53	楕円形	4.56		



第229図 2区1号掘立柱建物平面・断面図



E L=219.00m E

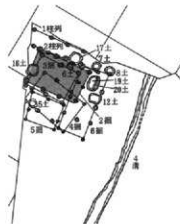


F L=219.00m F



2区2号掘立
ピット7

- 1 暗褐色土 少量のHr-FP、Hr-FAブロックを含む。
縞まじりあり。
 - 2 暗褐色土 多量のHr-FAブロック、少量の黒褐色ブロック
を含む。縞まじりあり。
- ピット9
- 1 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック、少量の炭化物粒を含む。
 - 2 暗褐色土 Hr-FP(第1層に比べて径が小さい)、Hr-FAブロッ
ク、少量の炭化物粒を含む。
 - 3 暗褐色土 Hr-FAブロック、黄褐色ブロック、多量の礫を含む。



第230図 2区2号掘立柱建物平面・断面図

2区3号掘立柱建物(第231図)

位置 935-502 主軸方向 N-86°-E 重複 2区2・4・6号掘立柱建物・2区16号土坑と重複。新旧関係は不明である。

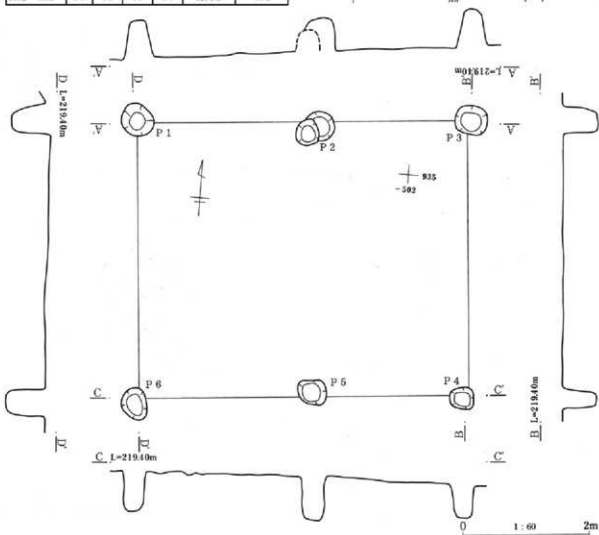
形態 身舎部分は1×2間(4.28~4.32m×5.16~5.34m・14尺×17.5尺)、2258㎡の東西棟。柱間は桁側2.41~2.75m、梁側4.28~4.32m。柱穴は直線

的に並び、ほとんど歪みのない長方形を呈す。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、隅丸方形、不整形のもの混在し、長径34~53cm、短径30~46cm、深さ53~69cmで、ばらつきがある。

内部施設なし。 出土遺物なし。

諏訪ノ木V遺跡 2区3号掘立柱建物 東西棟

規模		1×2間			面積		2258㎡	
主軸方向		N-86°-E			庇		-	
桁・梁行きの規模(m)		柱穴No.	規模(c m)			形状	次ビットとの間隔(m)	
			長径	短径	深さ			
北辺	5.34	P1	53	46	63	楕円形	2.70	
		P2	47	44	53	不整形	2.61	
東辺	4.28	P3	53	44	55	隅丸方形	4.28	
南辺	5.16	P4	34	30	54	隅丸方形	2.41	
		P5	50	37	69	楕円形	2.75	
西辺	4.32	P6	51	38	64	楕円形	4.32	



第231図 2区3号掘立柱建物平面・断面図

2区4号掘立柱建物(第232図)

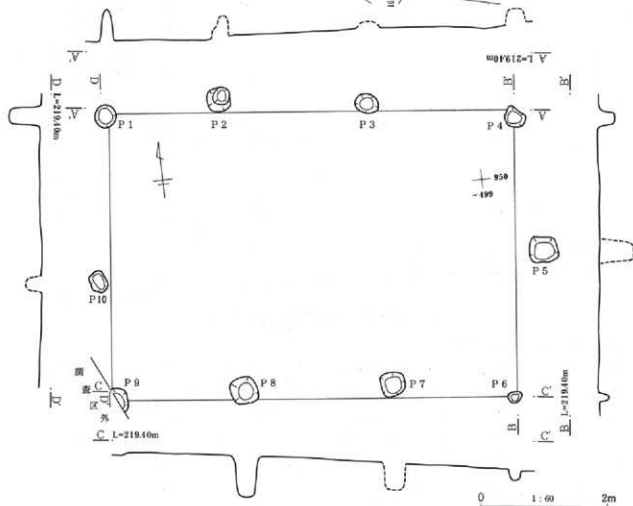
位置 950-499 主軸方向 N-83°-W 重複 2区2・3・5・6号掘立柱建物と重複。新旧関係は不明である。形態 身舎部分は2×3間(4.48~4.52m×

6.44~6.54m・15尺×21.5尺)、2921㎡の東西棟。柱間は桁間1.87~2.36m、梁間1.70~2.78m。西・南・北で、直線的に柱穴が並ぶが、東辺のP5は、外側に外れている。ほとんど歪みのない長方形を呈す。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、円形、隅丸方形、不整円形のもの混在し、長径23~49cm、短径15~40cm、深さ13~65cmで、ばらつきがある。

内部施設なし。 出土遺物なし。

測跡ノ本V遺跡 2区4号掘立柱建物 東西棟

規模		2×3間			面積	
主軸方向		N-85°-W			2921㎡	
桁・梁行きの規模(m)		形状			次ビットとの間隔(m)	
北辺	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
654	P1	36	33	50	円形	1.87
	P2	41	36	32	隅丸方形	2.36
	P3	37	29	13	楕円形	1.87
東辺	P4	36	27	25	不整円形	2.26
	P5	49	34	52	隅丸方形	2.26
南辺	P6	23	15	18	楕円形	2.02
	P7	42	36	45	隅丸方形	2.26
	P8	49	40	65	隅丸方形	2.16
西辺	P9	41	(17)	18	不整円形	1.70
	P10	35	26	27	楕円形	2.78



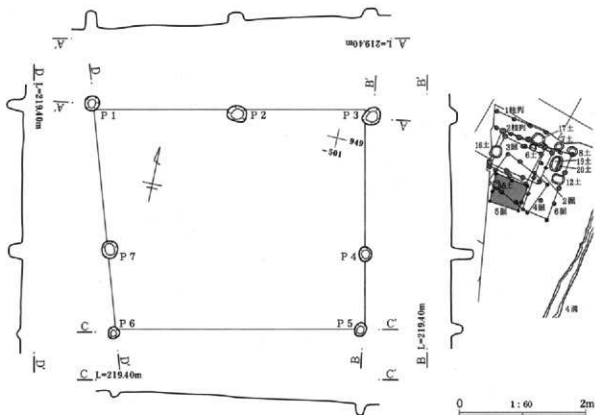
第232図 2区4号掘立柱建物平面・断面図

2区5号掘立柱建物(第233図)

位置 949-501 主軸方向 N-79°-E 重複 2区2・4号掘立柱建物、5号土坑と重複。新旧関係は不明である。形態 身舎部分は2×2間(3.31~3.60m×3.89~4.41m・115尺×145尺)、14.36㎡の東西棟。柱間は桁側2.13~2.28m、梁側1.17~2.37m。平面形は、台形に歪む。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形で、長径19~32cm、短径16~24cm、深さ10~34cmである。内部施設なし。 出土遺物なし。

諏訪ノ木V遺跡 2区5号掘立柱建物 東西棟

規模	2×2間			面積	14.36㎡	
主軸方向	N-79°-E			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺 4.41	P1	25	22	28	楕円形	2.28
	P2	32	16	17	楕円形	2.13
東辺 3.31	P3	30	24	12	楕円形	2.14
	P4	23	19	34	楕円形	1.17
南辺 3.89	P5	22	17	19	楕円形	3.89
西辺 3.6	P6	19	16	10	楕円形	1.29
	P7	27	23	20	楕円形	2.31

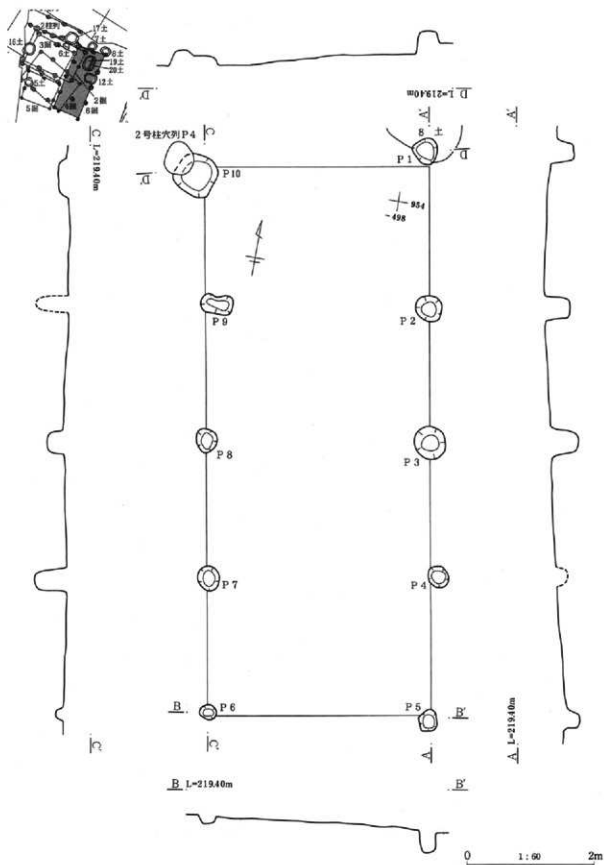


第233図 2区5号掘立柱建物平面・断面図

2区6号掘立柱建物(第234図)

位置 954-498 主軸方向 N-10°-W 重複 2区2・3・4号掘立柱建物、2号柱穴列、8・12・19・20号土坑と重複。本遺構は、2号柱穴列より前出で、8号土坑より後出である。その他の遺構との新旧関係は不明である。形態 身舎部分は1×4間(3.55~3.59m×8.52~8.88m・12尺×28尺)、31.06㎡の南北棟。柱間は桁側208~246m、梁側355~

359m。東・西・南で、直線的に柱穴が並ぶが、北辺のP1は、外側に外れている。ほとんど歪みのない長方形を呈す。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、円形、不整形のものが混在し、長径27~71cm、短径22~63cm、深さ13~51cmで、大きなばらつきがある。内部施設なし。 出土遺物なし。



第234图 2区6号掘立柱建物平面・断面图

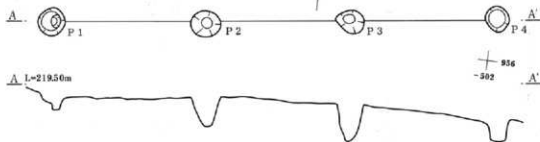
第5章 深訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

深訪ノ木V遺跡 2区6号掘立柱建物 南北棟

規模	1×4間			面積	3106㎡	
主軸方向	N-10°-W			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c m)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺 888	P1	41	35	36	楕円形	246
	P2	44	40	38	楕円形	209
	P3	52	49	44	円形	208
	P4	36	30	16	楕円形	225
南辺 355	P5	36	27	35	楕円形	355
西辺 852	P6	27	22	13	楕円形	210
	P7	39	33	51	楕円形	215
	P8	37	31	25	楕円形	217
	P9	50	25	48	不整形円形	210
	P10	71	63	15	不整形円形	359

深訪ノ木V遺跡 2区1号柱穴列 東西

規模	-			面積	-	
主軸方向	N-82°-E			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c m)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
全長 703	P1	38	36	35	円形	232
	P2	44	35	59	不整形円形	225
	P3	48	41	46	円形	246
	P4	44	43	25	円形	-



第235図 2区1号柱穴列平面・断面図

2区2号柱穴列(第236図)

位置 955-505 主軸方向 N-80°-E 重複 2区2・6号掘立柱建物、17号土坑と重複。本遺構は、6号掘立柱建物より後出である。その他の遺構との新旧関係は不明である。形態 全長8.90mで東西に走行する。柱間は210~236mである。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、不整形円形、隅丸方形のものが混在し、長径37~59cm、短径35~46cm、深さ27~66cmである。内部施設 なし。 出土遺物 なし。

2区1号柱穴列(第235図)

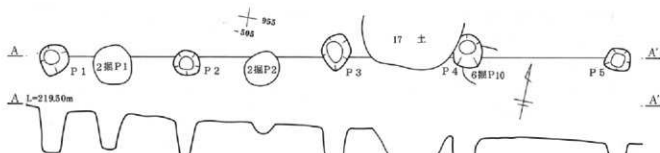
位置 956-502 主軸方向 N-82°-E 重複 なし 形態 全長7.03mで東西に走行する。柱間は225~246mである。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、円形、不整形円形のものが混在し、長径38~48cm、短径35~43cm、深さ25~59cmを測る。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。



深訪ノ木V遺跡 2区2号柱穴列 東西

規模	-			面積	-	
主軸方向	N-80°-E			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c m)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
全長 890	P1	37	35	27	隅丸方形	236
	P2	52	46	46	不整形円形	210
	P3	59	46	62	楕円形	236
	P4	41	40	58	円形	211
	P5	50	46	66	不整形円形	-



第236図 2区2号柱穴列平面・断面図

0 1:60 2m



3区1号掘立

ビット3

1 褐色土 Hr-FP, Hr-FA, 小礫を多く含む。

ビット4

1 褐色土 Hr-FP, Hr-FA を含む砂質で締まる。

ビット7

1 褐色土 砂質。Hr-FA を含む。

2 黒褐色土 Hr-FA を含む。締まりなし。

3 褐色土 砂質。Hr-FA, 黄色ブロックを含む。

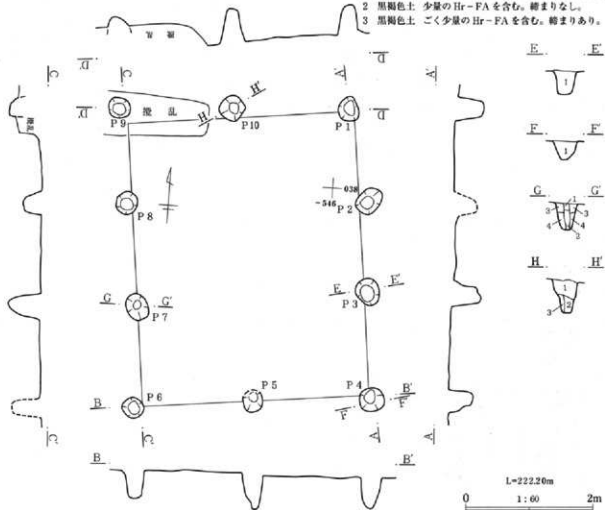
4 黒褐色土 多量のHr-FAを含む。やや締まる。

ビット10

1 黒褐色土 砂質。多量のHr-FAを含む。やや締まる。

2 黒褐色土 少量のHr-FAを含む。締まりなし。

3 黒褐色土 ごく少量のHr-FAを含む。締まりあり。



第237図 3区1号掘立柱建物平面・断面図

L-222.20m

0 1:60 2m

3区1号掘立柱建物(第238図、PL76)

位置 038-546 主軸方向 N-8°-W 重複 無し
 形態 身舎部分は2×3間(3.57~3.73m×4.51~4.69m・12尺×15尺)、1679㎡の南北棟。柱間は桁側1.37~1.64m、梁側1.74~1.92m。西・南・北で、直線的に柱穴が並ぶが、東辺のP2は、外側に外れている。ほとんど重みのない長方形を呈す。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、不整形のもの混在し、長径36~48cm、短径29~36cm、深さ19~58cmを測る。内部施設なし。出土遺物なし。

諏訪ノ木V遺跡 3区1号掘立柱建物 南北棟

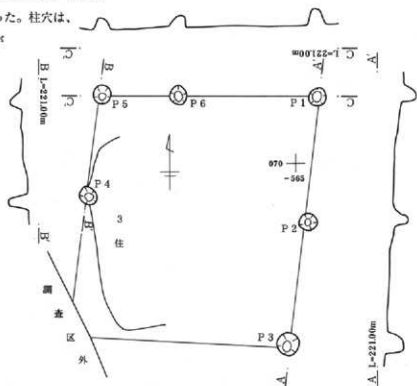
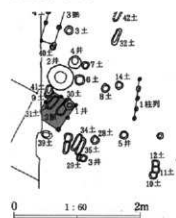
規模		2×3間			面積	1679㎡	
主軸方向		N-8°-W			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 4.51	P1	38	29	46	楕円形	1.50	
		P2	48	34	35	楕円形	1.37
		P3	43	35	46	楕円形	1.64
南辺 3.73	P4	41	36	50	楕円形	1.92	
		P5	36	34	58	不整形	1.81
西辺 4.69	P6	34	30	44	楕円形	1.56	
		P7	43	33	51	楕円形	1.64
北辺 3.57	P8	36	32	29	楕円形	1.49	
		P9	36	30	19	楕円形	1.74
		P10	40	36	53	不整形	1.83

3区2号掘立柱建物(第238図、PL77)

位置 070-565 主軸方向 N-8°-E 重複 3区3号住居、9・30・31号土坑、1号井戸と重複。本遺構は、3区3号住居より後出である。その他の遺構との新旧関係は不明である。形態 身舎部分は2×2間(3.48×3.97m・11.5尺×13尺)、1382㎡の南北棟。柱間は桁側1.59~1.99m、梁側1.25~2.23m。東・西・南で、直線的に柱穴が並ぶが、北辺のP1は、外側に外れている。やや歪んで菱形を呈す。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、円形、不整形のもの混在し、長径29~37cm、短径25~34cm、深さ19~32cmを測る。内部施設なし。出土遺物なし。

諏訪ノ木V遺跡 3区2号掘立柱建物 南北棟

規模		2×2間			面積	1382㎡	
主軸方向		N-8°-E			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.97	P1	29	27	24	不整形	1.98	
		P2	29	27	21	楕円形	1.99
		P3	37	34	29	楕円形	-
西辺 (1.59)	P4	30	25	32	楕円形	1.59	
		P5	30	28	28	円形	1.25
北辺 3.48	P6	30	26	19	楕円形	2.23	



第238図 3区2号掘立柱建物平面・断面図

3区3号獨立柱建物(第239図, PL77)

位置 081-572 主軸方向 N-10°-W 重複 4・40号土坑と重複。本遺構は、40号土坑より前出で、2区20号住居より後出である。4号土坑との新旧関係は不明である。形態 身倉部分は1×2間(1.87m×5.02~5.40m・6尺×17.5尺)、9.74㎡の南北棟。柱間は桁側2.47~2.92m、梁側1.87m。東・西・南で、直線的に柱穴が並ぶが、北辺のP1は、内側に外れている。ほとんど歪みのない長方形を呈す。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、不整形のもの混在し、長径37~57cm、短径28~42cm、深さ34~69cmで、ばら

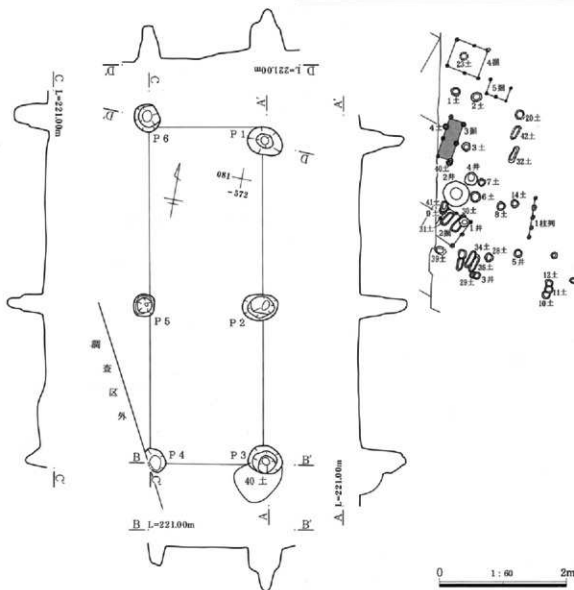
つきがある。

内部施設なし。

出土遺物なし。

調査ノ木V遺跡 3区 3号獨立柱建物 南北棟

規模		1×2間		面積		9.74㎡	
主軸方向		N-10°-W		庇		-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 5.02	P1	57	42	56	楕円形	255	
	P2	57	37	60	楕円形	247	
南辺 1.87	P3	54	41	69	楕円形	1.87	
西辺 5.4	P4	40	28	34	楕円形	2.48	
	P5	37	31	56	不整形円形	2.92	
北辺 1.87	P6	44	37	55	不整形円形	1.87	



第239図 3区3号獨立柱建物平面・断面図

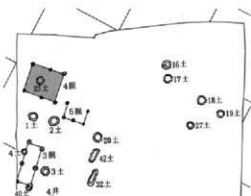
3区4号掘立柱建物(第240図、PL77)

位置 091-574 主軸方向 N-80°-E 重複 23号土坑と重複。新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は1×2間(3.68~3.98m×4.14~4.30m・12尺×15尺)、16.16㎡の東西棟。柱間は桁側1.89~2.40m、梁側3.68~3.98m。東・西・南・北で、直線的に柱穴が並び、ほとんど重みのない長方形を呈す。北・南辺のP2、P5はともに東へ片寄る。

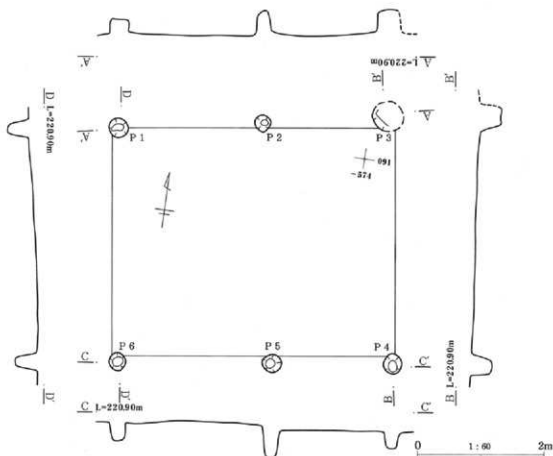
いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、円形、不整形円形のものが混在し、長径26~31cm、短径23~28cm、深さ26~50cmで、ばらつきがある。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。



諏訪ノ木V遺跡 3区 4号掘立柱建物 東西棟

規模	1×2間			面積	16.16㎡	
主軸方向	N-80°-E			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺 4.14	P1	30	28	33	円形	225
		P2	26	23		
東辺 3.98	P3	-	-	29	円形	3.98
南辺 4.3	P4	31	28	26	楕円形	1.90
		P5	31	27		
西辺 3.68	P6	29	26	35	円形	3.68



第240図 3区4号掘立柱建物平面・断面図

3区5号掘立柱建物(第241図、PL77)

位置 088-569 主軸方向 N-12°-W 重複 3
区1号堅穴状遺構と重複。本遺構は、3区1号堅穴状遺構より後出である。

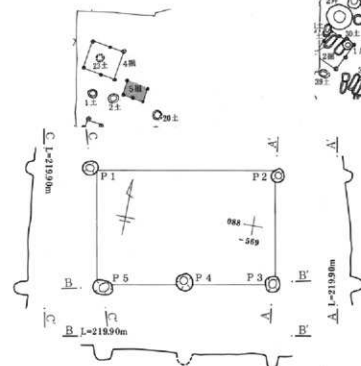
形態 1×2間(1.68~1.89m×2.66~3.02m・6尺×9~10尺)、8.50mの東西棟か。柱間は桁側1.32~3.02m、梁側1.68~1.89m。北辺は幅広く、平面台形を呈する。北辺中央の柱穴は省略か。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、隅丸方形のものが混在し、長径22~31cm、短径20~26cm、深さ8~23cmで、ばらつきがある。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。

源訪ノ木V遺跡 3区 5号掘立柱建物 東西棟か

規模	2×(1)間		面積	(850)㎡		
主軸方向	N-12°-W		庇	-		
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c m)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺 302	P1	25	22	14	円形	302
東辺 1.68	P2	22	20	13	楕円形	1.68
南辺 2.66	P3	26	20	19	隅丸方形	1.34
	P4	27	26	8	楕円形	1.32
西辺 1.89	P5	31	22	23	隅丸方形	1.89



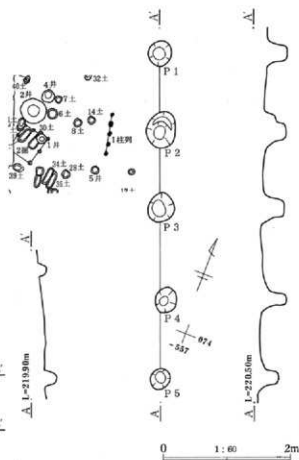
3区1号柱穴列(第241図、PL77)

位置 074-557 主軸方向 N-21°-W 重複なし
形態 全長5.10mで南北に走行する。柱間は1.20~1.46mである。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、円形、楕円形、不整形のもののが混在し、長径33~58cm、短径32~45cm、深さ32~38cmである。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。

源訪ノ木V遺跡 3区 1号柱穴列 南北

規模	-		面積	-		
方向	N-21°-W		庇	-		
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c m)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
全長 5.10	P1	40	36	32	円形	1.24
	P2	58	45	35	楕円形	1.20
	P3	47	42	35	不整形円形	1.46
	P4	40	34	38	不整形円形	1.22
	P5	33	32	32	円形	-



第241図 3区5号掘立柱建物、1号柱穴列平面・断面図

(2) 土坑(第242～256図、PL78～87・119・120)

諏訪ノ木V遺跡では、中世以降の土坑81基、土坑墓2基が検出された。人骨や銭貨が出土したものを土坑墓とし、それ以外を土坑とした。

土坑・土坑墓の多くは時期判別の決め手になる遺物が含まれていなかったため、埋土や形状、周辺遺構の様相から時期を中世以降と判別した。

本遺跡の土坑はその形状から①円形、②隅丸方形、③隅丸長方形、④不定形に分類した。

円形の土坑は、39基ある。その内、1区2・3号、2区5・6号、3区2・4・9・16～18・20・27号以外は底部がほぼ平らである。

隅丸方形の土坑は7基ある。隅丸方形はその形状から土坑墓の可能性も考えられるものもある。

隅丸長方形の土坑は12基ある。短軸に対して長軸が2倍以上ある隅丸方形のものを隅丸長方形とした。1区7号土坑を除き、ほぼ南北軸を長軸としている。形状、埋土、長軸方向などから芋穴の可能性が考えられる。

不定形に分類したものは21基ある。不定形の土坑で遺物が含まれるものは2区13号土坑1基である。出土した遺物は在地系の土器で、中世に比定さ

れる。

土坑の位置、形態、重複関係、規模などについては第11表に掲載してある。なお、特異なものや遺物が多く出土しているなど特徴的な土坑については下記に記載する。

2区7号土坑 本土坑は956-499グリッドに位置する。形態は円形を呈す。規模は長軸100cm、短軸97cm、最大深18cmを測る。埋土はブロック状で、人為的に埋められたものと思われる。出土した軟質陶器の播鉢は、6本1単位のすり目で、4ヶ所確認できる。内面には使用した磨減痕も確認できる。本遺構は出土遺物から中世に比定される。

2区12号土坑 本土坑は592-497グリッドに位置する。形態は隅丸方形を呈す。規模は長軸147cm、短軸111cm、最大深57cmを測る。埋土はブロック状で、人為的に埋められたものと思われる。出土した石臼は、上白である。

2区13号土坑 本土坑は860-432グリッドに位置する。形態は不定形を呈す。規模は長軸91cm、短軸59cm、最大深34cmを測る。在地系土器が出土した。本遺構は出土遺物から中世に比定される。

第11表 諏訪ノ木V遺跡 土坑一覧表

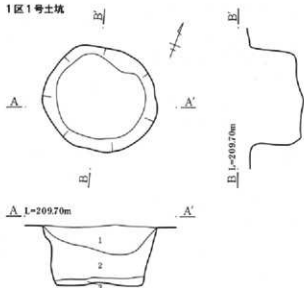
	遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模 (cm)			備考
					長軸	短軸	深さ	
1	1区-1号土坑	768-409	円形	-	121	109	56	
2	1区-2号土坑	781-145	円形	-	81	80	18	
3	1区-3号土坑	765-397	円形	-	96	96	38	11土を切る
4	1区-4号土坑	783-399	円形	-	78	65	48	
5	2区-2号土坑	906-466	円形	-	94	75	38	
6	2区-3号土坑	898-465	円形	-	66	56	70	
7	2区-4号土坑	881-462	円形	-	101	95	48	15土を切る
8	2区-5号土坑	948-505	円形	-	105	97	54	
9	2区-6号土坑	954-502	円形	N-84°-E	81	72	56	2層P3を切る
10	2区-7号土坑	956-499	円形	-	100	97	18	播り鉢
11	2区-8号土坑	957-497	円形	N-70°-W	124	109	6	6層P1に切られる
12	3区-1号土坑	085-575	円形	-	125	100	15	
13	3区-2号土坑	085-571	円形	-	125	113	20	
14	3区-3号土坑	080-570	円形	-	106	103	26	
15	3区-4号土坑	081-573	円形	-	71	69	20	
16	3区-5号土坑	068-563	円形	N-10°-W	103	93	36	3住、33土を切る
17	3区-6号土坑	074-560	円形	-	122	119	39	
18	3区-7号土坑	076-566	円形	-	79	77	19	
19	3区-8号土坑	075-562	円形	-	100	99	34	
20	3区-9号土坑	071-568	円形	-	-	87	39	41土に切られる
21	3区-10号土坑	067-550	円形	-	93	(82)	56	11土に切られる

[4] 中世以降の遺構と遺物

	遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模 (cm)			備考
					長軸	短軸	深さ	
22	3区-11号土坑	068-550	円形	-	102	87	40	12住、10・12土を切る
23	3区-12号土坑	069-553	円形	-	94	(72)	42	10住を切り、11土に切られる
24	3区-13号土坑	073-552	円形	-	80	76	40	10住を切る
25	3区-14号土坑	076-559	円形	-	89	86	22	
26	3区-15号土坑	083-555	円形	-	115	113	56	
27	3区-16号土坑	099-562	円形	-	100	95	14	
28	3区-17号土坑	098-561	円形	-	102	97	12	
29	3区-18号土坑	097-556	円形	-	107	105	30	
30	3区-19号土坑	097-553	円形	-	102	(97)	38	
31	3区-20号土坑	087-567	円形	-	117	103	32	1住を切る
32	3区-21号土坑	077-552	円形	-	97	(92)	39	
33	3区-22号土坑	073-549	円形	-	80	(90)	32	
34	3区-23号土坑	090-577	円形	-	(105)	96	13	
35	3区-24号土坑	071-550	円形	-	81	75	18	
36	3区-25号土坑	061-544	円形	-	101	100	38	
37	3区-26号土坑	061-548	円形	N-79°-W	127	104	36	
38	3区-27号土坑	094-555	円形	-	105	100	26	
39	3区-28号土坑	069-560	円形	-	97	87	32	
40	1区-5号土坑	794-412	隅丸方形	N-83°-E	119	91	37	6土を切る
41	1区-6号土坑	794-412	隅丸方形	N-86°-E	-	76	40	5土に切られる
42	2区-9号土坑	850-450	隅丸方形	N-80°-W	192	142	60	1住を切る
43	2区-10号土坑	852-443	隅丸方形	N-10°-W	136	94	30	
44	3区-29号土坑	065-560	隅丸方形	N-66°-E	118	84	32	2住を切り、3井に切られる
45	2区-11号土坑	849-443	隅丸方形	N-7°-E	217	201	50	
46	2区-12号土坑	592-497	隅丸方形	N-79°-E	147	111	57	石臼
47	1区-7号土坑	765-407	隅丸長方形	N-69°-E	171	63	60	12土を切る
48	1区-8号土坑	762-386	隅丸長方形	N-3°-W	(142)	66	28	16土に切られる
49	1区-9号土坑	773-407	隅丸長方形	N-20°-W	248	87	40	
50	1区-10号土坑	783-413	隅丸長方形	N-16°-W	290	73	22	
51	1区-11号土坑	783-399	隅丸長方形	N-19°-W	260	94	32	3土に切られる
52	3区-30号土坑	071-565	隅丸長方形	N-2°-E	254	100	48	3住を切り、1井に切られる
53	3区-31号土坑	071-567	隅丸長方形	N-15°-E	205	90	27	3住を切る
54	3区-32号土坑	081-564	隅丸長方形	N-6°-W	219	76	26	息室遺宝
55	3区-33号土坑	067-563	隅丸長方形	N-13°-W	(161)	65	42	2住を切り、5土に切られる
56	3区-34号土坑	068-562	隅丸長方形	N-0°	224	65	30	2住を切る
57	3区-35号土坑	068-561	隅丸長方形	N-3°-W	245	58	34	2住を切る
58	3区-36号土坑	076-570	隅丸長方形	N-10°-W	298	65	32	
59	3区-37号土坑	074-545	隅丸長方形	N-0°	218	127	40	
60	1区-12号土坑	765-407	不定形	-	94	90	48	7土に切られる
61	1区-13号土坑	765-390	不定形	N-80°-E	99	86	24	
62	1区-14号土坑	761-389	不定形	N-82°-E	141	58	16	15土を切る
63	1区-15号土坑	761-389	不定形	N-60°-W	(81)	52	24	14土に切られる
64	1区-16号土坑	762-386	不定形	N-85°-E	196	75	18	8土を切る
65	1区-17号土坑	766-389	不定形	N-22°-E	189	107	42	
66	1区-18号土坑	762-394	不定形	N-18°-W	181	90	20	
67	1区-19号土坑	780-391	不定形	N-73°-E	148	105	14	
68	2区-13号土坑	860-432	不定形	-	91	59	34	在地系土器、22土墓に切られる
69	2区-14号土坑	854-430	不定形	N-14°-W	152	132	20	
70	2区-15号土坑	883-463	不定形	N-26°-E	212	183	70	4土、4井に切られる
71	2区-16号土坑	951-506	不定形	-	150	139	40	
72	2区-17号土坑	955-502	不定形	N-87°-W	161	147	52	2掘P3に切れ、2柱列P4を切る
73	2区-18号土坑	977-506	不定形	N-61°-E	140	88	52	3井を切る
74	2区-19号土坑	954-499	不定形	N-9°-W	198	100	22	20土を切る
75	2区-20号土坑	954-499	不定形	N-11°-W	190	-	12	19土に切られる
76	2区-21号土坑	912-471	不定形	-	-	88	22	
77	3区-38号土坑	090-565	不定形	N-86°-E	90	82	40	
78	3区-39号土坑	066-567	不定形	N-80°-E	(114)	87	32	6住を切る
79	3区-40号土坑	076-571	不定形	N-25°-E	81	71	38	3掘P3を切る
80	3区-41号土坑	071-568	不定形	N-15°-W	134	77	18	9土を切る
81	3区-42号土坑	085-566	不定形	N-2°-E	192	78	15	1住を切る

円形

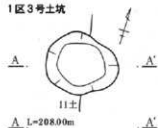
1区1号土坑



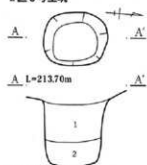
1区1号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック、黒褐色ブロックを含む。
- 3 暗黄褐色土 黄褐色粒を含む。粘性が強い。

1区3号土坑



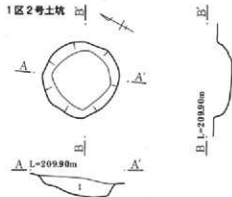
2区3号土坑



2区3号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。
- 2 黒褐色土 1層より締まり弱。

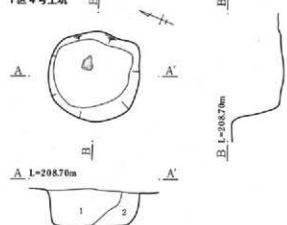
1区2号土坑



1区2号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAを含む。暗褐色粒ブロックを少量含む。

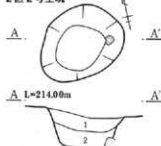
1区4号土坑



1区4号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。

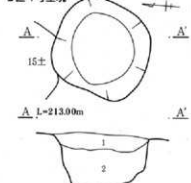
2区2号土坑



2区2号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FPを含む。1層より締まりなし。

2区4号土坑

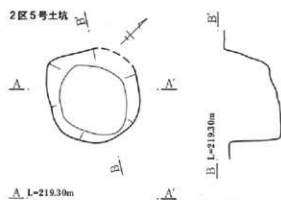


2区4号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FPをごく少量含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FPをごく少量含む。1層より締まりなし。

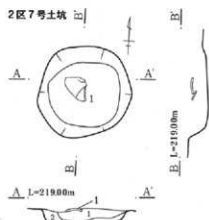


第242図 1区1~4、2区2~4号土坑平面・断面図



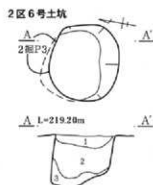
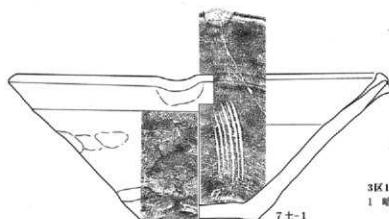
2区5号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FP, Hr-FA ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FA ブロックを少量含む。



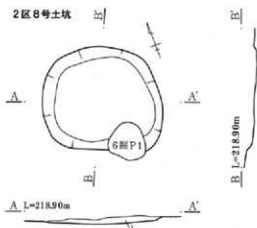
2区7号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FA ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FA ブロックを多量に含む。1層より締まりなし。



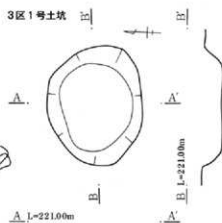
2区6号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FP を少量含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FA を含む。
- 3 黒褐色土 Hr-FP を少量、Hr-FA ブロックをごく少量含む。



2区8号土坑

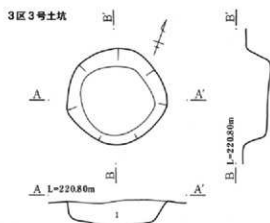
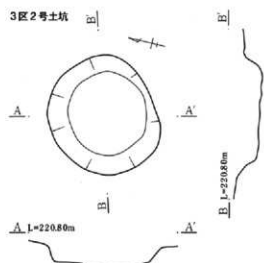
- 1 に近い黄褐色土 砂粒。



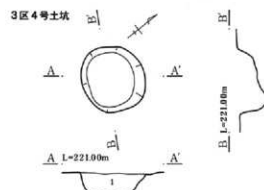
3区1号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FP, Hr-FA ブロックを多く含む。

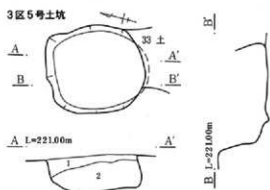
第243図 2区5～8、3区1号土坑平面・断面図、出土遺物図



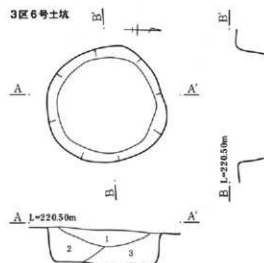
3区3号土坑
1 暗褐色土 Hr-FP を多く含む。



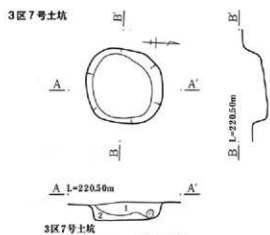
3区4号土坑
1 暗褐色土 Hr-FP, Hr-FA ブロックを多量に含む。



3区5号土坑
1 黒褐色土 Hr-FP を含む。粘まり、粘性なし。
2 黒褐色土 Hr-FP, Hr-FA ブロックを含む。



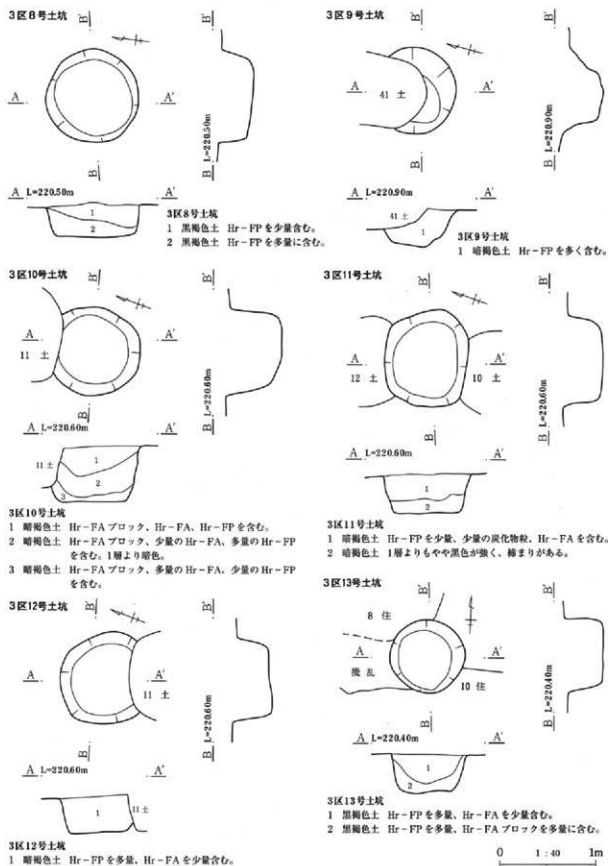
3区6号土坑
1 暗褐色土 Hr-FP を多く含む。
2 暗褐色土 Hr-FP を少量含む。
3 黒褐色土 Hr-FP を少量含む。



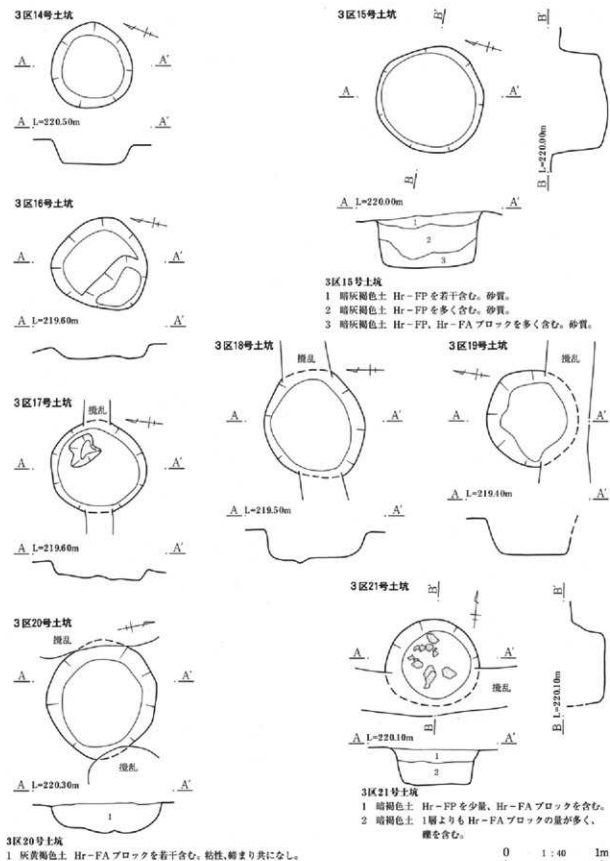
3区7号土坑
1 黒褐色土 Hr-FP を多く含む。
2 暗褐色土 Hr-FP を含む。

0 1 : 40 1m

第244図 3区2~7号土坑平面・断面図



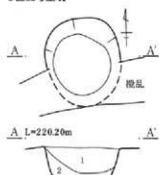
第245図 3区8～13号土坑平面・断面図



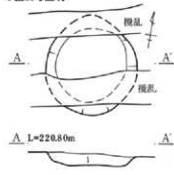
3区20号土坑
 1 灰黄褐色土 Hr-FA ブロックを若干含む。粘性、粘まり共になし。

第246図 3区14～21号土坑平面・断面図

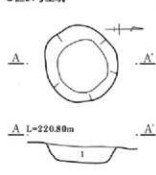
3区22号土坑



3区23号土坑



3区24号土坑



3区22号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを若干含む。粘性、締まり共になし。砂質。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロックを若干含む。粘性、締まり共になし。砂質。

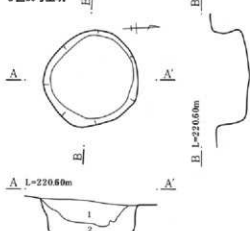
3区23号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロックを含む。締まりなし。

3区24号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FPを若干含む。粘性、締まり共になくばさつく。

3区25号土坑



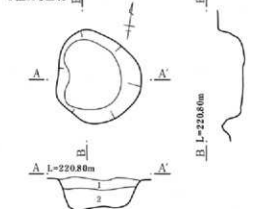
3区25号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性、締まりなし。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性、締まりなし。

3区26号土坑



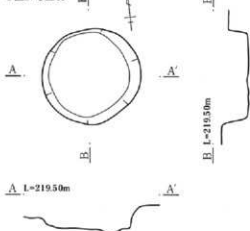
3区28号土坑



3区28号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。粘性、締まり共になし。
- 2 黄褐色土 Hr-FPを多く含む。粘性、締まり共になし。

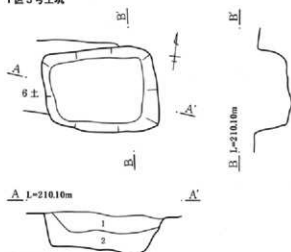
3区27号土坑



第247図 3区22～28号土坑平面・断面図

隅丸方形

1区5号土坑



1区5号土坑

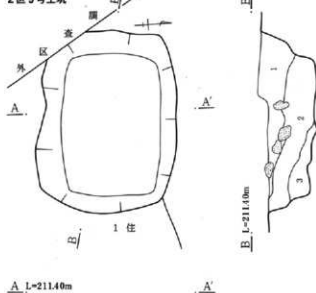
- 1 暗灰褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを多く含む。
- 2 暗灰褐色土 Hr-FPを多く、Hr-FAを少量含む。



1区6号土坑

- 1 暗灰褐色土 Hr-FAブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FAブロックを若干、Hr-FPを少量含む。

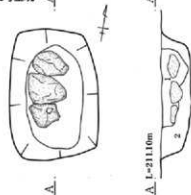
2区9号土坑



2区9号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含み、径5-10cm大の礫が多数に含まれる。
- 2 黒褐色土 ロームブロックが多数に含まれる。
- 3 黒褐色土 Hr-FP(5-10cm大)、ローム粒が少量含まれる。

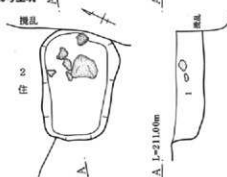
2区10号土坑



2区10号土坑

- 1 黒褐色土 軽石を少量、炭化物を多量に含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、炭化物を少量含む。

3区29号土坑



3区29号土坑

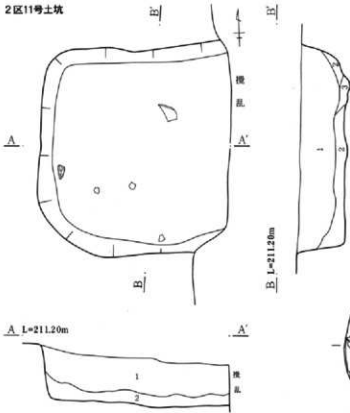
- 1 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロックを多量に含む。

0 1:40 1m

第248図 1区5、6号、2区9、10号、3区29号土坑平面・断面図

[4] 中世以降の遺構と遺物

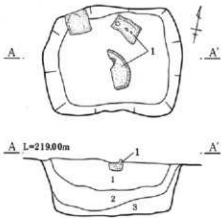
2区11号土坑



2区11号土坑

- 1 暗褐色土 軽石粒を少量含み、良く締まっている。
Hr-FPをごく少量含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FAを少量含む。
- 3 黒色土 砂質。

2区12号土坑



2区12号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FP、炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FAを多量に含む、締まりなし。

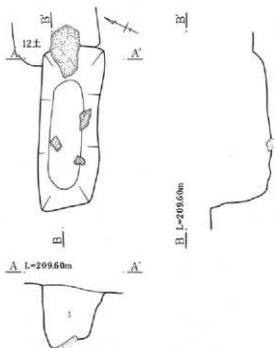
0 1:40 1m

0 1:6 20cm

第249図 2区11、12号土坑平面・断面図、出土遺物図

隅丸長方形

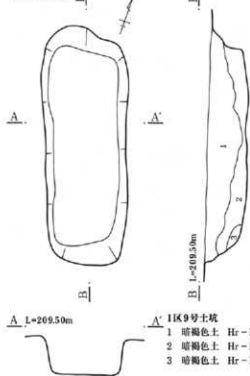
1区7号土坑



11K7号土坑

1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含み、Hr-FAブロックを少量含む。

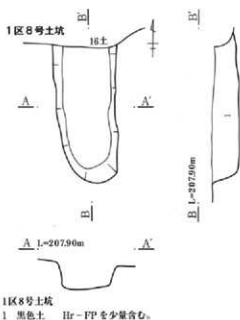
1区9号土坑



11K9号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FAを多量に含む。

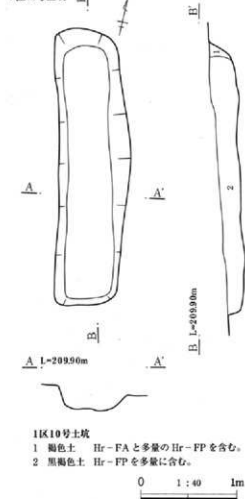
1区8号土坑



11K8号土坑

1 黒色土 Hr-FPを少量含む。

1区10号土坑

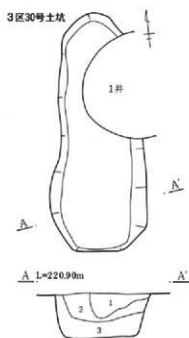
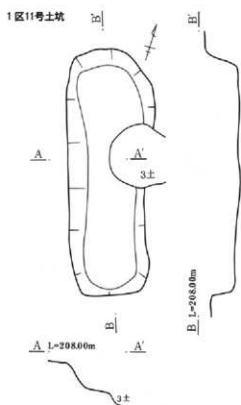


11K10号土坑

- 1 黒色土 Hr-FAと多量のHr-FPを含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。

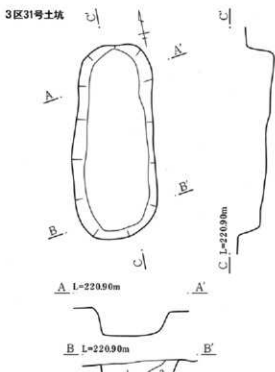


第250図 1区7～10号土坑平面・断面図



3区30号土坑

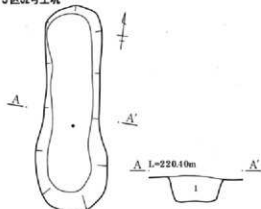
- 1 暗褐色土 Hr-FP を多く含む。粘性、締まりなく砂質。
- 2 黒褐色土 Hr-FP を多く含む。粘性、締まりなく砂質。
- 3 黒褐色土 Hr-FP を多く含む。粘性、締まりなく、やや砂質。



3区31号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FP を含む。
- 2 黒褐色土 1層よりやや Hr-FP が多い。

3区32号土坑



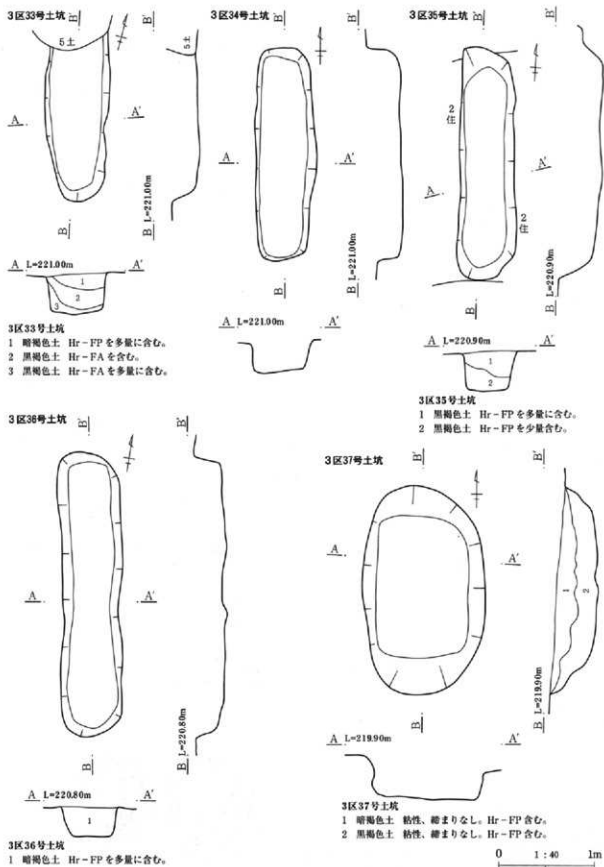
3区32号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FP を少量、Hr-FA ブロックを若干含む。

0 1:40 1m



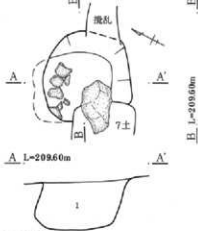
第251図 1区11号、3区30～32号土坑平面・断面図、出土遺物図



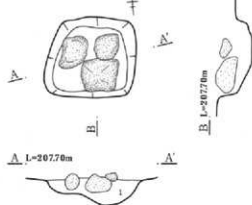
第252図 3区33～37号土坑平面・断面図

不定形

1区12号土坑



1区13号土坑



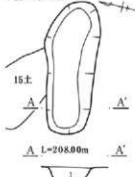
1区13号土坑

1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。

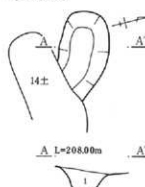
1区12号土坑

1 暗褐色土 多量のHr-FAブロックを含む。下に礫あり。

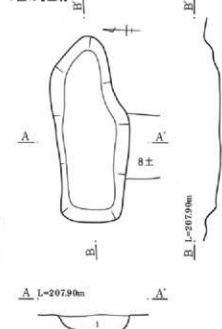
1区14号土坑



1区15号土坑



1区16号土坑



1区14号土坑

1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。

1区15号土坑

1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。

1区17号土坑



1区15号土坑

1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。

1区16号土坑

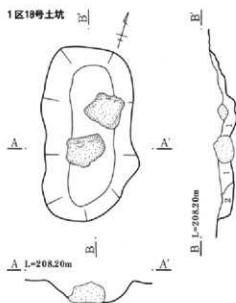
1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。

1区17号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。
- 3 黒褐色土 Hr-FPをやや多く含む。

0 1:40 1m

第253図 1区12～17号土坑平面・断面図



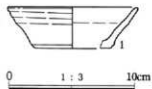
1区18号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FPを多く含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。



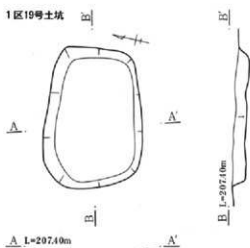
2区13号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FPを少量、Hr-FAをごく少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPをごく少量含む、ローム土が混入する。



2区15号土坑

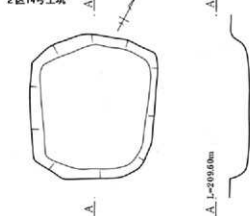
- 1 黒褐色土 Hr-FPを含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FPをごく少量含む。
- 3 黒褐色土 Hr-FAブロックを含む。



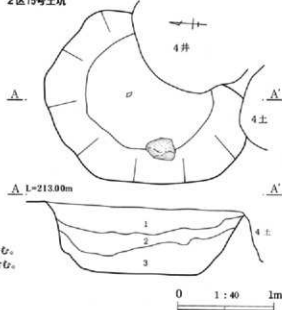
1区19号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。

2区14号土坑



2区15号土坑

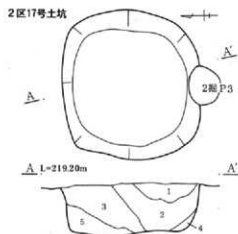


第254図 1区18、19号、2区13～15号土坑平面・断面図、出土遺物図



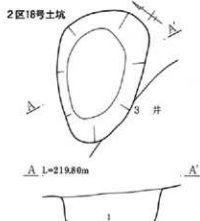
1区16号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FP をごく少量、Hr-FA ブロックを含む。
 2 暗褐色土 Hr-FA ブロックを含む。1層より締まりなし。



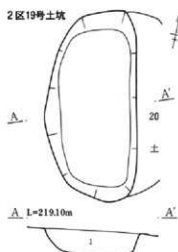
2区17号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FP、Hr-FA ブロックをごく少量含む。
 2 黒褐色土 Hr-FP、Hr-FA を多く含む。
 3 にぶい黄褐色土 砂粒。
 4 にぶい黄褐色土 Hr-FP、Hr-FA ブロックを少量含む。
 5 にぶい黄褐色土 Hr-FA ブロック、黒色土ブロックを含む。



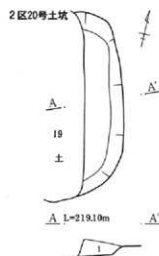
2区18号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FP を多量、少量の炭化物、少量のロームブロックを含む。
 2 暗褐色土 Hr-FP を少量含む。黒褐色土の混入により黒色がやや強い。



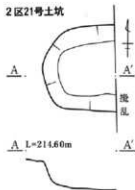
2区19号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FA ブロック、Hr-FP を少量含む。



2区20号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FA ブロックを含む。



2区21号土坑

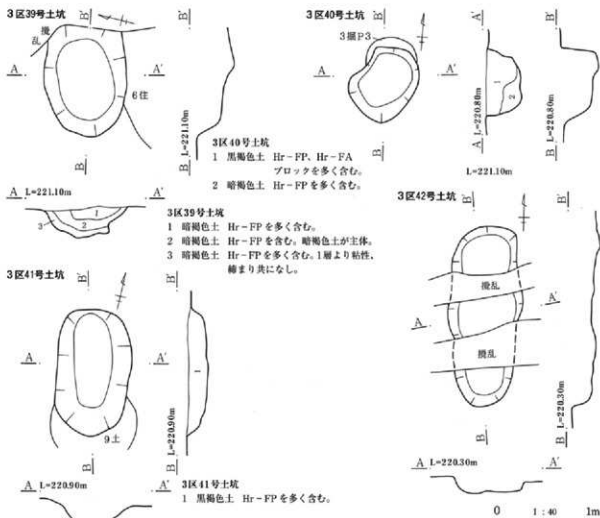


3区38号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FP を多く含む。
 2 暗褐色土 Hr-FA ブロックを多く含む。
 3 暗褐色土 Hr-FA ブロックを少し含む。



第255図 2区16～21号、3区38号土坑平面・断面図



第256図 3区39～42号土坑平面・断面図

2区7号土坑出土遺物観察表

No.	押図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第243図 PL-119	軟質陶器 播鉢	裡土 1/3	口(302) 高117 底(94)	底部回転糸切無調整。板状圧痕あり。調整時ロクロ左回転。6本1單位のすり目をも4ヶ所に施す。内面底部下位以下使用により磨減。中世。

2区12号土坑出土遺物観察表

No.	押図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第249図 PL-119	石臼	裡土 2/3強	高33 径36 重1175kg	上臼。側面に引き手差し込み用の孔を有し、その横に粗雑な孔を2穴穿つ。この孔は破片化した後の再利用時のものと思われる。挽き面は片減りせず均質。全体に風化磨減が著しい。挽き孔径4cm、芯孔径42cm。

3区32号土坑出土遺物観察表

No.	押図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第251図 PL-120	銭貨 皇寧通宝	+17 完形	外縁直径2325～2350mm、外縁内径2000～2050mm、銭厚100mm、量目238g。

2区13号土坑出土遺物観察表

No.	押図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第254図 PL-120	在地系土器 皿	裡土 1/3	口(100) 高33 底(72)	①細粒 ②微化結 ③にふい橙色	底部回転糸切無調整。中世。

(3) 土坑墓

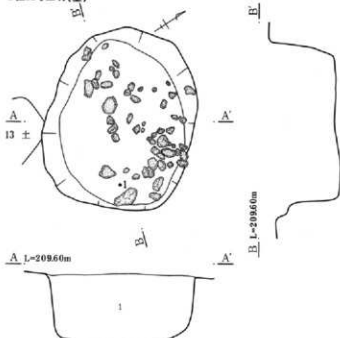
諏訪ノ木V遺跡では、中世以降の土坑81基、土坑墓2基が検出された。土坑の内、人骨や銭貨が出土したものを土坑墓とした。

2区22号土坑(墓)(第257図 PL87・120) 本土坑は860-430グリッドに位置する。2区13号土坑と重複する。本土坑が13号土坑を切る調査所見を得た。形態は不整形形を呈す。規模は長径379cm、短径303cm、最大深142cmを測る。土坑内から銭貨が出土したことから土坑墓とした。

2区23号土坑(墓)(第257図、PL87) 本土坑は

862-452グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。形態は楕円形を呈す。規模は長径193cm、短径155cm、最大深38cmを測る。土坑内から骨片が出土したとの調査所見から土坑墓とした。

2区22号土坑(墓)



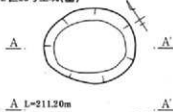
2区22号土坑(墓)

1 暗褐色土 Hr-FPをごく少量含む。

0 1:40 1m

第257図 2区22、23号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図

2区23号土坑(墓)

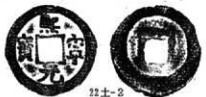


2区23号土坑(墓)

1 暗褐色土。多量のHr-FPを含む。砂粒。



22土-1



22土-2



22土-3

銭貨(1/1)

2区22号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第257図 PL-120	銭貨 皇宋通宝	+5 完形	外縁鉄径2450mm。外縁内径1950mm。鉄厚100mm。量目269g。
2	第257図 PL-120	銭貨 仁寧元宝	埋土 完形	外縁鉄径2450mm。外縁内径1850~1900mm。鉄厚125mm。量目384g。
3	第257図 PL-120	銭貨 永樂通宝	埋土 完形	外縁鉄径2425mm。外縁内径2100~2125mm。鉄厚150mm。量目297g。

(4) 井戸 (第258～262図、PL87・88・120)

井戸は1区1基、2区4基、3区5基の計10基検出された。出土遺物も少なく時期を比定することの難しい遺構がほとんどである。埋土や形状から中世以降とした。ほとんどの井戸は調査時の湧水のため危険が生じたので、底部まで調査することが出来なかった。

井戸の位置、形態、重複関係、規模、などについては第12表に掲載してある。なお、特異なものや遺物が多く出土しているなど特徴的な井戸については下記に記載してある。

1区1号井戸 (第258図、PL87)

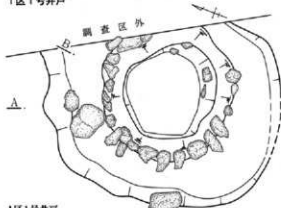
本井戸は1区北東の794-395グリッド付近に位置する。重複する遺構は検出されなかった。

形態は円形を呈す。残存状況は良好であったが、調査時の湧水のため危険が生じたので、底部まで調査することが出来なかった。1、5、6層は締まりのやや弱いブロック状の土層であるが、井戸の縁を囲む様に石組みが検出され、井戸構築の際に埋め込まれた土層である可能性が高いとの調査所見を得た。内部から井戸枠などの施設は確認されないことから素掘りの状態で使用されていたようである。

第12表 諏訪ノ木V遺跡 井戸一覧表

	遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模(cm)			備考
					長軸	短軸	最大深	
1	1区-1号井戸	794-395	円形	-	250	180	-	
2	2区-1号井戸	867-448	円形	-	129	127	278	
3	2区-2号井戸	868-447	円形	-	127	112	162	
4	2区-3号井戸	976-506	-	-	149	-	-	18土に切られる
5	2区-4号井戸	882-462	円形	-	142	133 (162)	-	15土を切る
6	3区-1号井戸	072-565	円形	-	145	110	-	3土、30土を切る
7	3区-2号井戸	075-567	円形	-	327	322	-	5土を切る
8	3区-3号井戸	066-560	円形	-	75	70	180	2土、29土を切る
9	3区-4号井戸	077-568	円形	-	167	149	342	5土を切る
10	3区-5号井戸	071-556	不定形	N-66°-E	127	101	-	

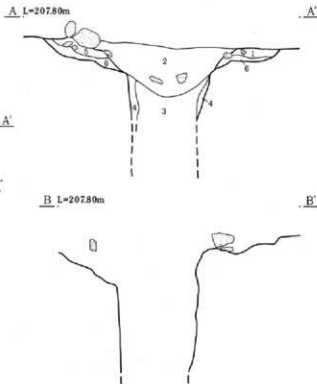
1区1号井戸



1区1号井戸

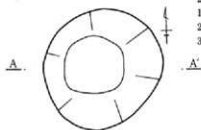
- 1 黄褐色土 暗褐色土を混入する。締まり弱、粘性弱。
- 2 黒褐色土 Hr-FPを含む。締まりやや弱、粘性弱。
- 3 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。締まりやや弱、粘性弱。
- 4 黒褐色土 黄褐色ロームを含む。締まり弱、粘性弱。
- 5 暗褐色土 黄褐色ロームブロックを多量に含む。粘性弱、締まりやや弱。
- 6 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。粘性弱、締まりやや弱。

0 1:40 1m

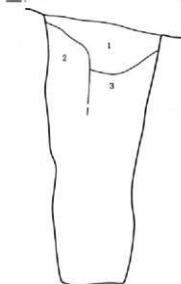


第258図 1区1号井戸平面・断面図

2区1号井戸



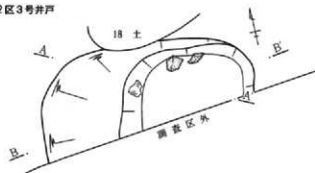
A L=210.70m



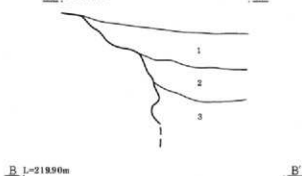
2区1号井戸

- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。軽石粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 混じりの少ない土。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを含む。

2区3号井戸



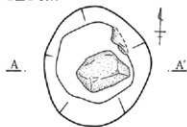
A L=219.90m



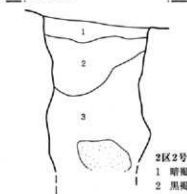
B L=218.90m



2区2号井戸



A L=210.30m



2区2号井戸

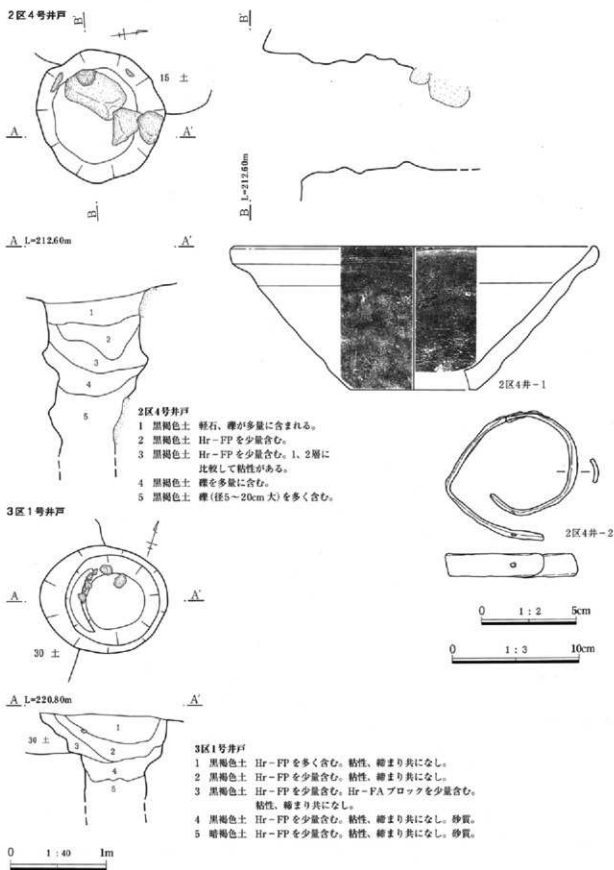
- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 黒色土

2区3号井戸

- 1 暗褐色土 Hr-FP を多量に含む。
- 2 暗褐色土 1層に Hr-FA ブロック、黒褐色ブロックが混入。
- 3 暗褐色土 2層よりも Hr-FA ブロックの混入が少なく、ローム粒子、ブロックが混入。

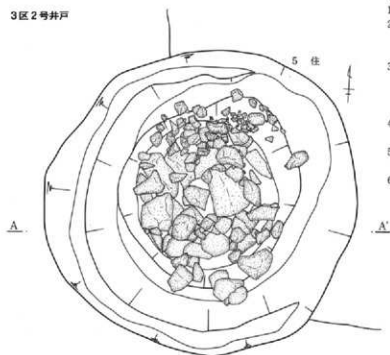
第259図 2区1～3号井戸平面・断面図

0 1:40 1m



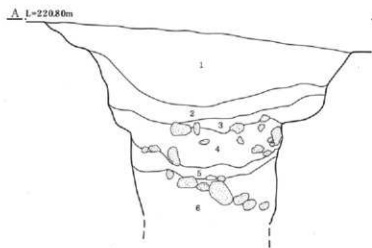
第260図 2区4号、3区1号井戸平面・断面図、出土遺物図

3区2号井戸



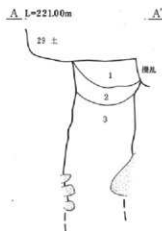
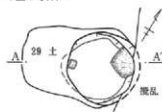
3区2号井戸

- 1 黒褐色土 締まり、粘性なし。Hr-FPを多く含む。
- 2 黄褐色土 締まり、粘性なし。Hr-FPを多量に含む。Hr-FPは径3-15cm程の大きなものが多い。
- 3 黒褐色土 締まり、粘性なし。Hr-FPを多く含む。径15-50cm程の角張った礫を含む。礫は井戸を構築していた石材の可能性もある。
- 4 黄褐色土 礫を多く含む。多量の礫・ロームブロックを含む。締まりなし。
- 5 黒色土 黒色土を主体とし、Hr-FAブロックを若干含む。
- 6 灰褐色土 灰褐色土を主体とし、多量の礫を含む。石組か。



0 1:2 5cm

3区3号井戸

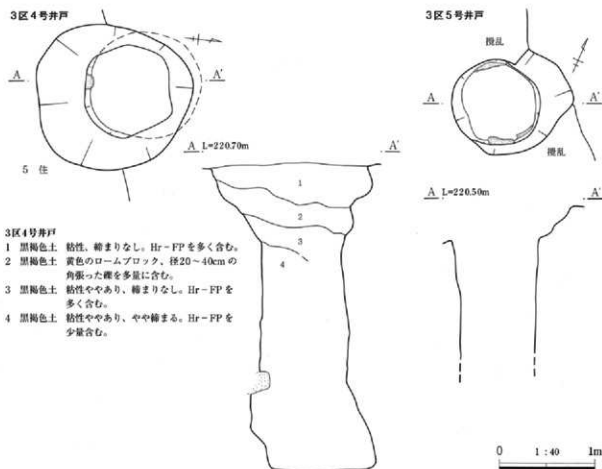


3区3号井戸

- 1 暗褐色土 礫(径20cm以下)を若干、ロームブロックを少し含む。粘性、締まり共になし。
- 2 暗褐色土 礫(径10cm以下)を若干、ロームブロックを多く含む。1層より多くのローム土を含み、やや明るい。粘性、締まり共になし。砂質。
- 3 暗褐色土 2層よりローム土が多く含まれる。粘性、締まり共になし。砂質。

0 1:40 1m

第261図 3区2、3号井戸平面・断面図、出土遺物図



第262図 3区4、5号井戸平面・断面図

2区4号井戸出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第260図 PL-120	軟質陶器 楕鉢	埋土 破片	口(29.0)高11.4 底(1.0)	内面口縁以下使用による磨滅著しい。底部周縁は使用により凹む。中世。
No.	検出No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値	特徴など
2	第260図 PL-120	銅製品 環状 不明	①30.0g ②1 ③L(●)	埋土 長6.8 厚0.2	不規則に環状に折れ曲がった薄板状の銅製品。両端部から1.5cm前後、内側に入った位置に径2mm程度の穴が穿たれている。横断面は外面が僅かに弧状で内面がごく浅い桶状に空んでいる。内外面の各所に短軸方向に向かう縦線痕が貼り付くように残されている。動物の毛の痕にも見えるが、植物性の繊維痕であろう。表面全体は緑青に覆われている。長軸の中央部で2つに割れている。端部寄りの小穴を重ねる様にして用いられたものか。

①重量②磁着度③メタル度

3区2号井戸出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など
1	第261図 PL-120	鉄製品 鍛造品 刀子	①7.9g ②6 ③M(○)	埋土 長149残幅13 厚0.5	先端部の欠落した片間の刀子片。両は背側である。背側から見ると刀子は弓なりに曲がっており、茎の先端部寄りのみが小さく逆方向に折れている。この折れた端部周辺のみが木質が僅かに確認される。刃部は錆び減りしている。刀子としては背側の最大幅みが5mm程あり、比較的しっかりした作りである。刃部の横断面形がやや片刃状になってしまっているのは保存処理によるもの。
2	第261図 PL-120	銅造洋 (銜鉄)	①7.3g ②2 ③緑化(△)	埋土 長径22 短径18 厚1.2	平面、不整形円形をした小塊状の銜鉄の鍛冶品。放射割れが発達しており、側面左側の首部は欠落してしまっている。上面はほぼ平坦で側面から下面が丸みを帯びている。

(5) 溝

溝は1区に4条、2区に4条検出された。3区からは検出されなかった。検出された溝は、断面形状や規模とも様々である。

1区1・4号溝、2区1～4号溝は、ほぼ東西、南北の軸にのる。特に2区1～4号溝は、検出状況から2区の削平された区画(第226図参照)に関連した溝の可能性が高く、出土遺物や埋土から中世に比定される。2区の削平された区画は、本調査で検出された2区1号掘立柱建物や諏訪ノ木Ⅱ遺跡(済川市教委)で検出された中世の掘立柱建物群が存在する区画である。

1区1号溝(第263図、PL89-120)

1区北に位置し、ほぼ東西に走行する。確認全長10.4m、最大深87cm、比高は85cmを測る。

寛永通宝1点、鎌の可能性のある板状の鍛造品、工具の可能性のある棒状の鍛造品が埋土から出土した。重複する遺構は検出されなかった。

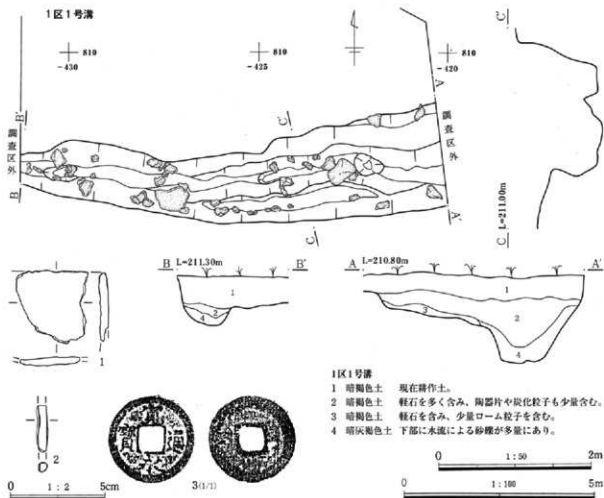
本溝は、傾斜方向に走向しているため比高が大きい。

1区2号溝(第264図、PL89)

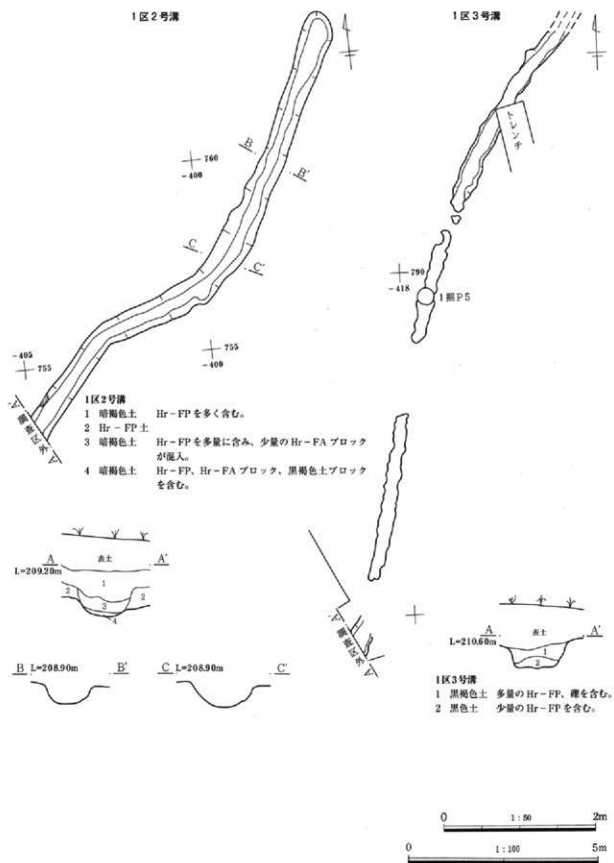
1区中央に位置し、ほぼ南北に走行する。確認全長133m、最大深14cm、比高は19cmを測る。遺物はない。重複する遺構は検出されなかった。

1区3号溝(第264図、PL89)

1区北に位置し、ほぼ南北に走行する。確認全長88m、最大深30cm、比高は21cmを測る。遺物はない。1区1号掘立柱建物と重複する。1区1号掘立柱建物に切られる調査所見を得た。



第263図 1区1号溝平面・断面図、出土遺物図



第264図 1区2、3号溝平面・断面図

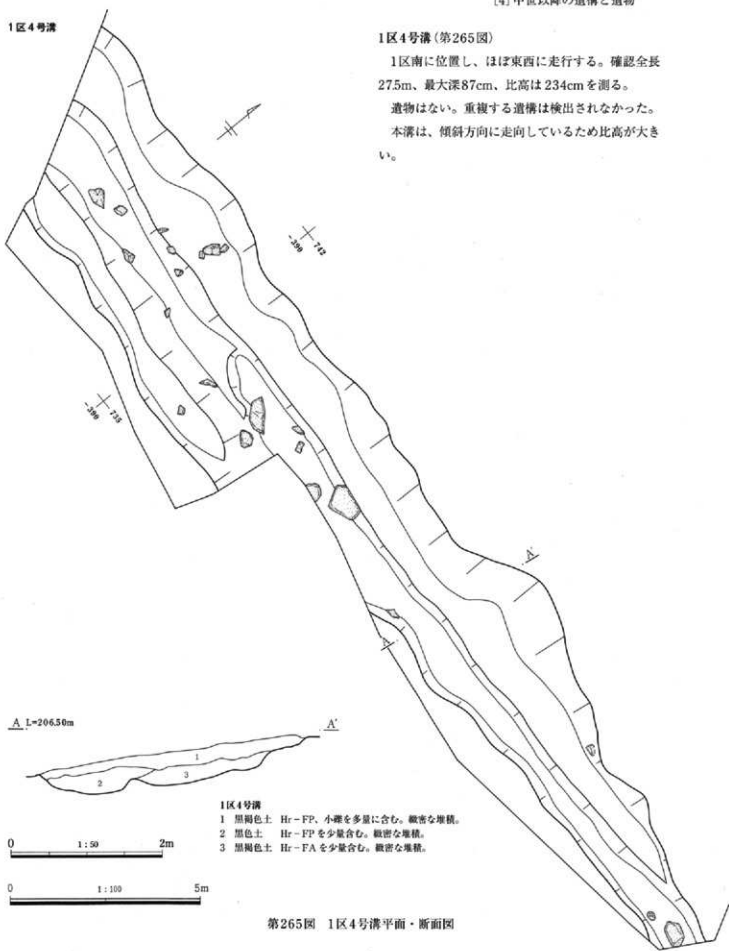
1区4号溝

1区4号溝(第265図)

1区南に位置し、ほぼ東西に走行する。確認全長275m、最大深87cm、比高は234cmを測る。

遺物はない。重複する遺構は検出されなかった。

本溝は、傾斜方向に走向しているため比高が大きい。



1区4号溝

- 1 黒褐色土 Hr-FP、小礫を多量に含む。緻密な堆積。
- 2 黒色土 Hr-FPを少量含む。緻密な堆積。
- 3 黒褐色土 Hr-FAを少量含む。緻密な堆積。

第265図 1区4号溝平面・断面図

2区1号溝 (第266図、PL89)

2区中央やや南に位置し、東西に走行する。確認全長221m、最大深49cm、比高は320cmを測る。

遺物はない。2区2号溝と重複。2区2号溝とはほぼ同時期であるとの調査所見を得た。

本溝は、傾斜方向に走向しているため比高が大きい。

2区2号溝 (第267図、PL120)

2区中央やや南に位置し、南北に走行する。確認全長242m、最大深61cm、比高は34cmを測る。

中世に比定される軟質陶器の摺鉢が出土した。2区1号溝と重複。2区1号溝とはほぼ同時期であるとの調査所見を得た。

2区3号溝 (第267図、PL120)

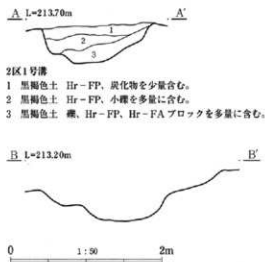
2区中央やや南に位置し、南北に走行する。確認全長128m、最大深40cm、比高は12cmを測る。

中世に比定される中国磁器碗が出土した。重複する遺構は検出されなかった。

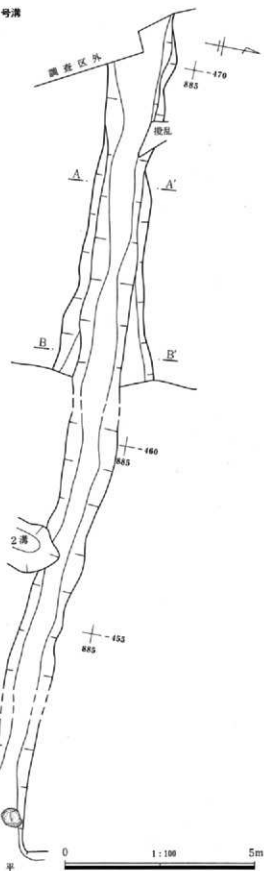
2区4号溝 (第268図、PL90)

2区中央北に位置し、南北に走行する。確認全長87.5m、最大深73cm、比高は235cmを測る。

遺物はない。重複する遺構は検出されなかった。

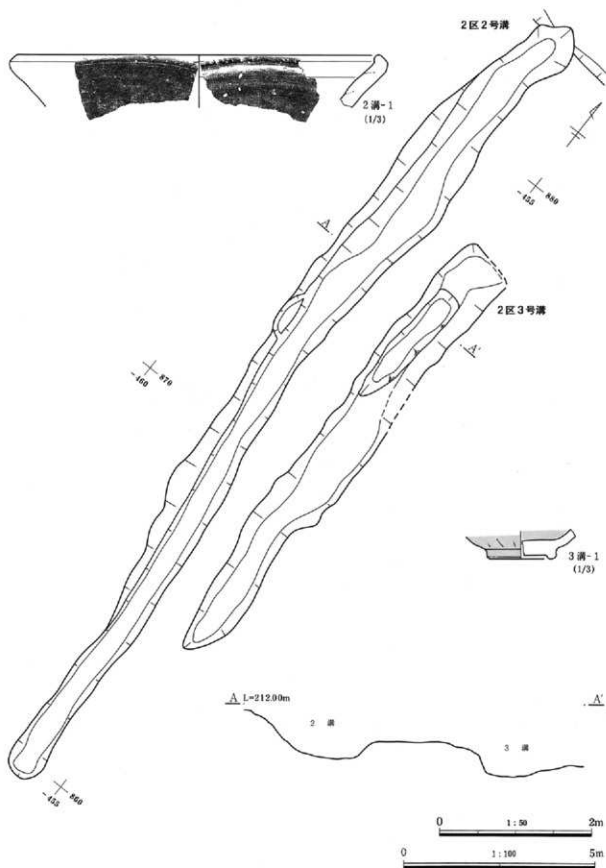


2区1号溝



第266図 2区1号溝平面・断面図

[4] 中世以降の遺構と遺物



第267図 2区2、3号溝平面・断面図、出土遺物図

1区1号溝出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	遺物名	①重②細③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
1	第263図 PL-120	鉄製品 鍛造品 板状不明	①126g ②5 ③鈍化(△)	埋土 長38残 幅37残 厚0.4	扁平な薄板状の鉄製品破片。上下面と上手側の直線状の断面が生きており、それ以外の側面は破面となっている。はっきりとした刃部は認められず、鎌ではないと考えられる。放射割れが内外面に目立ち、薄作りの鍛造品の口縁部の破片の可能性も残るが、保存処理後のため、判断が難しい。
2	第263図 PL-120	鉄製品 鍛造品 棒状不明	①14 ②3 ③鈍化(△)	埋土 長25残 幅0.6 厚0.5	長軸方向にやや反り返った棒状の鉄製品破片。長軸の両端部と下面の半分が破面となっている。横断面形は手前側が台形きみで、上手側に均かい扁平な形となる。釘等ではなく、何らかの工具の基から刃部にかけての破片か。
No.	検出No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など	
3	第263図 PL-120	縄貨 寛永通宝	埋土 完形	外縁径23.25mm、外縁内径19.00mm、銃厚1.00mm、量目238g。	

①重量②細さ③メタル度

2区2号溝出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第267図 PL-120	軟質陶器 罎鉢	埋土 口縁部片	口30.0 高4.2残 底-	外面器表は焼しにより黒色に仕上がる。中世。口縁内部面使用による磨滅。

2区3号溝出土遺物観察表

No.	検出No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第267図 PL-120	中国磁器 碗	埋土 底部片	口- 高23残 底(4.9)	外面陽蓮弁文。龍鳳雲系青磁、高台内から高台端部無軸。中世。



2区1号溝(西より)

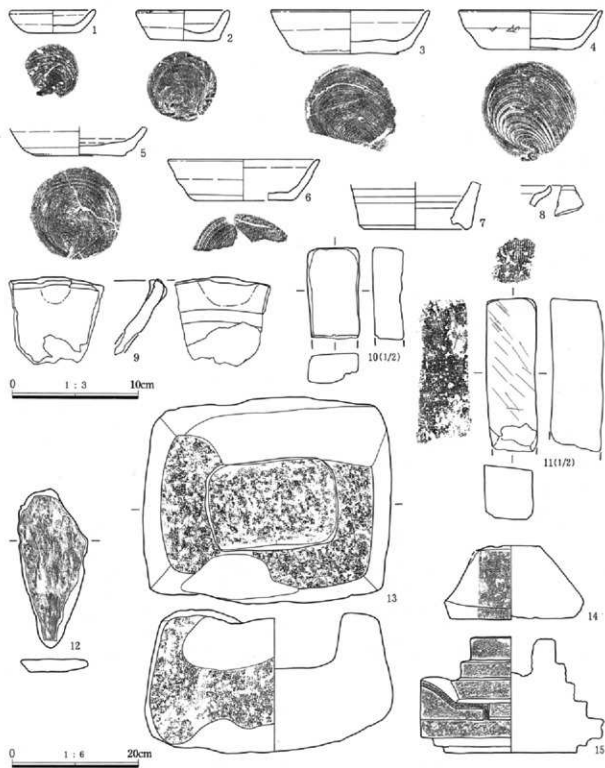


2区4号溝(北より)

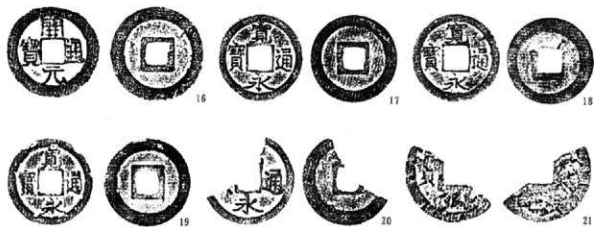
(6) 遺構外出土遺物 (第269・270図, PL120・121)

在地系土器、中国磁器、軟質陶器、砥石、板碑、骨磁器、五輪塔、宝篋印塔、銭貨といった中世以降の遺物が遺構外から出土した。帰属の明らかにならな

かった遺物で、残存率のよい個体を取り上げた。3～6の在地系土器は、2区1号掘立柱建物付近で出土したので、遺構に伴う可能性もある。



第269図 諏訪ノ木V遺跡 中世以降遺構外出土遺物図(1)



第270図 頭訪ノ木V遺跡 中世以降遺構外出土遺物図(2)

16~21(1/1)

頭訪ノ木V遺跡 中世以降 遺構外出土遺物観察表

No.	棟号 No. (図版 No.)	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など ①粘土 ②焼成 ③色調
1	第269図 PL-120	在地系土器 皿	2区 1/2	口(6.7) 高 1.8 底 4.2	底部左回転糸切無調整。中世。①粗砂質酸化縮きみ③にぶい黄褐色
2	第269図 PL-120	在地系土器 皿	2区 ほぼ完形	口7.4 高 2.5 底 5.6	底部左回転糸切無調整。口縁部芯切痕付着。中世。①粗砂質酸化縮きみ③にぶい褐色
3	第269図 PL-120	在地系土器 皿	2区 1/3	口(12.6) 高 3.5 底 7.6	底部右回転糸切無調整。底部内面指ナデ。中世。底部外面板状残痕残る。 ①粗砂質酸化縮きみ③にぶい褐色
4	第269図 PL-120	在地系土器 皿	2区 1/3	口(11.5) 高 3.1	底部右回転糸切無調整。底部内面指ナデ。中世。①粗砂質酸化縮きみ③にぶい褐色
5	第269図 PL-120	在地系土器 皿	2区 体-底部1/4	口 - 高 2.3残 底 7.2	底部右回転糸切無調整。底部内面指ナデ。中世。①粗砂質酸化縮きみ③にぶい褐色
6	第269図 PL-120	在地系土器 皿	2区 1/5	口(12.0) 高 3.3残 底(7.8)	底部右回転糸切無調整。中世。①粗砂質酸化縮きみ③にぶい褐色
7	第269図 PL-120	中国磁器 瓶	1区 底部片	口 - 高 3.8残 底(8.0)	いわゆる青白磁。2次的な装飾あり。古代末~中世初。
8	第269図 PL-120	中国磁器 瓶	2区 口縁部小片	口 - 高 1.7残 底 -	口縁部は、内面に稜をなして反折し、肩部を上方に曲げる。中世。
9	第269図 PL-120	軟質陶器 椀鉢	2区 片口小片	口 - 高 6.0残 底 -	器表焼し焼成。中世。
10	第269図 PL-121	砥石	1区	長 4.8 幅 2.7 厚 1.5 重 37.9g	4面使用し、調整痕は残らない。
11	第269図 PL-121	砥石	1区	長 8.1 幅 2.2 厚 2.8 重 120.6g	クシ歯状タガネ痕あり。
12	第269図 PL-121	板碑	2区 破片	長 2.50 幅 1.07 厚 2.0 重 0.86kg	基部。碑面は風化腐蝕甚大。表裏面共に工具痕は見られない。
13	第269図 PL-121	石製骨蔵器	2区 略定形	長 2.20 幅 3.90 重 30.45kg	形状は上面がやや小さい不均質な台形状立方体を呈す。底面は厚石面を残し、側面は僅かに突出す。上面は平坦に加工され、別造の蓋が想定される。上・側面は共に丁寧な磨削を施す。上面の中央部を長方形に 8.4cm ほど掘り込む。火輪。形状は小型でやや歪む。上部は平坦で空風輪突起の差し込み用の孔を持たない。整形は全面に丁寧な磨削を施し、表面はやや風化腐蝕する。
14	第269図 PL-121	瓦輪帯	2区 略定形	長 1.15 幅 2.16 重 25.5kg	空部。形状は均質で、整形は全面に丁寧な磨削を施す。隅部には輪状の縁取りを持つが、磨草文様の施文はない。
15	第269図 PL-121	宝篋印塔	2区 完形	長 1.83 幅 2.88 重 1.635kg	外縁鉄径 25.25mm、外縁内径 18.00 ~ 18.25mm、鉄厚 1.20mm、量目 3.10g。
16	第270図 PL-121	銭貨 寛永通宝	2区 完形		外縁鉄径 23.50mm、外縁内径 19.00mm、鉄厚 1.25mm、量目 3.27g。
17	第270図 PL-121	銭貨 寛永通宝	2区 完形		外縁鉄径 23.00 ~ 23.25mm、外縁内径 19.00mm、鉄厚 1.0mm、量目 2.13g。
18	第270図 PL-121	銭貨 寛永通宝	3区 完形		外縁鉄径 26.50mm、外縁内径 -、鉄厚 1.25mm、量目 1.49g。
19	第270図 PL-121	銭貨 □水通□	3区 1/2		外縁鉄径 24.50mm、外縁内径 20.00mm、鉄厚 1.25mm、量目 1.81g。
20	第270図 PL-121	銭貨 □水口□	3区 2/3		外縁鉄径 23.25mm、外縁内径 18.50 ~ 18.75mm、鉄厚 1.0mm、量目 2.19g。
21	第270図 PL-121	銭貨 寛永通宝	3区 完形		

第6章 自然科学分析

[1] 石原東遺跡出土人骨

はじめに

栢崎 修一郎

石原東遺跡は、群馬県渋川市石原に位置し、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が平成12(2000)年4月～平成13(2001)年5月まで行われた。本遺跡のD2区4号・5号・6号土坑、D4区1号・2号・3号・6号土坑、D5区1号・2号・4号土坑の10基より人骨が出土したので以下に報告する。これら10基の土坑出土人骨には、火を受けた痕跡が認められないため、すべて土葬により埋葬されたと推定される。なお、D5区5号・6号・7号土坑よりも、人骨として取り上げられた物体が存在したが、水洗後、すべて消失してしまった。これらは、紙であったと推定される。人骨として取り上げられた出土人骨の時代は、層位及び出土遺物より、すべて中近世に比定されている。

人骨は、清掃あるいは水洗後できる限りの接着復元を行った後、写真撮影・計測・観察を行った。なお、人骨の計測はマルティン [Martin] の方法(馬場、1991)に、歯の計測は藤田の方法(1949)に従った。また、人骨の比較データは遠藤他(1967)を用い、歯の比較データは、中近世人のものは MATSUMURA (1995) を、現代人のものは権田(1959)を用いた。

1. D2区出土人骨

(1) 4号土坑出土人骨 [2000年7月17日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約222cm・幅約178cm・深さ約17cmの土坑より出土している。この土坑の内、2個体は東南部より、1個体は北西部より出土している。発掘調査時は、D2区2号土坑と記録されている。

②人骨の出土部位

人骨は、子供の頭蓋骨片・第2頸椎・左肩甲骨・上腕骨・左右腸骨・脛骨遠位端・腓骨等が出土して

いる。

また、青年期の右上腕骨・左桡骨近位端・大腿骨骨頭・脛骨遠位端・右腓骨遠位端等が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

同土坑の東南側には、少なくとも子供と青年の2個体が埋葬されていたと推定される。出土人骨の出土位置より、どちらも、頭位は北東であると推定される。また、埋葬状態は、子供は人骨の出土状況から伸展葬であることが断定できる。青年の方は、出土人骨からは伸展葬か屈葬かは判定できない。しかしながら、同土坑の北東から南西にかけての長さが約178cmもあることから伸展葬である可能性が高い。

さらに、同土坑の北西側には、子供が1体埋葬されていたと推定される。出土人骨の残存状況が悪いため出土人骨の出土位置からは頭位及び埋葬状態を推定するのは困難であるが、恐らく、頭位は北東で埋葬状態は屈葬であると推定される。しかしながら、同人骨の埋葬状態は伸展葬である可能性もある。

④被葬者の個体数

子供の骨の一部大きさが異なる重複部位が認められたため、被葬者の個体数は、子供2個体と青年1個体の3個体と推定される。

⑤被葬者の性別

子供の性別は、歯が出土していれば永久歯の歯冠計測値で推定することもできるが、今回、歯が出土していないため、2個体共性別不明である。また、青年の性別は、上腕骨骨頭及び大腿骨骨頭が大きく、男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

子供の死亡年齢は、歯が出土していれば歯の萌出状態からかなり正確に推定することが可能である。しかし、今回、歯は1本も出土しておらず、被葬者

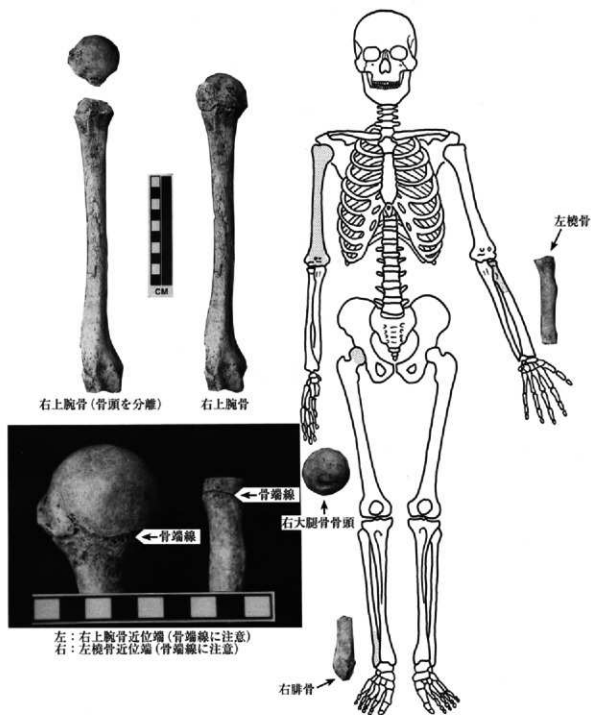


写真1. 石原東遺跡 D2区4号土坑出土人骨(約16歳男性)

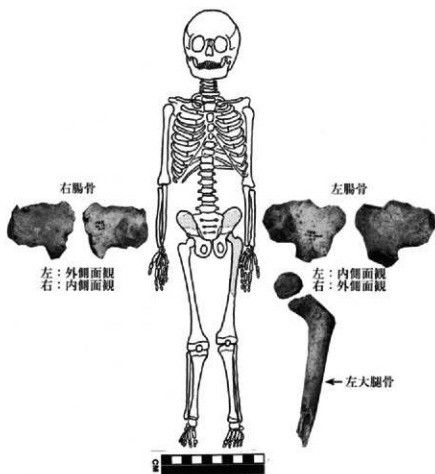


写真2 石原東遺跡 D2区4号土坑出土人骨(約6歳)

の死亡年齢を推定するのは困難である。ただし、一部残存している四肢骨の大きさから、他の遺跡から出土した人骨と比較すると、東南部に埋葬された子供が約6歳であり、西北部に埋葬された子供が約9歳と推定される。

青年期の個体は、右上腕骨・左橈骨近位端・癒合していない右大腿骨骨頭部・癒合していない大転子部が出土している。右上腕骨は骨頭部及び内側上顆部が癒合していない状態である。骨頭部は、男性で約16歳～20歳・女性で約13歳～17歳で癒合し、内側上顆部は、男性では約14歳～16歳・女性で約13歳～15歳で癒合するとされている。従って、死亡年齢は約14歳～16歳以下となる。また、右大腿骨の大転子部は、男性で約16歳～18歳・女性で約14歳～16歳で癒合するとされている。従って、死

亡年齢は約16歳～18歳以下となる。さらに、左橈骨近位端は、橈骨頭が癒合しかかっている状態である。この部位は、男性で約14歳～17歳、女性で約11.5歳～13歳で癒合するとされている。本個体は、男性と推定されるので、四肢骨の癒合状態から総合的に判定すると、死亡年齢は、約16歳と推定される。

②被葬者の生前の身長

子供の個体は、生前の身長を推定することは不可能である。参考までに、現代日本人の1975年の統計では、6歳時で男子114.3cm・女子113.4cm、9歳時で男子131.6cm・女子129.7cmである(鈴木、1996)。

青年期の個体の右上腕骨の最大長を計測すると、295mmであった。これを、藤井(1960)の式で計算すると、被葬者の生前の身長は約155.5cmとなっ

た。北里大学の平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm [最大167.2cm、最小147.2cm]・女性の平均身長は145.6cm [最大157.1cm、最小137.6cm]である(平本, 1972)。本被葬者の死亡年齢は約16歳であることから、成長すれば約2~3cmは身長が伸びると想定されるので、そうすると、平均的な江戸時代人

男性の身長を有したであろう。

参考までに、現代日本人の1975年の統計では、13歳時で男子154.6cm・女子152.3cm、14歳時で男子161.8cm・女子154.8cm、15歳時で男子165.3cm・女子154.4cm、16歳時で男子166.4cm・女子155.7cmである(鈴木, 1996)。

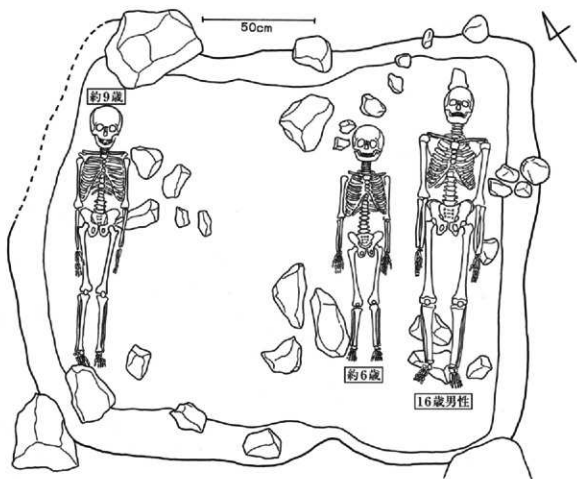


図1. 石原東遺跡 D2区4号土坑出土人骨の埋葬形態の想像図

(2)5号土坑出土人骨 [2000年7月14日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約150cm・幅約75cm・深さ約32cmの土坑より出土している。発掘調査時は、D2区1号土坑として記録されている。

②人骨の出土部位

人骨は、左鎖骨・左右肩甲骨・左上腕骨・右腓骨

遠位端・左距骨等が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

出土人骨の出土位置より、被葬者の頭位は北東で、埋葬状態は屈葬と推定される。

④被葬者の個体数

出土人骨には、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

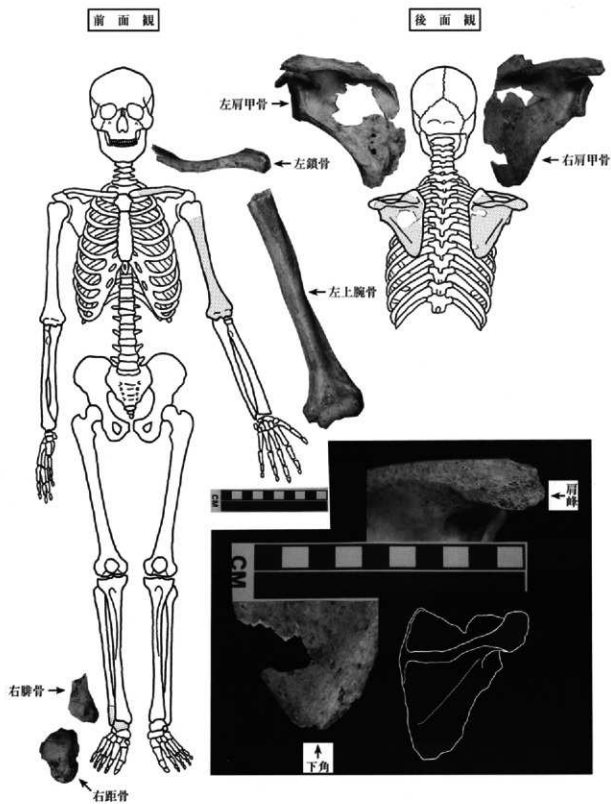


写真3. 石原東遺跡 D2区5号土坑出土人骨

⑤被葬者の性別

被葬者の性別推定の指標となる、頭蓋骨及び寛骨は出土していない。しかしながら、出土人骨の左右肩甲骨及び左上腕骨の大きさが、比較的大きいため、被葬者の性別は男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

被葬者の性別推定の指標となる、頭蓋骨・歯は出土していない。しかしながら、右肩甲骨の肩峰部及び下角部を観察すると、まだ、癒合が完了していない状態である。肩峰部は、約18歳～20歳で癒合し、下角部は約19歳～23歳で癒合が完了するとされている。また、左上腕骨の近位端部は、癒合が完了しており、この部位は男性で16歳～20歳、女性で13歳～17歳で癒合が完了するとされている。被葬者の性別は男性と推定されているので、被葬者の死亡年齢は、総合的に約20歳前後と推定される。

(3) 6号土坑出土人骨 [2000年7月18日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約164cm・幅約87cm・深さ約61cmの土坑より出土している。発掘調査時は、D2区3号土坑として記録されている。

②人骨の出土部位

出土人骨の残存状況は、比較的、良好である。頭蓋骨・下顎骨・左上腕骨・右尺骨・右橈骨・寛骨

片・左右大腿骨・左右脛骨等が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

出土人骨の出土位置より、被葬者の頭位は北西で仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

④被葬者の個体数

出土人骨には、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

出土した寛骨は、破損しているため、性別推定の部位に有用な大座骨切痕部分が欠けている。しかしながら、頭蓋骨の骨の厚さは薄く、わずかに残存している眼窩上縁部は鋭く薄く、側頭骨の乳棟突起も小さく、四肢骨は華奢で小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

被葬者の死亡年齢推定に有効な歯が8本出土している。歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出している状態である。これは、約30歳代にあたる。しかしながら、出土した下顎骨を観察すると、著しく変形しているが、歯槽部の退縮が認められ、かなりの歯は生前に脱落したと推定される。そうすると、歯が生前脱落し、上顎と下顎の歯の噛み合わせがなくなり、歯が咬耗しなかったとも推定される。したがって、本被葬者の死亡年齢は、老齢である可能性が高い。

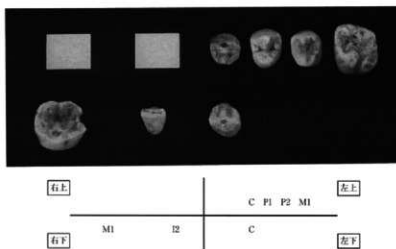


写真4. 石原東遺跡 D2区6号土坑出土歯

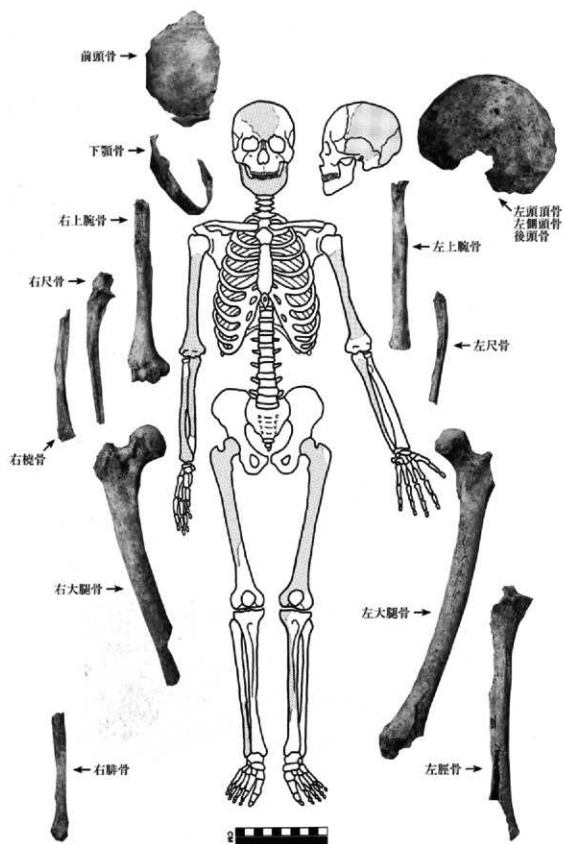


写真5. 石原東遺跡 D2区6号土坑出土人骨

2. D4区出土人骨

(1) 1号土坑出土人骨 [2000年7月7日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約71cm・幅約71cm・深さ約11cmの土坑より出土している。

②人骨の出土部位

人骨は、右寛骨片及び右大腿骨骨幹部が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

大腿骨及び寛骨は、土坑の東側から出土している。頭蓋骨や歯が出土していないので、確かではないが、恐らく、被葬者の頭位は西側で、埋葬状態は屈葬であると推定される。

④被葬者の個体数

出土人骨の残存部位は少ないが、人骨には明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

被葬者の性別を推定する指標となる部位が出土していないが、出土四肢骨の大きさを観察すると華奢

(2) 2号土坑出土人骨 [2000年7月7日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約120cm・幅約71cm・深さ約32cmの土坑より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の出土部位は、頭蓋骨片・下顎骨・脊椎骨片・四肢骨片等が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土位置より、被葬者の頭位は北西であり、恐らく屈葬で埋葬されたと推定される。

④被葬者の個体数

人骨の残存部位は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

出土右前頭骨の眉弓の発達が悪く、頭蓋骨片の骨の厚さを観察すると薄いので、被葬者の性別は女性



写真6. 石原東遺跡 D4区1号土坑出土人骨

で小さいので、被葬者の性別は女性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

被葬者の死亡年齢を推定する指標となる部位が出土していないが、恐らく成人であると推定される。

と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

出土頭蓋骨の上顎と下顎の歯の萌出状態を観察すると、上下顎の4本の第3大臼歯が萌出していない状態である。また、歯の咬耗度も、エナメル質のみに限定されている。したがって、被葬者の死亡年齢は、幅をもたせて、約15歳～18歳と推定される。

⑦歯の特徴

歯の噛み合わせは、鉗状咬合である。しかしながら、上顎右第1切歯は反対咬合である。残念ながら、同左第1切歯は出土しておらず、確認できない。

俗に虫歯と呼ばれる、齲蝕は認められなかった。

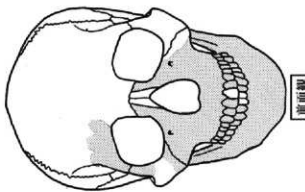
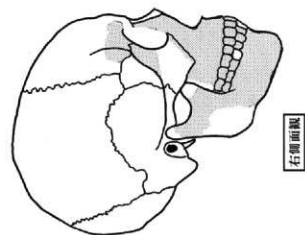
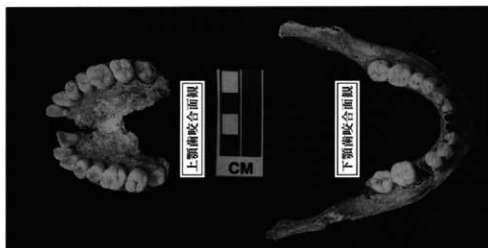


写真7. 石原東遺跡 D4区2号土坑出土人骨

(3) 3号土坑出土土人骨 [2000年7月7日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約75cm・幅約65cm・深さ約32cmの土坑より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の残存状況は、全体的に悪い。人骨の出土部位は、前頭骨片・下顎骨右片・右大腿骨片等が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

人骨は、一括して取り上げられているので、被葬者の頭位・埋葬状態は不明である。しかしながら、被葬者は成人であるので、屈葬であると推定される。

④被葬者の個体数

人骨の残存部位は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

出土歯の計測値から、計測値が比較的大きいことから、被葬者の性別は男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出するブローカの2度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は、約30歳代と推定される。

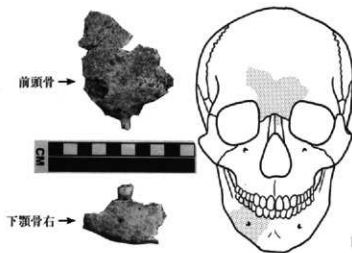


写真8. 石原東遺跡 D4区3号土坑出土土人骨

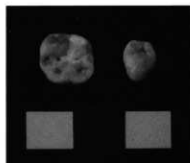


写真9. 石原東遺跡 D4区3号土坑出土歯
[左：下顎右第1大白歯、右：下顎左第2小白歯]

(4) 6号土坑出土土人骨 [2000年7月10日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約106cm・幅約70cm・深さ約31cmの土坑より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の残存状況は悪い。四肢骨片及び歯が2点出土している。報告に耐える人骨は、下顎右大白歯2点のみである。

③被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土位置が不明であるので、被葬者の頭位は不明である。しかしながら、出土歯は明らかに成

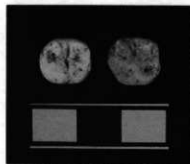


写真10. 石原東遺跡 D4区6号土坑出土歯
[左：下顎右第2大白歯、右：下顎右第1大白歯]

人のものであるので、埋葬状態は、屈葬であると推定される。

④被葬者の個体数

人骨の残存部位は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

出土人骨の残存部位が少なく、性別指標となる人

骨は出土していないが、出土大白歯の計測値から、被葬者の性別は男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

出土大白歯の咬耗度を観察すると、下顎右第一大臼歯は、象牙質が点状に露出するプロローカの2度の状態である。従って、被葬者の死亡年齢は、約30歳代と推定される。

3. D5区出土人骨

(1) 1号土坑出土人骨[2000年8月23日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約124cm・幅約99cm・深さ約34cmの土坑より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の残存状況は悪い。左右側頭骨片・肩甲骨片・大腿骨片等が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者の頭位は北西で、恐らく屈葬であったと推定される。

④被葬者の個体数

人骨の残存部位は少ないが、明らかな重複部位が

認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

性別指標となる部位が出土していないが、接着復元された大腸骨が大きいので、被葬者の性別は、恐らく男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

年齢指標となる部位が出土していないが、被葬者の死亡年齢は、恐らく成人であろう。

⑦出土人骨の特徴

左右側頭骨の乳突高が、かなり、発達している。

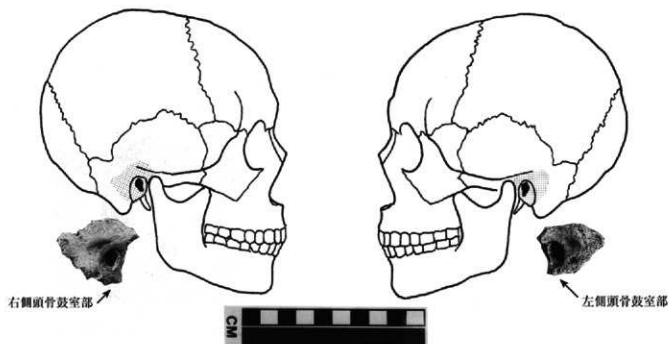


写真11. 石原東遺跡 D5区1号土坑出土人骨

(2) 2号土坑出土人骨 [2000年8月23日出土]

①人骨の出土状況

人骨は、長さ約92cm・深さ約30cmの土坑より出土している。土坑の幅については、不明である。

②人骨の出土部位

人骨は、寛骨片・左右大腿骨片等が出土している。

③被葬者の頭位・埋葬状態

出土人骨の出土位置より、被葬者の頭位は東側で、埋葬状態は仰臥屈葬と推定される。

④被葬者の個体数

人骨の残存部位は少ないが、明らかな重複部位が

認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

性別指標となる部位が出土していないが、左右大腿骨が華奢で小さいため、被葬者の性別は女性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

年齢推定の指標となる部位が出土していないが、被葬者の死亡年齢は、恐らく成人であろう。

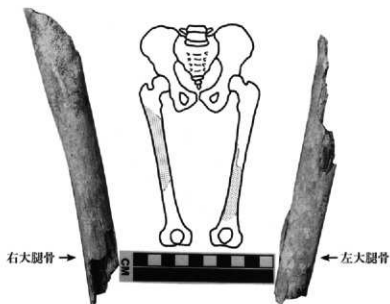


写真12. 石原東遺跡 D5区2号土坑出土人骨

(3) 4号土坑出土人骨 [2000年8月23日出土]

①人骨の出土状況

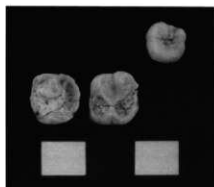
人骨は、長さ約115cm・幅約79cm・深さ約42cmの土坑より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の残存状況は悪く、そのほとんどが細片である。形をとどめているものは、南3点と右脛骨遠位部・右距骨・右踵骨のみである。

③被葬者の頭位・埋葬状態

出土人骨の残存部位が少ないため、被葬者の頭位及び埋葬状態は不明である。しかしながら、被葬者

写真13. 石原東遺跡 D5区4号土坑出土歯
[上段：上顎左第3大白歯、下段左：下顎左第1大白歯]、下段右：下顎右第2大白歯]

第6章 自然科学分析

の死亡年齢は成人であるので、土坑の大きさから埋葬状態は屈葬であると推定される。

④被葬者の個体数

人骨の残存部位は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

歯の歯冠計測値から、計測値が比較的小さいため、被葬者の性別は女性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度を観察すると、下顎左第1大臼歯の咬

耗は、象牙質にまで達し面を形成するブローカの2度の状態である。また、同第2大臼歯も、咬耗が象牙質にまで達している。したがって、被葬者の死亡年齢は40歳代であると推定される。

まとめ

石原東遺跡の土坑10基から、中近世の人骨が12体出土した。10基の人骨すべてに、火を受けた痕跡が認められないため土葬であったと推定される。出土人骨の判定結果のまとめを、以下の表に示した。

表1. 石原東遺跡出土人骨一覧表

区名	土坑番号	個体数	性別	死亡年齢	頭位	埋葬状態	備考
D 2	4号	3個体	男性	約16歳	北東	不明	身長約155.5cm
			不明	約9歳	北東	不明	
			不明	約6歳	北東	仰臥屈葬	
D 4	5号	1個体	男性	約20歳前後	北東	屈葬	
	6号	1個体	女性	北齡	北西	仰臥屈葬	
	1号	1個体	女性	成人	西	屈葬	
D 4	2号	1個体	女性	約15～18歳	北西	屈葬	
	3号	1個体	男性	約30歳代	不明	屈葬	
	6号	1個体	男性	約30歳代	不明	屈葬	
D 5	1号	1個体	男性	成人	北西	屈葬	
	2号	1個体	女性	成人	東	仰臥屈葬	
	4号	1個体	女性	約40歳代	不明	屈葬?	

謝辞

本出土人骨を報告する機会を与えていただき、出土人骨に関する様々な情報をいただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の笹澤奈史氏に感謝いたします。また、遺跡の発掘時に現場にてご教示いただいた元群埋文の間庭 稔氏・現群埋文の平方篤行氏・現群埋文の木暮育秀氏に感謝いたします。

引用文献

- 高橋悠男 1991 「人類学講座別巻1 人体計測法、人骨計測法」、雄山閣出版
 梶名忠次郎 1951 日本人前歯骨の人類学的研究、「慈恵会医科大学解剖学教室集論集」、第5巻
 藤田賢太郎 1949 歯の計測基準について、「人類学雑誌」、61(1): 1-6
 権田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67(3): 47-59
 MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum
 鈴木隆雄 1996 「日本人のからだ」、朝倉書店

表2. 石原東遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	石原東遺跡							江戸時代人*		現代日本人**			
		D2区6号		D4区2号		D4区3号		D4区6号		♂	♀	♂	♀	
		右	左	右	左	右	左	右	左					
上	I1	MD	-	-	91	欠損	-	-	-	-	878	838	867	855
		BL	-	-	83	欠損	-	-	-	-	752	706	735	728
	I2	MD	-	-	70	7.0	-	-	-	-	716	697	713	705
		BL	-	-	71	7.3	-	-	-	-	674	633	662	651
	C	MD	-	7.1	8.3	8.3	-	-	-	-	801	760	794	771
		BL	-	7.4	9.5	9.6	-	-	-	-	866	803	852	813
	P1	MD	-	7.2	7.6	7.8	-	-	-	-	741	723	738	737
		BL	-	8.9	10.6	10.5	-	-	-	-	967	933	959	943
	P2	MD	-	6.4	8.2	6.8	-	-	-	-	700	682	702	694
		BL	-	8.3	11.0	11.3	-	-	-	-	955	929	941	923
	M1	MD	-	10.5	11.8	11.7	-	-	-	-	1061	1018	1068	1047
		BL	-	11.4	12.3	12.6	-	-	-	-	1187	1139	1175	1140
M2	MD	-	-	10.5	10.2	-	-	-	-	988	948	991	974	
	BL	-	-	12.5	12.1	-	-	-	-	1200	1152	1185	1131	
M3	MD	-	-	9.3	9.0	-	-	-	8.7	-	-	894	886	
	BL	-	-	12.0	12.4	-	-	-	9.6	-	-	1079	1050	
下	I1	MD	-	-	5.9	5.9	-	-	-	-	545	532	548	547
		BL	-	-	6.6	6.6	-	-	-	-	578	565	588	577
	I2	MD	5.9	-	6.2	6.3	-	-	-	-	609	597	620	611
		BL	6.2	-	7.5	7.3	-	-	-	-	629	611	643	630
	C	MD	-	7.4	7.3	7.5	-	-	-	-	706	669	707	668
		BL	-	8.0	8.9	9.1	-	-	-	-	804	739	814	750
	P1	MD	-	-	7.6	7.2	-	-	-	-	732	705	731	719
		BL	-	-	8.6	9.0	-	-	-	-	834	789	806	777
	P2	MD	-	-	欠損	8.1	-	6.9	-	-	745	712	742	729
		BL	-	-	欠損	9.6	-	8.5	-	-	868	830	853	826
	M1	MD	11.2	-	12.6	12.4	11.4	-	11.7	(11.2)	1172	1114	1172	1132
		BL	10.7	-	12.0	12.0	11.1	-	10.8	(11.0)	1115	1062	1089	1055
M2	MD	-	-	11.9	11.9	-	-	11.3	11.5	1139	1078	1130	1089	
	BL	-	-	11.0	10.9	-	-	10.4	11.5	1075	1021	1053	1020	
M3	MD	-	-	欠損	欠損	-	-	-	-	-	-	1096	1065	
	BL	-	-	欠損	欠損	-	-	-	-	-	-	1028	1002	

注1: 計測値の単位は、すべて、[mm]である。

注2: 歯種は、I1(第1切歯)・I2(第2切歯)・C(犬歯)・P1(第1小臼歯)・P2(第2小臼歯)・M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)・M3(第3大臼歯)を意味する。

注3: MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠唇舌径)を意味する。

注4: 「欠損」は、歯が出してないために計測できなかったことを示す。

注5: 「欠如」は、歯が先天的に欠如しているため計測できなかったことを示す。

注6: 計測値の内、()で囲まれているものは、咬耗のために計測値が影響を受けていることを示す。

注7: 「*」は、MATSUMURA(1995)より引用。なお、同論文にはM3(第3大臼歯)のデータは無い。

注8: 「**」は、植田(1959)より引用。

表3. 石原東遺跡出土歯冠非計測の形質観察結果

歯種	非計測的形質	D2区6号土坑		D4区2号土坑		D4区3号		D4区6号		D5区4号	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
上	I1	シャベル形切歯	-	-	有り	-	-	-	-	-	-
		歯突起	-	-	無し	-	-	-	-	-	-
		盲孔	-	-	無し	-	-	-	-	-	-
	I2	シャベル形切歯	-	-	有り	有り	-	-	-	-	-
		歯突起	-	-	無し	無し	-	-	-	-	-
		盲孔	-	-	無し	無し	-	-	-	-	-
P1	介在結節	-	無し	有り	有り	-	-	-	-	-	
M1	カラバリ結節	-	無し	有り	有り	-	-	-	-	-	
下	M1	第6咬頭	無し	-	無し	無し	咬耗	無し	無し	咬耗	無し
		第7咬頭	無し	-	有り	無し	無し	無し	有り	咬耗	無し
		原錐舌状突起	無し	-	無し	無し	無し	無し	無し	咬耗	無し
	屈曲隆線	咬耗	-	無し	無し	咬耗	無し	無し	咬耗	無し	
	M2	咬合面の溝型	-	-	Y5	Y5	-	-	X4	咬耗	無し
		4咬頭	-	-	無し	無し	-	-	無し	咬耗	無し

注1. 歯種は、I1(第1切歯)・I2(第2切歯)・P1(第1小臼歯)・M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)を意味する。

注2. 「咬耗」とあるのは、咬耗があり観察できなかったことを示す。

表4. 石原東遺跡D4区2号土坑出土下顎骨計測値及び比較表

計測項目 (Martin's No)	D4区2号土坑	江戸時代人*		現代人**	
		♂	♀	♂	♀
67 前下顎幅	51 mm	478 mm	447 mm	-	-
69 顔高	35 mm	345 mm	325 mm	361 mm	332 mm
69(1) 下顎体高	30 mm	330 mm	302 mm	-	-
69(2) 下顎体高	26 mm	285 mm	249 mm	-	-
69(3) 下顎体厚	12 mm	132 mm	118 mm	-	-
69(6) 下顎体厚	16 mm	-	-	-	-
71 下顎枝幅	33 mm	354 mm	311 mm	331 mm	311 mm
71a 最小下顎枝幅	34 mm	-	-	-	-
69(3):69(1) 下顎体高厚率数	400	405	388	-	-

表5. 石原東遺跡出土人骨四肢骨計測値及び比較表

計測部位 計測項目	石原東遺跡出土人骨					江戸時代人骨*		現代人**	
	D2区4号土坑	D2区5号土坑		D2区6号土坑		♂	♀	♂	♀
肩甲骨	右	右	左	右	左	右平均	右平均	右平均	右平均
9 肩峰最大幅	-	230	280	-	-	308	253	303	267
12 関節窩長	-	360	370	-	-	366	329	355	316
13 関節窩幅	-	250	-	-	-	270	228	262	225
13-01 肩峰関節窩距離	-	150	160	-	-	-	-	-	-
上腕骨	右	右	左	右	左	右平均	右平均	右平均	右平均
1 上腕骨最大長	295.0	-	-	-	-	296.8	269.7	295.9	272.4
4 下端幅	-	-	590	-	-	596	508	590	499
5 中央最大径	190	-	(230)	(165)	-	227	196	224	197
6 中央最小径	180	-	(200)	(160)	-	177	149	177	147
6:5 体断面示数	947	-	870	970	-	783	766	796	751
6b 中央横径	180	-	(220)	(160)	-	-	-	-	-
6c 中央矢状径	200	-	(230)	(170)	-	-	-	-	-
7a 中央周	600	-	(700)	(550)	-	-	-	-	-
9 頭最大径	410	-	420	-	-	415	365	416	359
10 頭最大矢状径	440	-	440	-	-	443	387	442	379
14 肘頭窩幅	-	-	260	210	-	273	244	270	243
大腿骨	右	右	左	右	左	右平均	右平均	右平均	右平均
6 骨体中央矢状径	-	-	-	(220)	(230)	283	248	276	245
7 骨体中央横径	-	-	-	(240)	(250)	274	241	263	230
6:7 体中央断面示数	-	-	-	917	920	1039	1031	1054	1073
9 骨体上横径	-	-	-	300	290	307	265	310	279
10 骨体上矢状径	-	-	-	210	200	278	255	256	224
10:9 体上断面示数	-	-	-	700	690	912	973	822	809
15 頭直径	-	-	-	260	260	325	283	336	281
16 頭矢状径	-	-	-	190	170	258	237	274	231
16:15 頭断面示数	-	-	-	731	654	795	841	812	820
18 頭直径	450	-	-	390	-	465	409	464	402
19 頭横径	450	-	-	-	-	459	402	461	401
19:18 頭断面示数	1000	-	-	-	-	988	989	995	999

註1. 示数以外の計測値の単位は、示数以外はすべて「mm」である。

註2. () は、推定中央部での数値

* : 遠藤・北條・木村(1967)より引用

** : 梶甲骨[高野(1949)]・上腕骨[西原(1953)]・大腿骨[大場(1950)]より引用

[2] 石原東遺跡出土獣骨

はじめに

柄崎 修一郎

石原東遺跡は、群馬県渋川市石原に位置し、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が平成12(2000)年4月～平成13(2001)年5月まで行われた。本遺跡のD2区6号土坑から犬(イヌ) [*Canis familiaris*] の骨が、D5区3号土坑から馬(ウマ) [*Equus caballus*] の歯が出土したので以下に報告する。なお、犬歯及び馬歯の計測方法は、フォン・デリー・ドリーシェ [von den Driesch] (1976) に従った。



写真1. 石原東遺跡 D2区6号土坑出土犬骨左側面観

1. D2区6号土坑出土犬骨

D2区6号土坑出土犬骨は、破損しており、計測できたのは歯のみであった。歯冠計測値の比較は、すべて茂原・小野寺(1987)より引用した。

(1) 出土状況

一括で取り上げられているので、出土状況は不明である。

(2) 出土部位

犬の下顎骨左の第1大臼歯部から第3大臼歯部(歯が植立)が出土している。

(3) 個体数

重複部位が認められないため、個体数は1個体と推定される。

(4) 性別

性別推定は、完全な頭蓋骨が出土していないために難しいが、歯冠計測値の比較からは比較的歯の大きさが大きいので、雄(オス)と推定される。

(5) 死亡年齢

歯の咬耗度を観察すると、それほど咬耗しておらず、若年個体と推定される。本個体の場合、乳歯は認められず、すべて永久歯である。犬は、約4ヶ月～7ヶ月で永久歯が萌出して乳歯は脱落するので、死亡年齢は約4ヶ月～7ヶ月以上としておく。

(6) その他の病変

出土歯には、歯石及び齧蝕(虫歯)は認められなかった。

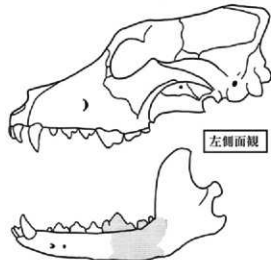


図1. 石原東遺跡 D2区6号土坑出土犬骨出土部位図

表1. 石原東遺跡出土犬骨下顎歯計測値及び比較表

歯種	計測項目	本遺跡		現生柴犬*		中世犬*		穂文田柄貝塚*	
		左	右	♂	♀	♂	♀	♂	♀
M1	MD	194mm	186mm	174mm	197mm	178mm	195mm	185mm	
	BL	75mm	77mm	71mm	82mm	73mm	79mm	73mm	
M2	MD	87mm	74mm	69mm	82mm	70mm	78mm	81mm	
	BL	60mm	59mm	55mm	65mm	55mm	62mm	62mm	
M3	MD	49mm	38mm	36mm	37mm	34mm	38mm	37mm	
	BL	44mm	35mm	32mm	33mm	32mm	35mm	35mm	

註1. 歯種は、M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)・M3(第3大臼歯)

註2. 計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠縦径)を意味する。

註3. ♀は、茂原・小野寺(1987)より引用。

2. D5区3号土坑出土馬歯

(1) 出土状況

馬歯は、長さ約116cm・深さ約36cmの不定形土坑の南東部から出土している。幅は、西側が攪乱を受けており、不明である。

(2) 出土部位

馬歯の上顎左第2小白歯及び同第3大白歯が出土している。

(3) 個体数

重複部位が認められないため、個体数は1個体と推定される。

(4) 性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無あるいは、寛骨により推定できる。今回は、それらの部位は出土していないため、性別の推定は難しい。

(5) 死亡年齢

出土馬歯は、一部破損しているが、かろうじて計測できた歯高計測値より、死亡年齢は幅をもたせて約8歳～約9歳と推定される。獣医学の分野では、馬の年齢を5歳以下を幼駒馬・6歳～15・16歳を牡駒馬・16歳～17歳以上を老駒馬と分類している。この分類では、本出土馬歯は牡駒馬に属する。

(6) その他の病変

出土馬歯には、歯石の付着は認められなかった。

(7) 馬の埋葬形態

馬歯の出土状況から、馬の遺体は頭を東南部に向けて屈葬の状態と推定される。通常、人間の場合は北向きにする場合が多い。これは未発表データであるが、本報告者が群馬県吾妻町の上郷岡原遺跡で発掘した馬骨も本馬歯と同じように頭部を北側ではなく南側に向けて埋葬していた。恐らく、長い間使役を使用した馬をねぎらって丁寧に埋葬したのだが、頭の向きは故意に人間とは同じ方向にできなかったのだろう。

謝辞

本出土獣骨を報告する機会を与えていただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の笹澤泰史氏に感謝いたします。

引用文献

- 茂原啓生・小野寺 寛 1987 鎌倉村木塚出土の中世犬骨。「人類学雑誌」, 95(3):361-379.
 von den Driesch, A. 1976 'A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites', Peabody Museum Bulletin No.1, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University



写真2 石原東遺跡 D5区3号土坑出土馬歯短側面観 [左: 上顎左第2小白歯, 右: 上顎左第3大白歯]

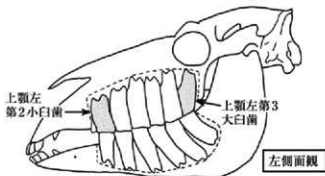


図2 石原東遺跡 D5区3号土坑出土馬歯出土部位図

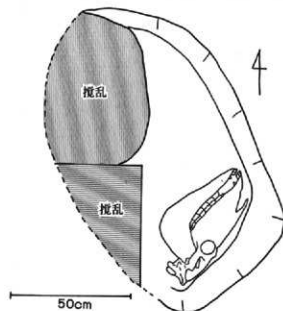


図3 石原東遺跡 D5区3号土坑出土馬骨の埋葬形態の想像図

[3] 石原東遺跡出土漆関係遺物の断面観察

1. はじめに

小林 正

石原東遺跡 D1 区では、9世紀前半から10世紀前半を中心とする遺物が多く出土しているが、その中には、漆塗り木製皿、漆附着須恵器、その他不明黒色物附着土器等がある。漆塗り木製皿は、詳しい時期を明らかにすることはできなかったが、平安時代前期に属すると思われる。県内では平安時代前期の漆器の出土は貴重であり、様々な角度からの調査が望ましい。漆製品の場合、その種類や形態といった外見上の検討だけでなく、塗装技法のような内面からの調査も重要である。どのような塗装技法が行われているかを知るには、遺物から小破片を採取し、プレパレート資料を作成して、断面を観察する方法が有効である。また、漆工技術を知る上では、漆工用具の特定や観察も必要である。したがって、漆附着土器やそれに類する遺物についても、同様に断面観察を行い、この遺跡における漆工の存在についても検討することとした^①。

その結果、黒色物が附着した須恵器1点は、漆附着土器であると判明し、漆塗り木製皿とあわせて報告することとした。

2. 調査結果

(1) 木胎漆器 (D1区遺物包含層出土木器 No.23)

資料の残存状況は良くないが、皿状の漆器である。観察は保存処理後に行っている。

肉眼での観察によると、塗膜の色調は黒色である。部分的に漆塗膜が剥離した箇所があるが、木地が良く露出しており、明瞭な下地は確認できない。また、僅かに残存している口縁部や底部を観察しても、布着せのような補強は行われていないようである。

断面観察には、体部の2箇所から小破片を採取して、プレパレートを作成した。この顕微鏡観察によると、木地表面には炭粉や鉱物等は確認できず、錆漆などによる木地固めは行われていないことが確認できた。漆が木地に浸透しており、くろめ漆を下地

として塗布していると思われる。

下地の上にくろめ漆を2回塗布している。これらの漆には、鉄粉や炭素といった黒色顔料は入っていない。下塗りは層厚約55ミクロンから60ミクロンである。上塗りは層厚10ミクロン以下であり、極めて薄い。この上塗りとした層は、下塗りの変色層の可能性も考えられた。しかし、下塗り層との境は明瞭で、2つのサンプルそれぞれで同様の層が観察できたことから、上塗り層と判断した。また、塗膜はなだらかであり、塗布ごとの研ぎ出しは、確認できない。

以上のように、この木胎漆器は、漆のみの下地のみに漆を2回塗布したのみであり、きわめて簡単に作られている。

(2) 黒色物附着須恵器杯

(D1区遺物包含層出土須恵器 No.81)

須恵器の残存率は低い、附着物の量は多い。肉眼で観察すると、内面全体に黒色物の附着が見られ、体部には帯状に附着物が厚く付き、漆特有の縮みしわが確認できる。厚い附着物は黒色に近く、附着が薄いところでは、褐色を帯びている。

断面で見ると、漆が厚く附着している様子が窺える。成分の均一化が行われており、精製されたくろめ漆である。ただし、やや強めの加熱を受けていたようである^②。微細な混入物が観察できるだけであり、漆には顔料などは入れられていない。

断面で観察できた限りでは、この杯には、漆が何層にも重なるように附着してはいない。肉眼で全体的に観察しても、幾重にも漆が重なっているようには見えない。この杯の用途は、いわゆる漆パレットのような漆の塗布に関する作業か、くろめなどの漆の精製作業と思われるが、漆工用具として繰り返し使われたことはなかったようである。

3. まとめ

今回の漆関係資料分析では、木胎漆器1点と、漆付着器が1点、確認できた。

本遺跡で出土した木胎漆器の塗装技法は、きわめて簡略なものであった。平安時代に属する木胎漆器の分析例はまだ少ないが、四柳嘉章氏や岡田文男氏などが行っている。9世紀代の平安京出土漆器の分析によると、炭粉漆、あるいは錆漆を下地として、その上に漆を2回から数回塗布しているという。また、石川県寺家遺跡では、布着せの上に錆漆を塗り、漆を8回塗り重ねているという。

漆器の品質は、塗り重ねが多ければ良いというような単純なものではない。しかし本遺跡出土の木胎漆器は、下地から上塗りに至るまで、漆のみを使用した素朴な作りであった。官衙や有力寺院に属する工房で作られたものというよりも、地域における独自の生産も考えるべきであろう。

木胎漆器の生産に関わる遺物としては、木胎漆器以外にも漆付着須恵器や轆轤の爪痕が残る木製容器の未製品が出土している。木胎漆器の生産が行われていたかどうかは、漉し布や刷毛などの漆工に関する遺物の出土がないので断定はできないが、漆付着須恵器は漆の何らかの利用が行われていたことを示している。木製容器未製品は、この地で轆轤使用による木地生産が行われていたことを示し、やはり、漆器生産との関わりが窺える。これらの木工や漆工に関連する遺物は出土数こそ少ないが、木地と漆という漆器生産に関する重要な資料である。本遺跡出土の木胎漆器は、この地で生産されたものである可能性もあるだろう。

今回は、石原東遺跡の木胎漆器と漆関連遺物について分析を行ってみた。本遺跡出土の木胎漆器は、漆を塗布した回数が少なく、簡単な作りではあるものの、11世紀以降の中世に多い浜下地ではなかった。古代の漆器生産は、官衙や寺院に所属する工房での生産が一般的には考えられる。しかし、それらとは別の在地における独自の生産である可能性もあ

り、中世的な浜下地漆器が登場する前段階の地域生産を考える上で、貴重な資料となりうるだろう。また、轆轤技術を持つ木工や漆利用が確認できたことは、官衙や寺院との関係が無いとされる本遺跡の性格を考える上でも、重要な資料となるだろう。

無論、このような可能性を考えるには、官衙などに所属する工房の生産や技術の実体を捉える必要があり、それはほとんど明らかにはなっていない。今後とも漆関連遺物の増加だけでなく、分析数も増えることを期待したい。

註

- (1) 今回、本遺跡の漆関係遺物の分析に関しては、国立歴史民俗博物館の永嶋正幸氏のご指導と御協力のもとで行った。厚く御礼申し上げます。
(2) 永嶋正幸氏のご御稿による。

参考文献

- 四柳嘉章 1991「古代～近世漆器製造と塗装技術」『石川考古学研究会会誌』第34号
四柳嘉章 1992「北陸・東北における古代・中世漆器の製造技術と調査史」『石川考古学研究会会誌』第35号
岡田文男 1995「古代出土漆器の研究 調査記録と探る材質と技法」京都書院

[4] 石原東遺跡の土層

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層が検出された石原東遺跡においても、地質調査を行って土層層序とテフラに関する記載を行うことになった。調査対象となった地点は、D1区である。

2. D1区における土層層序

D1区では、下位より黒色土（層厚5cm）、火山泥流堆積物を挟む成層したテフラ層（層厚118.6cm）、灰色砂層（層厚13cm）、黒色砂質土（層厚2cm）、褐色軽石層（層厚18cm）、円磨された白色軽石や気泡を含む灰色砂層（層厚21cm：高温の火山泥流堆積物）、白色軽石混じり暗灰色土（層厚5cm、軽石の最大径49mm）、灰褐色砂層（層厚43cm）、暗灰褐色土（層厚7cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より桃褐色細粒火山灰層（層厚10cm）、粗粒の亜角礫に富む桃褐色細粒火山灰層（層厚59cm、礫の最大径798mm：火山泥流堆積物）、桃褐色細粒火山灰層（層厚14cm）、灰褐色砂質細粒火山灰層（層厚5cm）、灰色石質岩片層（層厚0.8cm、石質岩片の最大径2mm）、褐色細粒火山灰層（層厚0.8cm）、層理が発達した灰色火山砂層（層厚7cm、火砕サージ堆積物）、白色粗粒軽石混じり黄灰色細粒火山灰層（層厚2cm、軽石の最大径82mm、石質岩片の最大径33mm）、層理が発達した灰色火山砂層（層厚5cm、火砕サージ堆積物）、褐色細粒火山灰層（層厚3cm）、層理が発達した灰色火山砂層（層厚3cm、火砕サージ堆積物）、褐色細粒火山灰層（層厚5cm）、層理が発達した灰

株式会社 古環境研究所

色火山砂層（層厚4cm、火砕サージ堆積物）から構成されている。この成層したテフラ層は、その層相から、6世紀初頭に榛名山から噴出した榛名二ツ岳渋谷テフラ（Hr-FA、新井,1979、坂口,1986、早田,1989、町田・新井,1992）に同定される。従来のテフラ区分（早田,1989,1993）に従うと、下位より泥流堆積物を挟む桃褐色細粒火山灰層はS-1、灰褐色砂質細粒火山灰層はS-2、灰色降下石質岩片層はS-3、褐色細粒火山灰層はS-4、火砕サージ堆積物はS-5、黄灰色細粒火山灰層はS-7およびS-9、白色粗粒軽石はS-8、その上位の火砕サージ堆積物と褐色細粒火山灰層はS-10に各々対比されるものと考えられる。

褐色軽石層では、軽石の表面に鉄分が付着しており、実際の軽石の色調は白色である。この軽石層は、その層相や層位から6世紀中葉に榛名山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井,1962、坂口,1986、早田,1989、町田・新井,1992）の降下堆積層に同定される。その上位に認められる高温の火山泥流堆積物については、噴火の後半に発生した火砕流の堆積に伴って発生した可能性が高い。

3. 小結

石原東遺跡において、地質調査を行った。その結果、下位より榛名二ツ岳渋谷テフラ（Hr-FA,6世紀初頭）とそれに伴う火山泥流堆積物、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP,6世紀初頭）とそれに伴う火山泥流堆積物を検出することができた。

文献

新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編,10,p1-79。
新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル,50,53,p41-52。
町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会,276p。
坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土層部と原形。群馬県教育委員会編「荒川北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」,p103-119。
早田 勉(1989) 6世紀における榛名山の2回の噴火とその災害。第四紀研究,27,p297-312。
早田 勉(1993) 古墳時代におこった榛名山二ツ岳の噴火。新井房夫編「火山灰考古学」,古今書院,p.128-150。

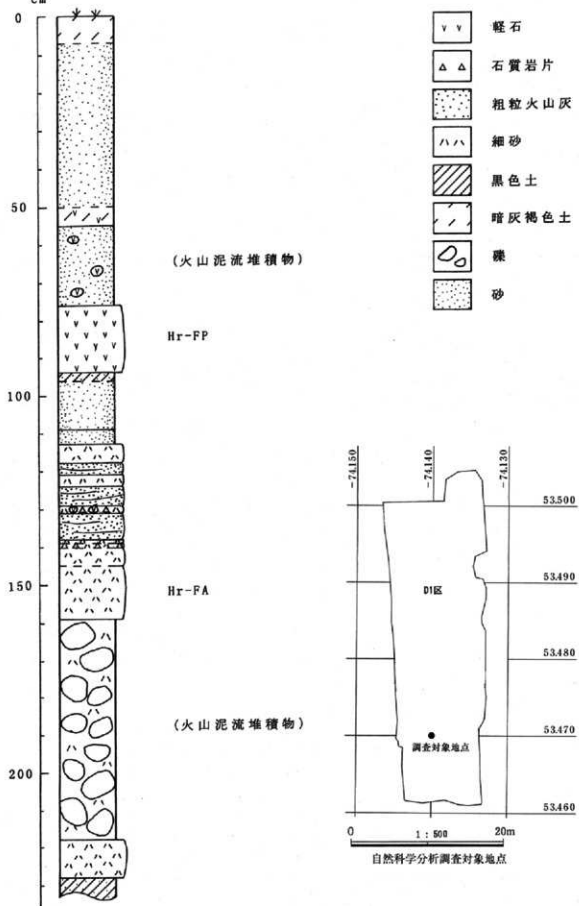


図1 D1区の土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号

第7章 調査の成果

[1] 縄文時代草創期の出土石器

中東 耕志

本遺跡の石器群は、利根川右岸の唐沢泥流堆積物上面から出土した、草創期に相当する資料である。利根川左岸の赤城村見立溜井遺跡や子持村白井北中道遺跡、北橋村房谷戸遺跡では、草創期の石器が検出されている。本遺跡では草創期の土器や石斧の類は発見されていないが、渋川市域においては最初に確認された草創期の遺跡である。諏訪ノ木V遺跡2区の石器群の分布状況と出土資料の特徴を把握し、他地域との比較をおこない、編年上の位置を概括しておきたい。

1. 諏訪ノ木V遺跡2区の石器分布

埋没していた小さな沢の底面に近い、緩やかな斜面から出土している。草創期の資料は調査区西境界地点からも出土していて、さらに西方向に分布が広がる可能性はあるが、およそ長径約3.5m、短径約2mの極めて限定された範囲内に集中して検出された。この分布傾向は、調査区分布範囲の北西部に集中して検出された第1グループと、南西部に散在して検出された第2グループに区分される。第1グループに石器は集中的に検出されたが、接合資料等の分布状況から、両グループは密接な関連をもった資料分布グループであることが判読された。

2. 諏訪ノ木V遺跡2区の石器の特徴

本遺跡で検出された資料は、尖頭器6点、有茎尖頭器2点、削器3点、ノッチドスクレイパー1点・搔器3点・半月形石器2点、両面加工石器(3点の接合資料)1点の計18点と剥片130点である。さらに、削器の接合資料を含む接合資料10点が検出されている。

本遺跡で検出された資料点数は多くはないが、石器石材としては在地の黒色頁岩も使用されているが、搬入品である珪質頁岩が多用されている特色がある。また、土器及び石斧は検出されていないが、完形に近い尖頭器の比率が多く、その他に半月形石器や、特異な形態の有茎尖頭器及び削器が含まれている。また、両面加工石器と搔器も出土している。

この点については、検出された器種と珪質頁岩を多用した特殊性の関連が特筆されよう。

さらに、接合資料が10点と両面加工石器の接合資料計11点が検出されているが、目的とする石器の製作器種は明確にはできなかった。しかし、接合資料-8のような尖頭器製作関連の接合資料及び接合資料-1の横位方向に折断していく技法や、No.18の両面加工石器の接合資料にも注目しておきたい。

3. 諏訪ノ木V遺跡2区の石器編年上の位置

本遺跡の資料については、土器と石斧が未検出であることから、明確に編年上の位置づけをおこなうのは困難であるが、特徴的な石器を他遺跡の資料と比較検討しておきたい。

まず、報告No.8の有茎尖頭器は、基本的な形態は尖頭器であるが、先端部ないしは基部が石錐状に尖っている。ただし、石錐としては認定できなかったため、尖頭器としての可能性を推定しつつ、突出した先端部を作出した特異な形態の有茎尖頭器と判断した。さらに、No.4・8の有茎尖頭器は逆三角形の茎部形態が類似している。本遺跡の有茎尖頭器は、古い段階の資料として位置づけられよう。また、尖頭器については山形県日向洞窟西地区の一部資料に類似している。さらに、縦長状の剥片を使用した特異な形態の削器であるNo.9・10・13は、小瀬が沢洞窟の報告No.317(1区4層出土 彎曲刃器)・181(3区3層 両側用刃器)に類似している。

群馬県内の資料としては、隆起線土器の出土した白井北中道遺跡段階と対比していきたい。

これらのことより、本遺跡の石器は縄文時代草創期の中でも古い段階の資料として位置づけたい。土器が検出されたならば、隆起線土器でも古い段階の様相が施された資料が想定されよう。

なお、本資料の編年上の位置づけについては、戸田哲也氏のご教示を得た。

[2] 諏訪ノ木V遺跡の早期縄紋土器について

橋本 淳

本遺跡における包含層出土の縄紋土器は98点と少量であるが、早期から後期にわたっている。そのなかでも早期のものが大半を占め、押型紋土器、沈線紋土器、燃糸紋・縄紋施紋土器、無紋土器が出土した。これらの土器は包含層一括出土であるため、それぞれの共存関係や前後関係を論じることはできないが、群馬県内での当該期資料がいまだ少ない状況のなかで資料的価値は極めて高いといえるであろう。以下、特筆されるべきものについて若干触れてみたい。

押型紋土器は桶沢式から細久保式にかけての段階が出土している。個体復元された土器は楕円押型紋を横位密接施紋するが、頸部に無紋帯を残してその上下端に刺突列を巡らすもので、桶沢Ⅱ式(中島1990)あるいは細久保1式(岡本1997)の特徴を有する。県内においては赤城村諏訪西遺跡(小野・谷藤1986)で、同様の紋様構成をもつ山形紋施紋の土器が、また同村勝保沢中ノ山遺跡(石坂1988)でも紋様構成は若干異なるものの同時期に比定しうる楕円押型紋土器が出土しており、本遺跡の資料と合わせ、群馬県における当該期の標式的な資料となりうるであろう。

沈線紋土器は個体復元された三戸式は重要であろう。現在まで県内において三戸式土器の出土は非常に散発的であり、またそのほとんどが破片資料のものばかりであった。本遺跡では1個体のみであるが、全体の紋様構成がうかがい知れるものである。紋様を再度概観すると、5段ずつの横帯区画を口縁部と胴部下半に配して絞線帯を区画し、絞線帯内に帯状斜格子目紋による幾何学状のモチーフを描く。こうした特徴は三戸2式(岡本1992、1997)に見られるものであり、本遺跡出土資料もこの段階に位置づけられよう。

また本遺跡からは燃糸紋・縄紋施紋土器が出土している。本文中では、「沈線紋土器に伴うと考えら

れる」としたが、実は明確な根拠を持ち合わせているわけではない。積極的に他の型式に比定することができないこと、沈線紋土器に伴うとされる燃糸紋・縄紋施紋土器の類例が他遺跡にみられることといった消極的な根拠により、位置づけた次第である。そのため誤認があるかもしれない。特に、燃糸紋・縄紋施紋土器の一括りにしたが分類できる要素はあり、例えば第113図29～35は草創期後半の燃糸紋土器に近い様相を呈している。また同図46は口唇部形態、波頂部下の瘤状貼付紋、異方向の帯状縄紋施紋、口縁部の横位縄紋を画す横位沈線といった独特の様相を呈する。いずれにせよ、明確な帰属時期を特定できるものではないので踏み込んだ議論は差し控えるが、現時点においては早期沈線紋土器に伴う可能性を指摘するにとどめておきたい。

以上、本遺跡出土の早期縄紋土器について簡単に触れてきた。前述したように包含層一括出土であることと出土点数が少量であるといった制約のために、土器相互の関係を論じるまでに至らないのが残念であった。しかしながら早期資料の少ない群馬県において、本遺跡出土資料は大変貴重なものであることには変わりはない。特に個体復元された押型紋土器と三戸式土器は当該期土器研究をすすめていくうえで欠かせないものとなるであろうし、今後の資料の増加により本遺跡の様相がより鮮明になることであろう。

参考文献

- 石坂 茂 1988「勝保沢中ノ山遺跡1」
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 1997「八木沢清水遺跡」
小野上村教育委員会
- 岡本東三 1992「埼玉県・大塚遺跡第3期土器をめぐって」
『人間・遺跡・遺物』2
- 岡本東三 1997「関東・北の沈線紋土器・東北の押型紋」
『人間・遺跡・遺物』3
- 小野和之・谷藤保彦 1986「中津遺跡・諏訪西遺跡」
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中島 空 1990「細久保遺跡2期土器についての覚書」『縄文時代』1

[3] 出土土器の変遷(奈良・平安時代)

笹澤 泰史

1. はじめに

石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡の奈良・平安時代の遺構から、大量の遺物が出土している。出土遺物は堅穴住居をはじめとする遺構からと石原東D1区遺物包含層からで、土師器・須恵器・施軸陶器・木器などがある。

ここでは、出土遺物の内、特に住居から出土した土器を主体的に分類して、石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡における土器変遷を試みてみたい。

土器類は形態、整形などで分類が可能である。分類の方法は、各住居より普遍的に出土している土師器杯、甕、須恵器杯、椀、羽釜の5器種について形態及び成・整形技法から分類を行う。次に分類した土器を出土した遺構に戻し、遺構内の共存関係を検討する。さらに遺物の組み合わせから面期を求め、期の設定を行う。

2. 分類

分類は以下の通り器種ごとに行った。

土師器杯

土師器杯は、形態による大分類として、丸底のタイプ(土師器杯A)、平底のタイプ(土師器杯B)、暗文のタイプ(土師器杯C)に分け、さらに細部の形態、整形による違いで細分した。

土師器杯A 丸底のタイプ

A I 丸底で口唇部が強く内湾。器高:口径は1:3。整形は、口縁部横ナデ後、体部から底部を手持ちへら削り。胎土がやや粗く器厚は薄い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区25住-2がある。

A II 丸底で口縁部の内湾が弱い。器高:口径は1:3.5。整形は、口縁部横ナデ後、体部中位が無調整、下位から底部がへら削り。胎土がやや粗く器厚は薄い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区21住-2がある。

A III 弱い丸底で、口縁部は直線的に立ち上がる。体部はほとんど内湾しない。器高:口径は1:3.8。整形は、口縁部横ナデで、体部中位から下位が無調整、最下位がへら削り。胎土がやや粗く器厚は薄い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区8住-1がある。

A IV 底部はほとんど平底化しているが、底部から体部にかけての丸みがA IIIまでの丸底の流れを汲む丸底のタイプ。器高:口径は1:4。胎土がやや粗く器厚は薄い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区14住-1がある。

土師器杯A(丸底のタイプ)

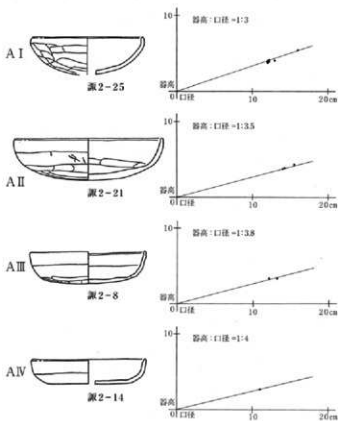


図1

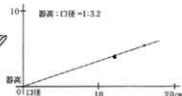
土師器杯 B 平底のタイプ

底部から体部が直線的に立ち上がる平底のタイプ。口縁部が直線的に外斜する。器高：口径は1:3.2。胎土がやや粗く器厚は薄い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区13住-1がある。

土師器杯 B(平底のタイプ)



図2-13



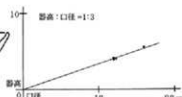
土師器杯 C 暗文のタイプ

底部は平底。体部は直線的に外斜し、口唇部が僅かに内傾する。器高：口径は1:2。成・整形は丁寧で、口縁部の上位・上半は横ナデ。中位以下・下半は横方向のヘラ削り。内面に斜放射状の暗文のものもある。胎土がきめ細かく器厚は厚い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区12住-1がある。

土師器杯 C(暗文のタイプ)



図3-12



土師器甕

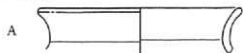


図2-25

土師器甕

土師器甕は主に口縁形態を軸に分類した。

A 胎土はやや粗く、器厚はやや厚い。胴部が長い器形であろう。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区25住-10がある。



図2-16

BI 頸部より下位の外面は斜め横方向のヘラ削り。つくりは丁寧。頸部から口縁部がやや長めで、胎土は、ややきめ細かく、器厚はやや薄い。胴部が比較的短い器形であろう。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区16住-4がある。

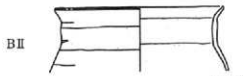


図3-10

BII 口縁部を強く横ナデすることによって、頸部に「コ」の字状の形状が出てくるが、BIの口縁の形状をやや残す器形。器厚はやや薄く、BVに比べて丁寧な作り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区10住-7がある。

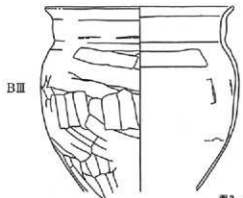


図3-3

BIII 口縁部を強く横ナデすることによって、頸部に垂直の無調整部分が出る。無調整部分を指で押さえた痕を残すものもある。「コ」の字が最もくっきりとする。丁寧なつくりで器厚は非常に薄い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区3住-6がある。

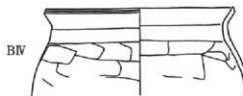


図1-2

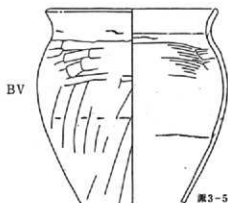
BIV 口縁部を強く横ナデすることによって、頸部に垂直の無調整部分がわずかに残存する

図2

器形。「コ」の字の痕跡がある。器厚はBIIやBIIIに比べてやや厚く、やや雑な作り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡1区2住-3がある。

BV 「コ」の字の痕跡は止めない。胴部の整形は、BIVに類似する。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区5住-7がある。

BVI 口縁部は短く「く」の字状に外反する。器厚が厚い。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区4・7住-3がある。



須恵器杯

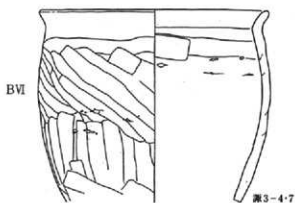
ロク口整形で、高台を付さないものを基本的に須恵器杯とした。分類は器形と底部切り離し技法を軸にした。

A I 底径に比べ、器高が低い。体部は傾きが少なく、口縁部は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は、回転ヘラ起こし後未調整。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区26住-3がある。

A IIa 底径に比べ、器高がやや高い。体部はやや傾き、口縁部は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は、回転ヘラ切り後、ナデ。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区12住-3がある。

A IIb 口径に比べ器高が高いものの、A IIaとほぼ同様な器形と成・整形の特徴を持つ。底部切り離し技法は、回転糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区16住-8がある。

A III 底径に比べ、器高がやや高い。体部は傾き、口縁部はやや外反する。底部は、回転糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区3住-2がある。



須恵器杯 A

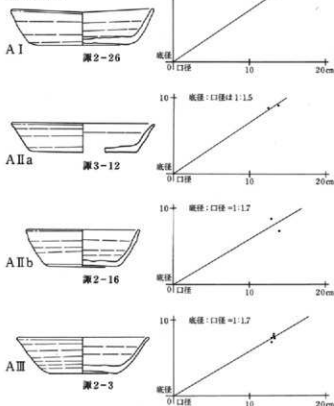
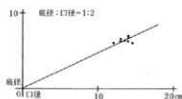
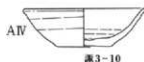


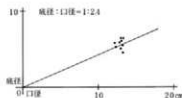
図3

第7章 調査の成果

AV 底径に比べ、器高が高い。口縁部はやや外反する。底部は、回転糸切り後、無調整。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区10住-4がある。

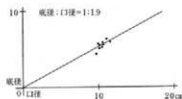
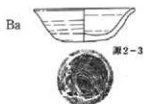


AV 底径と器高がほぼ同じ。口縁部は強く外反する。底部は回転糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区5住-3がある。

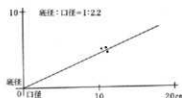


Ba ほぼAVと同じ器形で小形の杯。底部は、回転糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区3住-2がある。

須恵器杯 B

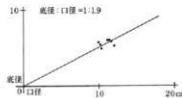
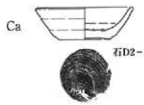


Bb Baとほぼ同様な器形と成・整形の特徴を持つが、底部切り難し技法が、静止糸切り。Baに比べて体部が内湾せず、やや器高が低いものもある。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区7住-6がある。

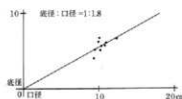
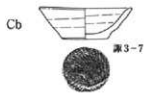


Ca 口縁部が外反しないですっきりと立ち上がる小形の杯。底部は回転糸切り。代表的な遺物に石原東遺跡D2区6住-1がある。

須恵器杯 C



Cb Caとほぼ同様な器形と成・整形の特徴を持つが、底部切り難し技法が静止糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区7住-7がある。



焼成は、概ねAI~AIIIが還元焰、AV、AVが酸化焰さみ、B、Cが酸化焰焼成である。AVよりAVの方が酸化が強い。

図4

須恵器碗

口ロ整形形で、高台を付すものを基本的に須恵器碗とした。分類は器形と底部切り離し技法及び高台を軸にした。

A I 体部は傾きが少なく、口縁部は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は、回転ヘラ切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区21住-11がある。

A II 体部はA Iに比べてやや傾き、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区10住-5がある。

A III 体部はA IIに比べて傾き、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区18住-4がある。

A IV 体部はA IIIに比べて傾き、口縁部は強く外反する。底部は回転糸切り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区11住-2がある。

B 小形の足高高台の碗。

口縁部は外反しない。器厚は厚い。代表的な遺物に石原東遺跡D4区1住-6がある。

C 足高高台の碗。

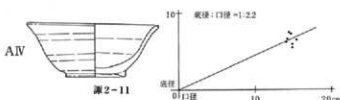
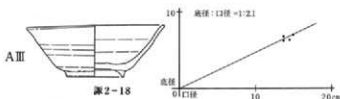
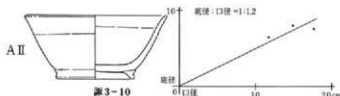
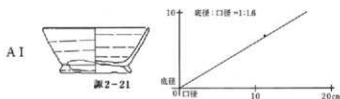
体部はほぼA IVの器形。器厚は厚い。代表的な遺物に石原東遺跡D4区1住-8がある。

D 小形の足高高台の碗。黒色土器。

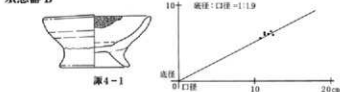
口縁部は外反しない。器厚はB、Cに比べて薄め。きれいな椀形で、成・整形が丁寧である。代表的な遺物に石原東遺跡D4区1住-5がある。

焼成は、概ねA I、A IIが還元焰、A III、A IVが酸化焰焼き、B、C、Dが酸化焰焼成である。A IIIよりA IVの方が酸化が強い。

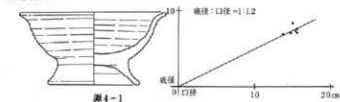
須恵器碗 A



須恵器 B



須恵器 C



須恵器 D

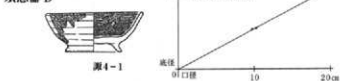


図5

羽釜

羽釜はA、B、C、D、Eの5つに分類した。

Aタイプは胎土が細かく均一。ロクロ目がはっきり観察できる。胴部には影らみがあり、罫はシャープである。還元焰焼成のものもある。

Bタイプは胎土が粗く、細かい黒色や半透明の粒子を多量に含む。胴部外面は下位から上位の縦方向のヘラ削り。胴部は胴長で、罫の接合が雑である。還元焰焼成のものもある。

C～Eタイプの胎土はやや粗く、にぶい橙色で、土師器甕に似ている。ロクロ目もなく、整形も土師器甕のような削り整形を施す。羽釜Aに似た器形をC、羽釜Bに似た器形をD、小形で胴部が球ぎみの器形をEとした。

A AI ロクロ整形。

還元焰焼成で、胎土は均一。

口縁部は内傾し、短い。

最大径は胴部上位。胴部に影らみがある。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区10住-3がある。

A II ロクロ整形。

還元焰焼成で、胎土は均一。

口縁部はやや内傾し、長い。最大径は罫と体部上位。胴部にやや影らみがある。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区4住-5がある。

A III ロクロ整形。

酸化焰焼成で、胎土は均一。やや粗い。口縁部は内傾し、短い。胴部から罫にかけての外面向外削り。

最大径は罫。胴部にやや影らみがある。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区4住-8がある。

羽釜 A

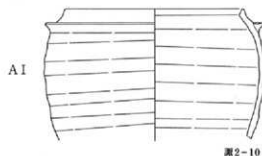


図2-10



図3-4

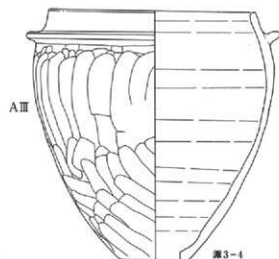


図3-4

羽釜 B

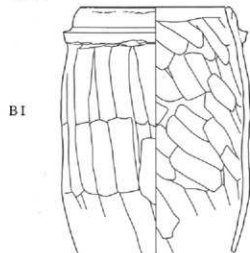
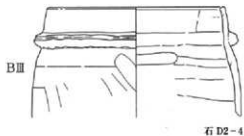
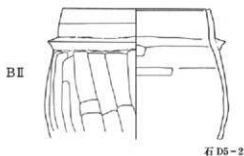


図2-10

図6

- B BI 還元焼成で、胎土は粗い。
口縁部は短い。最大径は胴部上位。胴長の器形。
鈎までの縦方向のヘラ削り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡2区10住-2がある。
- BII 酸化焙ぎみの焼成で、胎土は粗い。口縁部は直立ぎみで長い。
最大径は胴部上位。胴長の器形。
鈎までの縦方向のヘラ削り。代表的な遺物に石原東遺跡D5区2住-2がある。
- BIII 酸化焙ぎみの焼成で、胎土は粗い。
口縁部は直立ぎみで長い。
最大径は胴部上位。胴長の器形。
鈎付近までの縦方向のヘラ削り。代表的な遺物に石原東遺跡D2区4住-2がある。



- C 酸化焙焼成で、土師器甕に似た胎土、整形。Aの器形に類似する。
口縁部は内傾して短い。胴部に影らみがある。鈎より下が縦方向のヘラ削り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区1住-7がある。
- D 酸化焙焼成で、土師器甕に似た胎土、整形。Bの器形に類似する。
口縁部は直立して長い。胴長の胴部。
鈎より下が不定方向のヘラ削り。丁寧な鈎の接合。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区7住-18がある。
- E 酸化焙焼成で、土師器甕に似た胎土、整形。口縁部は内傾して短い。小形で球形ぎみの体部。鈎より下位は縦方向のヘラ削り。代表的な遺物に諏訪ノ木V遺跡3区4・7住-3がある。

羽釜 C・D・E(土師質)

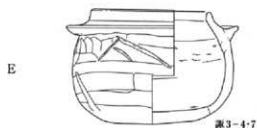
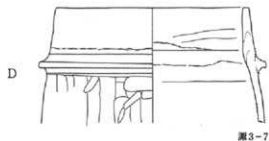
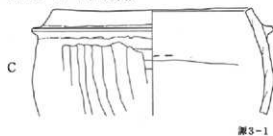


図7

3. 共存関係と期の設定

以上の5器種の分類を出土した遺構に還元し、土師器甕、羽釜A、羽釜Bを基軸に並べたものが表1である。土師器甕の形態変化を時間的変化であろうとの仮定のもとに土師器甕AからBVIとなるように並べると、全く別に分類した土師器杯もAIからBへ、須恵器杯もAIからAVへ、須恵器碗もAIからANへ並ぶ。このことから、土師器甕、杯、須恵器杯、碗のこのような形態変化が時間的推移に沿っていると考えられる。

同様に羽釜AIからAⅢ、BIからBⅢへと形態変化を時間的変化であろうとの仮定で並べると、全く別に分類した須恵器杯もAVからB・Cへ、須恵

器碗もAVからB・C・Dへ並ぶ。

以上のことから土師器甕、羽釜の形態変化を基軸に画期を求め、7期を設定する。

4. 各期の特徴

各期ごとの図示した遺物は代表する住居の一括資料を基本とするが、同時期と思われる住居のものも加えて構成した。

1期 (図8)

当期に該当するのは諏訪ノ木V遺跡2区25号住居だけである。杯AIと甕Aの出土で、全体の構成は不明である。

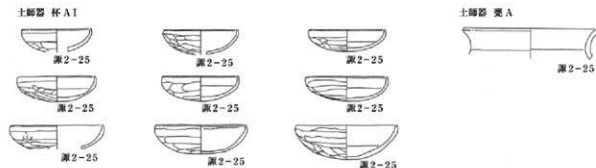


図8

2期

(図9)

諏訪ノ木V遺跡2区26号住居に代表される。土師器杯はAⅡ・C、土師器甕はBIで須恵器杯はAI

で構成される。土師器の他器種では口縁部の直立する妻がある。当期を最も特徴づけているのは、須恵器杯AIであろう。

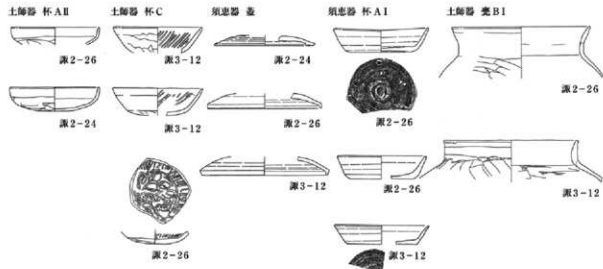


図9

3期

(図10)

諏訪ノ木V遺跡2区8住、2区21住に代表される。土師器杯はAII・III・C、土師器甕はBIで、須恵器杯はAIIa・AIIbで、須恵器碗はAIで構成される。須恵器の他器種では横瓶と大形の杯がある。当

期を最も特徴づけているのは、回転糸切りの底部切り離し技法の出現と、土師器杯底部の平底化である。供膳具では土師器が減少し、須恵器の占有率が増加する。

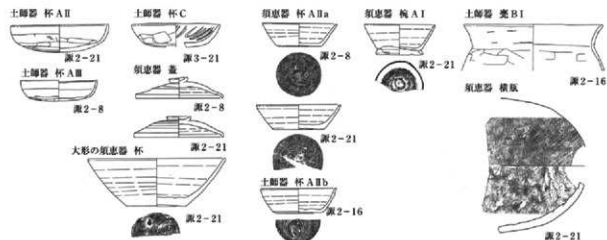


図10

4期

(図11)

諏訪ノ木V遺跡3区10住に代表される。土師器杯はAIV・B、土師器甕はBII・BIIIで、須恵器杯はAIII・AIVで、須恵器碗はAIIで構成される。須恵器の他器種では平城宮の土器分類で壺Gと呼ばれる長頸壺がある。当期は、土師器杯AIV・B、土

師器甕はBII・BIIIの2形態あり、前後に2分される可能性があるが、それらは、同一遺構内で共存し、本遺跡内で期を分離することが出来なかった。当期を最も特徴づけているのは、土師器杯Bの出現と「コ」の字口縁を特徴とする土師器甕の確立である。

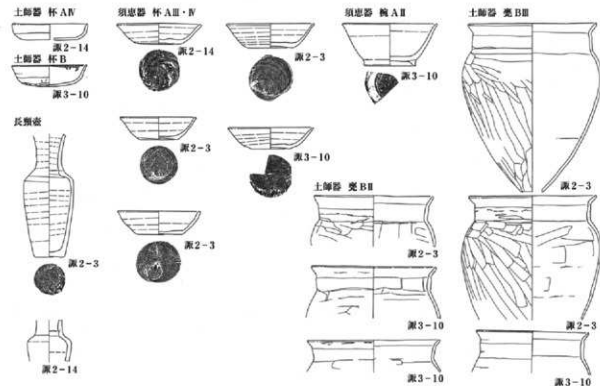


図11

5期

(図12)

源訪ノ木V遺跡2区13住、18住に代表される。土師器杯はB、土師器甕はBⅢ・BⅣで、須恵器杯はAⅣ・AⅤで、須恵器碗はAⅢ・AⅣで構成される。他器種では土師器の小型甕、光ヶ丘1号窟式期の灰釉陶器がある。当期は、土師器甕はBⅢ・BⅣ、須

恵器杯はAⅣ・AⅤ、須恵器碗はAⅢ・AⅣの2形態あり、前後に2分される可能性があるが、それらは、同一遺構内で共伴し、本遺跡内で期を分離することが出来なかった。当期を最も特徴づけているのは、土師器甕の「コ」の字の形骸化である。

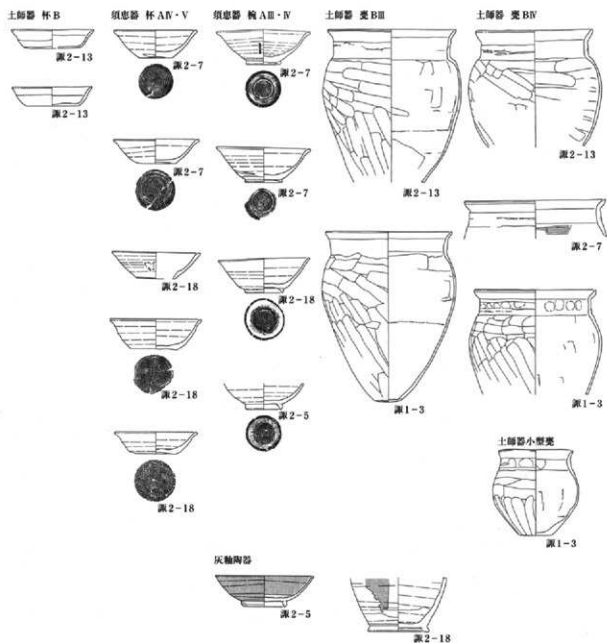


図12

6期

(図13)

諏訪ノ木V遺跡3区5住、2区10住に代表される。土師器甕はBV・BVIで、須恵器杯はAVで、須恵器碗はANで、羽釜はAI・BI・Cで構成される。他器種では須恵器小型甕・光ヶ丘1号窯式期・大原

2号窯式期の灰軸陶器がある。当期を最も特徴づけているのは、羽釜AI・BI・Cの出現と共伴である。諏訪ノ木V遺跡2区10住では羽釜AIとBI、諏訪ノ木V遺跡3区5住では羽釜BIと羽釜Cが共伴している。

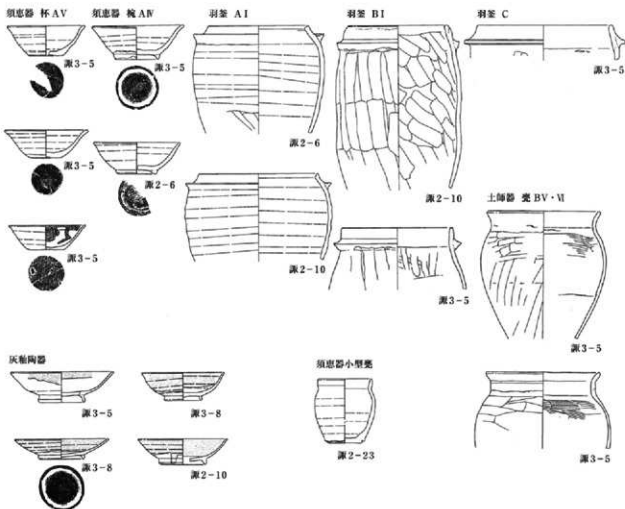


図13

7期

(図14)

石原東遺跡D2区3住、諏訪ノ木V遺跡3区4住、7住に代表される。土師器甕はBVIで、須恵器杯はB・C、須恵器碗はB・C・D、羽釜はAII・AIII・BII・BIII・C・D・Eで構成される。須恵器杯、碗には図14の3段目に図示した底部中央に孔のある小形で器高の低い杯や、大形の碗がある。他器種では須恵器甕・大原2号窯式期・虎浜山1号窯式期の灰軸陶器・

東海産の緑軸陶器がある。当期は、細分される可能性があるが、本遺跡では、同一遺構内でそれぞれが共伴し、期を分離することが出来なかった。当期を最も特徴づけているのは、須恵器碗B・C・Dの出現と6期で出現した羽釜の形態、焼成、成・整形の変化である。

第7章 調査の成果

9例があげられており、これを援用して本遺跡出土土器変遷に年代を与えると、概ね次のようになる。

1期は、出土量も少なく全体の構成が不明であるが、まとまって出土した土師器杯AⅠの形態が荒砥天之宮遺跡B区6号住居出土の土師器杯の形態と類似することから、概ね7世紀後半。2期も出土量が少なく全体の構成も不明であるが、須恵器杯AⅠの形態などが上野国分僧寺・尼寺中間地域Ⅰ区211号住居出土の須恵器杯などに類似することなどから概ね8世紀前半。3期は須恵器杯・碗の形態が山際窯発見遺物の須恵器杯・碗に類似することなどから概ね8世紀後半。4期は愛宕山遺跡4号住居に類似することから概ね9世紀前半。5期は黒熊中西遺跡10号住居出土の須恵器杯と類似することや、観音山古墳周溝内土坑出土の碗と類似する須恵器碗Ⅳと一段階前の須恵器碗Ⅲが見られることから概ね9世紀後半。6期は、羽釜の出現と観音山古墳周溝内土坑出土の碗と類似する須恵器碗Ⅳが主体になることから概ね10世紀前半。7期はこの時期から虎渓山1号窯式期の灰軸陶器が出現することから10世紀後半に比定されると考えられる。

5. まとめ

7期の時期分類を試みたところ、本遺跡では羽釜の共存関係を特筆すべき点が認められた。

羽釜は10世紀代の上野地域を代表する煮炊具であるがその器形・整形などでいくつかの型が設定されている。なかでも上野南部地域の西毛を中心とし

た「吉井型羽釜」と北部地域の「月夜野型羽釜」は、生産地と消費地の異なる地域差として捉えられている¹⁾。本遺跡の所在する渋川地区は、「吉井型羽釜」と「月夜野型羽釜」の出土地域のはほぼ中間で、どちらのタイプの羽釜も出土することが知られていた。

器形や成・整形の特徴から、本遺跡の羽釜Aが「吉井型羽釜」、羽釜Bが「月夜野型羽釜」であると考えることができるが、本遺跡には、「吉井型羽釜」や、「月夜野型羽釜」と異なる土師器に似た胎土、成・整形の羽釜C～E(以下「土師質の羽釜」)が存在することがわかった。このような羽釜は東毛地域で多く出土しており、東毛型と呼称されている。東毛型羽釜については、その生産地と消費地について未解明な部分が多く、実態は明らかでない。本遺跡出土の「土師質の羽釜」と「東毛型羽釜」の関係は不明であるが、今後明らかにしていきたい。

本遺跡では、同一遺構内で、「吉井型羽釜」、「月夜野型羽釜」、「土師質の羽釜」が共存して出土している。事例は少ないものの「吉井型羽釜」、「月夜野型羽釜」のそれぞれの初期の段階と考えられる羽釜AⅠとBⅠの共存例や、変遷を経た後のAⅡとBⅢの共存例が見られる。今後の検出例の増加を待ちたいが、この地域では「吉井型」、「月夜野型」、「土師質」3種の羽釜が、比較的長い期間共存していたと考えられる。

表2. 群馬県で年代根拠とされている遺物

	遺跡・遺構名	年代的根拠	想定される遺物の年代
1	国分寺中間地域Ⅰ区14号住居出土遺物	飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階(7世紀第2四半期)の畿内産暗文土師器杯CⅠが共存	7世紀第2四半期
2	国分寺中間地域Ⅰ区58号住居出土遺物	飛鳥Ⅲ段階(7世紀第3四半期)の畿内産暗文土師器杯CⅢが共存	7世紀第3四半期
3	荒砥天之宮遺跡B区6号住居出土遺物	飛鳥Ⅴ～平城段階(7世紀末～8世紀第1四半期)の畿内産暗文土師器杯AⅠが共存	7世紀末
4	国分寺中間地域Ⅰ区211号住居出土遺物	平城Ⅱ段階(8世紀第2四半期)の畿内産暗文土師器杯AⅠが共存	8世紀第2四半期
5	山際窯発見遺物	国分寺側施瓦と併焼	8世紀第2四半期～第3四半期
6	愛宕山遺跡4号住居出土遺物	万年通室(760年初)が共存	8世紀末～9世紀第1四半期
7	観音山古墳周溝内土坑出土遺物	貞観永宝(870年初)・寛平大宝(890年初)が共存	9世紀末～10世紀第1四半期
8	黒熊中西遺跡10号住居出土遺物	「元慶四年」(880年)銘の刷書された灰石が共存	9世紀第4四半期
9	鳥羽遺跡B区332号土坑出土遺物	土坑覆土層に茂岡B軽石(1108年降下)の純堆積がある。	11世紀末～12世紀初頭

「出土した古代の土師」展示レポート¹⁾群馬県原爆文化財調査事業団1997より引用

[4] 奈良・平安時代の遺構

笹澤 泰史

1. はじめに

石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居53軒、土坑2基、墨書土器を含む供膳具を中心とした遺物包含層(D1区遺物包含層)を検出した。このうち、住居から出土した土器は、本章[3]で記述したように1期から7期までの変遷を追うことができた。

土器の変遷をもとにすると、住居は1期から7期まで連続して存在しており、下記の通り、それぞれの集落が変遷・推移することがわかった。こうした集落を中心とした遺構の変遷を明らかにすることによって、遺跡地周辺の古代の様相が判明すると考えられる。

発掘区内のみの住居群の推移であるが、期ごとの粗密があり、仮に集落の変遷の大略を示しているとして以下を進めたい。

また、諏訪ノ木V遺跡の東に石原東遺跡D区は位置するが、諏訪ノ木V遺跡の標高約220mに対して、石原東遺跡D区の標高は約190mで、およそ30mの標高差がある。石原東遺跡D区のさらに東は緩やかに傾斜し、現在は水田域となっている。

2. 集落の変遷

I. 集落の各期について

発掘区の中で、集落が営まれるのは7世紀後半からである。それ以前は第2章(2)歴史的環境で記述したように6世紀代の火山災害によって、荒涼とした土地であったと推測される。火山災害後、周辺は諏訪ノ木遺跡1号墳¹⁾などに見られるように墓域として利用されていたと考えられ、現在までの調査では、6世紀以降から7世紀前半以前の居住や生産などの痕跡を示す遺構は見られない。

集落1期 - 7世紀後半 - (図15)

諏訪ノ木V遺跡2区25号住居1軒だけである。周辺遺跡の調査でもこの期の遺構は検出されてい

ないことから、閉村的様相が強いと思われる。

現在までの調査では、集落が営まれるのはこの時期からであると考えられる。

集落2期 - 8世紀前半 - (図16)

諏訪ノ木V遺跡2区24・26号住居、3区12号住居の3軒がある。発掘調査区内に3軒散在し、依然閉村的要素が強い。

集落3期 - 8世紀後半 - (図17)

諏訪ノ木V遺跡2区8・16・21号住居の3軒がある。2期と同じ3軒であるが、2区南の微高地に集中する傾向がある。この微高地には3期から6期までの長い間、連続と集落が営まれる。諏訪ノ木V遺跡2区21号住居は柱穴を持つ大形の竪穴住居で、集落の中心的建物であった可能性もある。

集落4期 - 9世紀前半 - (図18)

住居は諏訪ノ木V遺跡2区南の微高地に集中する傾向があり、3区の北にも2軒見られる。3期から急激に住居の増加が見られる。本遺跡の集落が本格的に営まれ始める時期である。

集落5期 - 9世紀後半 - (図19)

集落は2区南の微高地に集中する傾向があり、1区北に3軒、3区北に2軒見られる。竪穴住居に柱穴の有無や規模の差は見られない。

2区南の微高地にある2区7号住居からは「㊦(〇に囲まれた漢)」と書かれた墨書土器1点と、判読不明の墨書土器2点、合わせて3点の墨書土器が出土した。同じく2区18号住居からは、判読不明ではあるが墨書土器が1点と、権衡や鉄製紡錘車といった出土例の少ない遺物が検出された。これらの遺物は、この時期の集落の活動の一端を推測する手がかりになるとと思われる。

集落6期 - 10世紀前半 - (図20)

5期と集落の位置・規模ともそれほど変わらないことから5期から継続した集落であると考えられる。5期から6期は最も活発な集落の営みがあった

集落1期 - 7世紀後半-

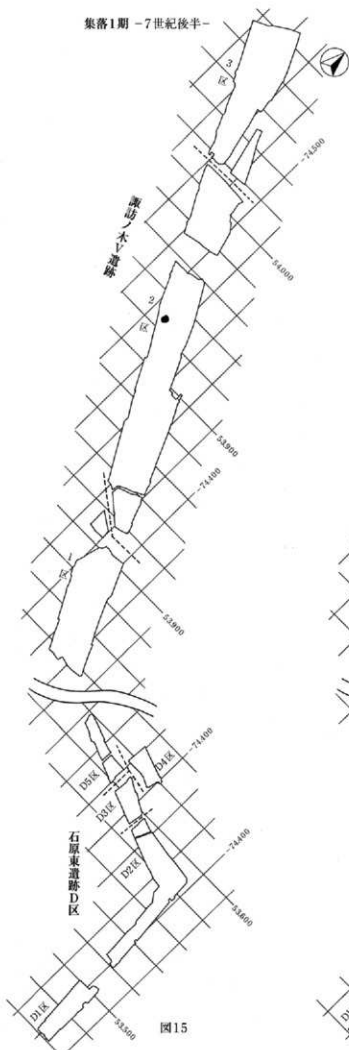


図15

集落2期 - 8世紀前半-

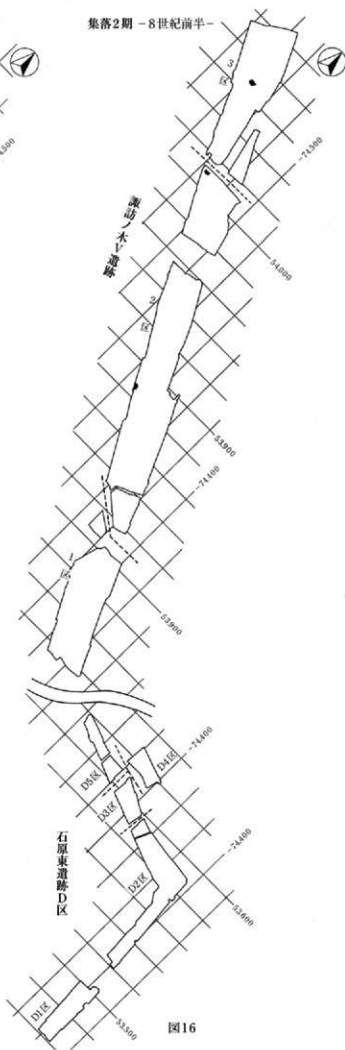


図16

集落3期 - 8世紀後半 -

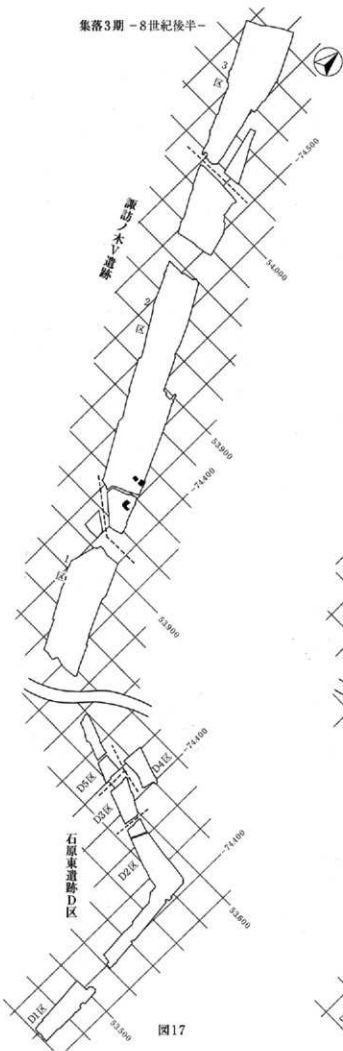


図17

集落4期 - 9世紀前半 -

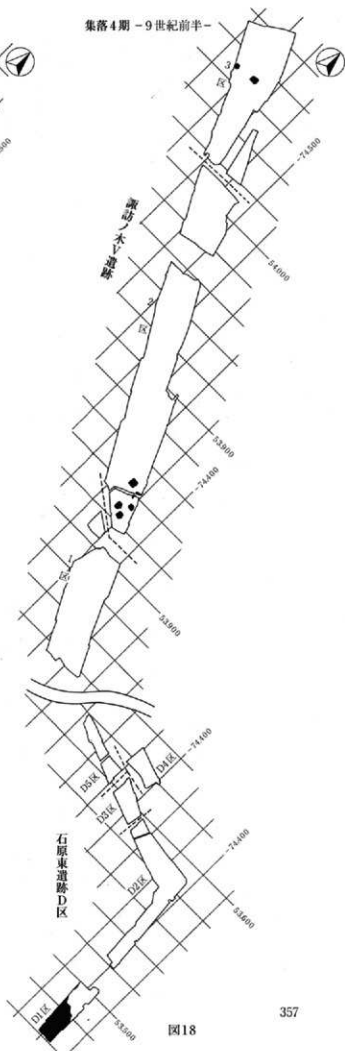


図18

集落5期-9世紀後半-

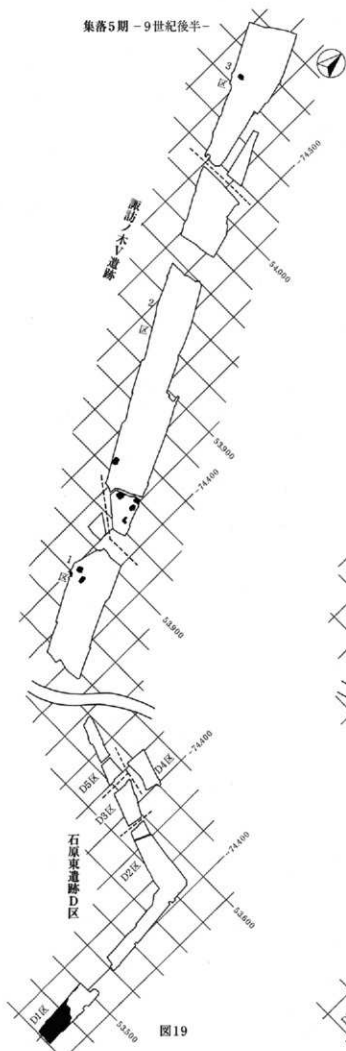


图19

集落6期-10世紀前半-

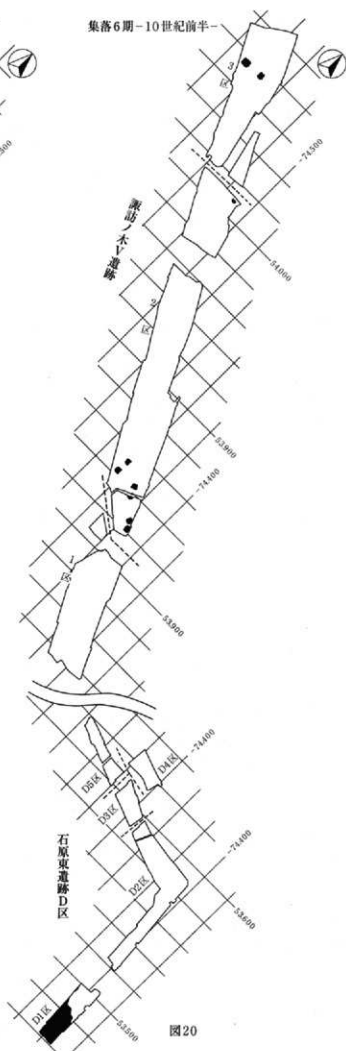


图20

集落7期-10世紀後半-

鉄関連遺物出土住居

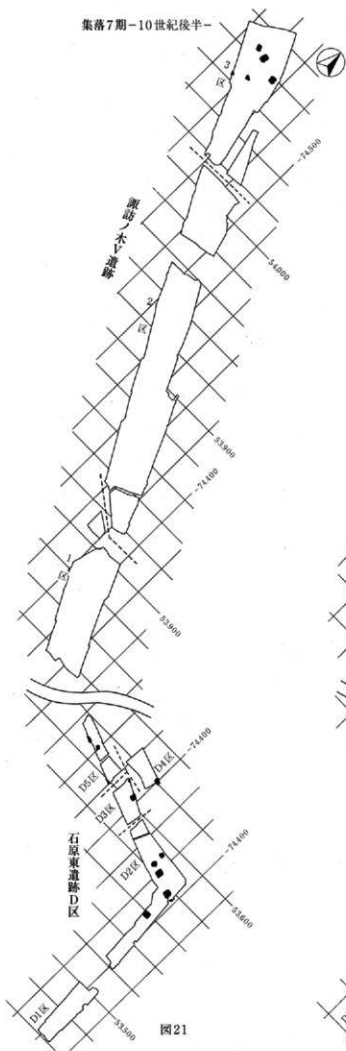


図21

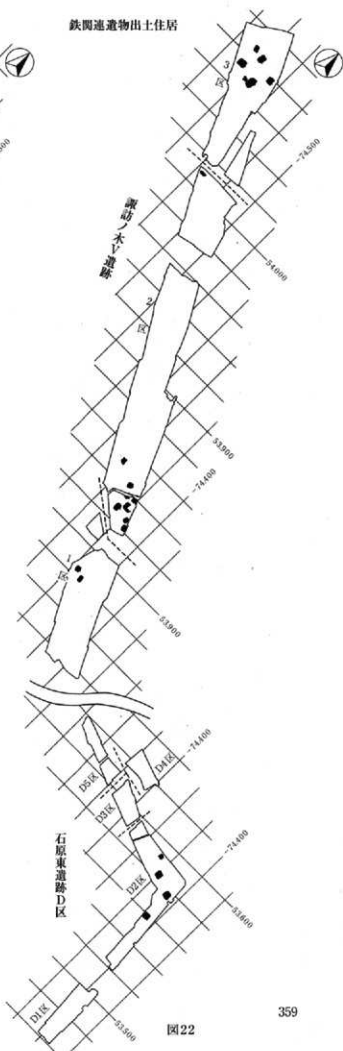


図22

と思われる。

集落7期 - 10世紀後半 - (図21)

6期まで全くなかった石原東遺跡D区に集落が出現する時期である。また、諏訪ノ木V遺跡では3期から6期まで継続した2区南微高地の集落はなくなり、諏訪ノ木V遺跡3区北に住居が集中する傾向がある。

周辺遺跡では石原東遺跡D区に東接する石原東遺跡C区において7期の竪穴住居が検出されており、本遺跡で検出された石原東遺跡D区と一連の集落と考えることができる。石原東遺跡C区も本遺跡と同様に6期以前の住居は検出されていないことから、石原東遺跡C区からD区に集落が出現するのは7期以降であると考えられる。さらに東の石原東遺跡A区では8世紀後半から9世紀後半代まで継続的に竪穴住居があり、石原東遺跡では東から西へ住居が展開する傾向が見られる。

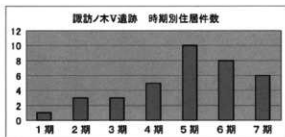


図23

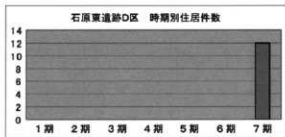


図24

3. 石原東遺跡D1区遺物包含層について

1. 概要

石原東遺跡D1区遺物包含層は唐沢川左岸に接して所在する。D1区遺物包含層から出土した遺物群は、総数約22,000点と豊富で、土師器約10,700点、須恵器約10,600点、施軸陶器547点、木器類57点を数える。

遺物の大部分は土器で、供膳具の割合が高いという特徴を持つ(図25)。本遺跡の竪穴住居出土の土器が、供膳具：煮炊具=2:1³⁾に対して、D1区遺物包含層から出土した土器は供膳具：煮炊具=12,000点：数十点と異なる割合を示す。

供膳具のうち196点は墨書土器であり、判読できる文字89点の内容は、「武」(類推含む)60点、「冫」12点、「益」3点、「上」3点、「天」2点、「有」・「山」・「中尾」・「中」・「尾」・「合」・「百」・「周」1点などがあり、80%は「武」・「冫」が占めている(図26)。

施軸陶器は、547点と多量の出土である。また、京都洛北産の3点(図32 灰緑35他)と、黒笹14号窯式期の灰軸陶器16点(図32 灰緑15他)の出土はこの遺跡を特徴づけている(図30)。京都洛北産や黒笹14号窯式期といった施軸陶器は最も早い段階のもので、国府周辺・官衙・寺院などで時折見ることのできる特異な遺物である。

木器は、農具や建築部材が見られず、曲物・挽物などの容器がほとんどである。通常腐ってなくなってしまう木器であるが、本遺跡で出土した曲物、挽物などの木器類は、土師器・須恵器・施軸陶器といった土器類とあわせて、初期平安時代の供膳形態を復元できる極めて良好な資料である。

さらにD1区遺物包含層では漆の付着した須恵器杯が出土した。これは、漆塗の際に用いられた漆パレットと思われる。こうした作業途中の須恵器杯の出土は、通常流通するとは考えにくく、本遺跡地周辺で、漆塗作業を行う漆工が存在していた可能性が考えられる。また挽物の一つは未製品の可能性が高く、この地で轆轤を使用した木工の存在の可能性を示している⁴⁾。

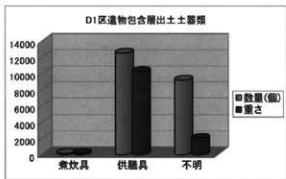


図25

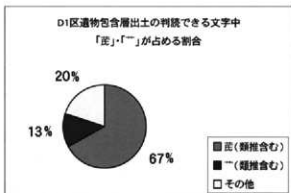


図26

II. 石原東遺跡 D1区遺物包含層出土土器の分類

住居出土の土器の分類は、土師器杯・須恵器杯・碗・土師器甕・羽釜の5器種で行ったが、D1区遺物包含層の土器は杯や碗などが中心であるので、土師器杯、須恵器杯、碗の3種類で行う。

D1区遺物包含層から出土した土器は21845点と大量であるが、形態分類までできるような土器は僅かである。報告書には器形が復元できるものと墨書土器をもれなく掲載したので、ここで分類した土器は全て報告書に掲載してあるものである。

分類記号などは、7章[3]で使用したものである。

土師器杯 (図27)

分類対象の土師器杯は19点である。内訳は、土師器杯B12点を中心に土師器杯C3点、AⅣ2点、AⅢ1点、AⅡ1点である。出土した杯の形態や土師

器杯AⅣがBに比べ極端に少ないことから、概ね4から5期の遺物群と比定できる。本遺跡では、3期(8世紀後半)から須恵器の占有率が増加するが、6期(10世紀前半)になると土師器杯は完全にみられなくなる。D1区遺物包含層の土師器杯は、本来占有率の高い、2期から3期(8世紀前半から後半)のものがほとんどなく、本来占有率の低い4期から5期(9世紀前半から後半)のものが突出している。

以上のことから、D1区遺物包含層は概ね4期(9世紀前半)に形成され始めたことがわかる。

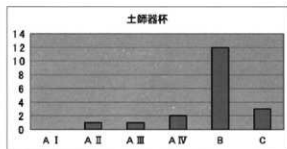


図27

須恵器杯 (図28)

分類対象の須恵器杯は40点である。内訳は、須恵器杯AⅣ15点、AⅤ12点を中心に、AⅢ8点、AⅡb3点、AⅠ1点、Bb1点である。AⅢ、AⅣ、AⅤは、4期から6期(9世紀前半から10世紀前半)を代表する須恵器杯である。B、Cといった7期(10世紀後半)の須恵器杯が、ほとんどみられないことから、D1区遺物包含層は4期から6期(9世紀前半から10世紀前半)までに形成されたと考えられる。

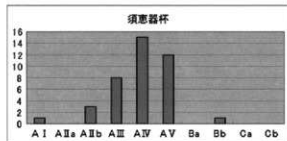


図28

須恵器碗 (図29)

分類対象の須恵器碗は22点である。内訳は、須

第7章 調査の成果

須恵器AⅢ10点、AⅣ7点を中心に、AⅡ3点、AⅠ1点、C1点である。AⅡ、AⅢ、AⅣは4期から6期(9世紀前半から10世紀前半)まで見られる須恵器碗である。須恵器杯と同様、B、C、Dといった7期(10世紀後半)の須恵器碗が、ほとんどみられないことから、D1区遺物包含層は4期から6期(9世紀前半から10世紀前半)までに形成されたと考えられる。

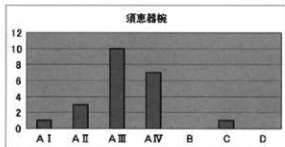


図29

灰軸陶器 (図30)

灰軸陶器は542点出土し、出土土器全体の4%を占める。そのうちの232点は、器形・軸調などにより、生産地を分類することができた。分類は当事業団神谷佳明の教示を得た。

分類した結果は図30の通りで、黒笹14号窯式期・光ヶ丘1号窯式期・大原2号窯式期が中心である。本遺跡の4期から6期(9世紀前半から10世紀前半)に相当する。

また、黒笹14号窯式期の灰軸陶器が16点と多く出土したことも本遺跡の特徴である。黒笹14号窯式期は、本遺跡の4期(9世紀前半)に相当し、緑軸陶器では、ほぼ同じ時期の京都洛北産3点が出土した。

Ⅲ. 墨書土器が形成された時期

D1区遺物包含層出土の土師器杯・須恵器杯・碗・灰軸陶器を以上の様に分類した。分類の結果、どの器種も概ね4期から6期(9世紀前半から10世紀前半)に比定された。

また前述したとおり、D1区遺物包含層からは196点の墨書土器が出土し、判読可能なもののうち、80%が「茂」・「𠄎」と判読できた。「茂」・「𠄎」と墨

書されているもので形態分類できるものは43点あるが、4期(9世紀前半)の器形に墨書されたものが10点あり、その他33点は5期から6期(9世紀後半から10世紀前半)の器形に墨書されている(図31)。

以下のことから、D1区遺物包含層からは、土師器約10,700点、須恵器約10,600点、施軸陶器547点、木器類57点の22,000点を超える大量の遺物が出土したが、そのほとんどすべてが4期から6期(9世紀前半から10世紀前半)の150年間に形成され、その間「茂」という同じ文字が、書き継がれていたことが判明した。

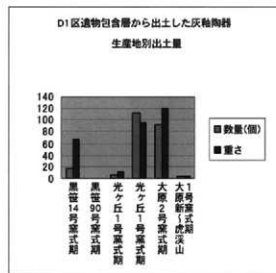


図30

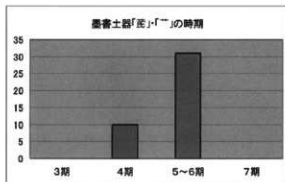


図31

4. まとめ

I. これまでにわかったこと

7章[4]Ⅲで述べたD1区遺物包含層出土遺物の特色をまとめると以下の通りになる。

- ①供膳具の出土の割合が高い。
- ②京都洛北産の緑釉陶器や黒磐14号窯式期の灰釉陶器を含む多量(547点)の施釉陶器が出土した。
- ③同一文字(茂)のまとまった墨書土器が出土した。
- ④漆の付着した須恵器杯や未製品の挽物が出土した。

そして、D1区遺物包含層から出土した22,000点を超える遺物は、9世紀前半から10世紀前半の150年間に形成され、その間「茂」という同じ文字が、書き継がれていたことが判明した。

また、これまで集落の変遷・D1区遺物包含層の形成時期を検討してきたが、①集落が本格的に展開され始める時期とD1区遺物包含層が形成され始める時期が、9世紀前半で一致すること、②D1区遺物包含層から450m離れた台地上の住居(諏訪ノ木V遺跡2区7号住居)から、「㊦(○に囲まれた茂)」と書かれた墨書土器を含む数点の墨書土器が出土したことから、D1区遺物包含層と諏訪ノ木V遺跡の台地上の集落は、密接な関係にあると考えられる。

II. 類例遺跡の諸相

以下では、D1区遺物包含層出土遺物の①から③の様な特徴を持つ遺跡を群馬県下を中心に引き上げ、比較することによって、本遺跡の性格に迫りたい。

①供膳具の割合が高い遺跡

下東西遺跡

下東西遺跡は、群馬県前橋市青梨子町、群馬郡群馬町北原に位置し、古代上野国では「群馬郡」に比定される。発掘調査では、区画溝とそれに伴う掘立柱建物群が検出され、溝の中から12,000点あまりの多量の供膳具を中心とした土器が出土した。土器群は、土師器杯・碗・皿類、暗文土器、畿内産土器、黒色土器、土師器甕類、須恵器蓋・杯・碗・皿・瓶・

壺・甕、硯、羽口、砥石、鉄製品が見られる。土師器の暗文杯や須恵器の蓋を持つ高台付き杯、大形の長頸壺、円面硯など一般の集落ではあまり出土しない遺物がみられる。下東西遺跡で検出された土器群に伴う掘立柱建物群は、7世紀終末から8世紀初頭の短期間に存在した官衙の様相を取り入れた居宅であると考えられている⁵³⁾。下東西遺跡東南1.5kmには、山王廃寺がある。山王廃寺は7世紀後半には創建され、11世紀半ばまで続いた「放光寺」であったと考えられている。周辺には上野国府、国分寺があり、律令制下の上野国の中心地に隣接している。

小八木志志貝戸遺跡

小八木志志貝戸遺跡は群馬県高崎市小八木町に位置し、古代上野国では「群馬郡」に比定される。発掘調査では、下東西遺跡と同様に区画溝とそれに伴う掘立柱建物と井戸が検出され、井戸の周辺からは、多量の供膳具を中心とした土器が出土した。土器群は土師器・須恵器杯・碗を主体に、長頸壺・平瓶・甕などが出土している。供膳具の割合が高い出土で、その中心は土師器や須恵器である。小八木志志貝戸遺跡で検出された土器群に伴う掘立柱建物群は、8世紀前半から8世紀第3四半期までの官衙の様相を取り入れた富豪層の居宅であると推定されている⁵⁴⁾。小八木志志貝戸遺跡西南1.5kmにある大八木屋敷遺跡では八脚門をもつ欄列と溝で区画された掘立柱建物群が検出され、「上野国交代実録帳」に見られる「八木院」に想定されている。大八木遺跡に隣接する融通寺遺跡では300軒近い堅穴住居、熊ノ堂遺跡では200軒以上の堅穴住居が検出されており、大八木屋敷遺跡周辺が古代八木郷の中心的地域であったと考えられている。

歴史的環境で述べた通り、本遺跡は、「和名類聚抄」による「群馬郡有馬郷」に属すると推定される。

本遺跡南1.5kmには有馬廃寺遺跡が所在し、有馬郷の中心地は本遺跡南1.5kmに所在する有馬廃寺周辺であったと推定されている。有馬廃寺周辺の有馬桑里遺跡・八木原沖田遺跡では、8世紀後半の集

落、さらに南の半田中原南原遺跡では8世紀前半代を中心に展開する集落が検出されている。

ここでは、本遺跡と同様、古代の中心地から約1.5kmほど離れた遺跡で供膳具が多量に出土した下東西遺跡と小八木志志貝戸遺跡を取り上げた。いずれも区画溝や井戸周辺からの出土で、周辺には供膳具に伴うと思われる掘立柱建物群などの居宅が検出されている。出土遺物も7世紀終末から8世紀初頭、8世紀前半から8世紀第3四半期と、本遺跡出土の土器群より古く、出土位置も異なるので、単純に比較できないが、下東西遺跡や小八木志志貝戸遺跡のように本遺跡でも掘立柱建物群が調査地に存在する可能性が考えられる。

②京都市北産の緑軸陶器や黒笹14号窯式期の灰軸陶器を含む多量の施軸陶器が出土した遺跡

下東西清水上遺跡

下東西清水上遺跡は、群馬県前橋市青梨子町に位置し、古代上野国では「群馬郡」に比定される。発掘調査では、7世紀から10世紀の集落と8世紀初頭の比較的規模の大きい掘立柱建物が検出されている。施軸陶器は奈良三彩香炉口縁部1点、緑軸陶器碗・輪花碗・稜碗・皿・段皿・輪花皿・香炉51点、灰軸陶器碗・輪花碗・稜碗・小碗・皿・段皿・折縁皿・小皿・耳皿・長頸壺・短頸壺・小瓶・平甕1,162点が出土している。灰軸陶器は、碗・皿などが圧倒的に多く、瓶類は少ない。灰軸陶器時期判別可能な838点を見ると、黒笹14号窯式期3点、黒笹90号窯式期から光が丘1号窯式期156点、大原2号窯式期652点、虎溪山1号窯式期27点と、圧倒的に大原2号窯式期のものが占めている。緑軸陶器は、ほとんど小片であるが、9世紀後半から10世紀後半までのもので、産地も畿内洛西・篠・近江・東海猿投・尾北・美濃の各地に及んでいる。神谷(1998)は、下東西清水上遺跡で検出された集落を山王庵寺の北側で総社古墳群の西側に位置することから、「山王庵寺に関係する豪族層がそれに付随する集落ではないか」と推定している。

下芝五反田遺跡

下芝五反田遺跡は、群馬県群馬郡箕郷町に位置し、古代上野国では「群馬郡」に比定される。発掘調査では、住居141軒・建物6棟・11世紀代の水田が検出されている。住居は8世紀のもが7軒で、134軒が9世紀以降に比定される。施軸陶器は5,459点出土し、集落遺跡としては際立つ量である。内訳は緑軸陶器碗・稜碗・皿・耳皿24点、灰軸陶器碗・皿・輪花碗・稜碗・小碗・段皿・輪花皿・折縁皿・耳皿5,435点である。灰軸陶器は碗・皿が大部分である。時期判別可能な838点を見ると、黒笹14号窯式期3点、黒笹90号窯式期から光が丘1号窯式期156点、大原2号窯式期652点、虎溪山1号窯式期27点と、圧倒的に大原2号窯式期のものが占めている。緑軸陶器は、9世紀後半から10世紀後半までの時期のもので、10世紀代に多く集中している。産地は、京都産・東海産に比定される。

また、遺跡からは「犬甘」と読める印が出土したが、高島(1999)は、「犬甘」を「犬飼」と同意語とし、他に「犬」とある墨書土器が出土していること、「続日本後紀」承和10年(843)の史料に、新田郡の犬養子羊・真虎兄弟の名が見られることなどから、付近一帯に犬養氏の居住を想定している。また神谷(2004)は、「自己の権利・権限・所有を表す印章は、惣田地を管理・運営していた者が使用したのではないか」と推定している。

下芝五反田遺跡東南1.5kmには、古代八木郷の中心的地域である大八木屋敷遺跡があり、神谷(2004)は、「下芝五反田遺跡の惣田地は八木郷の豪族層・富豪層が主導したと考えられる。」としている。また神谷(2004)は、下芝五反田遺跡出土の大量の食膳具を「農繁期における労働力集約のための魚酒饗応のために使用したのではないか」と想定している。

波志江西屋敷遺跡

波志江西屋敷遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町に位置し、古代上野国では「佐位郡」に比定される。

発掘調査では、12棟の掘立柱建物が検出された。掘立柱建物群は出土している遺物や重複する遺構から9世紀中頃に比定されている。施釉陶器は25点出土し、黒笹14号窯式期が全体の40%と高い比率で、黒笹14号窯式期から光が丘1号窯式期のものがある。他に大形の京都産緑釉陶器も出土した。また、波志江西屋敷遺跡周辺の今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡・西太田遺跡などでは奈良・平安時代の鉄製産関連遺構が検出されており、波志江西屋敷遺跡でも20点の刀子などの鉄製品が、羽口や鉄滓とともに出土している。8世紀後半に比定される住居から「金」「太」と墨書された土師器杯2点と、9世紀末から10世紀初頭に比定される住居から「東」と刻書された須恵器杯・碗それぞれ1点が出土している。鉄製産関連遺構が周辺で見られる点や墨書・刻書土器が出土している点も本遺跡と共通する点である。

遺跡は縄文の埋立1基と古墳時代後期の竪穴住居1軒、8世紀代が2軒検出されているだけで、集落が展開するのは9世紀以降である。

神谷(2004)は集落の発跡時期や出土遺物から「波志江西屋敷遺跡は、平安時代初頭に富豪層によって空地地の墾田を目的に形成された集落である。」と想定している。

京都洛北産の緑釉陶器や黒笹14号窯式期といった施釉陶器は最も早い段階のもので、国府周辺や官衙、寺院などで時折見ることのできる特異な遺物である。田中(2003)によれば、「こうした京都産の緑釉陶器は一旦平安京などの緑釉陶器の大消費地を経由して、東国へ流入していると考えられ、国司や王臣御使、僧侶などによって運搬されたと考えられる。」という。本遺跡D1区遺物包含層出土の黒笹14号窯式期灰釉陶器皿の底部外面に「茂」と書かれたものがある(図32 灰緑15)。これが9世紀前半代に搬入され、墨書されたものだとすれば、後述の通り、本遺跡の所在する「群馬郡有馬郷」の中心地である南1.5kmに位置する有馬廃寺遺跡や有馬郷を営

む中心氏族(有馬氏)との関わりが推測される。

③まとまって墨書土器が出土した遺跡

堀越中道遺跡

堀越中道遺跡は、群馬県勢多郡大胡町に位置し、古代上野国では「勢多郡」に比定される。発掘調査では、奈良・平安時代の住居39軒・掘立柱建物38棟・10世紀後半以降の道路などが検出された。堀越中道遺跡では、古墳時代前期以降、集落の断絶が見られ、再び8世紀中頃に集落が形成される。その規模は9世紀に最盛期を迎え、10世紀に縮小傾向になる。文字関係の資料では、墨書土器・刻書土器・刻書紡錘車・焼印がある。出土した墨書土器は43点で、判読可能な文字が15点あり、その内容は「立」8点・「下殿」1点・「山権」1点・「小林」1点・「平」1点などがある。「立」は焼印と同一文字で、所有・所属・識別に「立」という字が使用されていたと考えられている。掘立柱建物は、大形の礎石を持つ竪穴住居を囲むように配置されており、この住居からは、「立」の墨書土器の他に、黒笹14号窯式期を含む灰釉陶器・鉄製品・羽口などが出土している。「下殿」の墨書土器や石製瓦方・刀金具の出土から「下級官人」が推定され、神谷(2004)は「8世紀後半代に下級官人であった富豪層が継続的に居宅を構えた」と想定される。」としている。

書上上原之城遺跡

書上上原之城遺跡は、群馬県伊勢崎市豊城町に位置し、古代上野国では「佐位郡」に比定される。発掘調査では、8世紀前半から11世紀の竪穴住居47軒と9世紀代の掘立柱建物群が検出された。竪穴住居は7世紀のものは僅か、8世紀後半から9世紀代のものが主体である。総数116点の墨書土器が出土したが、そのほとんどは9世紀代の掘立柱建物を取り巻く竪穴住居で検出され、掘立柱建物の柱穴内からも出土した。墨書土器の内容は、「金」19点・「布」15点・「福」6点などである。所有・所属・識別に「金」、「布」、「福」という字が使用されていた

と考えられている。

古志田東遺跡

古志田東遺跡は、山形県米沢市林泉寺に位置する。発掘調査では、9世紀後半から10世紀初頭にかけての大形掘立柱建物1棟を含む掘立柱建物群・河川跡・船着き場遺構が検出された。河川跡からは大量の墨書土器を含む供膳具や木簡などが出土した。検出された土器を分類すると、大半は供膳具で全体の90%近くを占め、煮炊具は10%に満たない。

古志田東遺跡では、墨書土器が433点出土した。その内容は「□」133点・「木」66点・「東」15点・「山田」12点・「達」5点・「吉成」「欠」3点・「吉」「生」「布」「伍万」2点・「太」「福」「千万」「山田西」「山西」1点などである。調査報告書で墨書土器について考察した荒木(2001)は、出土した墨書土器群に使用痕などの諸痕跡があることから、「遺跡の主が徴発した人々に対して給食活動を行った際の土器群である」と推定している。また、多くの木簡も出土したが、なかでも遺跡の性格を特徴づける2・3号木簡は、田植えに関わる労働力徴発を示す木簡として注目を浴びており、三上(2003b)は奈良時代の越前国東大寺荘園関係資料にある農繁期の田植労働に伴う大規模な飲食儀礼と併せて、出土した大量の供膳具を、木簡が描く遺跡の主が徴発した労働者に対してねぎらいのための饗宴を開いた際に使用した土器ではないかと位置づけている。さらに三上(2003b)は、大量の墨書土器の出土を「農繁期の共同労働の際の儀礼で行う魚酒の神への供献と共同飲食こそが、土器に墨書するという非日常行為を必然ならしめたのではないだろうか。」と推測している。

発掘された掘立柱建物は7棟あり、母屋・工房・馬小屋・倉庫・住宅などに推測されている。

本遺跡D1区遺物包含層出土の墨書土器については、7章(5)「石原東遺跡・諏訪ノ木V遺跡出土の墨書・刻書土器について」(高島英之)で詳しく述

べているのでそちらを参照していただきたい。高島(2004)によると、本遺跡出土の196点の墨書土器のなかで判読可能なもののうち、67%を占める「茂」という文字は「茂」という文字と同義である可能性が高いという。「茂」という文字は吉祥的な文字として、類例も少なくないとのことで、本遺跡の様に谷部や河川で出土する例は全国的にも多く見られ、水に関わる祭祀・儀礼等に伴うものと推測できるとのことである。そして県内の類例としては、二之宮宮下遺跡の状況に最も近いという。

二之宮宮下遺跡は、前橋市二宮町に位置し、遺跡の西700mに位置する二之宮洗橋遺跡出土の8世紀代の須恵器に「芳郷」の墨書があることから、古代上野国では「勢多郡芳賀郷」にみられている。二之宮宮下遺跡では墨書が131点出土したが本遺跡同様にはほとんどが谷部包含層からの出土である。131点中、全く判読できないものが52点あるが、「天」を意味する則天文字・「得万」・「神」・「正合」・「成」・「得」・「雄」・「矢」・「乙」・「大」・「人」・「太」・「内」などがみられ、「天」を意味する則天文字が33点と最も多い。高島(1994)は、則天文字と他の通有の文字を組み合わせている例も見られることや、地方においては則天文字の全てが一語として伝わっているのではなく、単発的に伝播している可能性が高いことから、一種マジカルな威力をもった特殊な記号的文字として使用していたのではないかと推測している。また、その他の文字も各地の出土例から吉祥的・呪句的な意味が考えられるとしている。

高島(2004)は7章(5)の中で、「茂」という文字は、この場所で水に関わる何らかの祭祀・儀礼を行った際に使用したものであるとし、①「茂」という文字が圧倒的に高い割合で出土していること、②450m離れた諏訪ノ木V遺跡2区7号住居で「茂」と書かれた墨書土器が出土していること、③同一文字の使用期間が150年間という長い期間にわたっていることから、「茂」=「茂」は、数百年・数世代存続した包括的な大集団が標識的の文字として使用した文字と解釈している。

III. DI区遺物包含層の性格

ここまでDI区遺物包含層の特色である①供膳具の割合が高い遺跡、②京都洛北産の緑軸陶器や黒笹14号窯式期の灰軸陶器を含む多量(547点)の施軸陶器が出土する遺跡、③同一文字のまとまった墨書土器が出土する遺跡を概観してきた。

①で指摘した下東西遺跡・小八木志志貝戸遺跡のような供膳具の割合が高い遺跡は、居宅遺構の可能性が指摘されている。堅穴住居のような遺構であれば煮炊具の割合が高くなり、本遺跡を例に挙げれば、供膳具：煮炊具=2:1程度である。これに対してDI区遺物包含層は、供膳具：煮炊具が12000点：数十点と、供膳具が非常に高い割合を示す遺跡は、給食行為の際に使用されたものであると推定できる可能性もある。また、発掘調査区内では検出されなかったが、例示した遺跡の様な居宅が周辺に存在していた可能性も考えられる。

次に②で指摘した下東西清水上遺跡・下芝五反田遺跡・波志江西屋敷遺跡のような京都洛北産の緑軸陶器や黒笹14号窯式期の灰軸陶器を含む灰軸陶器の多く出土する遺跡は、各地の中心地と関わりのあった遺跡と推測できる。田中(1995)によると、武蔵国では、通常の堅穴住居から出土する灰軸陶器の量は、堅穴住居100軒に対し、10点以下という実態であるという。このデータを援用すれば、本遺跡の547点という灰軸陶器の出土量は、通常の堅穴住居の遺構であれば5470軒分ということになり、堅穴住居から廃棄されたものとは考えにくい。一般的にこの時代の灰軸陶器は、ハレの器とされており、何らかの祭祀・儀礼行為に際して使用されていたものと考えられる。また、黒笹14号窯式期の灰軸陶器や、京都洛北産の緑軸陶器は、国府周辺や官衙・寺院などで時折見ることのできる特異な遺物で、本遺跡では、有馬郡中心地との関わりが推測できる。

最後に、③であるが、本遺跡から出土した墨書土器群は、古志田東遺跡で指摘されている使用痕といえるような痕跡が確認できなかった。土器に何らか

の摩耗痕があるが、筆者の観察では使用痕なのか廃棄後の摩耗によるものなのか判断することができなかつたのである。しかしながらDI区遺物包含層から出土した約12000点の供膳具のうち墨書土器が196点とすべての供膳具の2%程度であること、煮炊具が少量であるが含まれること、播粉木などの食事が出土したこと等の状況から、本遺跡でも、煮炊きを伴う共同飲食行為が行われていた可能性が指摘できるかもしれない。

神谷(2004)は、森公章氏の以下の富豪層の概念に当てはめ上野における富豪層を検証した。

- a. 膨大な稲穀保有とそれを支える魚酒要応などによる農業経営
- b. 出挙による致富活動の展開
- c. 出挙活動に関しては返済不能者の土地を質として取り上げ、上田を集積
- d. 農業経営面以外の活動では膨大な銭貨の貯蓄
- e. 馬の購入などによる交易活動として、流通面での幅広い範囲に活動
- f. 武力保持
- g. 山野占有の活動

神谷(2004)は「古代上野の富豪層」でbからdは、考古史料の面から実証するのは難しいとしながらも、升や権衡の保有から出挙については実証できる可能性を示した。また、下芝五反田遺跡・清里陣馬遺跡・三ツ寺天下IV遺跡・本遺跡などの多量の施軸陶器をはじめとする供膳具の遺物群が、大量の労働力の集約を行う際に行われた要応に対する食膳具であるなどと指摘し、富豪層の要素を遺跡のなかから抽出した。

本遺跡では掘立建物等の遺構が検出されなかったことから、IIで取り上げた類型遺跡と単純に比較できないが、発掘範囲外に存在する可能性は十分あり、神谷(2004)の指摘するような、魚酒要応行為の際の食膳具と推測できる可能性もある。ただ高島(2003)は、「古代官衙・集落と墨書土器」の中で、古志田東遺跡で指摘された様な「農繁期の共同労働に儀礼の際に行う魚酒の神への供献と共同飲食」は、

祭祀・儀礼行為の中の儀礼部分にあたるという考えを示しており、これを受ければ、三上(2003b)や神谷(2004)の指摘するような共同飲食行為も高島(2003)の言う祭祀・儀礼行為の中の儀礼行為に含めて考えることができるかもしれない。

富豪層による田植えの時の労働力集約のための魚酒宴応行為が行われていた可能性は、石川県加茂遺跡出土の勝示札から、平川(2001)にも指摘されている。その勝示札は農業に励むべきことや禁止事項などを書いて人々に公示した文章で、加茂遺跡出土のものは、官司の意思や命令を広く伝達する種類のものと考えられている。この中の第2条に「農民がほしいままに魚酒を飲食することを禁ずる。」という一文があるが、これは「単に農民に対する贅沢の禁止ではなく、8世紀後半頃から社会問題となった富豪層による労働力独占に対する警告と理解できる。」と平川(2001)は指摘する。すなわち「類聚三代格」巻十九、延喜九(790)年四月十六日太政官符には、

(前略)凡そ魚酒を制するの状、頻年行い下すこと已に訖んぬ。聞くならく、この頃畿内の国司、格旨に違わず、曾て禁制なし。茲に因りて殷富の人、多く魚酒を蓄え、既に産業の就き易きを棄う。貧窮の輩、僅かに蔬食を弁へ、遷りて播種(ひく)の成し難きを憂う。是を以て、貧富共に競いて已が家資を竭し、彼の田夫に喫わしむ。百姓の弊、斯より甚だしきは莫し。(後略)

とある。平川(2001)はこの一節を「富豪層は財力によって魚酒を準備し、貧しい農民を集めて、田植えを順調にできるが、貧しい農民は自らの田植えの時期を逃してしまい、不作を招いてしまうのであろう。この太政官は、そうした富豪層による魚酒の誘いに安易にのるような行為を憤むように命じたものである。」と指摘している。また平川(2001)はこの勝示札の内容は、宛所と郡司署名などをのぞくと普遍的内容であって、全国各地に掲示された可能性が高いとしている¹⁷⁾。

5. おわりに

これまで、本遺跡発掘区内から出土した土器の変遷を明らかにすることによって、堅穴住居の変遷を追い、D1区遺物包含層の性格に迫る試みを行ってきたが、最後に周辺遺跡をもう一度見直すことによって、本遺跡周辺の奈良・平安時代の様相を推測してみたい。

本遺跡は、「和名類聚抄」による「群馬郡有馬郷」に所在する。本遺跡は有馬郷寺、有馬条里から茂沢川を挟んで北500～600mに位置し、有馬郷の中心地から少し外れる位置にある。有馬郷の中心地とされる有馬郷寺周辺地域は、「日本書紀」や「和名類聚抄」にみられる「阿利真君」の支配地と推定され¹⁸⁾、古くは弥生時代からの絶好の水田可耕地であった。

石原東遺跡周辺は、唐沢泥流堆積物を唐沢川が開削した低地部であるが、石原東遺跡D1区では、僅かではあるが、Hr-FP(2次堆積)下水田が検出され、古墳時代(Hr-FP降下以前)には水田域があったことが判明した。しかしながらHr-FP降下以降、8世紀代までは、遺構らしい遺構が検出されておらず、現在までの調査結果を踏まえると、Hr-FP降下以降は、概ね8世紀後半以降から集落が展開しているようである。石原東遺跡周辺の低地部の集落の展開は荒木(1995)が指摘する様に、東から西、つまり低位置から高位置へ集落が展開しており、今回報告する石原東遺跡D区では、羽釜を伴う10世紀後半以降から集落が展開している。

諏訪ノ木V遺跡周辺は、唐沢泥流堆積物によって形成された水はけのよい扇状地上の地形で、水田稲作などの生産域には不向きである。さらにHr-FP・Hr-FPの火山災害により、古墳時代の遺跡地周辺は、墓域として利用されていたようである。ただしこの6世紀代の噴火によってもたらされた火山灰や軽石の中には良質な砂鉄が含まれていたために、8世紀中頃以降には、金井製鉄遺跡や中筋遺跡に見られるような鉄生産が行われていたことが知られている。さらにそれ以降は、周辺遺跡で鉄生産に関わる多くの遺構がみられ、大塚(1993[渋川市誌])

によって「国司支配の時代を経て、その（鉄生産）技術は民間に伝播され、それぞれ個々の集落にひろがっていった様子がわかる。」¹⁰と指摘されているのである。

諏訪ノ木V遺跡では鉄関連遺物が多数出土した。遺物が出土した遺構は8世紀後半から10世紀後半まで見られ、鍛錬鍛冶遺構を伴う堅穴住居も数件確認できる。鉄関連の遺物が出土した堅穴住居は図22で示したとおりであるが、台地上で活発に鉄生産が行われていたことが推測できるのである。

また、鉄生産には多量の炭生産が想定出来る。前述したように、D1区遺物包含層から出土した未製の木製品や漆の付着した容器は、この地で轆轤による本地生産や漆器生産が行われていたことを窺わせ¹⁰、「茂」を使用した集団の活動が山野にもあったことが推測できるのである。

本論脱稿直前に、荒木勇次氏より、渋川市教育委員会が現在整理中の石原東遺跡E区8号住居から出土した「茂」と判読できる墨書土器を見せていただいた。詳しい遺構の時期などは本報告を待ちたいが、これがD1区遺物包含層で検出された「茂」と同じ性格のものであれば、「茂」という文字を使用した集団は、D1区遺物包含層から北西に450m離れた諏訪ノ木V遺跡2区7号住居から、東に400m離れた石原東遺跡E区8号住居までの広い範囲に及んでいた可能性が想定でき、台地部から低地部まで広範囲を包括した集団として捉えることができるかもしれない。

以上のことから、この集団が水田稲作から鉄生産・漆工・木工といった多様な技術集団を抱えていた可能性が指摘できるのである。

また、D1区遺物包含層で多量に出土した墨書土器に書かれた「茂」は、「茂」と判読できる¹¹が、本遺跡の南600mにある茂沢という地名、そこに流れる茂沢川の「茂」という文字との関連が注目される。吉祥的な意味合いが指摘される「茂」であるが、文字史料の少ない地域史のなかでこうした地名との一致は興味深いところである¹²。

報告する石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡は渋川市石原に所在する。調査を開始すると、まさに地名通りの石の原が出現した。地理的環境でも述べた様に、この石の原は厩沢泥流堆積物という水沢山の山体崩落に伴う堆積物である。今回の調査では、この直上から縄文草創期の石器が発見され、As-YP（約13～14万年前）以降、草創期（約12万年前後）以前に水沢山の山体崩落が起こったことが判明した。この堆積物に覆われた遺跡地周辺は、こうした地理的環境から「和名類聚抄」による「群馬郡有馬郷」に所在しながら、本遺跡南に所在する有馬条里田園・有馬庵寺周辺の中心地域とは異なる土地利用をされてきた様である。

多様な技術集団が属していた可能性がある本遺跡の「茂」を使用した集団は、低地部では稲作を行い、台地部では鉄生産・木工・漆工を行っていたことが推定できる。「茂」を使用した集団は、5世紀前半から10世紀後半の150年という長期間、この地域で活躍していたのではないだろうか。

謝辞

今回、本遺跡の住居から出土した土器について編年を試み、本遺跡の遺構について検討を加えました。この成果が今後この地域の土器研究・集落研究に多少なりとも役立てば幸いです。

最後に神谷佳明氏をはじめ、発掘調査・整理作業で御教示いただいた小島敦子氏、坂口一氏、桜岡正信氏、間庭 稔氏、穂貫邦男氏、大塚昌彦氏、荒木勇次氏をはじめとする多くの方々には、ここに記して感謝申し上げます次第です。

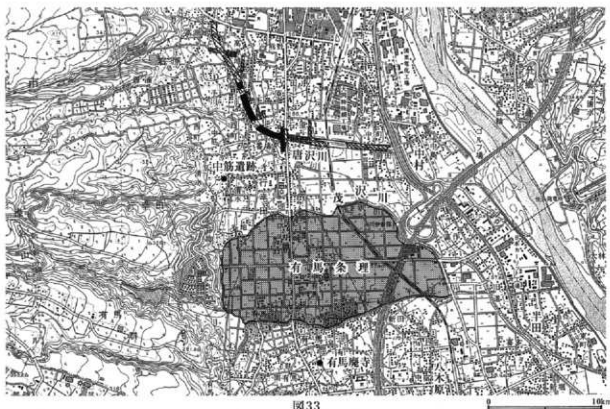


図33

第7章 調査の成果

注

- (1) 桜岡正信2003『月夜野型羽釜の生産と流通』『研究紀要』21群馬県歴史文化財調査事業団。
- (2) 1981『諏訪ノ水遺跡』渋川市教育委員会、石原東遺跡D区周辺には石原東古墳群、空沼古墳群などのH-II-F降下以降の古墳群が見られる。
- (3) 石原東遺跡D区、諏訪ノ水遺跡の部宅住居から検出された土器は供養具195点に対して、煮炊具103点である。
- (4) 小林正2004『石原東遺跡出土部伍遺物の断面観察』『本報告書』群馬県歴史文化財調査事業団。
- (5) 神谷佳明2004『古代上野の宮家集』『研究紀要』22群馬県歴史文化財調査事業団。
- (6) 神谷佳明2002『小八木志具戸遺跡』群馬県歴史文化財調査事業団。
- (7) 平川南2001『加茂遺跡を引える』『発見！古代のおもしろき』(財)石川歴史文化財センターより刊行。
- (8) 1971『北群馬・渋川の歴史』
- (9) 1993『第六編 奈良・平安時代』『渋川市誌』で大塚昌彦により補綴されている。
- (10) 小林正2004『石原東遺跡出土部伍遺物の断面観察』『本報告書』群馬県歴史文化財調査事業団。
- (11) 高島英之2004『石原東遺跡・諏訪ノ水遺跡出土の墨書・新書土器について』『本報告書』群馬県歴史文化財調査事業団。
- (12) 万葉集の歌歌で国名がはつきりしている約90首のうち、上野国は25首あり、その中の9首は伊香保について詠まれたものである。現在の伊香保町に伊香保時代から古墳時代にかけての遺跡がないことや、温泉について詠まれていることなどから、今の伊香保の温泉が未発見で、当時注目されていたことが強調されている。『上野国の信仰と文化』で群馬大学教授榎崎芳左衛門氏が示した渋川・吉岡・榑東にかけての地域を伊香保とする。流が一般的の古来の伊香保の地名の捉え方になっている。
- 土屋文明は永聖の種生などから、万葉集歌の一つに上毛野 伊香保の詠にうえこ水壺かく思ひむやと 榑東あけむ」とある『伊香保の詠』の都定地の一つに渋川市の平田・八木原・中村地区を挙げている。
- 『渋川市誌』によると、「最近の発掘調査の結果で、平田・中村・八木原の各地域については、縄文・弥生の遺物が発掘されたい地区があることがわかり、古墳時代には沼田盆地であったと思われる所がある。」という。又、渋川地誌研究会は『渋川市の地名』で、「茂原川は、この地に住んで用であったと推定できる。」としている。
- 茂原川より南は、水利、一町田の区画や半・長地に見える細長い水田区画が残り、施工初期を念食川に限定できる有馬桑里水田がひろがる。有馬地区は、古く『日本書紀』や『和名初抄』にみられる河内真直の支配地と推定され、有馬宛寺遺跡や、桑里水田が確認できる地域である。現在では土地改良事業により整然と区画されており、有馬桑里の姿を想像することはできないが、土地改良以前の有馬桑里水田は、昭和19年から20年に米軍によって撮影された航空写真、大高定邦氏によって行幸田丘跡より撮影された写真、昭和15年に作成された群地図から推定できる。それらの資料については渋川市教育委員会『有馬宛寺跡』(1988)、渋川市教育委員会『八木原沖田遺跡・区遺跡』(1988)で報告されている。(以上『渋川市誌』、『有馬宛寺跡』より)

参考・引用文献

- 坂本孝伸2001『古志田遺跡出土の墨書土器』『古志田東遺跡』不沢市教育委員会
- 坂本孝次1995『石原東遺跡』渋川市教育委員会
- 坂本孝次2000『諏訪ノ水遺跡』渋川市教育委員会
- 坂本孝次2001『諏訪ノ水遺跡』渋川市教育委員会
- 坂本孝次2001『諏訪ノ水遺跡』渋川市教育委員会
- 井上肇編1978『群馬県下の歴史時代の土器』『群馬県史研究』8群馬県史編審委員会
- 大江正行・中沢信1985『月夜野古墳群の成立とその背景』『月夜野古墳群』月夜野町教育委員会
- 大江正行1988『第1部 瓦葺』『有馬宛寺跡』渋川市教育委員会
- 大塚昌彦・榑貫峻子1983『有馬桑里遺跡』渋川市教育委員会
- 大塚昌彦1994『平田中塚・南原遺跡』渋川市教育委員会
- 大塚昌彦2000『伏見法による炭焼き土』『群馬考古学手帳』10群馬土器

観会

- 神谷佳明1987『第2部 出土土器について』『下野西遺跡』群馬県歴史文化財調査事業団
- 神谷佳明1998『下野西清水土器出土の輪軸陶器について』『下野西清水土器』群馬県歴史文化財調査事業団
- 神谷佳明1999『出土土器の調査』『出土輪軸陶器について』『遺構について』
- 神谷佳明2001『輪軸陶器にみる古代上野国』『研究紀要』19群馬県歴史文化財調査事業団
- 神谷佳明2004『古代上野の宮家集』『研究紀要』22群馬県歴史文化財調査事業団
- 津津博明1990『第6編 吉野原部について』『上野国分寺・尼寺中間地域(4)』群馬県歴史文化財調査事業団
- 津津博明・桜岡正信1990『上野国分寺・尼寺中間地域(4)』群馬県歴史文化財調査事業団
- 津津博明・榑貫峻子1990『新田郡芝野町山崎東塚採集遺物』『研究紀要』8群馬県歴史文化財調査事業団
- 群馬県教育委員会1989・1992・1998『群馬県出土の墨書・新書土器』(1)～(3)
- 群馬県史編審委員会1990『群馬県史 通史編1』
- 群馬県歴史文化財調査事業団1997『最新情報展示レポート 古代の上野』
- 小林良光1988『有馬宛寺跡』渋川市教育委員会
- 小林良光1996『八木原沖田遺跡 区遺跡』渋川市教育委員会
- 飯口一三・三浦京子1988『奈良・平安時代の土器の編年』『群馬県史研究』24群馬県史編審委員会
- 桜岡正信1988『古墳時代中期～奈良時代、平安時代の遺物』『上野国分寺・尼寺中間地域(2)』群馬県歴史文化財調査事業団
- 桜岡正信1992『上野国分寺・尼寺中間地域(7)』群馬県歴史文化財調査事業団
- 桜岡正信2003『月夜野型羽釜の生産と流通』『研究紀要』21群馬県歴史文化財調査事業団
- 渋川市史編審委員会1997『渋川市誌』
- 渋川地名研究会・渋川市教育委員会2001『渋川市の地名』
- 高島英之1994『二之宮下遺跡出土の墨書土器について』『二之宮下遺跡』群馬県歴史文化財調査事業団
- 高島英之1999『下野五反田遺跡出土の墨書・新書土器について』『下野五反田遺跡』群馬県歴史文化財調査事業団
- 高島英之2000『古代出土文字資料の研究』
- 高島英之2004『石原東遺跡・諏訪ノ水遺跡出土の墨書・新書土器について』『本報告書』
- 田中広明1995『関東西部における律令成立までの土器様相と歴史的動向』『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 田中広明2003『地方の象徴と古代の官人』
- 土屋文明1944『萬葉集上野国巻私注』
- 角田芳昭2003『流志江下層遺跡』群馬県歴史文化財調査事業団
- 手塚孝2001『古志田東遺跡』不沢市教育委員会
- 郷江秀夫1988『寛統天皇の宮遺跡』群馬県歴史文化財調査事業団
- 郷江秀夫2000『雲台山遺跡』群馬県歴史文化財調査事業団
- 中沢信1997『矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代後期の土器について』『遺構』群馬県歴史文化財調査事業団
- 奈良文化財研究所2003『古代官衙・集落と墨書土器』
- 平川南2000『墨書土器の研究』
- 三上喜孝2003a『古志田水田が語る古代長者の世界』『11回企画展古志田長者の世帯～古志田東遺跡(山形)出土きたむ風土記の丘考古資料展』
- 三上喜孝2003b『文献史学からみた墨書土器の機能と役割』『古代官衙・集落と墨書土器』奈良文化財研究所
- 山口隆弘1994『沼田中西遺跡(2)』群馬県歴史文化財調査事業団
- 山下隆信1997『關越中遺跡』群馬県勢多郡大田町教育委員会
- 榑貫峻子1992『群馬県における歴史時代の土器について』『群馬考古学手帳』3群馬土器観会

[5] 石原東遺跡・諏訪ノ木V遺跡出土の墨書・刻書土器について

高島 英之

1. 石原東遺跡・諏訪ノ木V遺跡出土の

墨書・刻書土器

澁川市石原の石原東遺跡および隣接する同市諏訪ノ木の諏訪ノ木V遺跡から合計で209点にのぼる墨書・刻書土器が出土した。ただし約半数は小片などで全く判読できないものである。また、刻書土器は諏訪ノ木V遺跡2区遺構外出土の資料(2-外-7)1点のみであり、他208点は墨書土器である。

それにしても県内のこれまでの一遺跡における墨書土器出土数から見れば、現在までのところ、一遺跡における県内最多出土量を誇る伊勢崎市上植木光仙房遺跡出土の213次に次ぎ、沼田市戸神諏訪遺跡出土の174点、群馬町三ッ寺II遺跡出土の151点、前橋市二之宮宮下東遺跡出土の131点、境町十三宝遺跡出土の124点、伊勢崎市書土上原之城遺跡出土の121点などを越える県内第2位の出土量と言うことになる。

また、同じ澁川市内では、「延喜式」左右馬寮式御牧条にみえる「有馬鳥牧」を構成する牧の施設の一つに想定可能な半田中原・南原遺跡出土の113点を越え、現在のところは、市内では最多の墨書土器出土量をみた遺跡ということになる。

これらの墨書土器のほとんどは、調査区の最南東端部、調査区域の南側を西から東に流れる唐沢川が開析した谷部に堆積した包含層中からの出土であり、遺構に伴う資料が少ないので、墨書土器そのものの記載内容や記載状況等から集落内の特定の単位集団の趨勢や動向などを跡づけることはできないが、非常に特徴的な字形のものが見られるなど、近年、脚光を浴びるようになってきた墨書土器研究に、大変有益な素材を提供することが出来る資料群と言うことができるだろう。とりわけ、最近、注目されつつある墨書土器字形論との関わりの中で、重視できる内容を含んでいると考えられる。

なお、本遺跡出土の墨書土器全点の器形、器種、

時期、文字内容、文字記載部位・位置・方向などについては、表1および図1に掲げておいたので、以下では出土資料中にみられる特徴的な事項2・3について取り上げていくことにしたい。

2. 石原東遺跡出土の墨書土器の内容

石原東遺跡と諏訪ノ木V遺跡は、ほぼ南北に隣接する遺跡であるが、本書でもすでに述べられているように同遺跡間にはかなりの比高差がある。

石原東遺跡出土墨書土器全201点の内、9割以上の196点が、調査区最南東端部の谷部にあたるD1区からの出土であり、本遺跡と諏訪ノ木V遺跡出土の墨書土器の内9割以上が調査区最南東端部の唐沢川河畔谷部包含層中からの出土と言うことになる。石原東遺跡出土の墨書土器201点のうち、多少なりとも判読可能な資料は93点であり、そのうちD1区出土の資料は89点である。

石原東遺跡出土墨書土器で多少なりとも判読可能な93点の内60点が、「茂」と明確に判読できるものかあるいはそのように類推できる字形である。明確に判読可能な資料では、いずれも草冠の下に「氏」という文字を記す字形である。このような文字は、各地における膨大な墨書土器の出土例や、あるいは現存する各種の異体字字典等に当たっても管見の限り見いだすことはできなかったが、類似する字形という観点や、墨書土器に見られる文字の類例から見て、おそらく「茂」という文字を記そうと意識したと考えるのが妥当であるように思われる。仮に、この字形が通常使用されている「茂」の文字と同義のものでよいとすれば、各地における墨書土器の出土例から見ても、また墨書土器に通常よく記されることが多い吉祥的な文字としても、類例も少なくなく、解釈に無理はない。

また、草冠の部分のみ判読できる資料についても「茂」の文字を記した、あるいは記そうとしたものと考え、それらを加えると、多少なりとも判読が可能

な石原東遺跡出土墨書土器93点のうちの72点にのぼり、本遺跡の谷部包含層から出土した墨書土器のほとんどが「茂」=「茂」の文字が記されたものであったことが判明する。

なお、「茂」=「茂」の文字が記されたものに限らず、本遺跡出土墨書土器の圧倒的多数は、底部外面に記載されたものである。それ以外に文字が墨書された部位や位置、方向等についてさしたる特徴を指摘することはできなかった。

3. 石原東遺跡出土墨書土器の意味、用途と機能

谷部包含層中から出土したこれらの墨書土器については、集落の中における何らかの祭祀・儀礼等の行為に際して使用され、谷部に廃棄されたか、あるいは谷部や河川、水に関わる祭祀・儀礼等に伴うものとの推測が容易に成り立つところであろう。全国的に見てもこのような墨書土器の出土状況の類例は多い。県内の類例では、前橋市東部の二之宮宮下東遺跡出土墨書土器の出土状況に非常によく類似している。

多少なりとも判読が可能なものうち圧倒的多数なのが「茂」=「茂」と記されたものなので、先にも述べたように記された文字の内容から集落内における単位集団の趨勢や動向を伺い知ることは現段階では困難である。しかしながら、圧倒的多数の資料が同一文字が記されたものであることから逆説的に考えるならば、この場所では何らかの祭祀や儀礼等の行為を執り行った集団とは、大きな一つの集団としてグルーピングすることが可能になってくる。「茂」=「茂」の文字はそうした包括的大集団の標識的な文字と解釈することが出来るのではないだろうか。

同じ谷部に堆積した包含層中から非常に少数出土したそれ以外の文字が記された墨書土器は、それぞれがほとんど別個の文字であり、まとまりが見られないので、包括的な大集団に対するような別個の異なる何らかの集団の標識的の文字とは考えにくいように思われる。

むしろこれらの資料に記載された文字は、包括的大集団傘下にある何らかの小集団の標識的な文字を意

味していると解釈する方が妥当であろう。包括的な大集団の内部にある何らかの小集団とは、具体的には、場合によっては「戸」のような単位である可能性も、また一組の単婚家族である可能性も、また住居単位である可能性すら有しているが、これらの資料からのみでは、これらの資料に記載された文字が如何なる集団のシンボルとして機能したのかという点に付いては明確にしがたい。包括的大集団の内部に重層的に存在したであろうある種の小集団の標識的の文字が記された墨書土器が、祭祀儀礼と儀礼等の行為に当って何らかの理由があって使用されたことを示していると考えることが出来る。

なお、D1区の包含層以外では、「茂」=「茂」の文字が記されたものは、D5区の1号住居跡から1点出土している。わずか1点とは言え、住居跡から「茂」=「茂」の文字が記された墨書土器が出土していることによって、D1区の谷部に墨書土器を廃棄した、あるいはそこで墨書土器を使用した何らかの祭祀・儀礼等の行為を執り行った集団は、この谷部に隣接する微高地に生活の根拠を置いた人々であったであろうことが想定できる。これらの墨書土器を使用した祭祀・儀礼等の行為は、居住する地域のすぐ近接する場所で行われたと言うことになる。

4. 石原東遺跡出土墨書土器の年代幅

本遺跡出土墨書土器で多少なりとも判読が可能な資料の圧倒的多数を占める、この「茂」=「茂」という文字が記された土器は、判明する限り9世紀前半代のものから10世紀第3四半期のものまで存在している。

D1区で検出された谷部で、墨書土器を使用した祭祀・儀礼等の行為を執り行った、あるいは集落内における祭祀・儀礼等の行為に際して使用した墨書土器を谷部に廃棄した集団にとって、およそ百数十年・数世代に亘って、集団の標識的の文字として使用する程に、この「茂」=「茂」という文字は彼らにとって意味を有したものと解釈することが可能である。

およそ百数十年、少なくとも三代以上に亘って同じ文字が集団的の標識的の文字として使用し継がれ

ている。これまでの各地における墨書土器の出土事例にも、集落内の単位集団の標識的な文字として数十年～百年程度の年代幅で同じ文字が書き継がれているような事例は決して珍しいことではない。しかしながら今回、土器の器形と年代観の関係から、明確な形で文字の使用年代の幅を提示することが出来た点は今後のこの方面の研究の進展に資するところとして評価できるであろう。また、明らかに出来た同一文字の使用年代幅として、非常にその間が長きに亘っている点も特筆すべき点であろう。

5. 諏訪ノ木V遺跡出土の墨書・刻書土器

石原東遺跡から台地を上がった上、北側に隣接する諏訪ノ木V遺跡からは8点の墨書・刻書土器が出土している。うち、遺構外出土の1点(2-外-7)は刻書土器である。なお、多少なりとも判読が可能な資料は8点の内の2点にすぎない。

多少なりとも判読が可能な資料2点の内の1点(2-7住-7)には「○に囲まれた「茂」と考えられる文字が記されている。この資料が出土した諏訪ノ木V遺跡2区7号住居跡は「茂」=「茂」と記された墨書土器が多数出土した石原東遺跡D1区の谷部から約450m以上離れた場所に位置しているが、谷部で大量に出土した墨書土器と関連する文字が台地上、およそ450m以上も離れた位置から出土していることから、この「茂」=「茂」という文字を何らかの集団の標識的な文字として祭祀・儀礼等の行為に当たって土器に記入した人々の広がりを確認することができる。

6. まとめ

石原東遺跡及び隣接する諏訪ノ木V遺跡で検出された集落に居住する人々にとっての包括的集団の標識的な文字である「茂」=「茂」という字形の文字が、少なくとも百数十年・数世代に亘って使用し続けるほどの意味を有する文字であったという、標識的な文字使用の時間的な幅については前節においてすでに指摘出来たところであった。

それと関連する文字が僅か一点とはいえ、諏訪ノ木V遺跡からも出土していることからみれば、標

識的な文字使用の空間的な広がりもまた一方で指摘できるわけであり、当該遺跡所在地域一帯における祭祀・儀礼等の行為に伴う人々の動向一特に集団の形成範囲や存続時間等の幅を有る程度伺い知ることが可能となった。

この点は、従来、古代集落研究の中で、ある程度漠然と論じられてきたところではあったが、当該遺跡出土資料の検討によって、遺構・遺物などの考古資料に即して明確に結論づけられるようになった点は重要であろう。

当該遺跡出土の資料は、谷部からの一括出土資料が圧倒的多数を占めているため、たびたび先述しているように、墨書土器の記載内容や記載状況や出土状況から集落内における単位集団の趨勢や動向を跡づけることは不可能である。しかしながら、一括出土資料が圧倒的多数を占め、なおかつそれらの年代幅が広がったことから、集落内、あるいは集落に接して数世代に亘って連続と祭祀・儀礼等行為を続けてきた集団の消長関係とその集団の空間的な広がりがある程度明確に提示することが出来た。この点は、今後、当該時期の集落論を構築していく上で、重要な要素となりうるものであり、今後、さらに類例の検討を積み重ねていくことによって、より具体像を明らかにすることが可能になってくるものと確信する。

おわりに—墨書土器研究の意義

古代の文献史料は非常に限られており、従来、その研究もある種の限界に達したかの観があった。こうした状況をうち破り、古代史研究に活力を与え、その将来に無限の可能性を開く元となったのが、こうした古代出土文字資料の発見であった。

出土文字資料の資料的特質は、第一に、地下から発見された考古学的遺物であるということである。すなわちそのことは、そこに記載された文字情報とともに、その資料がどの遺跡のいかなる遺構からどのような状況で発見されたのかという出土情報や、遺物としての形態に関する情報がその資料に込められていると言うことを示している。出土文字資料は

科学的に行われる発掘調査によって、幸運な諸条件に応じて一面では偶然に伝存した史料ということが出来る。

史料的特質の第二としては、紙以外の物質を书写材料としているものも多いということである。文字が記された物それぞれの特性や、物そのものの用途・機能・使用方法と文字内容とが密接に関連している場合が多い。したがって、記された文字情報を正しく解釈し、歴史史料として最大限有効に活用するためには、文字が記された物そのものの特質と記された文字内容とを総合的に解釈して判断する必要がある。各々の出土文字資料の出土状況や物としての特質や考古遺物としての物そのものに付帯する情報を明らかにした上で、はじめて記載された文字が持つ文字情報の果たした意味が正当に理解できるのである。

さらに第三としては、出土文字資料が同時代史料であるということが挙げられる。すなわち後世の写本などではなく、確実に古代のある時点で記され、廃棄された生の史料であるという点であり、後世の調色や編集が入る余地がないという点である。また、二次的な手が加わった編纂物などの文献史料とは異なり、記録・文書あるいは典籍などに纏められる前段階における、日常的な情報を含んでいることが多い。個々の出土文字資料に記されている情報は、あまりにも断片的に過ぎるものが多いが、当時の官衙などにおける日常の行政事務の実態や、古代の村落における祭祀・儀礼等の行為の実相を具体的に伺い知ることが出来る貴重な資料となるものが多い。

こうした出土文字資料を取り扱う際には、何よりもまずそれらが考古学的な遺物であることを重視せねばならない。もちろん、文字情報の大きさや効果は絶大であるが、同時代の生の史料であるとは言え、その断片的なる故にこそ、各出土文字資料に記された文字情報自身の史料批判を経ることの重要性も多言を要しないであろう。まずもって、これら出土文字資料に込められた歴史情報を最大限に引き出すことが求められる。

従来は、このような出土文字資料は、もっぱら釈文のみが対象とされ、その属性についての検討が等閑に付される傾向が強かっただけに、そこに記された文字情報以上の歴史情報を得ることが出来なかったわけである。出土文字資料の用途・機能は、それぞれ文字が記されたもののそのものの属性に左右されるものであり、記された文字情報のみならず、資料そのものの属性の検討を行うことによって、文字情報以上の歴史情報を引き出すことが可能になるばかりでなく、記された文字情報の正確な解釈にも資することになる。

また、往々にして、出土文字資料によって得られた新知見と考古学上のそれとを結びつけば、直ちに新しい見解が次々に生まれるかのような過大な期待が寄せられがちである。確かに、各種の出土文字資料からは目新しい、既存の史料とは異なった、あるいは既存の史料から得難い内容が知得でき、またそこに出土文字資料研究の大きな魅力があることも否定できない。しかしながら、既存の文献史料によって緻密に構築されてきたこれまでの研究成果と無関係に、出土文字資料から新しい情報が読みとれる訳はないし、また各種の出土文字資料の発見によって得られた新知見をもとにすることで、既存の文献史料の読み方や解釈が変わるとか、新しい解釈の可能性が生まれたりするわけである。

つまり、出土文字資料から引き出し得る歴史像と既存の資・史料から得られた歴史像とにおける、どちらが正しいのかを二者択一的に判断するのではなく、それぞれから導き出された歴史像の矛盾を、各資・史料の特性に則して再び読み直すことによって新見解を提示し、ひいては相互の史料上の矛盾を総合的に解釈し、理解することが必要と言えるだろう。そこにこそ出土文字資料研究の意義が存在するのである。

多種多様な出土文字資料は、それぞれの資料の属性や用途・機能に起因する資料的特性があり、各種の資料に応じた実に多種多様な用途・機能を有するものであるから、出土文字資料全般を総体的に

取り扱ったところで、考古学的な遺物論としても古代史科学の研究としても必ずしも一定の方向性を示し得るものではない。

それぞれの出土文字資料に記載された内容を正しく解釈し、既存の史料との整合性をはかり、資料として最大限有効に活用していくためには、まず資料そのものについての基礎的な検討が必要不可欠である。したがって、資料自体に即して、その用途や機能の解明に主眼をおいた基礎的な研究を行なうことは、重要な意味がある。

出土文字資料に人間が与えた機能は、社会から切り離れた個人が恣意的に付与したのではなく、各々の出土文字資料の記載者が果たしていた当時の社会的機能と密接に関連するわけであるから、出土文字資料それぞれの機能を復元することが、各出土文字資料を媒体とする人的・政治的・社会的諸関係を解明することにつながる。その過程で、例えば木簡なら、それがどの官司から差し出されてどこに充てられたのかというような官司間相互の関係であるとか、あるいはそれら官司の運営の実態が明らかにすることが出来、場合によってはそれぞれの出土文字資料の出土地点がいかなる性格の施設であるのかを解明することも可能になる。さらには、このような諸関係、すなわち人と人との関係の総体としての日本古代史像の一部を明らかにすることになる。つまり、それぞれの出土文字資料の用途と機能を解明することによって、そうした人的関係の背後にある律令官司制のシステムや、集落内の社会構造を明らかにすることが可能であり、さらにはそのような諸関係の総体としての古代社会像の解明に繋がっていくのである。

今日、古代の墨書・刻書土器の出土数は全国各地で膨大な量にのぼり、出土文字資料の範疇の中でも木簡や漆紙文書、文字瓦等とは異なり、沖縄地方を除く日本列島のあらゆる地域のさまざまな種類の遺跡からはほぼ普遍的に出土している。ただし、一点一点の墨書・刻書土器の字数は、出土文字資料の中でも木簡や漆紙文書に比べると極端に少なく、一般

的にはせいぜい一文字か数文字しか記されていないものがほとんどである。しかしながら、こうした極めて断片的な資料ではあるが、それらを丹念かつ体系的に検討していくならば、既存の文献史料はもとより木簡・漆紙文書・文字瓦など他の出土文字資料からでは決して明らかにすることが出来ない古代の在地社会の実相を描き出すことが可能になると考える。古代の墨書・刻書土器が出土資料の量の多寡はあるものの全国的にはほぼ普遍的に出土する資料であることからみれば、各種の古代出土文字資料の中でも、ものそのものについて資料の属性を検討することが最も必要とされる資料ということが出来る。

近年における埋藏文化財発掘調査の急増によって、木簡、漆紙文書、墨書・刻書土器・刻書紡錘車・印章・焼印などの出土文字資料は、各地で膨大な量が蓄積されつつある。個々の資料は断片的であり、それぞれの文字資料に記された文字の意味や用途などを確定することが困難なケースも非常に多い。しかしながら、特に墨書・刻書土器・印章・焼印・刻書磁石、あるいは本論文ではほとんど言及することが出来なかった刻書紡錘車など集落遺跡出土の文字資料は、それぞれが同じ集落遺跡から出土した他の文字資料とも密接に関連している。相互の資料を有機的に関連付けて検討することによって、当該期の村落研究に関する新たな分析視角が設定できる。さらに、個々の文字資料についても、それらの資料的特質を解明することができるのである。

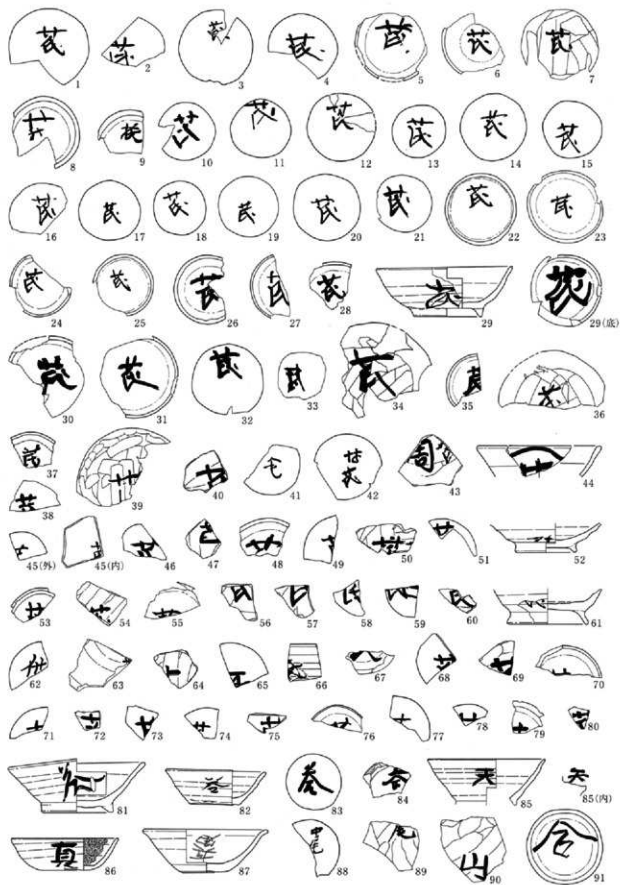


図1

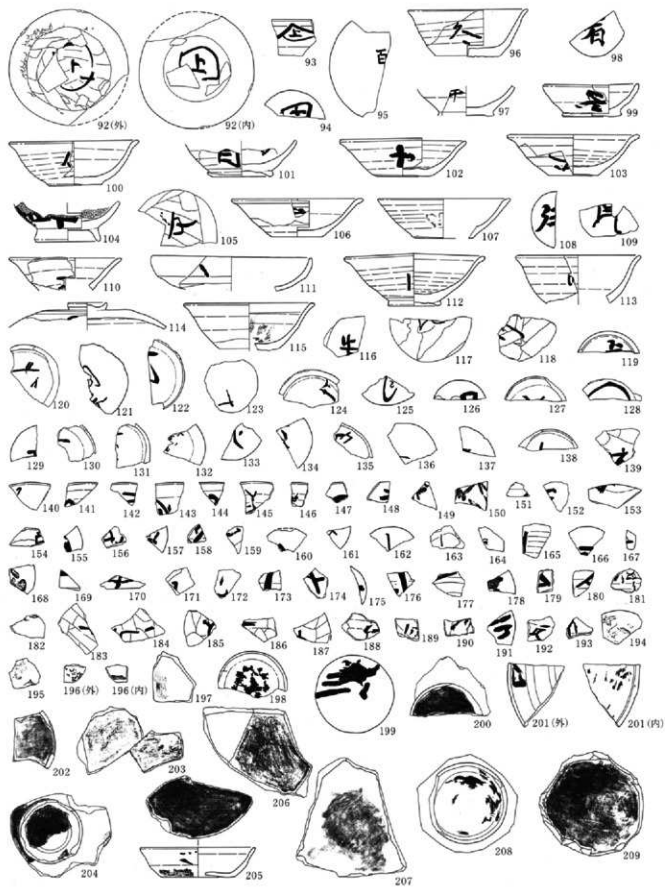


图2

第7章 調査の成果

石原東遺跡 D1区・諏訪ノ木V遺跡 墨書土器一覧

No.	出土遺跡・区	出土遺構	土器No.	器種	器形	墨書の部位・位置・方向	歌文・文字情報	遺物年代
1	石原東・D1	包含層	22	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀前半
2	石原東・D1	包含層	17	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀前半
3	石原東・D1	包含層	23	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀前半
4	石原東・D1	包含層	59	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
5	石原東・D1	包含層	103	須恵器	碗	底部外面	茂	9世紀前半
6	石原東・D1	包含層	190	須恵器	皿	底部外面	茂	9世紀後半
7	石原東・D1	包含層	15	土師器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
8	石原東・D1	包含層	116	須恵器	碗	底部外面	茂	
9	石原東・D1	包含層	6	灰輪陶器	碗	底部外面	茂	光ヶ丘1号窯式
10	石原東・D1	包含層	70	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀第4四半期
11	石原東・D1	包含層	55	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
12	石原東・D1	包含層	35	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀前半
13	石原東・D1	包含層	56	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀第3四半期
14	石原東・D1	包含層	39	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀第3四半期
15	石原東・D1	包含層	73	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀第4四半期～10世紀前半
16	石原東・D1	包含層	49	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
17	石原東・D1	包含層	75	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀第4四半期～10世紀前半
18	石原東・D1	包含層	41	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀第3四半期
19	石原東・D1	包含層	74	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀第4四半期～10世紀前半
20	石原東・D1	包含層	48	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
21	石原東・D1	包含層	198	須恵器	皿	底部外面	茂	9世紀後半
22	石原東・D1	包含層	18	灰輪陶器	皿	底部外面	茂	黒笹14号窯式。
23	石原東・D1	包含層	193	須恵器	皿	底部外面	茂	9世紀後半
24	石原東・D1	包含層	136	須恵器	碗	底部外面	茂	9世紀後半
25	石原東・D1	包含層	23	灰輪陶器	皿	底部外面	茂	大原2号窯式期
26	石原東・D1	包含層	147	須恵器	碗	底部外面	茂	
27	石原東・D1	包含層	114	須恵器	碗	底部外面	茂	
28	石原東・D1	包含層	111	須恵器	碗	底部外面	茂	転用減少
29	石原東・D1	包含層	123	須恵器	杯・碗	底部外面/体部外面正位	茂/茂	9世紀第3四半期
30	石原東・D1	包含層	134	須恵器	碗	底部外面	茂	9世紀後半
31	石原東・D1	包含層	110	須恵器	碗	底部外面	茂	9世紀第4四半期
32	石原東・D1	包含層	60	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
33	石原東・D1	包含層	82	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
34	石原東・D1	包含層	20	土師器	杯	底部外面	〃〔茂カ〕	9世紀後半
35	石原東・D5	1号住居	2	灰輪陶器	碗	底部外面	茂	10世紀第3四半期
36	石原東・D1	包含層	17	土師器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
37	石原東・D1	包含層	156	須恵器	碗	底部外面	茂	
38	石原東・D1	包含層	67	須恵器	杯	底部外面	茂	9世紀後半
39	石原東・D1	包含層	14	土師器	杯	底部外面	〃〔茂カ〕	9世紀後半
40	石原東・D1	包含層	32	土師器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	
41	石原東・D1	包含層	50	須恵器	杯	底部外面	□	9世紀後半
42	石原東・D1	包含層	40	須恵器	杯	底部外面	□〔茂カ〕/茂	9世紀第3四半期
43	石原東・D1	包含層	12	須恵器	蓋	天井部外面	周/茂	9世紀後半
44	諏訪V-2	7号住居	7	須恵器	杯・碗	体部外面正位	□〔茂カ〕	10世紀第1四半期
45	石原東・D1	包含層	61	須恵器	杯	底部内外面	茂(内)□〔茂カ〕(外)	9世紀第3四半期
46	石原東・D1	包含層	25	須恵器	杯	底部外面	〃〔茂カ〕	
47	石原東・D1	包含層	38	土師器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	
48	石原東・D1	包含層	119	須恵器	碗	底部外面	〃〔茂カ〕	
49	石原東・D1	包含層	51	須恵器	杯	底部外面	〃〔茂カ〕	9世紀後半
50	石原東・D1	包含層	33	土師器	杯	底部外面	〃〔茂カ〕	
51	石原東・D1	包含層	52	須恵器	杯	底部外面	〃	9世紀後半
52	石原東・D1	包含層	137	須恵器	碗	体部外面正位	〃	9世紀後半
53	石原東・D1	包含層	112	須恵器	碗	底部外面	〃	
54	石原東・D1	包含層	36	土師器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	
55	石原東・D1	包含層	117	須恵器	碗	底部外面	〃〔茂カ〕	
56	石原東・D1	包含層	40	土師器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	
57	石原東・D1	包含層	39	土師器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	
58	石原東・D1	包含層	21	須恵器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	9世紀前半
59	石原東・D1	包含層	19	須恵器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	9世紀前半
60	石原東・D1	包含層	41	土師器	杯	底部外面	□〔茂カ〕	

[5] 石原東遺跡・諏訪ノ木遺跡出土の墨書・刻書土器について

No.	出土遺跡・区	出土遺構	土器 No.	器種	器形	墨書の部位・位置・方向	表文・文字情報	遺物年代代
61	石原東・D1	包含層	135	須恵器	碗	体部外面正位	□[瓦カ]	
62	石原東・D1	包含層	43	須恵器	杯	底部外面	□	9世紀第3四半期
63	石原東・D1	包含層	5	須恵器	蓋	体部外面	□[「カ」]	
64	石原東・D1	包含層	37	土師器	杯	底部外面	□[「カ」]	
65	石原東・D1	包含層	18	須恵器	杯	底部外面	□	9世紀前半
66	石原東・D1	包含層	159	須恵器	杯・碗	体部外面	□	9世紀第3四半期
67	石原東・D1	包含層	155	須恵器	碗	底部外面	□[瓦カ]	
68	石原東・D1	包含層	45	須恵器	杯	底部外面	□[瓦カ]	
69	石原東・D1	包含層	34	土師器	杯	底部外面	□[瓦カ]	
70	石原東・D1	包含層	108	須恵器	碗	底部外面	-	9世紀前半
71	石原東・D1	包含層	44	須恵器	杯	底部外面	□[「カ」]	9世紀第3四半期
72	石原東・D1	包含層	35	土師器	杯	底部外面	□[瓦カ]	
73	石原東・D1	包含層	84	須恵器	杯	底部外面	□[「カ」]	
74	石原東・D1	包含層	86	須恵器	杯	底部外面	-	
75	石原東・D1	包含層	181	須恵器	杯・碗	底部外面	-	
76	石原東・D1	包含層	120	須恵器	碗	底部外面	□[「カ」]	
77	石原東・D1	包含層	28	須恵器	杯	底部外面	□[「カ」]	
78	石原東・D1	包含層	83	須恵器	杯	底部外面	-	
79	石原東・D1	包含層	148	須恵器	碗	底部外面	□[「カ」]	
80	石原東・D1	包含層	85	須恵器	杯	底部外面	□[瓦カ]	
81	石原東・D1	包含層	132	須恵器	碗	体部外面正位	益	9世紀第4前半期
82	石原東・D2	1号土坑	4	須恵器	杯	体部外面	□[益カ]	9世紀第4前半期～10世紀第1前半期
83	石原東・D1	包含層	145	須恵器	碗	底部外面	益	9世紀後半
84	石原東・D1	包含層	7	灰釉陶器	碗	底部外面	□[益カ]	光ヶ丘1号窯式
85	石原東・D1	包含層	124	須恵器	碗	体部内外面正位	天(内・外)	9世紀第4前半期～10世紀第1前半期
86	石原東・D5	3号住居	2	須恵器	杯	体部外面正位	真	10世紀第3前半期
87	諏訪V-2	遺構外	7	須恵器	杯	体部内面逆位	真□[田カ] 刷書	9世紀第4前半期～10世紀第1前半期
88	石原東・D1	包含層	54	須恵器	杯	底部外面	中尾	
89	石原東・D1	包含層	43	土師器	杯	底部外面	□[尾カ]	
90	石原東・D1	包含層	42	土師器	杯	底部外面	山	
91	石原東・D1	包含層	122	須恵器	碗	底部外面	合	9世紀第3四半期
92	石原東・D1	包含層	16	土師器	杯	底部内外面	[上]内□[田カ] 刷	9世紀後半
93	石原東・D1	包含層	160	須恵器	杯・碗	体部外面正位	へ/上	9世紀前半
94	石原東・D1	包含層	46	須恵器	杯	底部外面	□	
95	石原東・D1	包含層	33	須恵器	杯	底部内面	首	9世紀前半
96	石原東・D1	包含層	129	須恵器	碗	体部外面正位	□	9世紀前半
97	石原東・D1	包含層	146	須恵器	碗	体部外面正位	□[中カ]	9世紀後半
98	石原東・D1	包含層	20	須恵器	杯	底部外面	□[香カ]	9世紀前半
99	石原東・D5	3号住居	1	須恵器	杯	体部外面	□	10世紀第3四半期
100	石原東・D1	包含層	72	須恵器	杯	底部外面正位	□[「カ」]	9世紀第4前半期
101	諏訪V-2	7号住居	5	須恵器	碗	体部内外面	□/□	10世紀第1前半期
102	諏訪V-2	遺構外	6	須恵器	杯	体部外面正位	□	9世紀第4前半期～10世紀第1前半期
103	石原東・D1	包含層	80	須恵器	杯	体部外面	□	10世紀前半
104	石原東・D1	包含層	133	須恵器	碗	体部外面	□	内面に加熱を受けた油斑點が付着
105	石原東・D1	包含層	5	土師器	杯	底部外面	□	8世紀後半
106	石原東・D1	包含層	79	須恵器	杯	体部外面	□	10世紀前半
107	諏訪V-2	18号住居	2	須恵器	杯	体部外面	□	9世紀第3前半期
108	石原東・D1	包含層	77	須恵器	杯	底部外面	□	10世紀前半
109	石原東・D1	包含層	13	須恵器	蓋	天井部外面	□	
110	石原東・D1	包含層	125	須恵器	碗	体部外面	墨痕	
111	諏訪V-2	遺構外	1	土師器	杯	体部外面	墨痕	8世紀中頃
112	諏訪V-2	7号住居	3	須恵器	碗	体部外面	墨痕	10世紀第1前半期
113	石原東・D1	包含層	127	須恵器	碗	体部外面	墨痕	
114	石原東・D1	包含層	3	須恵器	蓋	体部外面	墨痕	8世紀後半
115	諏訪V-2	1号住居	1	須恵器	碗	内面	墨痕	10世紀第1前半期
116	石原東・D1	包含層	87	須恵器	杯	底部外面	□	
117	石原東・D1	包含層	12	土師器	杯	底部外面	□[瓦カ]	9世紀前半
118	石原東・D1	包含層	45	土師器	杯	底部外面	□	
119	石原東・D1	包含層	11	灰釉陶器	碗	底部外面	□	大原2号窯式
120	石原東・D1	包含層	139	須恵器	碗	底部外面	□	
121	石原東・D1	包含層	16	須恵器	杯	底部外面	□	

第7章 調査の成果

No.	出土遺跡・区	出土遺構	土器 No.	器種	器形	墨書の内容・位置・方向	釈文・文字情報	遺物年代
122	石原東・D1	包含層	142	須恵器	碗	底部外面	□	
123	石原東・D1	包含層	62	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
124	石原東・D1	包含層	143	須恵器	碗	底部外面	□	
125	石原東・D1	包含層	84	須恵器	杯	底部外面	□	
126	石原東・D1	包含層	65	須恵器	杯	底部外面	□	
127	石原東・D1	包含層	141	須恵器	碗	底部外面	□	
128	石原東・D1	包含層	153	須恵器	碗	底部外面	□	9世紀第4四半期～10世紀第1四半期
129	石原東・D1	包含層	30	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
130	石原東・D1	包含層	115	須恵器	碗	底部外面	墨痕	
131	石原東・D1	包含層	140	須恵器	碗	底部外面	墨痕	
132	石原東・D1	包含層	154	須恵器	碗	底部外面	墨痕	
133	石原東・D1	包含層	24	須恵器	杯	底部外面	□	
134	石原東・D1	包含層	29	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
135	石原東・D1	包含層	138	須恵器	碗	底部外面	□	
136	石原東・D1	包含層	88	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
137	石原東・D1	包含層	37	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
138	石原東・D1	包含層	118	須恵器	碗	底部外面	墨痕	
139	石原東・D1	包含層	46	土師器	杯	底部外面	□	
140	石原東・D1	包含層	167	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
141	石原東・D1	包含層	163	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
142	石原東・D1	包含層	168	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
143	石原東・D1	包含層	161	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
144	石原東・D1	包含層	164	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
145	石原東・D1	包含層	162	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
146	石原東・D1	包含層	166	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
147	石原東・D1	包含層	165	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
148	石原東・D4	1号住居	12	須恵器	杯・碗	体部外面	□	
149	石原東・D1	包含層	185	須恵器	杯・碗	底部外面	墨痕	
150	石原東・D1	包含層	188	須恵器	杯・碗	底部外面	墨痕	
151	石原東・D1	包含層	173	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
152	石原東・D1	包含層	66	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
153	石原東・D1	包含層	14	須恵器	蓋	体部外面	墨痕	
154	石原東・D1	包含層	92	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
155	石原東・D1	包含層	98	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
156	石原東・D1	包含層	182	須恵器	杯・碗	底部外面	墨痕	
157	石原東・D1	包含層	95	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
158	石原東・D1	包含層	174	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
159	石原東・D1	包含層	55	土師器	杯	底部外面	墨痕	
160	石原東・D1	包含層	90	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
161	石原東・D1	包含層	89	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
162	石原東・D1	包含層	26	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
163	石原東・D1	包含層	47	土師器	杯	底部外面	墨痕	
164	石原東・D1	包含層	93	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
165	石原東・D1	包含層	169	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
166	石原東・D1	包含層	63	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
167	石原東・D1	包含層	94	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
168	石原東・D1	包含層	97	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
169	石原東・D1	包含層	178	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
170	石原東・D1	包含層	99	須恵器	杯	体部外面	□	
171	石原東・D1	包含層	186	須恵器	杯・碗	底部外面	墨痕	
172	石原東・D1	包含層	183	須恵器	杯・碗	底部外面	墨痕	
173	石原東・D1	包含層	176	須恵器	杯・碗	体部外面	□	
174	石原東・D1	包含層	53	土師器	杯	底部外面	□	
175	石原東・D1	包含層	91	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
176	石原東・D1	包含層	171	須恵器	杯・碗	体部外面	□	
177	石原東・D1	包含層	172	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
178	石原東・D1	包含層	101	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
179	石原東・D1	包含層	184	須恵器	杯・碗	底部外面	墨痕	
180	石原東・D1	包含層	170	須恵器	杯・碗	体部外面	□	
181	石原東・D1	包含層	177	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
182	石原東・D1	包含層	187	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	

[5] 石原東遺跡・諏訪ノ木遺跡出土の墨書・刻書土器について

No.	出土遺跡・区	出土遺構	土器No.	器種	器形	墨書の部位・位置・方向	釈文・文字情報	遺物年代他
183	石原東・D1	包含層	44	土師器	杯	底部外面	墨痕	
184	石原東・D1	包含層	51	土師器	杯	底部外面	墨痕	
185	石原東・D1	包含層	52	土師器	杯	底部外面	□	
186	石原東・D1	包含層	56	土師器	杯	底部外面	墨痕	
187	石原東・D1	包含層	48	土師器	杯	底部外面	墨痕	
188	石原東・D1	包含層	175	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
189	石原東・D1	包含層	54	土師器	杯	底部外面	墨痕	
190	石原東・D1	包含層	49	土師器	杯	底部外面	墨痕	
191	石原東・D1	包含層	96	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
192	石原東・D1	包含層	50	土師器	杯	底部外面	墨痕	
193	石原東・D1	包含層	180	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	
194	石原東・D1	包含層	27	須恵器	杯	底部外面	墨痕	
195	石原東・D1	包含層	100	須恵器	杯	底部内面	墨痕	パレット
196	石原東・D1	包含層	179	須恵器	杯・碗	体部外面	墨痕	内面パレットか
197	石原東・D1	包含層	144	須恵器	碗	底部内面	墨痕	
198	石原東・D1	包含層	102	須恵器	碗	底部外面	墨痕	9世紀前半
199	石原東・D1	包含層	15	須恵器	杯	底部内面	□	8世紀後半
200	石原東・D1	包含層	107	須恵器	碗	底部外面	墨痕	パレットか
201	石原東・D1	包含層	6	須恵器	蓋	体部外面	墨痕	8世紀後半 内面パレット
202	石原東・D1	包含層	26	灰輪陶器	蓋	体部内面	墨痕	パレットか
203	石原東・D1	包含層	9	須恵器	蓋	体部内面	墨痕	パレットか
204	石原東・D1	包含層	196	須恵器	皿	底部外面	墨痕	パレットか
205	石原東・D1	包含層	34	須恵器	杯	体部内外面	墨痕	内面パレットか
206	石原東・D1	包含層	228	須恵器	大甕	胴部内面	墨痕	パレットか
207	石原東・D1	包含層	227	須恵器	大甕	胴部内面	墨痕	パレットか
208	石原東・D1	包含層	105	須恵器	碗	底部外面	墨痕	パレットか
209	石原東・D1	包含層	106	須恵器	碗	底部内面	墨痕	転用皿か

報告書抄録

書名ふりがな	いしはらひがしいせきでーく・すわのきごいせき
書名	石原東道跡D区・諏訪ノ木V道跡
副書名	洪川都市計画道路3.31号中村上郷集約路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	340
編著者名	飯澤奉史
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20050223
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北碓村大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	いしはらひがしいせきでーく
遺跡名	石原東道跡D区
所在地ふりがな	しふかわしいしはら
遺跡所在地	洪川市石原
市町村コード	10208
遺跡番号	-
北緯(日本測地系)	362848
東経(日本測地系)	1390018
北緯(世界測地系)	362859
東経(世界測地系)	1390006
調査期間	20000403-20010508
調査面積	4970
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/その他
主な時代	古墳/奈良平安/中近世
遺跡概要	集落・奈良平安・整穴住居12+土坑1・土師器+須恵器+灰輪陶器+鉄関連遺物/集落・中近世・掘立柱建物8+柱穴列1+土坑3+井戸1+溝4-陶磁器/田畑・古墳・水田2/墓・中近世・土坑墓30-人骨+銭貨/その他・包含層・奈良平安時代・土師器(墨書土器含む)+須恵器(墨書土器含む)+灰輪陶器(墨書土器含む)+鉄輪陶器+木器+鉄関連遺物
特記事項	奈良・平安時代の墨書土器「花」、土師器、須恵器、灰輪・鉄輪陶器、木器類などの包含層
遺跡名ふりがな	すわのきごいせき
遺跡名	諏訪ノ木V道跡
所在地ふりがな	しふかわしいしはら
遺跡所在地	洪川市石原
市町村コード	10208
遺跡番号	-
北緯(日本測地系)	362900
東経(日本測地系)	1390017
北緯(世界測地系)	362911
東経(世界測地系)	1390005
調査期間	20000901-20021127
調査面積	11977
調査原因	道路建設工事
種別	集落/その他
主な時代	縄文/弥生/古墳/奈良平安/中近世
遺跡概要	集落-奈良平安-整穴住居40+整穴状遺構2+土坑1-土師器+須恵器+灰輪陶器+鉄関連遺物/集落-中近世-掘立柱建物12+柱穴列3+土坑2+井戸10+溝6-陶磁器/その他-包含層-縄文時代+弥生時代-石器+縄文土器+弥生土器
特記事項	縄文時代草創期の石器、縄文時代早期(三戸式)の土器



石原東遺跡D区
諏訪ノ木V遺跡
(本文編)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書
第340集
渋川郡市計画道路3.3.1号中村上郷線側路
事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 第1集

平成17年2月18日 印刷

平成17年2月23日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 群馬県勢多郡北郷村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>
印刷／日本特急印刷株式会社